明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可
明治四十四年二月八日印刷納本 每月一回廿五日印刷納本

女子文壇

婦人ノート



第一增刊
七年三號

◁秀才文壇春季定期増刊▷

本號に限り
定價金廿錢

春風號

郵稅一册
壹錢五厘

◁二月十五日發行▷

◎二月十五日に發行さるべき秀才文壇第一増刊『春風號』の内容の概略を擧げて見ると、募集原稿は既定の締切期日一月十五日に悉皆是を締切り、今や方に其編輯中である。二月の増刊は今回が最初の事でもあり、又締切期日が新年匆々であつたので、或は應募數が今迄の増刊よりは少數ではないかと記者は密かに心配せざるを得なかつた、處が實際集つたのを見ると、盛んなるかな、諸君の奮勵は忽ちにして記者の杞憂を一掃して其應募數の從來の増刊に比して甚だしく増加せるに一驚を喫せざるを得なかつた。で記者は如何に之れ等諸君の玉稿を以て春風號を編輯すべきか。願くは發行の日を今より待たれん事を希望する。猶本號は、單に諸君の玉稿のみでなく、文壇の名家及び本誌選者の寄稿を掲載する。其要目を擧げると、中村星湖氏の小說、水野葉舟氏の小品の作法及び近作の小品一篇。吉江孤雁氏の棕梠日記。柳田國男男の傳說に關する記事。佐々醒雪。相馬御風、窪田空穗諸氏の談話。河井醉茗氏の對話一篇。松原至文氏の評論。白柳秀湖氏の小品三木露風、森川葵村、高田蝶衣、前田夕暮諸氏の詩歌俳句。福永挽歌氏の散文詩雪ふる日等を掲載する豫定である。

發行所　東京神田區旅籠町一丁目　振替口座東京一九五五番　文光堂

女子文壇 第一増刊 婦人ノート

目次

對話

梅咲く日



竹久夢二筆



女學生

毎號懸賞讀者文藝募集

二月一日第二號發行 價十五錢郵税壹錢半

貳月號

口繪石版密刷及原色版其他數葉 每號懸賞文藝滿載

○小說 戀しき人　田村露英

○脂粉の氣のおゝき女性　與謝野晶子

■棚橋女史を訪の記 ■新しき女のさけび

■教育ある女のワナ ■てんな奥さま

■あんな令孃 ■米國女學生氣質 ■生

■花教授所の看板のうら表 ■青春期の女の衛生

■花嫁のマダム振り……

◎春日局　山路愛山

■都下十五女學校評判記……

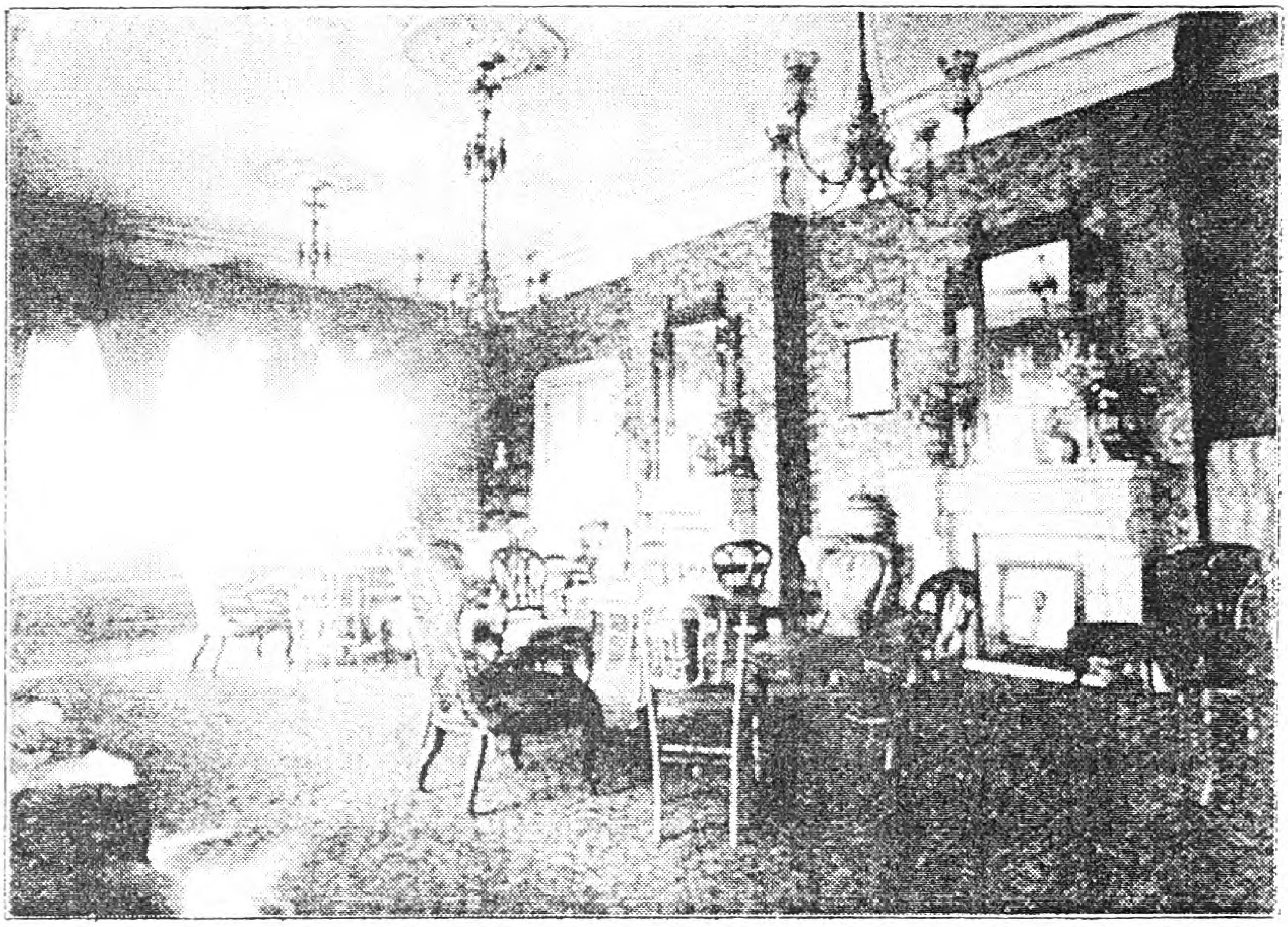
■小督の局 ■○○子さんの打明け話 ■冬季簡易なる美顔術 ■侵略者フレタムケレ ■婦人と色彩の觀念 ■少女の煩悶 ■記者たらんとする諸孃よ

○○動かぬ道理美しき感情……井上博士

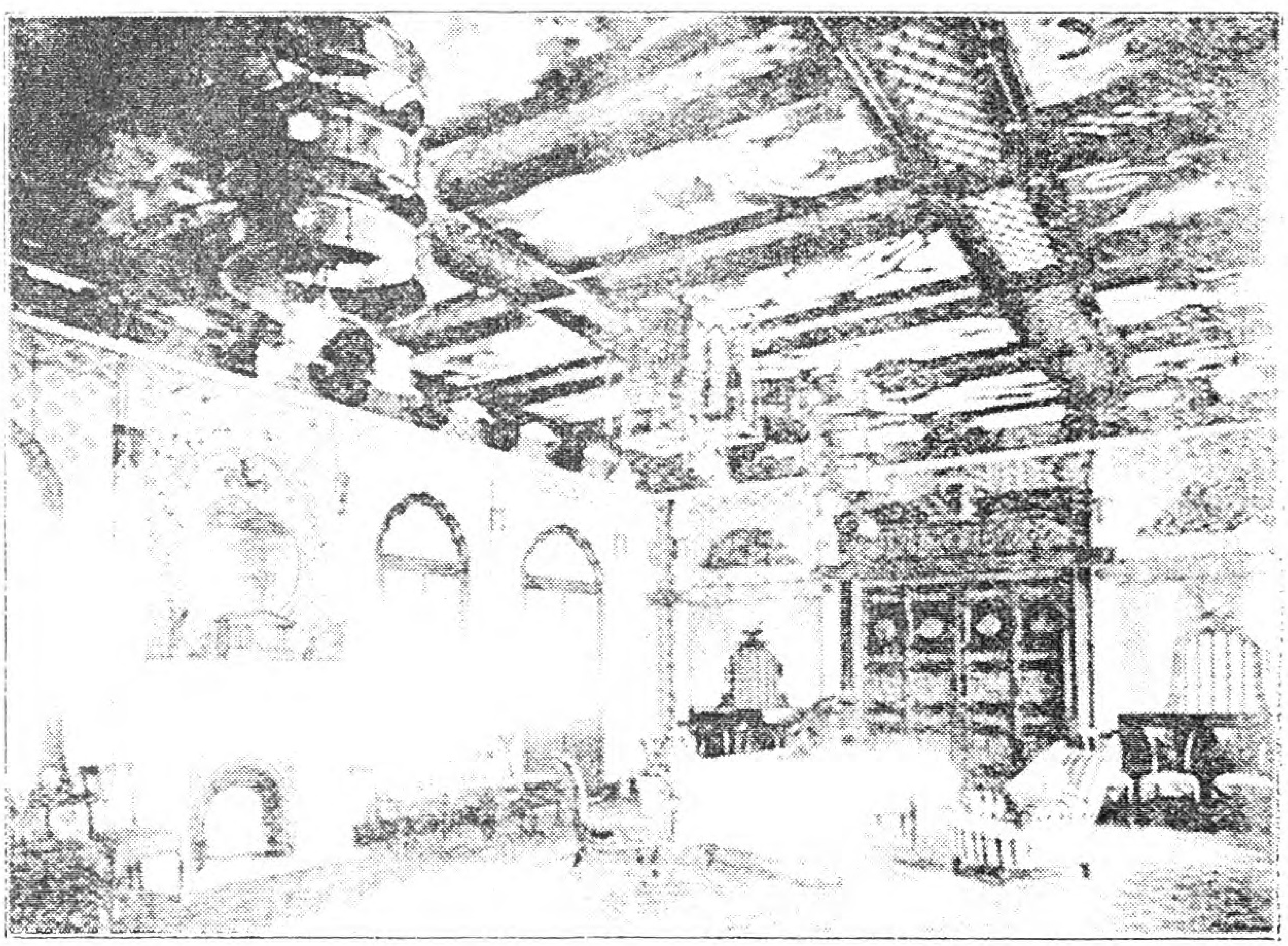
○○渡米船客の六割強は婦人……島貫兵太夫

發行所　東京神田旅籠町一　文光堂　振替口座東京一九五五番

室内美（其一）

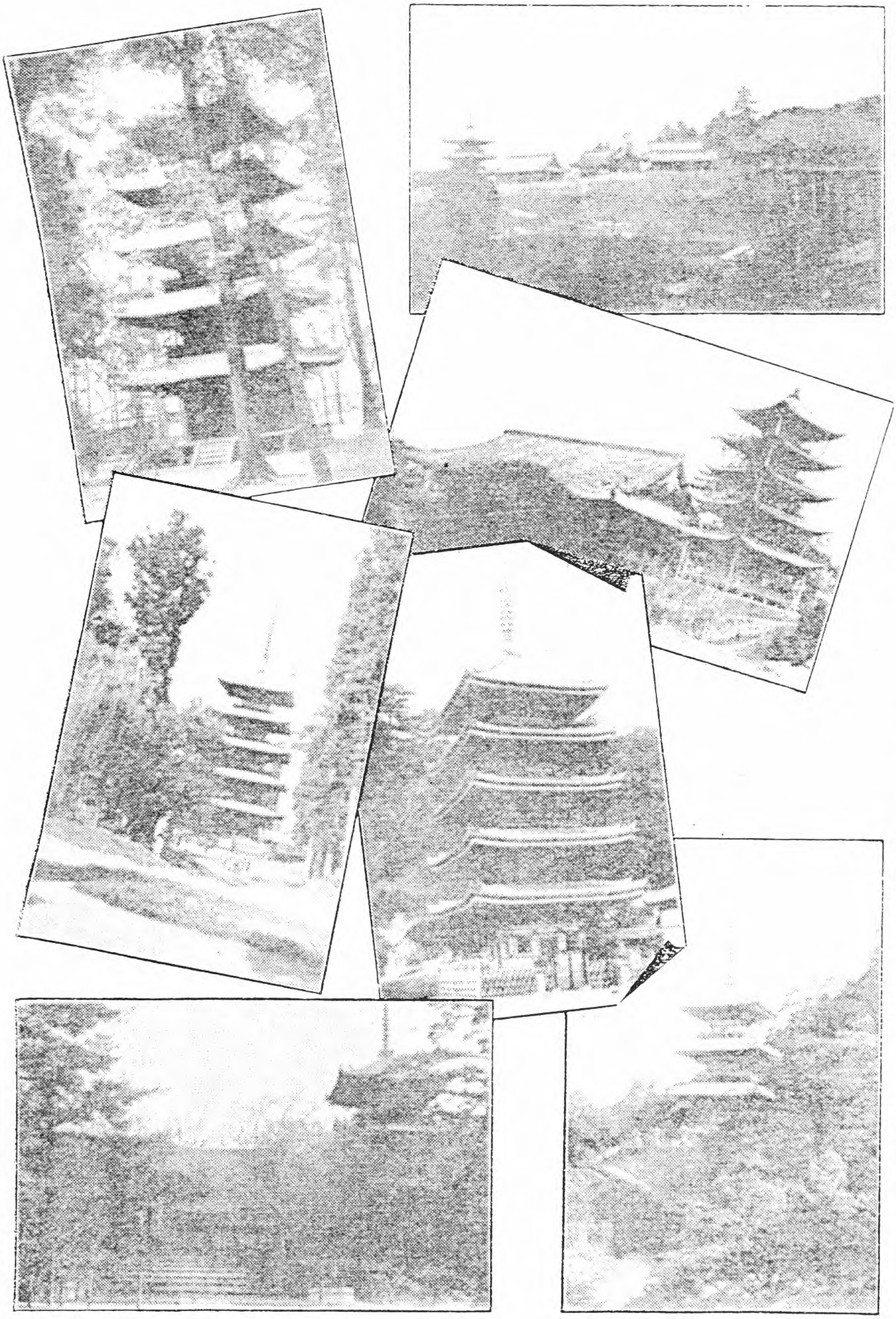


華族會館の一部



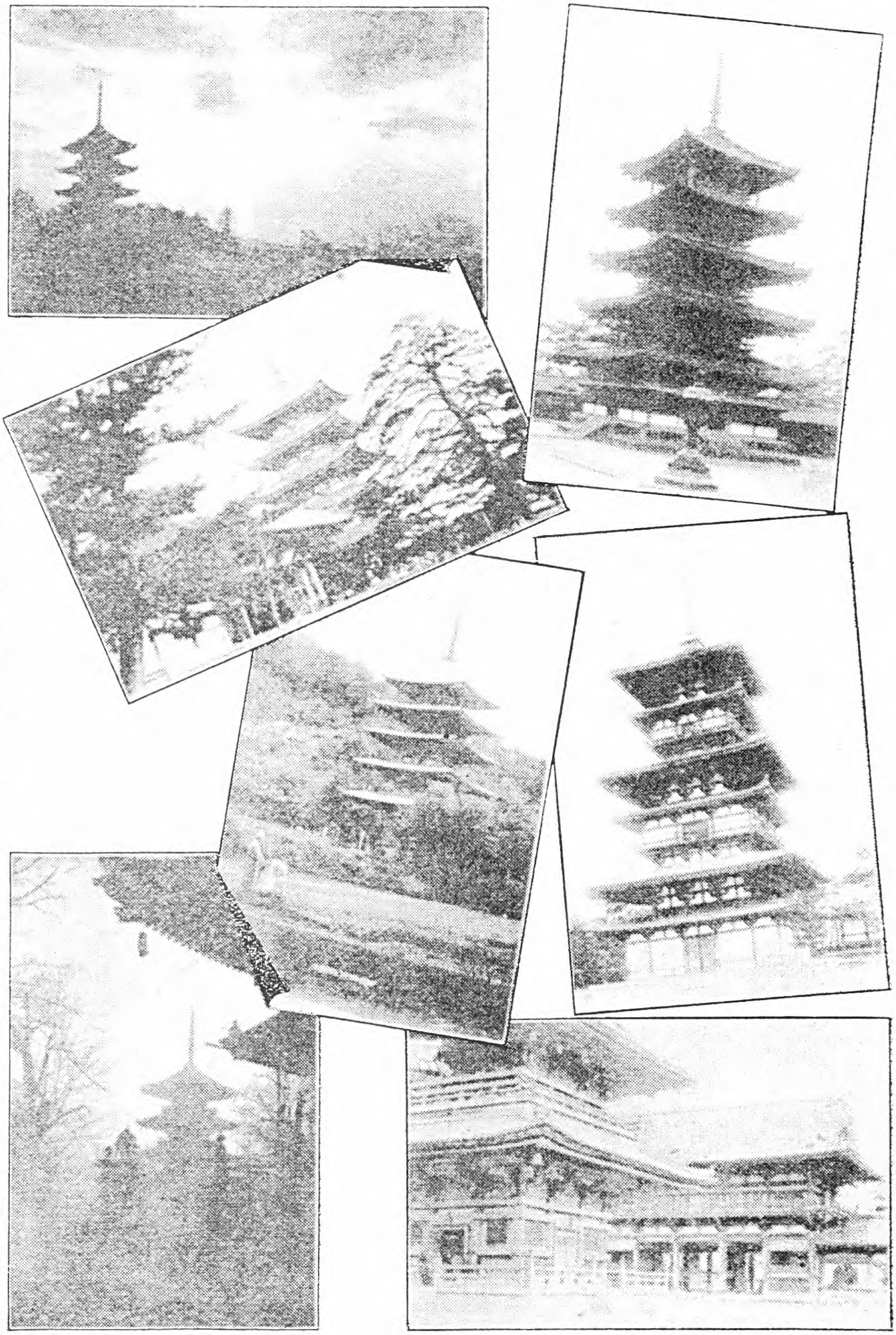
大倉喜八郎氏食堂

塔（其一）



（右）京都清水寺の塔、安藝嚴島の塔、備後明王院の塔、出雲清水寺の塔（左）東京上野東照宮の塔、弘前市大圓寺の塔、京都眞如堂の塔

塔（其二）

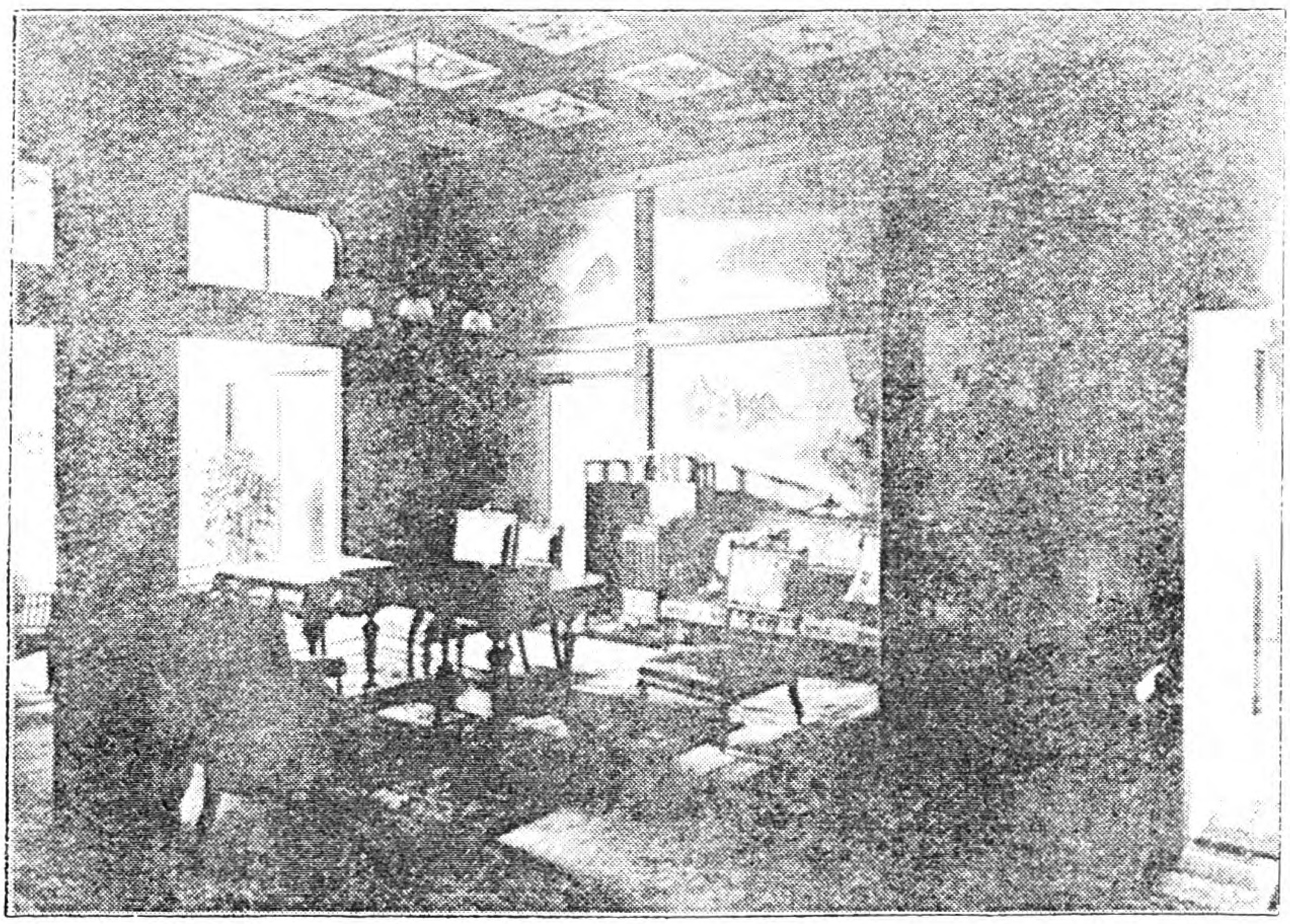


（右）大和法隆寺の塔、大和藥師寺の塔、大阪天王寺の塔（左）京都東寺の塔、奈良興福寺の塔、山口璃瑠光寺の塔、東京芝公園圓山の塔

室内美（其二）



麻布三井家桐の間



仝家四季の間

今の婦人

紙數二百餘頁
美麗口繪挿入
定價貳拾錢
送料壹錢五厘

本書の内容

●美しい血　佐藤まさ子
●與へられたる生命　山田邦子
●木柵　長曾我部菊子
●大川端　鈴木春子

▲美しき色彩　執筆婦人九名
●見るも夢、覺むるも夢の女　若杉濱子
●面がはり
●母に縋りて　前島ゆり子

▲若奥樣の生活　白木紗子、枝の小島、きみ子

◎賣約濟　うすゆき
◎死なれぬ女　山崎千代子
●現代婦人の進歩　河井酔茗
●良人の選擇に迷へる女に與ふ　雨をとこ

▲婦人登山記　玉蕊子　かつら
●私の心を縛つて欲しい　迷へる女
●白き月の沈む頃彼女は眠れり　初枝野道子
●獨寢の枕に響く鐘の音　月夜花
●正氣か狂氣か　秋扇
●教會を脱したい　芳子
●女學校窓に覗いた世間　白雨女
●涙を呑んで運命に從ふ　神保千代野
●單調なる生活に倦む　野に降る雨
●覆面を脱ぐ　築土の草
●私の運命を左右した試驗の力　秋香
●危うく戀の波に浚はれんとす　夕がほ
●引いて歌ふや獅子の曲　さつき
●夢の記　葛の葉
●三人女　芳惠子
●遊學を志の貫かうとする初一念　星子

◎夜の自然を愛す　吉田紫花
◎覺めたる日記　安木春子
●懷姙日記　越路女
●苦勞人の面影　船田馨子
●私の離縁された一事始終　小夜時雨
劇
●早婚の爲に生じたる吾家の悲　新田文子
●嫂の冷たき心を悲む　島守女
●姑の我を折らすも少しの呼吸　月見草
●子供を持つても忘られぬ文學　はまゆふ
●細君評判記　さくら貝
●袖香爐　横瀬夜雨
●朝しづく　三加島葭子
●七世の後も　原田琴子
●栗の實　美耶子
●小品文、詩、和歌、俳句

東京　京橋區大鋸町　女子文壇社出版
（振替口座第壹七貳九番）
●賣捌各地書店●

地方の婦人

紙數二百餘頁
美麗口繪挿入
定價貳拾錢
送料壹錢五厘

本書の内容

地方婦人の自重を望む 下田文學士◉女が中心になつて働く 横井農博士◉行ける處まで行き得ない 田山花袋◉女性の自然の觀かた 小島烏水◉天然の美と婦人の美 大下藤次郎◉私の故郷 尾上文學士◉海豹島の婦人生活 岩野泡鳴◉杉坂峠 澤村文學士◉下京の女 兒玉花外◉雲雀鳴く野 夜雨◉煽風器▲富士登山は宜い經驗 目賀田逸子▲鳥の鳴く廣尾の奥 仲小路八重子▲田舍では讀書より仕事 遠山稻子▲周防の德山 武田貢▲氣が利かぬ代りに人情に厚い 中村若子▲幼い時は山へ成長すれば海へ 岸すみ子▲信飛境上の深山旅行 辻村鏡子▲暑い方に向ふ 中野仙子▲嫁して後忍耐強い京都婦人 松岡いと子 (小說)漁父の母 小栗籌子 賣り桑 水野仙子◉海岸 河井酔茗◉琵琶湖しのぶ◉雨 川路柳虹◉伊豆の海岸より 中村女學士◉淡路の生活 一色醒川◉騒鈴 色彩的區分したる大阪市の婦人 みどり女◉神戸 羅漢柏 東京近縣の女の特色 遲塚麗水◉都會より地方へ 長曾我部菊子◉嫁の旅日記 靜江◉農村の處女が最も活動する田植時(伊豆、伯耆、近江) 富山と岡山の女 下總子◉本州の南北兩端より(薩摩、北見、)◉五年以前 山田邦子◉諸國通信(肥前松浦、××町、和泉の南、伊豫松山、常陸下館、野州小山の各地より) 山岳と海岸▲熱海▲房州の渚▲越後の海▲秩父▲高尾 地方の現在 石油の噴出 蒲原草蕨 其他 都會に憧憬れつゝある若き女の叫び▲私の淋しい心を察して下さい 北斗星▲行きたいくと思ふ一念 桃の花▲擂鉢の底のやうな土地より 上田けん子▲嚴格に過ぎたる家庭 白露子▲船中より身を投んとしたる其後の私 虹文◉創作(和歌、小品文)

東京 京橋區大鋸町 女子文壇社出版
(振替口座第壹七貳九番) ◉全國各地書店◉

都會の婦人

紙數二百餘頁
美麗口繪挿入
定價貳拾錢
送料壹錢五厘

本書の内容

東京の地と東京の女
▲芝居の書割のやうな不忍池畔 馬場孤蝶▲新しい親系の盡きざる都會 蒲原有明▲大いなる未成品 戸川秋骨▲西と南の郊外 吉江孤雁

街頭を歩める女の印象
▲張りつめた力 小川未明▲雪の夜の銀座 服部嘉香▲植物園で逢つた女 北原白秋▲僅に殘れる印象 水野葉舟▲街の夕月 森川葵村▲三人の女(對話) 吉井勇▲油繪に入る女 木下杢太郎

● 詩に現れたる都會 河井醉茗▲暗愁に囚はれたる都會の女性 澤村文學士▲西の郊外より 水野千枝子▲南の郊外より 荒川澄子▲日比谷太神宮結婚式の記事 遊蝶花▲上野より(對話) うすき雪▲婦人席にて さわらび女▲東海道線 羅漢柏

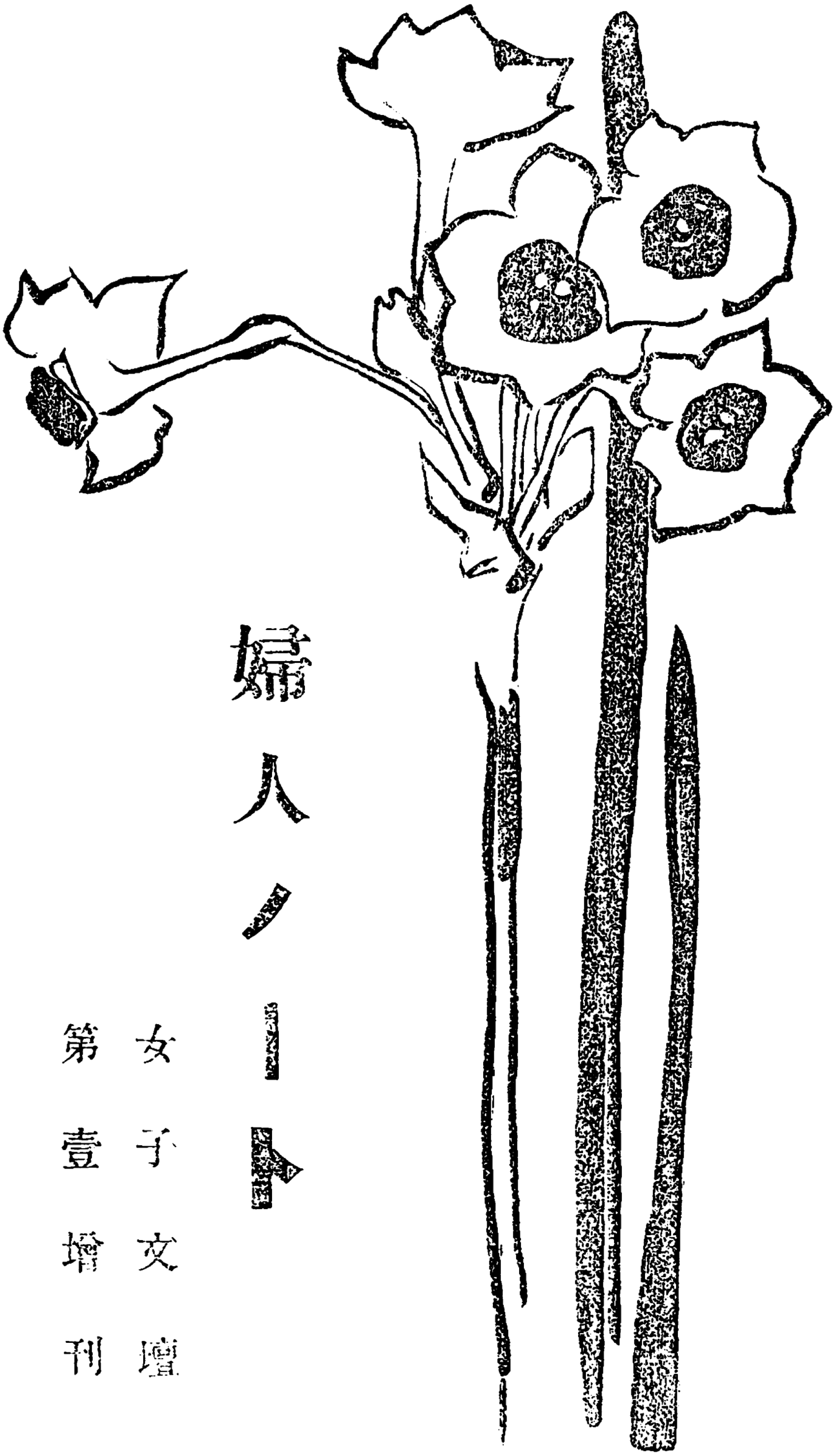
東京印象記
萬壽子▲銀座 くに子▲神樂阪 白百合▲魚河岸 ▲日比谷 春子▲根津 簞子▲不忍 瀬子▲芝公園 やゑ子▲谷中 霞子▲神田 樂子▲西片町 千歳▲美しい動物園 しげを▲深川 ふぢ

都會の渦捲に漂ふ若き女の眞情
▲濁つた室に輝く電燈 やゑ子▲入京記 きく子▲闘ひ疲れて 白山吹▲熱涙冷涙 湖畔の女▲造物主は何故私の鼻の土を倹約したのでせう 常世草▲心の活動寫眞 夕ぼし▲湯屋の三助に不快を感ず 萩花▲開放されたのか落伍したのか 藥隱れの花▲欺かれたる工女の懺悔 沼谷額子▲東京大阪京都 きく子

都會の實際的生活
▲生活の階級 霞子▲卒業式の前 つゆ草▲バザーの當日 靜江▲某子爵邸に遊ぶ 白菊▲お嬢様のお供 森英子

創作
▲(小説)卵涙 花子▲(散文)山みち野ちみ 章子▲(詩)白鳥 田中蕗葉子▲(歌)灰色の波 原田琴子▲(俳句)木の芽 披出子

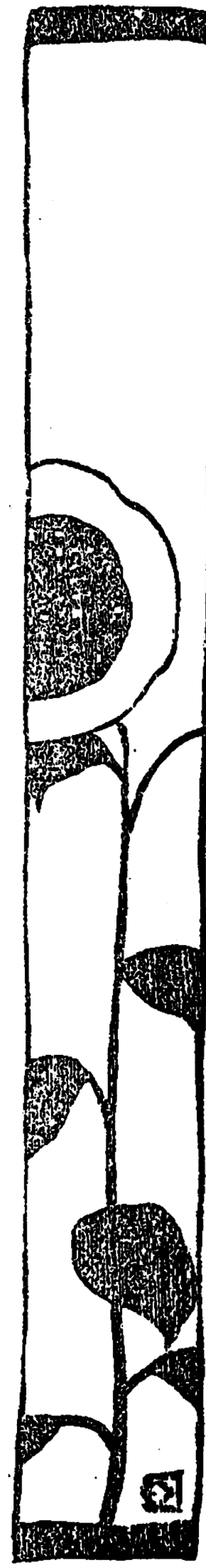
東京 京橋區八鋸町 **女子文壇社出版**
(振替口座第壹七貳九番) ◎賣捌各地書店◎



婦人ノート

女子文壇

第壹增刊



春の寫生法

學習院女學部教授　岡野榮

▲春の繪は俗になり易い

花咲き鳥唄ふ春の自然は、一幅の彩畫とも見えるけれど、實際春の野なり花なりを寫生して得たる畫は平凡俗惡に流れ易いものである。さりながら日は暖かし風は柔かなり、郊外寫生には持て來いの好季節、諸子も必らずや畫具箱を携げて、花の野邊を逍遙はれる事と思ふ。

春には又春の特色が有る、空にも地にも只柔い調子が漲つて、色彩綾なす花は地に滿つる、で注意して描けば又面白いものも出來るので有る。

▲迅速なる自然の變化

俚言にも『三日見ぬ間の櫻かな。』と云ふ事が有るが實に春の自然界程變化の多い時はない。今朝木々の梢に星程の芽が見えたかと思ふと、晝には最早小さい葉が出てゐる。櫻などは僅か一夜見ぬ間に最早殘らず散つて了つて居る事がある。其れで少し念の入つた畫になると、其れを完全に書き上ると云ふ事は、初學者には少なからず困難な事と思ふ。

嘗て私が郊外の寫生に出掛けて、雜木林の其處此處に可愛い丶芽が萠き出した頃書き始めたが、恰度其頃

は雨の多い頃で、其爲め一日行つては二日休みと云つた風になつて、次に行た時には最早一面綠を呈してゐたので、折角の畫を書き直して、又次に行て見ると今度はずつと濃厚な綠になつてゐた。其麼風に春の自然には絶えず迅速な變化が有るから、夏や冬の樣に幾日もかゝつて一つの畫を描き上ると云ふ事は難しい。其れで筆を取る始めに、先づ幾日で書き上ると云ふ豫定で掛らなければ折角の畫も半途にして終らねばならなくなる。

春には一種の柔い氣分が有る。山も杜も空もふうんわりと暖い霞に包まれて、其處に又一種の赫とした明がある。此美しい氣分を表現するためには又少なからぬ注意を要する、で可成暖い明るい色のみにて其畫を描き上げる必要がある。如何に形が整つて居ても春の氣持が出てゐなくては其畫に何の價値もない。

▲花の寫生

櫻などの樣な花の寫生は殊に困難なもので有る。晴れた日光を受けた花と、曇つた時、雨の時と、天候に從つて、色彩に變化の有るものである。初學者は櫻は常に櫻色だと思つて描く。然し周圍との關係、或は天候の變化に依つて、或時には黄色くも見える、或時には垢れても見えるが、槪して櫻は白色に近い色をしてゐる。馴ぬ間は往々櫻色に書き度がるものだから、其邊の注意も必要である。又櫻の如き花は往々平板單調な描寫に流れ易い。是は陰影と日當の觀察が足りない爲めに只一面の霞が錦の樣なものになつて了ふ。此厚味を見せると云ふ事が必要である。

菫や蓮花を描く場合、初學者はともすると其花瓣の一つ〱迄も、餘りに精細に描かうとする。其れは野に咲いてゐるのを不圖見た時の感よりも、其物の形と云ふ事が頭に殘つて居るからである。只見た儘を描けば可い、星の樣に見えたなら星の樣に描けばいゝ、或は只一面紅の草原に見えたなら、其色でざつとぬれば可い。實際の寫生は只見た儘を描くので有て、精細に描いた爲めに却て全體の調和を破る樣な事が有ては

ならぬ。

▲景色の寫生

理想的に云へば、遠くには霞に包まれた山々が横つて居る、麓の森も紫に霞んでゐる。すぐ近くには新綠の森を脊負ふた寺院の屋根が見えて、庭の櫻は今が眞盛りである。白堊には鈍い光が射して、小川の岸には菫が咲いてゐる。而して四邊は一面五形花の原である。と云つた樣な場所が有るとする。

其處を寫生するのには、先づ鉛筆で持て精細に全體の形を取る事が必要である。其後、馴れた人では自分の感じた色からどし／＼書きこなして行く事が出來るけれ雖、初學者は一番薄い色から塗り初めるのである。若し近景に非常に色の濃い松などが有るとする、而して其れを濃厚な繪具で描き上げて見る、すると調和上其繪全體が段々と暗くなりゆくのみである。然し薄い色から段々と厚い色に及ぶ時には、決して全體を暗くする樣な事はない。で初學者は可成安全な法を取る方が得策である。

其れで先づ第一に、雲の部分を白く拔いて置て空と水とを塗る。空の色も地平線に近付くに從つて、段々と紫色掛つた鼠色を呈して居るので有るから、其邊に注意して、空の地色の稍や涸いた後、コバルトにピリヂアン。或はレモンエローの如き暖い色を混じて用ひる。又多少ローズドレーの樣な淡紅色を交せても可い。

次には遠い山の霞める色である。是はコバルト。ローズドレー。ガランス。ピンクマダム。（カーマインの如き強烈なる色は避けなければならぬ）などで書き上げて、多少近くなつた山には、僅ばかりグリーンをかけるが良い。

次には野原の草の色である。春の初めには多少黄色を帶びてゐるから、先づ黄色で塗つて後に綠をかける又始めから混合して描いてもい丶。

其後に白壁などを拔いて森を書くのだが、白堊は決して純白でなく、空氣のため多少紫色を帶びてゐる。杜森の色は遠くでは山と同色である。而し近いのは

緑色をしてゐるが、熟く見ると草や樹の緑とは異ふ。故に遠景の緑は熟く注意しないと近景との調和を缺く事がある、其れで多少のコバルトを混ぜてもいゝ。

手前の杜を書けば次には櫻などの花である。これは森などの背景から空に抜け出てゐるものは多少暗色を呈して居る事に注意せねばならぬ。然し背景が暗や杜や樹で有たなら花は白く見える。(花の寫生參照)

下草に野の花が咲いて居れば、後から紫なり紅なりを入れる爲めに、草を



描く時先づ白く抜いて置くのであるが、近頃は其麼面倒な事をしなくとも、草の色が濁いて後チヤイニース、ホワイトで點を作る樣になつた。其れで是等の花を描く時には、先づ先程花の寫生の所で云つた注意を熟く考へてかゝらねばならぬ。

次には水に映つて居る影であるが、是れは森なり、花なりの色で其儘に描けばいゝ。

最後に、最も手近に有て、能く形の見別けらるゝ花や葉を描き入れ、又全體で最も強い色を處々にさす。其れで其一枚

の畫は出來上つたのである。

△遠景を洗ふ事

水彩畫で遠景の一度描いた上を、どつぷり水を含めた筆か、スポンジの樣なもので洗ふと非常に柔い空氣の調子が出る事がある。殊に水蒸氣の多い春の寫生には適合した方法である。雲なども斯うして描けば圓味が自然と見えて來る。

春の景色に限つてゞはないが、婦人が水畫を描く時動もすると、同じ場處を二度も三度も摩擦癖がある。是は最初筆を取つた時に思切りが惡いからなので、結句いゝしみを作る事になるが、筆にどつぷり含めて描けば其麼事はない。是れは空とか平らな處とかを塗る時には最も注意を要する事で、又若ししみが出來たにしても乾いて後に幾らも直す法が有るのだから、濡れてゐる間に小細工をする事は避けねばならぬ。然し馴れるに從つて却て雲や空に此しみを作つて美味を見せる事がある。未だ乾かぬ地塗へ稍々濃い色を落して技巧的に作るのだ。けれども初心者は其麼事は避けて、却てしみたなら直す工夫をせねばならぬ。さうするには地下の色が乾かぬ間に上色を洗ふと、却て下色を損ずる事があるから、先づ乾いて後に、今云つた洗ひ法を應用すれば可い。

△主なる繪具

春の色はなるべく透明な暖味のある色を用ひる樣にして、暗い寒い色は避けなければならぬ。若し止むを得ず用ひる時には小量の明るい色を混合して用ひるがいゝ。

春の寫生に用ひる重なる繪具を書いて見やう。但し是等の繪具は單色で描く事は極めて稀で、常によく配合して用ひるのである。

青色。コバルト（空、水、山など）
　ビオレーコバルト（遠景や影、有れば調法）
　ウルトラマリン（樹や草の深い綠）
赤色。ローズドレー（花や空）

ピングマダー（花や空）

黄色。レモンエロー（草や木の葉）

ガンボーシ（草や木の葉）

綠色。エメラルドグリーン

ピリヂアン

其他の色。

バーミリオン

エローオークル

ライトレッド

カドミユム

チヤイニスホワイト

先づ是れだけの色を具へて置けば、春の寫生には差支へはない。

繰返して云ふ。春は總ての變化の烈しい時である。春の感を出すには、眼前の印象を捉へて、見た儘を正直に描け。

* * * * *

深閨記

井上過女

夫れ女子の道たるや、日を閨門の內に及て非とする事なく儀とする事なし、柔順以て德となし而して行必ず信にす。酒食衣服是れ議り而して外事なし。若し夫れ之に反する者は、此れ天道の常に違うて、禍亂必ず至らむ。故に姙姒德に順ひて周室內助の功あり。呂武政を專にして終に其族を亡ぼす。樊姬身を修めて、莊王過を改む。驪姬姦を作して、嗣子安からず。趙姬叔隗に事へて、子孫祥を承く。夏姬淫にして子を殺し國を傾く。此に因て之を觀れば、治亂豈に婦人に關するかな。予終日深閨に在り諸の史鑑女圖を歷見して善者は之を師とし、非者は之を戒とす。尙くは過を改め、此に其の終りを克くせんことを。故に志を寫し拙を述べ、以て壁に書しぬ。銘に曰く。

閨室の幽、獨り詩書に對す。聖賢を師として心の樂しみ餘り有り。

婦人の職業を開拓いて行く途

太平洋生命保險會社長　中村靜嘉

女子の職業に就ては、多少の理想を有つて居る。兎角實行は理想通りには行かぬものであるが、これは廣く社會一般の人とも相談をして、婦人自身の立場としても、大に考へて貰はねばならぬ。と同時に私どもの理想も實現せらるゝやうにして貰ひたいものである。

外國では年々女子の職業が增加して來る、卽ち多くの勞力を要せぬ緻密な仕事は、女子の職業として多く與へられて居り又男女間に於ける弊害も極めて少い所から、男女同じ場所に同じ仕事をして居ても、男は女を輕蔑し、女は男を度外視するといふやうなことはない、それ〳〵その職業に勵んで居るから、自然女子の職業は廣くもなり、多くもなり、且發達もして行く譯である。

然るに我國の現時の有樣では、男女同じ場所に立交つて仕事をするといふことは、相互の關係上に取締を要するのみならず、男女の智識に懸隔がある所から、談話の材料も異つて居つて、とても外國流には事情が許さぬのである。

よつて女子には女子專務の職業を與へねばならぬ、女子も亦相當の職業に從事すべきものたることも心掛けねばならぬ。未だ我國では女子に相當する職業に乏しいこと、この職業に從事する用意に缺くる所があつて、其爲に女子の獨立、女子の自活の道がうまくゆかないから、止なく羞づべき群に投ずるものも決して少なくはない。

差當つて女子の職業としては、第一に裁縫、造花、刺繡、意匠、圖案といふ所で、これに依つて一家を立てるといふことは困難であるが、辛うじて一身を立て

ることは出來る。これを大に發達させると同時に、女子適當の仕事を見付け、女子の職業を多く且つ盛んにしたいものである。

蒔繪は最も緻密な仕事で女子に適當して居るが、それすら多くは男子の仕事となつて、裁縫刺繍の如きも、職業としての大部分は男子が占領して、これ等の職業からも、女子には多くを與へられぬことになつて居る。女子は大に奮勵して、この領分を開拓せねばならぬ。

事務員としての女子、これも次第に用ひられるやうになつて來て、女子に取つては誠によいことである。外國では女子が首腦となつて、事に當つて居る働き振りは男子も及ばない程である。

又タイプライターなどは、女子に適當な仕事で、亞米利加などでは、殆んど女子專有の業となつて、一箇年之れによつて受くる女子の所得は、一千五百萬ドルの多きに達すとの事である。日本でもぼつ〳〵行はれて來たが、英語さへ出來ればさまでむつかしい仕事でも無いので、月俸五十圓位は得られるものもあるとのことである。

當會社などでも女子を使つて居るが、尤も勤直に事務を執るのは、一般に二十三四からである。私も男子よりも多數に、女子を使ひたいとの理想ではあるが、急には實行が出來難い。それには事務室の構造からして改めなければならない。先年シカゴ婦人博覽會の事務室を見たが、それは實に巧妙に出來て居つた。男女が如何程交つて事務を執つても、弊害がない、其の事務室の構造に倣ひたいとは思ふが、こゝ幾年後に出來るかは考へものである。

それから女子の職業として、化學の分析なども適當の仕事と思ふ。鑛山、又は鑛業試驗所などで是非この分析のことは、女子に分與して貰ひたいものである。

一定の原則によつて手を下すべき緻密な仕事は、女子に最も適當である。首腦となつて事に當るまでには行かないが、會計の助手、物品の出納、その他物を整理する事等は尤も適任であつて、これはなか〳〵成績がよいやうであるから、此方面に向つて、女子の職業の餘地はまだ〳〵盛んにあることゝ思ふ。



一年中室外で出來る遊戲

女子高等師範學校長　中川謙二郎

私は此頃純日本固有の婦人の遊戲として、體育上にも後世につたへられる樣なものを見出したいとしきりに思つてゐるが、どうも今の處で、さしたる發見もなく、殘念な樣にも思ふ。先づ今の處で體育上にも充分價値が有り、行はれて居る事に、薙刀、弓、まれには柔術、などが有るが、其等は、もとより昔の如く身のたしなみとして習はぬまでも、遊戲として行るのではない、それこれから考へて、先づ今の處で、純日本固有の遊戲として、婦人に適當な、しかも體育上にも相當の價値を持つて居るものに、羽根つきが一つ有ると思ふ。

御存じの通り羽根つきは、今の處で正月にのみ限られて居るが、勿論正月は餅を食ふたり、脂肪氣の多いものを食ふ時であるから、引籠り勝ちな日本婦人として、非常に適當な好い遊戲であるが、私は之をただに正月のみに限らず、一年中通して、婦人の遊戲として、行つて非常によい遊戲と思ふ。

何んでも昔京都の大宮内などでは、盛んではないまでも、細く、長く、一年中の女官たちの遊戲として、之を行つて居つた樣であつたが、現今は知らない。現今もなほ其風が殘つて居るとすれば、益々其風を盛にされたいものである。

何せよ遊戲などでも、兎角うつむいてする事は餘り好ましくない。かるたなどは世界中あらゆる人種の好む遊戲であるから、其れを私は無理に止めはしないが其れよりも、より以上外に出て、廣濶とした天を仰ぎ仰向て遊ぶ事は、精神が自然のび〱として高く廣く晴晴と、何となく向上發展の氣を養ふ樣なものであるし、

又生理的に言つても、胸を開き、手や足を、自由自在に動かして遊ぶのだから、こせ〳〵とした事よりも、どれ程趣味多い事で有るか知れない。加ふるに、外氣に慣れて皮膚を健全にし、ちつとやそつとの風位に、おぢ〳〵と縮み上る樣な事も無くなるだらうから、精神的に言つても、生理的に言つても、誠に得がたい遊戲であると思ふ。彼れこれから押して此遊戲は、たゞに婦人のみに限らず、男子がまじつてやつてもさしつかへない。かるたなどに男子がまじつて、たてこめた室の中で、烟草の烟や、人氣の滿ち切つたなかで、うつむき屈んで、押したり、突いたりと言ふ事が有るので、間違ひも起り易いが、かう言ふ廣濶とした野に、一定の距離を保つて、力をふるつた遊びをするなら、ほんとに男女混つて遊んでも、かへつて面白い事にもなり、男女の交際と言ふ事が、ほんとに清く發展してゆく事にも成らうと思ふ。今の處で、此風はいちづに市井の賤しい風と、習慣的に思ひ込まれて居るのは、なげかはしい事で有るけれど、さりとて今の處、強いてそれを男子に押し付けないでもよい、婦人の間には、此風を盛にしたらよからうと思ふ。美しき羽子板、白き羽根、いづれから考へても、誇るべき日本の遊戲だらうと思はるゝのである。

それに付いては、羽子板の押繪であるが、どうも今のまゝでは好ましくない、役者の似顏や古い型としていやしい好みではなからうが、そんな事から羽根つきを全然止めて居る家庭も有ると聞いた。折角これ程得がたい遊戲を、こんな事の爲に止めたくはない、役者の似顏も惡いではないが、其向き〳〵を考へて、此一つを以つてのみせずに、上品な家庭向きにも、何か新案をこらして、例へば今盛に行はれて居る造花などを美しく飾つたものをこしらへるとか、新案の道は廣く開けて居る。

かくてこれを眞正の意味から婦人の遊戲として殘したい。此外まだ、何か然るべき遊戲も有らば、私は參考の爲廣く聞きたいと思つて居る。

東京ノート

▲區名の訓み方

京橋（きやうばし）。日本橋（にほんばし）。神田（かんだ）。下谷（したや淺草（あさくさ）。本所（ほんじやう）。深川（ふかがは）。本郷（ほんがう）。小石川（こいしかは）。牛込（うしごめ）。麹町（かうぢまち）。四谷（よつや）赤坂（あかさか）。麻布（あざぶ）。芝（しば）。

▲町名の訓み方

大鋸町（をがちやう）。木挽町（こびきちやう）。築地（つきぢ）。靈岸島（れいがんじま）。佐柄木町（さえぎちやう）。八官町（はちくわんちやう）。【以上京橋】幸町（さいはひちやう）。隼町（はやぶさちやう）。平河町（ひらかはちやう）。番町（ばんちやう）。飯田町（いひだまち）。大手町（おほてまち）。八重洲町（やへすまち）。有樂町（いうらくちやう）。【以上麹町區】檜物町（ひものちやう）。槫正町（くれまさちやう）茅場町（かやばちやう）。蠣殻町（かきがらちやう）。藥研堀（やげんぼり）。石町（こくちやう）。本銀町（ほんしろがねちやう）。【以上日本橋區】多町（たちやう）。美土代町（みとしろちやう）。甲賀町（かふがちやう）。神保町（じんぼうちやう）。猿樂町（さるがくちやう）。旅籠町（はたごちやう）。同朋町（どうぼうちやう）。【以上神田區】徒士町（をかちまち）。二長町（にちやうまち）。入谷（いりや）金杉（かなすぎ）。谷中（やなか）。三ノ輪（みのわ）【以上下谷區】千束町（せんぞくまち）。山谷（さんや）。今戸（いまど）。馬道（うまみち）。鳥越町（とりごえちやう）。三筋町（みすぢまち）。山宿（やまのしゆく）。【以上淺草區】駒込（こまごめ）。動坂（どうさか）。千駄木（せんだぎ）。湯島（ゆしま）。切通（きりどほし）。新花町（しんはなちやう）。龍岡町（たつをかちやう）。【以上本郷區】白山（はくさん）。指ケ谷町（さすがやちやう）。餌差町（ゑさしまち）。表町（おもてちやう）。久堅町（ひさかたまち）。氷川 ひかは）。第六天（だいろくてん）。小日向臺町（こびなただいまち）。雜司谷（ざふしがや）。【以上小石川區】宮比町（みやびちやう）。改代町（かいたいまち）。赤城下（あかぎした）。矢來（やらい）。鶴巻町（つるまきちやう）。拂方町（はらひかたまち）。砂土原町（さどはらちやう）。甲良町（かふらまち）。藥王寺前（やくわうじまへ）。富久町（とみひさちやう）。大久保餘丁町（おほくぼよちやうまち）。【以上牛込區】本村町（ほんむらちやう）。愛住町（あいずみちやう）。大番町（おほばんちやう）【以上四谷區】溜池（ためいけ）。靈南坂（れいなんざか）。福吉町（ふくよしちやう）。榎坂町（えのきざかまち）。檜町（ひのきまち）。青山高樹町（あをやまたかぎちやう）。【以上赤坂區】龍土町（りうどちやう）。廣尾（ひろを）。飯倉六本木（ろつぽんぎ）。我善坊（がぜんばう）。飯倉（いひぐら）。狸穴町（まみあなちやう）。新堀町（しんぼりちやう）。【以上麻布區】烏森（からすもり）。兼房町（けんばうちやう）。露月町（ろげつちやう）。新錢座（しんせんざ）。明船町（あけふねちやう）。葺手町（ふきてちやう）。神谷町（かみやちやう）功運町（かううんちやう）。西久保（にしのくぼ）。白金（しろかね）。三光町（さんくわうちやう）。伊皿子（いさらご）。高輪（たかなわ）。【以上芝區】請地（うけぢ）。押上（おしあげ）。中の郷（なかのがう、。原庭町（はらにはちやう）。石原町（いしはらちやう）。錦糸町（きんしまち）。太平町（たい〻いちやう）。【以上本所區】猿江裏町（さるえうらまち）。木場（こば）。古石場（ふるいしば）。數矢町（かずやちやう）【以上深川區】沙場（すなば）龜戸（かめゐど）。向島（むかふじま）。千住（せんぢゆ）。日暮里（につぽり）。田端（たばた）。染井（そめゐ）。巣鴨（すがも）池袋（いけぶくろ）。目白（めじろ）。戸塚（とつか）。柏木（かしはぎ）。角筈（つのはず）。新宿（しんじゆく）。千駄谷（せんだがや）。代々木（よゝぎ）原宿（はらじゆく）。穩田（をんでん）。澁谷（しぶや）。目黒（めぐろ）。品川（しながは）。【以上郡部】（以上讀みにくきもの、特種の讀み方をするもの、讀み誤り易きもの等

を掲ぐ)

▲東京の名木。 鶴龜松(小石川細川邸前)。臥龍梅(龜戸天神)。蛸松(品川東禪寺前)。老梅(大藏省庭内)。稚兒の松(博物館内表慶館前)。老松(大塚村池田邸内)。大樅(高輪御殿内)。大椎(小石川小日向小學校内)。神樹(内務省横)。赤松(高輪御殿奥庭)。菩提(麻布德川侯邸内)。椋(小石川傳通院前)。化銀杏(芝區田村町)。さゝつばき(芝公園靈廟)。ユリの木(本鄕伊藤博士邸内)。東鄕大將手植の月桂樹(日比谷公園)。なんぢやもんぢやの木(青山練兵場)。

▲主なる新聞紙 東京朝日新聞。時事新報。報知新聞。萬朝報。國民新聞。讀賣新聞。都新聞。二六新報。中央新聞。やまと新聞。東京日日新聞。東京毎日新聞。毎日電報。日本新聞。

▲多きもの 男女學生。名流人士。櫻の木。公孫樹。檜葉。杉。扇骨木。松。鴉。馬。蕎麥屋。酒屋。煙草屋。ポスト。電線。地下線。轉宅。迷信家。電車。書肆。古本屋。往來止。繪葉書屋。草花屋。新聞賣。煮豆賣。豆腐賣。活動寫眞。寄席。洋服。洋館。西洋料理。水菓子屋(果物店)。寄留。製本屋。學校。自働車。魚屋。乾物屋。パン屋。牛乳屋。開業醫。古着屋。髯。紙屑買。郵便配達。山師。金貸。御仕立物所。天麩羅屋。脚氣。神經衰弱。から風。小火。貸間。下宿屋。燒芋屋。眼鏡。外國人。男女同行。散歩。屋臺店。賴母子。[illegible]地。道聞く人。靴さらひ。繪草屋紙。駄菓子屋。イルミネーション。夜店。女義太夫。繪畫展覽會。秋草。西洋花。毛蟲。肉屋。箱車。印刷所。鮭。大根。鱗。地震。其日ぐらし。内職。

▲少きもの 僧侶。老人。土塀。石。桃の樹。果樹。雀。竹藪。牛。人力車。旅館。鍛冶屋。提灯。土鍋。松茸。昆布。新年の廻禮者。井戸。時雨。蛇。西瓜。風。佛事。長持。土藏。煙突。數代續いた家。矢立。茛入。[illegible]。

▲電車の線路 現在の電車終點は、品川、青山、新宿、江戸川、小石川白山、小石川大塚、深川、千住、金杉、本所業平橋。乘換場所は切符にゝ點を印しある所。運轉時間は午前五時頃より夜半一時頃まで。電車賃は片道五錢、往復九錢、朝の割引中は往復五錢、回數券は二十回分八十五錢、三十回分一圓二十五錢、五十回分二圓五錢。重要なる停留場は卽ち乘換場に同じ、現今行はるゝ乘換切符(下圖)を見れば、一目瞭然なり。電車の切符も創業以來幾變遷した、目下行はれてゐるのは下圖の通りであるが、以前のものと比較すると線路の延長したことが能く分る、五年、十年の後は更に何う變化するであらう、參考の爲め現在の者を此處に示して置く。

乘換時間	行先	ノリカヘ	行先	ノリカヘ
十時 十二時	品川		築地	
八時 九時	さつまばら	〃	万世ばし	〃
六時 七時	大門	〃	三宅坂	〃
四時 五時	[illegible]	〃	[illegible]	〃
二時 三時	九段上	〃	赤坂見付	〃
十二時 一時	九段下	〃	青山一丁目	
十時 十一時	すきやばし	〃	[illegible]	〃
八時 九時	本石町	〃	麹町二	〃
六時 七時	外手町	〃	青山	
四拾四年二月十日	須田町	〃	新宿	
	小川町	〃	四谷見付	〃
	[illegible]	〃	市ケ谷	〃
	駿河台下	〃	飯田ばし	〃
	[illegible]	〃	江戸川	
	松住町	〃	白山	
	本鄕三丁目	〃	水道ばし	〃
	上野廣小路	〃	神保町	〃
	雷門あづまばし	〃	車坂町	〃
	厩橋	〃	[illegible]	〃
	蠣殼町	〃	[illegible]	〃
[illegible]	人形町	〃	小傳馬町	〃
	和泉橋	〃	御徒町	〃
	[illegible]	〃	大塚	
	日本橋	〃	中之橋	
	日比谷	〃	大曲	〃
	深川		呉服橋	〃
	茅場町	〃	[illegible]	
	淺草橋	〃	南千住	
	兩國	〃	春日町	〃

英語ノート

アトモスフィア　雰圍氣、大氣
コンヴェンション　因襲、踏習
ネガチイブ　消極的、反面的
パッシップ　受動的
ニックネエム　綽名
イルミネエション　電燈飾
アイロニー　暗譏、反語
マッフ　筒手套
マッチ　試合
レース　競爭
インスピレエション　靈感
ナチュラリズム　自然主義
アイデア　理想
ポエット　詩人
ユニヴァシテー　大學
シンパッシー　同情
コントラスト　對照
チヤアム　魅力、心醉

スタイル　姿態
タイプ　型
ライフ　生活
ノンセンス　無意味
メランコーリア　憂鬱病
グラフィック　畫報
デパートメント、ストア　雜貨店
マアケット　市場
サック　袋
カバー　外被
クラス　階級
アラモード　時好の、新流行の
アクタア　俳優
エキスプレッシヨン　表情
アート　美術
プロフェッサー　專門學校教授
クヰン　女王
ハート　心、心臓
エキスヒビシヨン　展覽會、共進會、博覽會
トラスト　資本同盟

ストライキ　同盟罷工
タイプライター　印字機
ビルブローカー　手形仲買
マネージャー　支配人・工業主
ブロマイド　引き伸ばし寫眞
バナナ　芭蕉の實
ワッフル　菓子の名
パイナプル　椰子の實
バルコニー　露臺（西洋館の屋上の見晴らし）
スケッチ　小品（文章又は繪畫）
サーチライト　探照燈（又は探海燈）
ハスバンド　配偶（夫）
ワイフ　妻
ラブ　戀愛
ポリスマン　巡査
ネームカード　名刺
ダイアリー　日記
プログラム　番組
カレンダー　暦
カタログ　目錄

ライブラリー　圖書館
ドア　扉
チッケット　切符
ポスト　郵便函
ドクトル　博士
ビーフ　牛肉
ドーター　令孃
マダム　令夫人
ミス　孃
ミセス　夫人
デア　親愛なる
フラワー　花
ウエルカム　歡迎
ビューテー　美人
フエース　顏
シスター　姉妹
パンヂー　三色菫
バイオレット　菫
スター　星
マレージ　結婚
エンゲージ　婚約

ホネムーン　新婚旅行
スヰート　快き(甘き)
ホーム　家庭
ハンドル　把手
レター　手紙
アルバム　繪葉書帖
クラスメート　級友
スクール　學校
チヤチー　教會
バイブル　聖書
チーチヤー　先生
スチユデント　生徒
リーダー　讀本
パラソル　洋傘
ベール　面帕
シヨール　肩掛
リング　指環
ボンネツト　花帽
スカート　裳裾
オペラバツク　手提袋
オペラグラス　觀劇眼鏡

ガーデン　花園
カーテン　窓かけ
レデー　貴女
フレンド　友人
ホームシツク　懷郷病
モデル　手本
ミユジツク　音樂
ソロ　獨唱
テクニツク　術語
メロデイ　旋律
パーク　公園
ミルクホール　牛乳店
レストラント　料理店
ローズ　薔薇
ゴツド　神
タイム　時
ポケツト　衣嚢
シルクハツト　絹帽
ローカルカラー　地方的特色
アデユー　左様なら
クラシツク　古典的
ルビ　振假名
ミユーズ　藝術の神



和歌評釋 萬葉集の佳作

文學士　澤村胡夷

○

山の端にいざよふ月の出でんかと
　わが待つ君が夜は降ちつゝ

萬葉集に出てゐる忌部首黒麻呂の歌であるが、此歌は黒麻呂が友の來るを待わびた心を歌つたのである。句法が少しく複雜してゐるやうだけれども、其意味は簡單である。唯來るべき友を月に譬へたのに過ぎぬ。卽ち山の端より上らんとして躊躇つてゐる月を待つが如く君を待つてゐるに、夜は深けて行くといふのである。然し如何にも自由奔放な句法と云ふ事が出來る。

○

わがせこが假庵つくらす茅なくば
　小松が下の茅を苅らさね

是は中大兄皇子と中皇女とが紀伊の溫泉に行かれた時皇女が其途上にて詠じ給へる歌であるが、其內容は極めて簡單であつて、路傍に草などの茂つてゐる狀を捉へ來つて歌つたものである。然し內容の單純なるに拘らず音韻上の關係から外形的に一種の興味を添へやうと企てられてゐるのである。是れは頭韻の方法だ卽ち『かりほ』『かや』『小松』『かやをかる』などのKの音を驅使してゐる事である。此種の例は萬葉集には少くないので、例へば『淑人のよしとよくみて、よしといひし、芳野よく見よ、よき人よく見つ』の如きは此類である。此頭韻法は音韻上の關係から來るものであるから、音聲に依て謠ふものには自然的に生育するのである。後世の俗謠などには此方法を頗る有効に利

用してゐるものも少くない。數年前に流行した俗謠の中で『泣いてくれるな可愛の駒よ、こよひ忍ぶはこひじやない』の如きは頗る有効に驅使せられたる一例と云ふ事が出來やうと思ふ。

○

あしの葉に夕霧たちてかもがねの
　寒き夕べし汝をばしぬばん

是は東人の歌であるが、故國を去つて水路夢冷やかなる人の歌として殊に情緒の美はしく溢れてゐるのを覺える。句法や用語には必ずしも巧を弄してゐるとは見る事が出來ないけれども、却て其率直な語法が甚だしく人の感興を喚ぶのである。『汝をばしぬばん』と云ふ言表しは較露骨ではあるが、かゝる露骨なる言表し方が此場合には寧ろ有効となつてゐる。『汝をばしぬばん』と云ふ事が歌の主意と見る事が出來ると同時に其背後に於て作者は此率直な言表しを是認せしむるだけの情調を缺如してゐないのである。蘆の葉……夕霧……かりの音……日暮……旅人の悲しき胸……かくて作者は一句『汝をばしぬばん』と結んでゐる、有効なる所以。

○

家もふとさかしらなせそ風まもり
　よくしていませ荒き其路

こは筑紫の女の作つた歌である。故鄕へ歸る人に與へた歌のやうであるが。女の歌として餘程優しみの籠つた作である。故鄕を思ふの念切なる餘、決して無理を爲給ふ勿れ、濤荒き舟路ゆゑ、風の和ぐ日を心して往にませといふのである。婦人の作としてその極めて細心綿密なる着眼點を喜ばねばならぬ。殊に往んとする人の身の上を案ずる切々の情が言外に溢れてゐる。而して婦人の胸奥に裹める優しき心情が遺憾なく流露せられて一讀人を動かさずんば止まぬ概がある。

○

埼玉の津にをる舟の風をいたみ
　綱は絶ゆとも言な絶えそね

これも東人の歌の一つである。埼玉の津は武藏の埼

玉郡の舟泊を指すのであるが、利禰河べりの舟着などを云ふのであらう。埼玉の津にゐる舟が風の烈しき爲めに其舟綱を截らるゝ事があるとも言を絶さずにあれかしと云ふ意である。此歌の最も技巧的な部分は『絶ゆ』と云ふ語を重ねて言を絶やさであれかしの意を强めたに過ぎない。かゝる修辭法は古き歌には少くないまた後世の歌にも屢用ゐられてゐるもので、對遇法の一種である。『槍はさびても心はさびぬ昔忘れぬおとしざし』といふ唄の中の『槍は銹ても心は銹びぬ』と云ふのと同樣な言廻しである。

○

朝和に眞梶こぎ出でゝ見つゝ來し
　三津の松原浪越に見ゆ

萬葉の中の作者不明の分である。三津の松原とあるのは攝津國西成郡にある地名であるが、歌の意味は極て簡單明瞭である。三津の松原を海上より望見して歌つたまでで、浪越に三津の濱が見ゆると云ふに過ぎぬ然し幼稚な一種の技巧が此歌には用ゐられてゐる。是は古い歌には勿論の事で、謠曲の道行文などに往々發見する方法である。それは卽ち『見つゝ來し、三津の松原』と云ふ反複法であつて、祝詞などにも多量に見受ける處である。この方法は枕詞の成立などにも多少關係を有してゐるので殊に古い歌などを知る上には記憶すべき事である。然しかくの如く音韻上の反複的技法を露骨に用ゐる事は今日の作詩上には餘り喜ばれない事をも忘れてはならぬ。旣に前に云つた頭韻法の原始的なものは實に此方法に外ならぬのである。

○

茜さす紫野ゆき標野ゆき
　野守は見ずや君が袖ふる

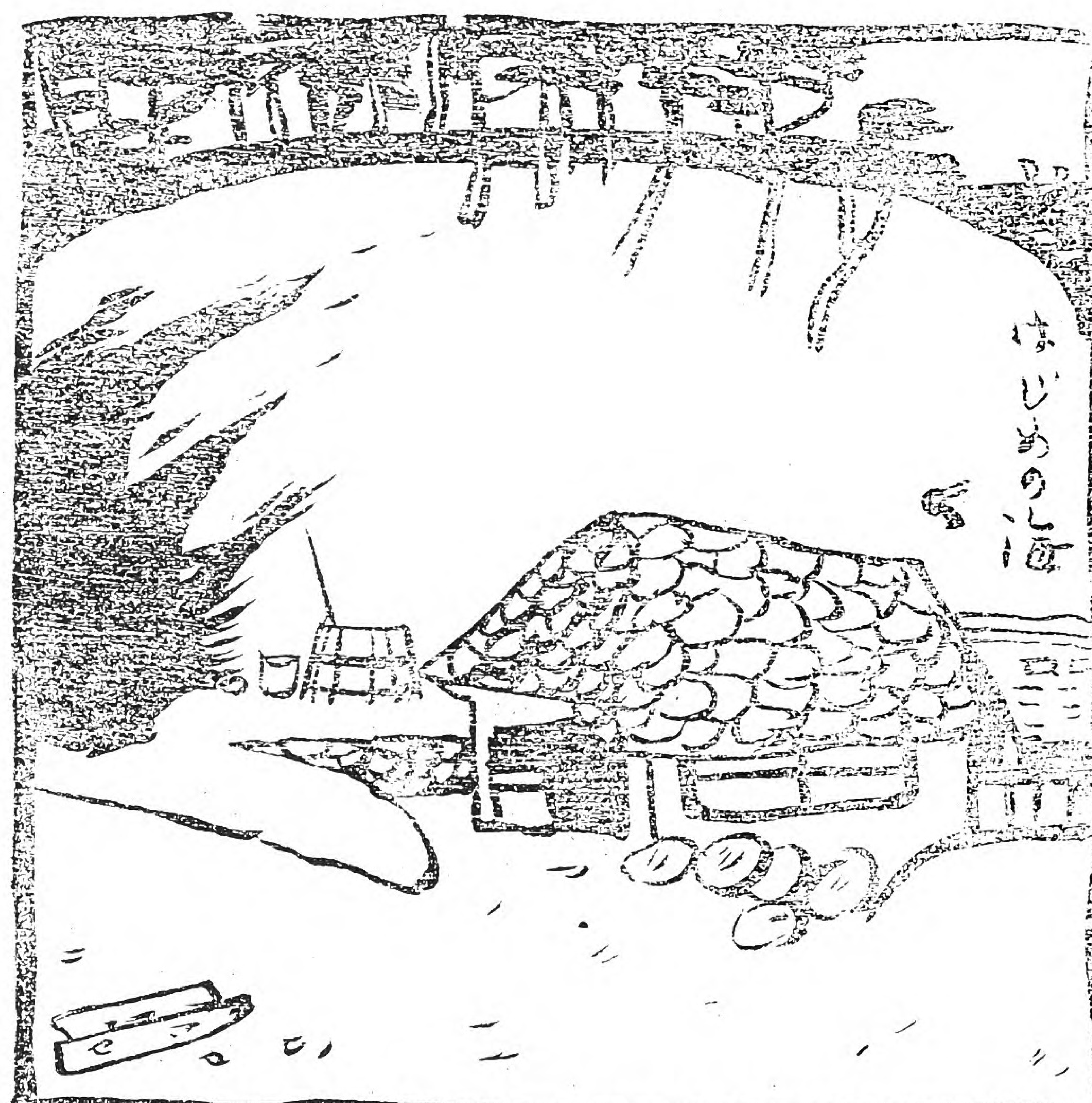
是は額田王の作であつて、天智帝が近江の蒲生の野に獵に出給へる時に作つた歌である。茜さすは枕詞で、紫野は紫草の繁れる野と言ふ意味である。標野は獵を爲給はむが爲に標定せられた野の義であつて『紫野ゆき標野ゆき』は彼處へ此處へと野を行き給へるの意を反複法の形を以て言現したのである。卽ち句の終

の語を反覆するやり方である。此方法は屢用ゐらるゝ方法であつて反複法の中でも殊に是は Epiphora と稱せらるゝ者である。歌の全體の意味は、君が紫野をゆき標野をゆき給ひて袖振給へるを野守は見奉らざるかと云ふのである

○

東の野に炎の
立つ見えて
顧すれば月
かたぶきぬ

柿本人麿の歌である。人麿が草壁皇子に從つて大和の宇陀郡に獵をした時の歌だ。曉明の景致を捉へて來たので、餘



に技巧を用ゐてゐないが、其句法の悠々迫らぬ裡に人麿の詩情を窺ふ事が出來る。炎と云ふは光の見ゆるに用たので東の空に曉の光が漂へるを指すのである。東を望めば野に曉の光のにほへるが見ゆるが、さて西を顧るに殘んの月が沒せんとしてなほ力無き光を投てゐると云ふ此歌の如きは多くを語らずして曉の野の心持を人に押附やうとする。

○

東の市の植樹のこ垂
まで

逢ず久しみ宜戀にけり

門部王の作である。長く久しき間を樹の成長するに譬へた點に興味がある。時間的に久しく長いといふ抽象的な概念を具體的に言表はして來たのである。都の街頭に實の成る樹でも植られてゐたのであらう。市の樹が年老て梢の垂るまで久しく逢ず、戀暮したりと云ふので、頗る技巧的に言表してゐるのだが、特に下の句が引しまつてゐて苦心の痕迹を認めるのである。

○

石室戸に立てる松樹汝を見れば
昔の人を相見る如し

是は博通法師が紀伊國の三穗の石室に到つて歌へるものの一つである。意味も單純で言表しも露骨であるを免れないやうであるが、石室戸は勿論三穗の石室の口を指すのであつて、昔の人と云へるは來目稚子の事である。意味は石室の口にある松の樹を捉へ來つて昔此石室に住へりと傳られた來目稚子を目前に見る心地がすると云つてゐるに過ぎない。但この歌に就て注意すべき事は松樹を呼かけて擬人的に歌つてゐる事である。松樹を擬人的に呼かけてゐる事は日本武尊の歌にもある。一體かゝる一種の擬人法は詩歌には決して少くないので、殊に初期の詩歌や原始的なる詩には甚だ面白く此方法が現されてゐるのである。

○

吾背は物な思ひそ事しあらば
火にも水にも吾なけなくに

安倍女郎の作である。格別深い意味があると云ふではないが、一種の熱情を發揮してゐる點が婦人の作として注意すべきであらう。其意味はわが背の君よ、吾あるからは火に投じ水に入る程の事變ありとも物思ひ為給ふ勿れと云ふのである。非常なる困難なる出來事を水火に投ずるといふ事に譬へる仕方は頗る古くから歌に現れてゐるのは餘程面白い事であらうと思ふ。

○

わが背がけせる衣の針目落ず
入にけらしも吾心さへ

これも安倍女郎の歌である。けせると云へるは着たると云ふに同じく、針目落ずは衣の針目も殘さずと云ふのである。わが心に君を思ふと云ふ事を巧に言表したのだが、此言表しが婦人らしく爲されてゐる事を記憶せねばならぬ。即ち君が着給へる衣の針目も殘さずと云ふが如く其取材其着眼點が徹頭徹尾婦人らしくて極て手近なものを捉へて來てゐる所に此歌の特色があると云ふ事が出來やう。前に擧た歌はどちらかと云ふと較露骨であるけれども此歌は前の歌よりも餘程手際よく言表されてゐる。

〇

庭にたち麻を刈干し布しのぶ
　東女を忘れ給ふな

こは藤原宇合が任地なる房總の地を去つて京に上る時に常陸娘子に贈つた歌である。布しのぶと云ふのは麻を刈干しその麻を布くと云ふのと、重々しのぶと云ふのとをかけてゐるのだが、その意味は庭に出でゝ麻を刈つて干しながら思慕つてゐる所のこの吾を忘れ給ふ勿れと云ふのである。元來この歌は稚氣があつて、必ずしも巧な歌とは云ひ難いけれども、其稚氣のある裡に捨難き趣を保つてゐる。女のしほらしさを感ぜしめる。殊に『吾』と云ふ代りに東女と云捨た所に作者の技倆が籠つてゐるでは無いか。

〇

春の野に草はむ駒の口止まず
　吾をしぬぶらん家の兒呂はも

作者は明かでない。矢張萬葉集にある歌であるが、恐く防人などが作つたものと見て可らうと思ふ。即ち家鄕を離れて遠く防人として出でゝゐる者が故鄕を想ひつゝ詠つたものだ。『家の兒呂はも』とある兒呂とあるは妻を指して云ふのである。春の野にて駒が草を食み、其口を止めざるが如く家妻は吾身を想出でつゝ絕えず噂をしてゐるに相違ないと云ふのである。其譬なども餘程單純であるが、其裡に溫情を示してゐる。然し稚氣のある歌たるは免れない。

〇

置きて行かば妹は眞悲し持て行く
あづさの弓の弓束にもがも

是は疑ひもなく防人の歌である。防人が家を出立つ時其妻に別るゝの悲しみを歌へるものだが、その惜別の情をあくまで武人らしく言表してゐる所に捨難き趣がある。家に殘して立去らば妻は悲しむのだが、せめてわが携へ行く弓の束でゝもありなばと云ふのである『置きて行く』と云ふのと『持ちて行く』と云ふのとを對應せしめてゐる。而して梓の弓と一轉して言起してゐるのである。

○

後居てこひば苦しも朝獵の
君が弓にも成ましものを

是は前の防人の妻の返歌である。後居ては殘り居てと云ふ意だ。『朝獵の』は深い意味があるのでなく、弓といふ語を呼起す爲の語である。君が出立給へるあとに殘居て君を戀ひんは苦しき事なり、君の言給へる如くその弓にでも成つて伴はれ行かれたきものをと云ふ意である。前の歌の返しとして無難の作であると思ふ。

○

信濃路はいまの墾路かりばねに
足ふましむな沓はけ吾背

東歌の信濃國歌の一つで作者は明かではないけれども女の作である事は疑ひを容れぬ。今の墾路は開墾したばかりの新しき路の事であつて、かりばねと云ふは草木を苅取つて殘れる根株を指すのである。足ふましむなどは足にて踏み給ふ勿と云ふのだが、此歌の作者は新道を過て來る男を指して吾背と云つてゐるのであらう。信濃の街道は新たに造られたる路だから、苅殘れる根株を踏んで足を傷ひ給ふ勿、吾夫よ、沓をはき給へよと云ふのである。此歌も餘程女性の優しき心振が現れてゐる。是等の歌に於ても知らるゝ如く言ふ所は極て率直であるが如何にも誠實なる心情が流露せられてゐるから、多く言はずして却て美はしき情調が漂ふてゐるのである。されば巧を弄した後世の歌などよりも人に與ふる感興も強く且つ印象の深きものがあ

るやうに思はれる。

○

しもつけぬ安蘇の磧よ石ふまず
　空ゆと來ぬよ汝が心のれ

下野國の歌で、作者は勿論明かではない。此歌は女に宛たる歌らしい。落想なども句法なども古拙な點があつて、內容が充實してゐる點が注意に價すると思ふ。歌の意味は下野の安蘇の磧を石のあるをも嫌はず心も空に出て來たのであるが、汝は是を如何に思ふか、汝が心を告げよと云ふのである。空ゆと來ぬよは空より飛ぶ心しての意味である。全體から云へば各句が頗る自由に動いてゐる、調子の餘程ひきしまつてゐるのを覺える。

○

うべ兒なはわぬに戀ふなもたと月の
　ぬがなへ行けば戀ふしかるなも

この歌も東歌の中の一つである。元來東歌には地方的特色が遺憾なく表されてゐると云ふ事に於て甚だ興味があるのだが、此歌なども語句などの上に此種の特色を保つてゐるものと云つて可らうと思ふ。兒なはと云ふは兒らはと云ふに同じく戀せる女の事を指してゐるのである。『わぬ』には己にと云ふ意で『たと月』は經つ月の義、『ぬがなへ』は流れと云ふに同じ事であつて、兒らは吾に戀へる故、別れてより月日が長く經過した事なれば戀ひしくもあらんかと云ふ意である。とにかくかくの如く一種の特色を短歌の上に發揮してゐる事は餘程面白い事だと思ふ。

○

妹が門いや遠ぞきぬ筑波山
　隱れぬ程に袖はふりてな

同じく東歌のうちであるが、防人などに出行く路すがら歌つたものであらう。意味は單純で、妹が門はいよ〱遠離つた、筑波嶺も隱るゝほどに袖を振らんかと云ふのである。防人に出立つて遙にわが家わが里を望みながら袖を振らんとする狀を見るがやうである。

○

わが背をやまとへ遣りてまつしたす
足柄山の杉の樹の間か

是も亦作者は分らぬのであるが、歌の意よりすれば都へ官用にて出でたる人の妻の歌であらう。まつしたすは物を窺がふさまである。足柄山の杉の樹の間より夫は今や歸來ると吾は窺ひ居るといふのである。此歌などは語の上に地方的特色があるのではないが、其內容上に特色を發揮してゐるので、杉の太く繁れる足柄山を面白く捉へて來てゐる。內容上の特色から云へば『信濃路は今の墾路』の歌なども著しく地方的特色を發揮してゐるものと云はねばならぬ。

○

夕闇はみちたづ〳〵し月待ちて
いませわがせてその間にも見む

豐前國娘子大宅女の歌とある。これには然まで地方的特色と云ふやうなものが表はれてゐないが、うひうひしい處女の情が能く舒べてある。みちたづ〳〵しはたど〳〵しいで、道が暗くなつてとぼつくといふやうな意味である。いませは行きませで、一首の大意は夕暮になつて暗い道をお歸りになるより、今に月も出ませうから、それを待つておいでなさいと云ふのが、第四句までゞ、第五句のその間にも見むは、その月を待つてゐる間だけでも、君の傍にゐて、君を見てゐたいと云ふので、はかなき戀のこゝろが、痛切になつてゐる。此一句は說明のやうで、說明でない、感じであるから、何うしても此一句が此歌の生命でもあり、又此歌の一際目立つ點であらう。

○

あま雲のそぎへのきはみ遠けども
心しゆけば戀ふるものかも

丹生の女王の歌である。此歌のやうな意は、集中にも澤山ある、必ずしも此れが優れてゐるといふのではないが、戀の歌でも、萬葉歌人の作は皆雄大な景象を捉へてゐるから面白い。天の雲のはてまでも、心が行くと單純に云つて、却つて大きい思想が表はれてゐるのである。



中子の躾け方に就て

佐々木露野

四五人以上の御子様を御持ちの方は、疾くに御氣付きの事と存じますが、昔から此中子くくと云ひますのは、例へば五人の内の三番目とか、七人の御子様の中の四人目の方とか云ふ風に、中央に當る御子様——男のお子様は夫れ程でもありませぬが、女のお子様には何らでもお困りのやうに御見受け申します。何う云ふ譯か。

◎父親に嫌はれる

のが女の子で中子に生れたものの運命の樣で御座います。勿論一概に斯うだと云ふのではありませんけれども、運惡く其子が容貌でも惡く生れついて居りますと、父親は何うしても其子を可愛いいと思へない樣であります。勿論親子の間ですから決して愛情がないといふのではありませんが、久しく欲しがつて居た時に生れた長男とか長女の方が、何となく愛らしく思へ、また直ぐ其後に生れた嬰兒の方が中央の子よりも可愛いいと云ふ具合で、丁度三番目とか四番目とかの子供が出來る時分には、最早軍人の方ならば上長官位で、お急がしい最中だとか、又實業家、學者などに致しましても、留學するとか、海外に派遣せられるとかまた、仕入れ取引きのために多忙を極める時代になると見えて、中には中央に生れた悲しさには、六ッ七ッになるまで、一度も父親の膝に抱かれた事のないといふお子様も有る様に見受けます。よしや五ッとか六ッとかでお父様に抱かれる機會がありましても、尚お小

いお子樣がおありになれば、燒餅をやいて其二つ三つの方が泣き出すとか……いろ／＼をかしな事が御座います。

また母親にしましても、小いのが又其後に出來て居りますと、つい面倒を見てやりたくても、まあお前は姉さんだから泣かずに一人でお遊びとか……ひどい方はうるさいからとつい／＼心には憎くは思はずとも、けんどんに叱る事なども出て來ると見えます。

それからまた、餘り多勢で困るからとて、他家に養はれて行くのも中子などに多い樣です。其れに里子にやられたお子樣などは、

◎父親母親を大きくなるまで知らず

に育つ事などありまして、そんな時には、何うも親の方から何の樣に氣をつけましても、子供が懷かぬ樣な事が御座いますので、兩親等は不憫には思ひながらも餘程なれる迄は、親子といふ感じが、はつきりと起らぬので御座います。

此う云ふ風な工合にして兩親との間も何となく可笑しいものになつてまゐります。そして子供の方では物心がつきますと、お父樣は他の兄弟をば可愛がつて、自分を可愛がらぬといふ樣な僻みが出て參ります。其れに兄弟同志の中では、徒ら盛りの兄さん姉さんからは生意氣だといつて髪を引張られたり、泣かされたりします。そしてもし其同胞が女許りでもあれば、姉さんの着物が丁度いいからとて、まあ中流位の家庭では順々にお古が廻ります、さうしますと、中央の女のお子さんは、姉さんと小さい妹には、新しい着物を下さつて、私には新しい着物は一つも下さらないなどと、申しましたり、また呉服屋でも參りますと、六つ七つの女の子ならば、母親の氣がいら／＼する計りに、お母さん今度は私に買つて頂戴などと申す事も御座います。

兩親には懷かず、上と下との同胞からはいぢめられますから、中央の子供はたまりません。

◎それで愈僻む

様な習慣がついてまゐります。

注意深くない家庭に中子として生れた子供の……殊に女の子などの運命はいつ迄も……お嫁に行くか、一人前になれる迄は……悲慘な事情がついて廻る事が多い樣です。

◎氣の毒な中子の實例

私の親しくお交際致して居りました御家の奥樣は、それは〳〵世間で申します男優りとでもいふお方で御座います。

此お方は五人の中の丁度中央で、一時は里子として田舍に行つておいでになつたのですが、お家にお歸りになつても父親に懐かず、父親は大變短氣な癇癪持な方で昔風な海軍の軍人でしたので、いつも其中子になるお孃さんを怒鳴つておいでになつたさうです。

一人の味方とお賴みになつて居た、お母樣はまだ其の奥樣の十五にもお成りにならぬ内に亡くなられて、間もなく二度目のお母樣が來られました。しかし十八か十九のお歳の時に良縁あつて、或る有望な海軍士官の處にお縁づきになりました。

其奥樣のお父樣は其當座、殊に初孫さんが、此方のお姉樣よりも早く此お方の所に出來た時には、毎日の樣に訪ねていらつしやつて、其奥樣は始めてお父樣の樣に思へたといつて喜んでおいでになりました。

間もなく……それでもお縁づきになつてから……七八年してから……其御良人は亡くなられました。その後の家の整理の際に一寸した金子に就ての言ひ懸りから、悲しい事には、親子疎遠になる樣になりました。然し間に立つ人が居りまして其奥樣はお宅をお疊みになつて里に同居なさる事になりました。

けれども繼母ではあるし、お父樣を……其方は勝氣な方だものですから快く思つてお居でなさらぬので、始終角突き合ひをする樣になり、遂々また別居と云ふことになりました。そして今はお子樣がお弱いので餘

程遠くの片田舍に住んで里とは手紙のやりとりもなされないのであります。

尙手近な處では私の妹に十九になるのが居りますが九人の中の四番目で、何うしてか子供の時から父が嫌ひ、二三年前までは父とやさしく、しんみりと話しなどもしませんでした。

此子は大分今迄には他家へ養はれたり、預かられたりして中々苦勞を見た樣です。それで勝氣でありますが、久しい間僻んだ樣な根性で、……家庭もよく整つて居ませんでした故か……私などは非常に可愛さうな子だと思つて居ります。此頃は漸く其樣な癖も取れた樣ですから、何うか眞直な人にしたいと思つて居ります。

また、私の遠い親戚で五人の中の中央に三重子と云ふ今年八歳になる女の子が居ます。此一番の姉さんは十二歳で次が十歳の兄、下に妹が二人居ります。氣の毒な事には此三重子さんは五人の中で一番容貌がよくなく、氣質は愛らしい子なのですが、……此三重子さんはお父さんが四十二、お母さんが三十三の時の、兩厄の年に生れて、色々昔風な事をして、一度捨てる眞似をしたりした事なども有るのであります。

妙な事には此子の少い時から、お父さんは何となし此お子さんをあまり可愛いゝとも思ひませんでした。それに丁度二つ置に二人の妹さへ出來、上にはお父さんが一番お好きな長女と、一人息子の長男が居りますので、何うしてもお父さんは此子を可愛がりませんでした。

六つの時などには、四つの妹や八つの兄さんたちとよく爭をして、いつも泣かされました。泣くのも子供ながらに口惜しいのか、泣き出すと一時間餘りもウオン〳〵云つて泣いて居ますので、お父さんは八ケま敷いといつて怒鳴ります、時折は非道い目にもあはせますので、終にはお父さんの傍には寄り付きもしない樣になりまして、お父さんの姿が見えますとふと他の室に行つてしまふ位でした。

お母さんは、此子が何となし氣の毒なので、いつも

かばふ様にしてやりました。すると子供といふものはをかしな者で、お母様にはまた甘へていつそう泣いたりしますので、其のお父さんはお母さんに、あまりお前が甘やかすからだといつて、いろいろな議論も始まりました。其中に、此三重子さんの下の四つになる妹さんが急に脳膜炎で亡くなりました。子供の死になど會つた事のない、此母親は非常に嘆きました。然し熱心な基督教信者だつたので、いろ／＼其の子の死の事を考へまして、漸く、此子が姉の身代りになつて、お父さんの氣に入る様に、またお父さんがあまり姉さんをひどくしない様に、亡くなつたのかもしれぬなど丶思つて、自ら慰めて居ました。



其後其お父さんはあまり、ひどくはなさらぬ様になりましたけれども、何うも此事は何時も夫婦間の問題となつたのですが、此三重子さんのお母さんの云はれる事を、お父さんはあまり本氣になつてお聞きにならぬので、此三重子さんのお母さんは、此事でいつも心を悩まして居られます

此様な例はまだ幾つもある事と存じます。それで此「中子」を躾けるには何の様にすればよいかといふ事を考へたいと存じます

◎躾け方のよき實例

或私の存じて居ます、世間でも評判な程の立派な御家庭の事なのですが、其お家には四人のお年子のお孃さんが居られました。

中央のお子様許りでなく、隨分此躾け方にはお苦心なすつたさうで、お召物などは十七八におなりになるまで皆平等に同じお揃ひの召物を着せておいでになりました。

異つた物をお與へになると、子供に僻みが起きるからとて、斯うなすつたのであります。私達も此位注意を致したいものであります。

中子を躾けると申しても、別に特別な事もないと存じます。前に擧げました樣な例は、大方は男子の不注意から、中子などを悲しい運命に陷れる事と存じますこれは日本在來の結婚の習慣などで男子が女子と同じ權力を持たず、女は是非夫に從はねばならぬといふ樣になつて居ますので、男の荒つぽい考より女の考が優つて居てもそれが通らず、此樣な悲しい事がお子さんの多い家庭に起るのではないかと存じます。それで何事も夫婦相談の上、妻の云ひ分も通して貰ふ樣にならねば、此樣な改善は出來ぬかと思ひます。

中子の躾け方は、第一に兩親が子供を偏愛せず何の子でも同じやうに愛して育てたらば、決して中子だからとて、生れつき僻み根性のものでもありますまいから、いろ／＼な悲しい弊害は起らぬ事と存じます。

それに其當人に中子だからといふ自覺――暗示――のやうなものを與へるのはいけません。姉とか。妹とか云ふ、單に生れた時の前後に餘り重を置きすぎて、幼少の時から一種の階級的コンベンションを暗示するのは、必ず善いと限りません。長上を敬ふのは自然の德義でせうけれど、形式のみに重きを置くと、其子供に反抗心を起させます、強て然ういふことはしないで姉を愛し、妹を愛するといふ感情の疏通が欲しいと思ひます。さすれば自然中子だからとて、薄倖な際に遭ふ機會も少くなるでせう。



山田流と生田流

櫻井銓子

能く遊藝には流派の爭ひがございまして、近頃箏曲家の間にも、やれ山田流が何うの、生田流が何うのと相排斥するやうですが、餘り流派ばかりを爭つて、根本の箏曲を度外視するやうでは、斯道の爲に惜むべきことでございます。

申すまでもなく、箏の音は人の心をやはらげ、彌生の頃にも秋の心持を動かし、秋の夜にも、春の鳥の歌ふが如き感じを起させるものでございまして、音曲の中でも、博く一般の家庭に行はれ、或る程度までは國民の思想を支配してゐると云ても可いほど、大切なものでございます。

私は、山田、生田の孰れの流派にも左袒するものではありませんが、山田流をあしざまに云ふのは、故人山田檢校に對しても、濟まぬことだらうと思ひます。御機嫌取派だとか、でまかし稽古だとか云ふのは甚いではありませんか。元來、山田流の由來を概略お話申ますと、飛燕の曲の作曲者たる安村檢校の高弟に、長谷富檢校と云ふ人がありました。此の人が、師安村檢校の命を受けて、江戸に出で、箏の組を擴めたもので其時に山田松黑と云ふ人、長谷富檢校の門に入り、眞草行組曲は更なり、秘曲までも傳授を受けた。且又『體源抄』の著者でもあつた。此山田檢校の弟子に、三田斗養一と云ふ人があつて、師から皆傳せられたが今日山田檢校と云つてゐるのは此人のことである。此人は我邦の國語國文に通じ、性質は無慾恬淡、殊に文才にも長けてゐたと見え、十七歳の時に既に其時代に應じて三十餘章の新曲を作り、一方では箏とか、爪とか樂器の改良にも意を用ゆるなど、斯道中其の名人であつたのです。

又、眞、草、行と申しますのは、寛文年間、八橋檢

校が組十三曲を作り、彈き方を眞、草、行に分けたもので、八橋は主として行の組を彈き、生田は主として草の手を彈き、之を世に擴めて生田流と稱し、山田は眞の手を主に彈きひろめて、山田流と稱してゐるのであります。

右の如く眞草行とも八橋檢校の手に成つたものでありますから、生田と云ひ山田と云ふも、其根本は同じ流れでありまして、例へば關東風と云ひ、關西風と云ふも、同じ箏の曲に相違ないが、只、習慣上然う云ふ風に別れて來たまでゝ、箏の曲に二つはないのであります。(因に云ふ、玆に云ふ處の眞、草、行の眞は普通に今謂ふ新とは違ひますから、混ぜぬやうに願ひます)

此間或る雜誌に、東京に秘曲を彈くものなしとの記事が出て居りましたが、秘曲を修めた者は少いながらも現在にあるのでございます。斯かる斷言をなさるのは、江戸時代からの箏曲の藝風を御存知ないからでせう。兎に角八橋、山田、生田の孰れにせよ、近頃非難の聲を聞きますのは、昔のやうに指南者の資格が嚴重でなく、曲を授けるにも順序も立てず敎へると云ふやうな風で、自然亂脈に流れて來たのであらうと思ひますが、誠に嘆はしい次第です。



細川流盃景大家櫻井銈子女史

話は變りますが、今井慶松氏が生田流を音樂學校に入れたいと云ふ爲に、京阪地方に探しに行かれた時、一流の人がないと云つて、歸京されたと云ふ事を聞きましたが、京阪地方には其當時古河氏、松阪氏、百原氏などが健在で、之を二流三流以下に見るのは當を得ないやうに思ひます。何かの聞誤りかとも思つて居りますが、事實ならば京阪地方の箏曲界に對してお氣の毒です。



櫻草の採集と栽培法

理科大學植物學教室助手 牧野富太郎

◎種類と產地

櫻草は其花の色と形態が、春野の花の中でも特に優しいので夙に人々に賞翫されて居た花である。此花は植物學上、櫻草科の中の櫻草屬に屬する草花で有て、學名をプリムラ、コルチユソイデスと云ふ。園藝品として取扱はれてゐる種々の櫻草も、亦舊を探れば其祖先は原野に自生してゐたのである。

其れでは何う云ふ處に生えてゐるかと云へば、東京附近では、板橋と續いた川越街道に沿うた地方例へば志村ノ原、戸田ノ原、其他荒川の兩岸の平野には澤山自生してゐるのである。

三月四月の候が來ると、綠の春草の間に淡紅に紫を帶びた此花が一面に咲いて、野の面を美しく彩る。其れで、東京の人々も其れを採りに出掛けて行くのであ

日本には普通吾々が見る櫻草の他に兄弟の樣な關係ある同屬の他の種類が隨分澤山有る、のみならず櫻草にあつては往時より園藝的の技巧に依つて、種々の變種を生じて居る。

櫻草と云へば春野の若草の間にのみ顫へて居る樣に思へるが、然し或他の種類は高山に、又山地に、溪谷に、處々に自生してゐて、種々の形狀色彩を具へてゐて、何れも皆美しいものばかりである。然し其中でも特に熟く知られてゐるのは、普通に云ふ櫻草である。

る。處で其櫻草咲く川越街道に沿うた野原が、段々と開墾せられて行く事を見ると私は殘念で堪まらぬ。然し社會の變遷と共に未開の地が開かれて行くのは、之は止むを得ない事で怎うも仕方がない。

　地方では信州の輕井澤及び北部の諸國に產する事が知られてゐる。此花は又日本特有のものではなくシベリヤの方面にも產して、其方面と日本とが原產地になつてゐる、從つて歐洲諸國にも早くから輸入せられてゐて、其學名プリムラ、コルチユソイデスは有名なる植物學者リンネ氏の命名にかゝるものである。歐洲へは其後日本から園藝的に改良した或種が輸入せられて彼地では非常に賞翫せられたものだが、學者達は是を別種だと思つてプリムラ、シーボルジーと命名して了つた。然し是は別種ではなく普通の櫻草から出た變種と云はねばならぬ。

　日本產の園藝品となつてゐるのは、色彩にも濃淡があり純白なのがあり、又瓣の多裂したの、形の大なるもの、種々花形は變つてゐるが、然し野生種は色彩に多少の濃淡が有るのみで、花形は一定した通形をもつてゐる。

◎形態と受粉作用

　此櫻草は決して一年限りで枯れるものではない、卽ち多年生の植物である。で地中には地下莖を有して居つて、四五月頃が來ると四五枚の葉と一二の花梗を萌出して花を開く。葉には長き葉柄を具へて居る、葉の如是叢生するのを植物學では根生葉と云ふ。葉は楕圓形で邊緣に粗な鋸齒を有してゐる。其鋸齒が又鋸齒を持てゐる、此の如きものを重鋸齒と云ふのである。花莖は葉よりも高く、其頂に綠色の鱗片が有て總苞をなして居る、其處から數條の小梗を拔き各々の頂端に花を一つ一つ開く樣になつてゐる。

　諸子が野外に採集に出た時には注意して其花の形狀を見るがいゝ。或花は雄蕊が花の筒の上部に着て居つて、花柱が短かく、或る花は雄蕊が其筒の下部に着て居つて花柱が長い、此二種の花を發見するであらう。

是れは櫻草が昆蟲の媒介に依て受粉作用を行ふ時に自花受精を嫌ふためである。其理由は此處には省略するが、兎に角標本を作る時には必らず此二種の花に注意しなければならぬ。

◎採集法

櫻草を採集するには、東京附近では前述べた、川越街道に沿ふた原野や荒川の岸に行つて、三四月の頃青草の中に咲いてゐるのを採集するので有るが、此花の咲いてる處は蘆の根や、又は茅芒の叢の中に有るので、餘程注意しないと其根を完全に採掘する事が困難である。其れで採集に出掛ける時必らず忘れてはならぬものは金屬製の箆である。で周圍から此箆を以て、徐々に丁寧に掘り取つて、若し栽培するためで有たなら、其根を切らぬ樣に又乾かぬ樣に新聞紙で包んで置かねばならぬ。又標本にするのだつたら、水で丁寧に土を洗ひ落して置く方がいゝ。



◎栽培法

以上に述べた櫻草の種類は、先づ日本に於ける代表的の物と云へる。然し此他に、大櫻草、九輪草、岩櫻カツコ草、雛櫻、姫小櫻、雪割櫻、雪割小櫻、南京小櫻、陸奧小櫻、蝦夷小櫻、などが有る。又近頃溫室用として珍重されてゐるものには、支那產のプリムラ、シネンセス。プリムラ、オブコニカの二種が有る。甲はカンザクラと呼び、乙はトキハザクラと唱へ、花が優

美なので大に喜ばれてゐる。其他西洋から來たプリムラにも種々有つて、九輪櫻と呼ばれ、三四月の頃植木屋や縁日の夜店で多く見られる處のもので、其れには黄色の花を開くものもある。日本產では九輪草が一番壯大な花穗を付ける。此花穗が何段にもなつて居る故、九輪草と呼ばれる樣になつた。又日本產の一番小さいのは姫小櫻と呼ばれて、陸中の早池峰に產するのである。

櫻草の栽培は槪して容易なるもので有て、只高山地帶に產するものが少し面倒な位である。先づ普通東京の近郊に有る櫻草は、只花園の柔い土に植ゑ付けて、時々水をやつて根本を涸かさぬ樣にすれは其れで充分だ。見掛けは露にも堪へぬ樣な姿をしてゐるけれど、中々に生活力の强いものである。

高山生の物はなるべく有機土に植ゑる事を避けて、盆栽にして置くのである。先づへゴ屑（植木屋に行けば有る。）か木炭の粉末に少しく水蘚を交ぜて、水氣を絶やさぬ樣にし、其中に植ゑて置けば澤山だ、而して可成日蔭に置く方が可い。

九輪草の如きは、濕潤な地を擇んで植ゑて置けばいいので有る。

櫻草は決して他の草花の樣に難かしい手入れや肥料の心配はなく、只水のみで育て得る花で有るから、素人園藝家、殊に女子諸君には適當な花であると思ふ。

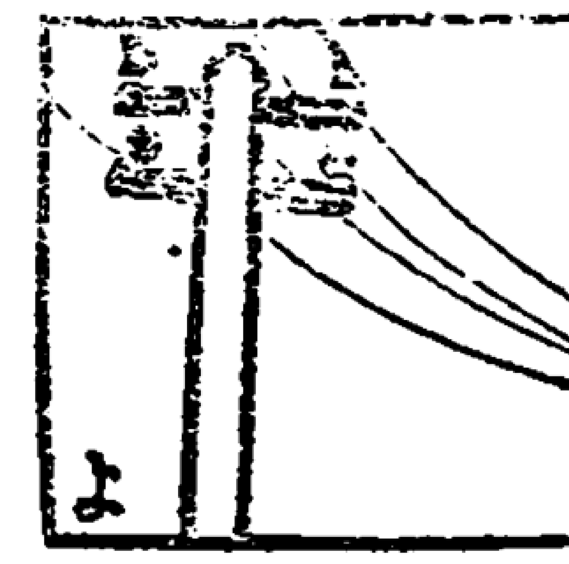
三四月の頃、野に青葉が萠えたなら、是非とも先に云つた郊外へ行つて見るがよからう。

◎櫻草摘

右の牧野先生のお話にもある通り、東京郊外荒川の岸に咲く櫻草を、ちやうど櫻の花の咲く時分に、摘みに出かけるのは、尤も女らしい郊外の遊びです。公德上から云へば、根は殘して、花だけ摘んで歸る方が眞實でせうが、近年は大抵根でも掘取つて來る人が多いやうです。それでも少し注意して、年々培養をしてやれば此花の存在は、至る處に見られるやうになるでせう、櫻草は實に愛すべき花です。（記者）

文章の今昔

河井醉茗



◎樂になつた點

昔の文章より、今の文章の方が、書くのに樂になつた點は、形式を重んじない處にある。昔の文章は形容澤山、故事引用も澤山、粧飾澤山で、一寸見た處は堂堂塋々として、初心の者は寄り附けないやうであるが實際は和漢の書物から引き拔いて來て、巧みに綴り合せたに過ぎぬ。それから見ると現代の文章は、粧飾に重きを置かないから、形式に深い苦勞は要らぬ。左に引用した一文は『平家物語』中に在る文覺上人の勸進帳であるが、要は高雄の寺の寄附を請ふと云ふことに過ぎないが、文章は實に華麗壯重なもので、和漢の文字を巧みに按排し、佛典を引き、故事を用ゐ、大いに誇張してある。今は此んな文章を手本にして、創作をする必要はない、單に古文辭の價値のある處を翫賞するに止めて宜い。

沙彌文覺敬ひて白す、殊には貴賤道俗の助成を蒙りて、高雄山の靈地に一院を建立し、二世安樂大利を勤行せんと乞ふ、勸進の狀。夫惟れば、眞如廣大なり、成佛の假名を斷つといへども、法性隨妄の雲厚く覆ひて、十二因緣の峰にたなびきしより以來、本有心蓮の月の光幽にして、未三毒四慢の大虚に顯れず。悲しきかな、佛日はやく沒して生死流轉の衢冥々たり。唯色に耽り酒に耽る、誰か狂象跳猿の迷を謝せん。徒に人を謗し、法を謗す、是豈閻羅獄卒の責を免れんや。爰に文覺偶俗塵を打ち拂ひて法衣を飾るといへども、惡行猶心に逞しうして、日夜に作善苗又耳に榮えて朝暮にすたる。痛ましきかな、再び三途の火坑に歸りて、永く四生の苦輪を廻らんことを。このゆゑに牟尼の憲法千萬軸、軸々に佛種の因をあかし、隨緣至誠の法、一として菩提の彼岸に至らずといふことなし。故に文覺、無常觀門に涙を落し、上下の親族を勸めて、上品蓮臺に緣を結び、等妙覺王の靈場を建てんとなり。それ高雄は山堆

うして、鷲山の梢を表し、谷静にして商山洞の苔を敷けり。岩泉咽びて布を引き、嶺猿叫びて枝に遊ぶ、人里遠くして囂塵なく、師跡事なくして信心のみあり。地形勝れたり、尤も佛天を崇むべし、奉加すこしきなり、誰か助成せざらん。仄に聞く、衆妙爲佛塔の功德、忽に佛因を感ず、況や一紙半錢の寶財に於てをや。願くは建立成就して、禁闕鳳暦御願圓滿、乃至都鄙遠近里民、緇素堯舜無爲の化をうたひ、椿葉再改のゑみを披かん。殊には又、聖靈幽儀、前後大小、速に一佛志門の臺に至り、必ず三身萬德の月を翫ばん。仍りて勧進修行の趣、蓋以てかくの如し。治承三年三月日、文覺。

◎苦しくなつた點

書くのに苦しくなつた點は、文章が直ちに人格其もの、表現となつたから、生來人格の劣つた人間は文章を書く資格がない、創作をやる能力がないと極つて了つたことで、文字の用途が單に文字だけでは獨立しなくなつた。それが如何にも苦しい、感じることも、考へることも、餘程他から勝れて居なければ、世間で認めてくれぬ、通り一ぺんの文章が書けるからとて、決して文章の本意を達したものでない。

今、一つの例を引いてみやう。

もはや其夜も明け行けば、寺の鐘も勤行の聲もろともに響きわたり、求食鳥の軒近く鳴渡るに、みな〳〵目さめて起き出づれば勝手より膳も出で、それ〳〵支度する内。（夜明）

はや日も西の山の端にちらつき、おのづから道急ぐ馬士唄の、竹にとまる雀色時、やう〳〵蒲原の宿にいたる。（夕暮）

此文は『東海道膝栗毛』の一節で、朝と、夕との旅の情景を書いたものだが、極めて、のんきな觀方の疎略なものである、尤も此文章は其時代にあつては、飾り氣の無い自然なもので、稱揚して宜いのではあるが、今から見ると、物足らぬ。

それが明治時代になつて、何う變化したかと云ふに露伴氏の『風流佛』に同じく旅の心持を書いたものがあるから、一節を拔いてみやう。

汽車もある世に、さりとては修業する身の痛ましや。菅笠は街道の埃に赤うなつて、肌着に風呂場の虱を避け得ず。春の日永き畷に疲れては、蝶うら〳〵と飛ぶに翼羨ましく、秋の夜は淋しき床に寢覺めて、隣りの歯ぎしみに魂を驚かす。旅路の情なきこと、風吹き荒み、熱砂顔にぶつかる時、眼を閉ぎてあゆめば、邪見の喇叭、氣を注けろから

がらの馬車に蹤ぢゞみあがり、雨降り切りては新道のさゝれ石足を嚙むに生爪を剝し惱むを、胴慾の車夫法外の價を貪り、尙も並木で五割酒錢は天下の法だと劫する。仇もなさけも一日限りの、人情は薄き掛け蒲團に襟首さむく、待遇は冷かな平の內に蒟蒻黑し。

斯うなると、多少明治の空氣が入つて來てゐるから觀察も細ければ、書き方もずつとこうしやになつて居る。併し未だ徳川式のにほひは拔けてゐない、西鶴張の文法が殘つてあつて、何處にか未だ現代と、接觸しないやうな點がある。文字に囚はれてゐると云ふ傾向が歴然と分る。文章は實に上手に書いてあるが、矢張文章が上手なのであつて、內容の充實と云ふ上から見ると、缺けてゐる處がある。

今度は尤も新らしいものを調べてみやう。

日ゝ落ちて、空模樣の怪しく成つた頃である。

東海道線の下り列車は、途中で故障を生じたので、一時間餘りも後れて岐阜驛へ着いた。車掌が「ぎふ、ぎふ」と呼びながら、一つ宛車輛の戶を開けて行く。其後から、乘客は零れるやうにプラットフオームへ降りて、先を爭つて線路の上に架けた橋を渡らうとした。

小島要吉は三年振りで此停車場に立つた。今頃故國の土を踏まうとは昨日までも思つて居なかつた。

去年の夏大學を卒業した時でさへ、歸省して見やうなぞと云ふことゝろは起らなかつた。少さい時から都へ出たが、いろ〳〵因由があつて、故鄕へは歸らない。一生歸りたくない。天が下に自分の生國といふものが無ければいいと思ふことさへあつた。それが今度止むを得ない事情で、突然歸つて來て、早くも聞慣れた土音を耳にし、見慣れた風俗を眼にすると、幾許長く他國に放浪して、自分だけは他州の人間に成濟したつもりで居ても、矢張此處の土と水とで出來た人間だなと云ふ感じが俄に强くなつた。

之も同じく旅の心持を書いたものだが、遙に前者とは相違してゐる、此文は森田草平君の『煤烟』の劈頭である。斯うなると文章が上手やら下手やら分らぬ。文字の使ひ方が巧いと云ふよりも、思つてゐることが苦もなく書けてあると云ふことに歸著する、而して其思つてゐることが、平凡でなく、何處やら個人の人格が表はれてゐる、人間が動いてゐる、此のゆきかたが現代の文章のゆきかたであつて、昔から見ると、文字は只もう一つの符號か、道具に過ぎないので、文章の變遷も亦驚くべきものである。

文學ノート

▲世界現存の文豪。　世界の文豪も年々凋落して行くが、今、獨逸、佛蘭西、露西亞、英國、米國を初め大陸の文學者を數へて見れば其數も決して少くはあるまい。それに世界の文壇も、日本の文壇と同じく、やはり後からくと新進作家があはれて來るから、大勢も年々に進んで行く。詩壇などは殊に然うである。而して世界を通じて、一つの大潮流があつて、時代を代表してゐる作家は必ず潮流に乘じてゐる、また率先して大潮流を作つて行く。日本の文壇も、もう餘程世界的になつた、世界の文壇に通じてゐなければ、日本の文壇を語ることは出來ない、加之現今は飜譯が多くなり、且自由に、且巧みになつたから、外國語の素養ないものでも、世界文學の大勢位や、名作ぐらゐは知ることは出來る、馴染が薄いからとて、世界の文壇を度外視してはならぬ、初心の者でも、毎に注意することが、かんじんであらう。さて現存して居る世界の文士の主なる人々は、

メレデイス(英)
スヰンバーン(英)
ストリンドベルヒ(瑞)
ズーデルマン(獨)
マーテルリンク(白)
エチエガレイ(西)
ビヨルソン(那)
ハーデイー(英)
ブランデス(丁)
ハウプトマン(獨)
ダヌンチオ(伊)
キツプリング(英)
ゴールキイ(露)
アナトール、フランス(佛)
ミラー(米)
メレジフスキイ(露)
アンドレフ(露)

▲人形の家。　イブセン作の脚本、婦人問題を中心としたるもの、女主人公の名はノラ、譯は昨年一月の『早稻田文學』にある。

▲ゴルキイ。　露西亞の作家、好んで下層社會の暗黒面を描寫す、近頃其脚本『夜の宿』を小山内薫氏譯して有樂座で劇に演じた。

▲イ・ブセン。　ノルエーの人、脚本家、其社會劇の飜譯を集めて、早稻田大學出版部から出てゐる。

▲海潮音。　世界に於ける近代詩人の傑作の詩ばかりを集めたもの、譯者は上田敏氏。

▲卽興詩人。　森鷗外氏の譯、原作者はアンデルゼン。

▲みなわ集。　同じく森鷗外氏の譯、世界の名作を蒐む。

▲一幕物。　同じく博士の譯、獨逸の一幕物の劇の飜譯ばかりを集めたもの、『續一幕物』も一冊になつてゐる。

▲あめりか物語。　永井荷風氏の創作、舞臺は主としてアメリカ大陸。

▲トルストイ。　露西亞の大思想家、小說及び論文の著述が多い、昨年死去。

▲希臘神話。　希臘の神話は、西洋では唯一の古典である、後世の文學も是に淵源する處が頗る多い。

▲文學の中心。　現在の世界の文學の中心は、獨逸と、佛蘭西と、露西亞である。

▲ファウスト。　獨逸文豪、ゲーテの一代の代表作はファウストである、氏は千八百三十二年に死んだ。

▲英文學史。　坪内博士の『英文學史』淺野文學士の『英文學史』、外に未だアストン氏の英文學史の譯もある。

▲ゾラ。　ゾラはフランス自然主義作家中の尤も早く出た人である、氏は千八百四十年に生れた。

▲ヨネ、ノグチ。　野口米次郎氏は多年米國に居た人で、英詩を以て米國に聞えてゐる、目下は我邦に居る。

▲モオパッサン。　フランスの短篇作家自然主義派に屬す、我國にも四五の譯がある。

▲ツルゲネフ。　ロシアの作家、短篇小說及び散文詩を作る、譯は多くある。

▲勅選詩人。　英國では勅選を以て詩人を定めることがある、之を宮廷詩人とも、桂冠詩人とも云ふ。

▲ボードレイル。　フランスの詩人で、詩集『惡の花』が有名である。シンボリズムの運動を起した一人である。

▲死の勝利。　伊太利の詩人、ダヌンチオは其作『死の勝利』を以て世界に著はれてゐる。

▲エーツ。　現代英國の詩人兼戯曲家、アーサーシモンヅと共に我邦の詩人間にも珍重せられてゐる。

▲ニイチエ。　近代の大思想家で、獨逸の人である。氏の思想は我邦にも影響する處が多い、一生の代表作『ツアラトストラ』は近く生田長江氏の譯書が出來た、ニイチエは千九百年に死んだ。

▲チエホフ。　ロシア唯一の諷刺小說家、短篇集は瀨沼夏葉女史に依りて譯されて一册となつてゐる。

▲マテルリンク。　作家にして又思想家である、白耳義の人、氏の神秘說は世界に有名である、劇、詩、論文の著述がある。

▲シエキスピア。　世界一の文學者として推奬せられてゐる英國の劇作家　其譯は日本にも澤山ある、日本に於けるシエキスピアに尤も通じてゐる人は坪内文學博士である、博士にもハムレット外數種の譯がある。

▲沉鐘。　獨逸のハウプトマンの作で、やはり世界的傑作の一つである、脚本。

▲ワグネル。　獨逸の音樂作曲家である、氏の作曲は世界唯一のものとして知れ渡つてゐる、歌劇タンホイゼルも有名である。

▲罪と罰。　ロシアのドストエフスキーの著で、此譯は内田魯庵氏に依りて、既に十數年程以前に譯されてある。

▲杜伯の臨終　十一月二十日午前六時トルストイが死んだ。心臟が忽然停止したのである。瞑目の三十分前伯夫人が室に入つたのを、伯は認識しなかつた、前日來病牀に居た醫師は六人であつた。伯の左肺の炎症が前日に大いに進んだ。伯は前日二回の劇烈なる發作に耐へたのであつた。絕息の時は、親戚は隣室に居て、病室には醫師ばかりゐた。隣室にゐたのは、令孃と友人であつた、遺骸には黑絹のロシア風の襦袢が着せてある。遺骸の置いてある室は樅の小枝で飾られた。農家の小兒が床の上に忘るな草と秋の花とを蒔いた。伯の友人等は、此臨終の家を買取つて保存したいと言つた。

顔の美しくなる食物と化粧の方法

東京美容院長　北原十三男



△運動不足の爲め肥える人

美顔術と言ふものが近頃大分流行して居るが、私がこゝに述べる美顔術は、美顔術師に就て施して貰ふ美顔術でなく、自分の宅で自分一人で行へる美顔術である。今美顔術を説明するに、これを二つに分けて説明しやう、一は生理的美顔術で、他は化粧的美顔術である。生理的美顔術と言ふと、化粧的美顔術の如く人工で顔を美しくするのでなく、生理學上から研究して先天的に美しい顔と同一にするのである。順序的に説明すれば、先づ第一に運動をよくせねばならぬ、尤も年齢や身體の强弱に依り、一概に言ふことは出來ぬが、自分の身體の具合を考へて、毎日適當の運動をせねばならぬ。運動が不足であると肥胖病になつて醜くなる壯健で肥るのなれば左程醜くはないが、病氣で肥ると實に見られたものでない。若し適當の運動をして居れば、血液の循環がよくなつて、皮膚の色澤もよくなり顔も生氣を帶びて自然美しくなる。然し過ぎたるは及ざるが如しで、運動も度を過ると反つてよくない。下女の赤い顔も運動過度の結果である。

△下手な入浴は美を損ず

第二には入浴の際に注意することである。東京の人は湯の中へ入ることが好きであるが、これは好くないことである。熱湯は皮膚の美を損ずものであるから餘り熱い湯に入らぬ樣にせねばならぬ。それから湯に入つて顔を洗ふ時にも手拭で擦るのはよくない、皮膚の弛緩して居る所を手拭で擦ると、皮膚に過度の刺戟を

與へるので自然に小皺がよる。それでは顔を洗ふには如何したらよいかと言ふと、手拭を用ひないで、指の先で毛並の逆と思ふ方に輕く擦るのである。指の先で擦るのは石鹼を使はないで、唯指の先だけで擦ればよいのである。斯うして顔を洗へば皺をこしらへる恐れもなく、美の衰へる憂ひもない、のみならず、老衰して見苦くなつて居る表皮を取り去り、其跡の皮膚に活力を與へ皮膚をして愈々美しくするのである、指で洗ふ時も前にも言ふた通り決して毛並の順に洗ふてはならぬ、若し毛並の順に洗ふと小皺が出來るからである。
それから入浴の時間であるが、十分より二十分までが適當である、餘り長く湯に入つて居るのはよくない。
第三は睡眠である。睡眠と美容とは大變關係のあるものである、睡眠中は腦の休憩時間であるから、腦の休養が充分であれば顔色もよく常に元氣のある顔をして居られるが、若し睡眠が不足であると、顔に疲勞の色が現れ自然顔附が不快に見える。殊に睡眠が不足であると外眦に皺が寄つて醜くなる。然し睡眠時間も餘り長すぎては又よくない、それではどの位が適當かと言ふと、人にも依るが先づ六時間乃至七時間位が適當であらうと思ふ。

△菜食は肉體を美にす

第四には食物である。食物が身體に影響することは今更言ふまでもないが、殊に皮膚に大なる關係を持つて居る、であるから生理的に顔を美しくするには是非とも食物に注意せねばならぬ。食ふ物が多過ぎたり、酒を飲むだり、脂肪質のものや蛋白質の物を食ひ過ぎたりすると、肥胖病に罹つて顔が醜くなる。又玉子、牛乳、肉類等を過食して菜食をしない時は、身體の所所に紫斑病に似た褐色斑が出來て、齒根が黒色に變ずることがあるから、勉めて菜食をせねばならぬ。女が天受の美を發揮さすには野菜物を食るのが第一である其證據には肉食を多くする地方の人の皮膚と、菜食を多くする地方の人の皮膚とを比較して見ると、日本では如何しても菜食を多くする地方の人の皮膚の方が美

しい様である。

△顔の美くなる食物

何う言ふ物を食て居ると顔が美くしくなるかと言ふと、先づ第一が貝類である。貝類はなるべく柔い物を選むで、常に食ると皮膚が美しくなる、殊に牡蠣はグリゴナールに富むで居るから、皮膚の營養に頗るよい。第二には果物である。果物は皮膚の營養になるが、餘り酸味の勝つた物はよくない、果物の中で一番よいのは胡瓜である、胡瓜を圍て置て常に食て居ると顔の色が美しくなる、又胡瓜の心はこれを取つて顔に塗ると皮膚が美しくなる。胡瓜に次でよいのは眞桑瓜である眞桑瓜も亦心を顔に塗て其他の部分を食用にするのである。支那では眞桑瓜の心を化粧料として居るし、西洋では胡瓜のエッセンスを美顔料として居る。第三には野菜である、野菜は纖維に富むで居るから便通をよくする、便通が整理されて居ると皮膚が美しくなる。第四には海草である。常に海草を食て居ると皮膚を美しくするのみならず、髪の艶を良くする、常食としてよい海草の主なるものは昆布、海苔、鹿尾菜等である。殊に鹿尾菜は食用として良いだけでなく、其茹汁の中へ布海苔を混じて髪の毛を洗ふと、髪の艶がよくなつて髪が長くなる。

△白粉の塗り方

化粧的美顔術とは化粧品を顔に塗つて一時容貌を美しくするのである、化粧品として一般に使用して居るものは白粉と紅とである。この白粉と紅を使用するにも其顔だちに依つて餘程巧みに使用せぬと反つて醜くなる。今白粉と紅の使ひ方を説明しやう。白粉を塗るには顔の形に依て種々工夫をせねばならぬ。團子鼻の人は、白粉を塗る前に眼と眼との中間から鼻の先へ掛けて、縦一文字に細く白粉を筆で塗り附けて置て、それから普通に白粉を塗り、際立たところを消すと團子鼻とは見えない。鼻の小さくて低い人は、團子鼻と同じく縦一文字に鼻筋へ白粉を塗り、尙ほ鼻の兩側にも

白粉を塗つて、其上へ普通に白粉を塗ると小さい鼻も大きく見える。鼻の上向いた人は、鼻腔の下に一文字を白粉で畫き、又鼻の先へも多量に白粉を塗り、其上へ普通に白粉を塗ると鼻の上向たのは分なくなる。若し鼻に白粉を塗てもよく乗ぬ時は酒、焼酎、アルコールの類で鼻を充分拭ひ、それから又酒やアルコール分を拭ひ去つた上で白粉を塗ると如何な人にも白粉がよくつくのである。



△近來流行のクリーム

頰の憔けた人は頰の最も低いところへ、日の丸の様に白粉を塗り、其上へ普通に白粉を塗ると頰の憔けたのが分らなくなる。反齒の爲めに口の尖つて居る人は鼻腔の下を濃く塗り、又唇の下を濃く塗ると反齒とは見えない。顎の突き出た人は其突き出た所のみ白粉を濃くして置くと顎の出たのが分らなくなる、頰の出た人は頰の所だけ白粉を薄くして置くと、頰の出たのが分らなくなる。然し極端に頰骨の出た人はこれと反對に、頰骨の所だけ白粉を濃くして置くと突出たのが隠れる。眼の窪むだ人は、白粉を塗る前に眼の周圍に白粉を充分塗り込み、眼を閉つて高い所だけを軽く拭ひ去り、其後で普通に

白粉を塗ると、眼の窪むだのが分らなくなる。おでこの人は眉の上へ白粉を濃く塗つて、生際を少し薄く塗つて置くとおでこが隱れる、然し餘り生際の禿げ上つた人は、生際に白粉を塗らぬ方が見よい。色の黒い爲めに白粉を使ない人は、眼の縁に薄く紅をさして置くと色の黒いのが目に立ぬ、顔の青い人はスヌダー（スヌーダとは近來流行のクリームで其製法は晒蠟六、〇鯨蠟八、〇ラノリン八〇、〇扁桃油一〇、〇の四種を微温湯で溶解し、能く混和した中へアロキサン一、〇を水少量に溶かしたるものを次順少量づゝ混和してクリーム狀となして用ひるのである、此クリームは眞の肉色と少しも變らず、至つて美しい色を出すのみならず、容易に剝落しない化粧品である）を双方の頬と眼瞼とに塗り、其上へ白粉を塗ると、顔の青いのが少しも分らない。顔色の惡い人だけでなく、普通の人でも唯白粉を塗つて置くだけでは、少しも顔に變化がないので直ぐ見厭がする、此スヌーダを用ひると櫻花のそれの如く實に美しい顔になる。

△生際、唇、瘦せた頬

眼の釣り上つた人は眉を三日月なりに作ると顔の險相が隱れる、又眼の下つた人は眉の尻を上げて置くと眼尻の下つたのが分らない。頭の素地の黒い人は、普通の白粉を塗ると恰度假面を冠つた樣になるから斯う言ふ人は生際の中へ打ち込み白粉をするのである。其法は髷の崩れない程度に髪を分け、額の幅の凡三分の一程まで白粉を打ち込み、其跡を手拭でよく拭て置くと生際が美しく見える。耳に白粉を塗るには普通の白粉では却々附かぬことがある斯う言ふ時は水晶白粉其製法炭酸鉛五、〇薔薇水五、〇〇橙花水五〇、〇の三種を混和する）を約五倍の濃さに作り、これを用ひると綺麗につく。おちよぼ口をすると唇に皺のよる人がある、これを療すにはワセリン五、〇流動パラフィン五、〇蜂蜜五、〇硼砂〇、五桂皮油〇、五を混和してクリームに作り、之を塗つて居ると皺がよらなくなる。頬の落ち窪むで居る人があるが、大變貧相に見える、

斯う言ふ人はグリスリン一〇、〇蜂蜜一〇、〇安息香酸一、〇硼酸〇、五蕃椒丁幾〇、二イランクイランク油〇、一ケイ色素〇、一桂皮油〇、二クエン油〇、五の九種を混和してクリームを作り、これを頬へ塗つて居ると落ち窪むだのが、段々癒つて輪廓の正しい顔になる。

△紅のつけ方

紅の使用法も却々六ヶ敷もので、餘程工夫せぬと紅をつけた爲めに反つて醜くなる。紅の引方の主なるものを擧げると、唇の薄くて口の大きい人は口端に紅を塗ず、唇の中央に三角形の一角を外へ出した樣に塗るのである。すると大きい口も小さく見える。口が大くて唇の厚い人は、椎の果形に一點唇の中央に紅を落し其形を同じ大さに奥の端へ塗れば小さく見える。慨して唇の大い人は櫻花形の如くに塗る時は小さく見えるものである。從來誰でも紅茶碗を直ぐに舐めて塗つて居る人があるが、これは只唇を赤くするだけで、唇の形は少しも良くならない、唇の形を良くするには如何しても筆で塗らねばならぬ、紅は少多量に塗ると青光りになつて見苦いから、斯う言ふ時は前記のスヌーダを唇へ塗つて、其上へ紅を塗ると美しく見える。

▲山の湯より▼

酔茗先生、夜汽車は敗殘者の隱家だと盡々思はれました。すぐ前の列に五人程並んで腰掛けた女がありました。歌舞伎役者の噂が一切りはずんでおゝと思ふ間に最う正體もなく寢入つてまるんです。油沁みたコートの襟と紅の袖口と、それに浸んだ色ノ手柄と、——暗い天井ノカンテラが搖々震ふと、其度に女等はさも疲憊した樣に唇元をびく〳〵動かしてゐました。直ぐ横ノ男、朝鮮に行つてゐましたとか、或男は神戸から新潟へ、——港から港への漂泊者、雨が箭の樣に窓硝子をうちました。

碓氷——何んかゞ呟きました。がたつと窓硝子を落すと、空は瓦落りつと晴れて高い山の間に星が見えました。『幽狀軌入口』紺地に赤く拔いた角燈ノ灯がチラッと眼前を過りました。ト田へ着いたのは未た夜の内です。二等待合室の炭火の端に只一人屈んで、端書をかいてゐると、二十前後の書翆をかけた男が闇の中へ大股で出て行きました。夜が明けました、霧ノ樣な雨が降つてゐます、驛前の肉屋へ上りました。炬にあたりながら食べるのです、面白いと思ひました。馭者の悠長な角笛が、寂とした信州の平野を渡つて行きます(二月一日、山の湯にて浩生)

今日も亦快晴 雄神嶽の上には私の立てた白旗が旭日に光々輝いて居ます。今朝は早く起きました。而して霜に氷つた道を北向觀音の御堂へとたどりました。淺間山の煙が見えます。藝者屋の二階から白い煙が吠えてゐます。觀音に參詣してみくじを引きました、半吉が出ました、面白いから御送りいたします。

今朝起きてから朝飯までに最早三ども湯に入ります。

昨夜は年越しの夜でした。福は、鬼は外」の聲が家々に聞えました。溫泉場の夜の階調——、溪の音と、湯口の響と、年越しの歌と——(五日、山の湯にて浩生)

滑稽ノート

▲蜈蚣は毒蟲なれども毘沙門の使はしめにして福を與へたまふ媒と聞いて敬ひ、蛇はいやらしき物なれども、辨天の愛し給ふと云ふゆゑ、こは〳〵ながら、懇ろになりたき慾の世の中に（一九）

▲是は早速忝けあり、御恩は死んだら忘れます其代り限月には屹度返濟も覺束なし、生きた人への香奠と思召て下さりませ（同上）

▲運は天に、蚊帳は質屋にありては蚊の食ふ時の用には立ちがたし（不詳）

▲『アリストートル曰く、女は何うせ碌でなしなれば、嫁をとるなら、大きな嫁より小さな嫁をとるべし、大きな碌でなしより、小さな碌でなしの方が災少なし……』『寒月君の妻君は大きいか、小さいか』『大きな碌でなしの部ですよ』『ハヽヽ、こりや面白い本だ、さあ、あとを讀んだ』『或人問ふ、如何なるが是れ最大奇蹟、賢者答へて曰く、貞婦……』『賢者つて誰ですか』『名前は書いてない』『どうせ振られた賢者に相違ないね』『次にはダイオジニスが出て居る、或人問ふ、妻を娶るいづれの時に於てすべきか、ダイオジニス答へて曰く、青年は未し、老年は既に遲し、とある』『先生樽の中で考へたね』『ピザゴラス曰く、天下に三つの恐るべきものあり、曰く火、曰く水、曰く女』『希臘の哲學者抔は存外迂濶な事を言ふものだね。僕に曰はせると天下に恐るべきものなし、火に入つて燒けず、水に入つて溺れず……』丈で獨仙君一寸行きつまる『女に逢つてとろけずだらう』と迷亭先生が援兵に出る（漱石）

▲『宜いから後を申せ』『はッ、かね〴〵一羽の雀を飼ひ置きました處』『むだな事をしたものだな』『ある日の事、老父の不在に、老婆が洗濯物へつけやうとて、こしらへて置きました糊を、その雀が自分にくれたのかと思ひ、みな嘗めて了ひました』『ム、成程』『ところで老婆は性質甚だ邪慳でござりますゆゑ、大に憤りまして、其雀の舌を切つて放ちました』『フム成程』『スルトやがて老父が歸宅いたし、雀の姿が見えませぬ故、何方へ行つたかと、老婆に尋ねますと、斯う〳〵だと譯々話しましたから、仁者の老父は、流涕いたして之を憐み、雀に逢うて慰むるところあらんと欲し、覊旅の用意を致して』『コレ大分、かたくるしいな』『ハッ、然らば世話に碎いて申しませうならば、舌切雀、お宿は何處だ、チウ〳〵〳〵』『ハ、ア、面白いな、いま一度申せ』『ハッ、舌切雀、お宿はどこだ、チウチウ〳〵』『これは面白い、舌切雀、お宿は何處だ、それから何と申したな』（藤兵衛）

▲昔、久米の仙人は、物洗ふ女の木綿湯具のびらつきて、脛の白く見えしにさへ、通を失ひしためしもあり、かく數多ある美人の中にいたりなば、釋迦も黃金の涎をながし、達摩の目玉も絹絲の如くなるべし。（風來）

▲妙法蓮華經普門品第始終忽多闇世間子息大分遊興毎晩三味線音曲滅多無正夜前大食翌日頭痛八百羅利古灰笑止千萬近邊醫者早速御見舞調合煎藥吞多羅久多。腹張多心經。チイン〳〵はなのした空殿のこんりふ、おこゝろざしをおたのん申ます（一九）

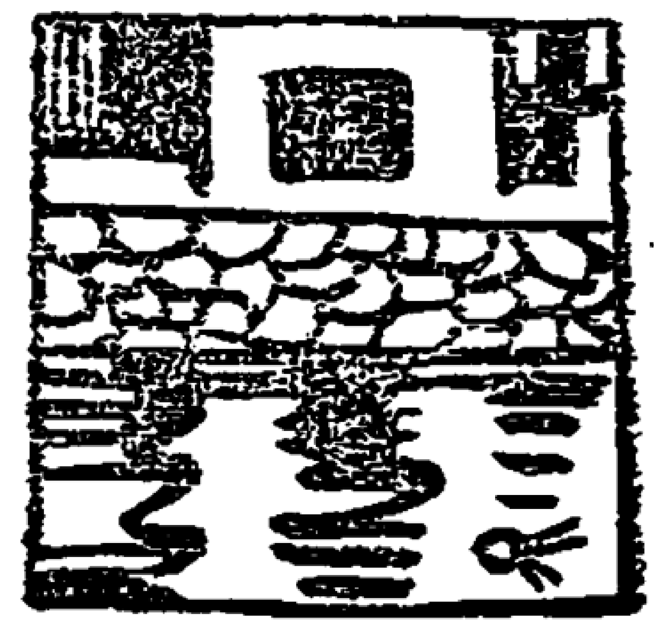
▲盛り立つた娘の子に善い器量の若い男は見せまじきものなり、狼の咽喉に立つた骨を手を入れて拔いて遣るよりは、油斷のならぬものぞかし（自笑）

▲樂燒の茶碗を胡麻あへにせしやうなるかほつき（不詳）

▲お月樣と菱餅、下駄と人魂ほど違ふ（同）

▲朱に交はれば赤うなり、炭屋の男は黑うなる（同）

▲定めなき世とは人ごとにいへども、世の定めなきよりは、只定めなきは人の心にぞありける、古人春宵一刻價千金とめつたに高ばれば、又浮世を三分五厘と捨賣にする男もあり（自笑）



女髪結所の朝

うす雪

若き妻、あら大變早く、お出かけ？
娘、えゝ、今日は芝居、明治座へ行くの。
妻、明治座へ何しに？
娘、見に行くのよ、極つてるぢやありませんか變な方ねえ。
髪結、あすこ今何やつてゐます？
娘、何かやつぱり舊劇でしやう、よく知らないわ。
妻、「よく」だけおまけぢやないの？、舊劇なんかおとなしく見てゐるやうなお孃さんぢやないのに。今日は雨が降る事よ。
髪結、いやですねえ雨なんか降つちや、奧さん一寸前髪を。
圍妾、お早う、こんで？
梳手、もう一つだけですよ、おあがんなさい、
髪結、お菊さんかい？
梳手、いゝえ、裏の奧さん。
圍妾、おやお揃ひで、お早うございます。あのねえ、私すまないけれど一寸間へ入れて頂けないかしら、實はねえ是から出かけるッて譯で、今來て待つてるのよ、おゝ寒、風引ちやつた。
髪結、こちらもお出かけでお急ぎなの。
娘、いゝわ、私遲くなつてもいゝことよ。
圍妾、あゝすみませんわねえ。
髪結、どうもお氣の毒樣、ぢや梳けたら根をしばつといておあげよ。
圍妾、此蒲團は隨分綺麗だねえおとみさん。
梳手、えゝ、油が染込むから堪りませんよ。
圍妾、一つおでればいゝのにさ、おかねさん金持なんだから。
髪結、何ですつて？
圍妾、ハイ。
髪結、そりやさうとお樂しみはどちら？
圍妾、お樂しみぢやないのよ、一寸下谷の方へ用達に行くの。
髪結、皆さんがお出かけで羨しいねえ。
圍妾、お天氣がいゝからねえ。

髪結、處が今日は雨が降るんですとさ。

園妾、あらどうして？

娘、私が芝居へ行くとそんなにをかしいかしら。

園妾、お芝居でゐらつしやいますか、それこそお樂しみですわねえ。

妻、芝居つてそんなにいゝものでしやうか？

髪結、結構ぢやありませんか、私なんざ芝居つて云ふもの何年にも見た事がありませんよ。

園妾、いゝやね、其代りお金が溜るんだから。

髪結、あんな事ばつかり云つて、そりや御自分の事でしやう。

園妾、えゝ／＼さうでございますとも有つて／＼懐の中でお金が泣てゐるわ。

髪結、私の懐でも泣てますよ欲しい／＼つて。

園、梳、はゝゝゝ。

髪結、奥さん髱止して置きましやうか。

園妾、おゝよく出來た事、失禮ながら其方がずつと宜うございますわ、おとみさん私の髱よく癖直しておくれよ、束髪にばかりしてゐるもんだから癖がついちやつた。

娘、待つてらつしやいな一しよに歸るから。

妻、一しよに歸りたいけれど——用もあるし、此間からホワイトシャツを縫かけてゐるのに毎日／＼人が來たり何かしてちつとも出來ないのよ、今日は是非こしらへ上ちやはうと思つて。

娘、いゝぢやありませんか、そんな物いつだつて出來るわ、待つてゐらつしやいよ、ね？私が島田に結ふんだから。

妻、嘘云つて。

娘、嘘ならいゝわ、ほら髱も丈長もちやんとあるでしやう？。

妻、まあ、ほんとなの？

娘、隨分氣の小さい方ねえ、そんなに驚かなくつてもいゝ事よ。

妻、だつてあなたが　田に結つて芝居へ行くなんて柄にないんですもの

髪結、ぢやお見合なんでしやう。

妻、園、はゝゝゝ。

娘、あなたが去年あたりハスと二人で、シアターだとかオペラだとか云つて横濱くんだりへ出かけたのだつて、大して柄にはまつてやしなかつたわ。

妾、面白いわねえ、お若い方は。

梳手、いやな奥さん、「お若い方」だつて、

圍妾、だつてさうぢやないの、私なんかまご〱してゐりや直卅になつちまふわ、卅の聲を聞いちや女もうおしまひだ。

髪結、さうでもありませんよ、眞の女の盛りは卅位ですよ、あなたなんか今眞盛りだ。

圍妾、何とか云つてるわ。さう云や私孃さんにおごつて頂かなきやならないわ

娘、私に？

圍妾　え〻、あなたをね大變おほめ申てゐる人がございますのよ。



髪結、三好屋のおかみさんでしやう？

妻、私ぐらゐなもんでしやう？

圍妾、嘘よ男なのよ家へ來る方でね立派な人よ、どうして知つてるんだかあなたの事をそりやよく知つとりますのよ。

娘、さうですか。

髪結、張合のない返事だねえ、片つ方ぢやおごつて頂かうつて云つてるのに。

娘、だつて別に嬉しくないんですもの私をよく知つてゐる人なんて——そんな人めつたにありやしなくつてよ

娘、あなただつて眞に解つてやしないわ、去年の私と今年の私とは同じぢやない事よ、現に今日私が芝居へ行くと云つたら驚いたぢやありませんか。
髪結、ひどくいぢめられますね。
妻、えゝ、私いぢめられるからもう歸るわ。
娘、いゝぢやありませんか今迄待つたんですものもう少しよ。
妻、だつて私あなたのお相手してゐるより家の用をした方がいゝんですもの。
娘、家の用なんかつまらないぢやありませんか、
妻、あなたにはつまらなくつても私にや意味があるのよ。
髪結、お前もういゝから武藏屋さんから枝本へ行つといで。
梳手、枝本私いやだ、あすこの女中衆はけんつくばかり喰はせるんですもの。
髪結、そんな事が怖くてどうするんだい馬鹿。
圍妾、さ早く行といでなさいよ、隨分あどけないわねえ。
髪結、あどけなさ過て困つちまふ十八にもなつて。
圍妾、ぢや文子さんと同年ね。
妻、あの方十八？私廿三四かと思つた。
髪結、ひどい事を。
圍妾、いゝえ其位に見えてよ、あのいやに粋がつた風つちやないわ。
髪結、餘程家がいゝんでしやうねえ。
圍妾、何だか知らないけれど餘程變てこな親だわ、素人の娘がふだんにあんなぞろ〳〵した服装をして、待合ッ入りなんかするのを默つて見てゐるベラボーが何處にあるもんか。
髪結、私や始めて見る時にや、おとなしい娘さんだと思ひましたよ。
圍妾、私もよ、此方が極りが惡いやうだつたわ。
妻、實際おとなしさうぢやありませんか。
圍妾、どうしてあなた、あんな顔してゐて惡黨なんでございますよ、あの年で旦那が二人もあるつてんだから驚くわねえ。
髪結、ほんとなんでしやうかねえ。
圍妾、ほんとでしやうよ。
妻、容姿がいゝから人がいろんな事云ふんでしやう。
圍妾、何が容姿がいゝもんですか、私あなたの方が餘程ようございますわ。

妻、はゝゝ。
圍妾、あらほんとでござんすよ、いつそ藝者なら藝者でいゝけれど、素人の娘がぢやら／＼したのは見つともないわ、私堅氣が好。
妻、あゝ是から當分日本髮にしやう、心持が變るわねえ、女らしい氣持になれるわねえ。
娘、あゝ／＼もう幾時間かの後には島田に結つて赤い棧敷の中の人になるのかと思ふと樂しみだ。
妻、だけど餘り期待が大きいと失望する事よ、一體あなたは何物に對しても想像が廻り過るのよ、だから實際にぶつかつては失望しい／＼して、あなた自分で淋しい境遇を作つてしまつたのよ。
娘、だけどねえ、だけどねえ、樂しい想像が胸に燃える時、それを味はないで葬つて了ふのは損ぢやありませんか。
妻、損ていふか何ていふか知らないけれど、つまり小さな歡樂で大きな苦痛を買ふ譯になりやしなくつて？
娘、あなたは何でも一足飛に結果ばかり考へる方ねえ
妻、だけど私を御覽なさいな私を——私の運命つていふものは、あなたにや馬鹿々々しくも見えるでしやうけれど、兎に角今の私は幸福よ。
娘、あなたのやうなのが幸福なら私決して幸福になりたくないわ。
妻、あなた一體幸福つて何だと思つて。
娘、もういゝ事よ面倒くさい、そんな話し嫌ひよ氣がめいつちまふわ。
圍妾、此方で御馳走の話してゐりや、あつちぢや「氣がめいる」つて云つてゐらつしやる。
髮結、あなたのやうな方でも氣がめいるつて事がありますか。
娘、ありますとも、沙漠の中へでも行つて了ひたくなる事幾度もあるわ。
妻、沙漠の中でも厭はないつていふ人を一人見つけるといゝわ。
髮結、文子さんみたやうな事云つて。
圍妾、奴さん又さがしてるの？
髮結、さうなんでしやう、世話してくれつて云ふ位ですもの。
圍妾、おかねさんにさう云ふの？
髮結、私にや云やしませんけれどね、おとみに云ひましたとさ、「其代り私もお前さんに相應したのがあつ

たら世話して上る」つて、「だけど私はいゝ男でなくつちや嫌よ」ですとさ。

圍妾、呆れ返つちまふ。あ、髱がつまつたわねえ、まあいゝや、どう行つて來ましやう、さよなら、お先へ有難うございました。

髪給、お約束のお土産を忘れちやいけませんよ。へえお待遠樣でした。

妻、私も歸らう。

髪結、とう〳〵お歸りですか。

娘、世帶持だから私なんかに構つちやゐられないんですつて。

髪結、又喧嘩したんですか。

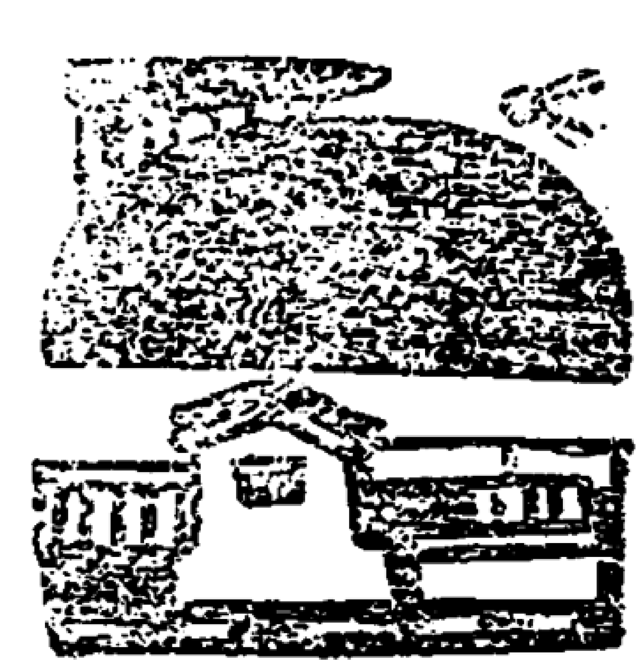
妻、ちつと喧嘩しに出かけて入らつしやいよ、ほんとに入らつしやいな。

娘、えゝ、プリムローズが咲たら頂きに。

妻、まあ、あゝいふ人よ、ほゝ、さよなら。

娘、髪、さよなら。

來るか〳〵と濱へ出てみれば
　濱の松風音ばかり
君に別れて松原行けば
松のつゆやら涙やら



職業の苦痛

白山吹

▲理想は女辯護士

幼少の頃、將來汝は何に成るの？と能く聞かれたものでした、すると私は男の子の如に、雙肩聳やかして女辯護士！と答へました。それが十四五の時分には激變して、沈鬱な少女になつて了ひましたが、今は果して違はず女辯護士と迄ならずとも、女新聞記者といふお轉婆者になりました。

最初は、女權擴張論ぐらゐ唱へ出す意氣込みがあつたかも知れませんが、どうして〳〵社會は私達に、そんな自由を與へて呉れません。

自分の素養の足りない事をも顧ず、盲人蛇に怯ぢず的に、逆巻く濁流の渦中に飛び込んだので御座いました。

今思ひ出すと、怖ろしさと恥かしさとに戰慄を覺えます。

幾多の人の親切も誠意も、年老いた父母の涙をも、唯々自らの個性を葬る壓迫とのみ思ひました。自由とか解放とか、然うした世界に憧憬して、煙のやうな夢の如な天地を想見して、遂に温い父母の膝下を去つたのです。

果して自由の世界を發見する事を得ましたでせうか。

▲婦人記者となる

社會に出てから、仕事は私にとつて、案外困難な事でも御座いませんでした。然し自分の純白であつた感情を斯くまで損はれる事とは思ひもよらなかつたのでした。

最初に與へられた仕事といふのは、名士や夫人を訪問する事で、餘り六ヶ敷い事とも思はれませんが、中中然うでないのです。然し初めの二三日は何の經驗もないので、默つて卓子の前にあつて、雜誌の切り拔き等をさせられてゐました。編輯長や主任に對しては、唯々満身敬意の念を持つて、御意の儘に働きました。然し想像した新聞社といふものは、目の廻る程忙しい活氣の滿ち／＼たものだと、思つて居りましたにも係はらず、毎日凝としてゐるので、苦痛で苦痛で堪へられません、すると、××主任もそれを察して下すつて『然うしてゐても苦しいでせうから、何處か訪問して御覧なさい。』と、嬉んで話し相な人を、皆で列擧してくれました。イの一番に伺つたのは、慥か岡田八千代女史のお宅だと覺えてゐます。

▲訪問難

東京の地理さへも委しく知らず、何でも澁谷の伊達といふ邸の跡と聞いたので、青山の終點で電車を下りました。――今思へば割合に大膽でしたね、――そして、伊達跡／＼と尋ね廻つたけれども、一向わかりません。

酒屋で聞いても薪屋で聞いても知れません、凡二時間も澁谷の野をうろついて、漸く差配をしてゐる、駄菓子屋のお爺さんに訪ねますと、『その岡田さんといふのは何を商賣にしてゐなさるんです。』といつた。

『美術家、あの繪をお書きになるのです。』お爺さんは此の界隈で有名な識者ださうですが、猶首を傾けて考へ込んで居まして、

『それでは、俺の姪にあたるのですが、その亭主が繪

師ですから、其處へ行つてお聞きなさい、ナアニ、直き向ふの小い家です』と親切に敎へて呉れました。日あたりの惡い茅葺屋根の家です、御免下さいとおとなへば、若い病みあがりらしい妻君が、蒼い顔をして出て來ました。その妻君も『岡田さん――、美術家――』と、暫く考へ込んでゐましたが、

『その方の奥さんでせう、小説をお書きになるのは、それならば小説にいつか、天現寺橋の邊りとありましたよ』とその橋を敎へて呉れました。天現寺橋なんて名前すらも初めて聞くので御座います、漸うにしてそのお玄關に辿りついた時は、何しろ二時間も足駄を引き摺つたのでしたから、足袋は切れる足は痛む、馴れないので全身綿のやうに疲れてゐました。

問ひたいと思ふ事も口に出ず、思ひ切つて問題を提出すれば、八千代女史は謙遜に、

『私達にはわかりませんで御座います。』とお逃げ遊ずそれを突つ込む勇氣もなければ、術も知らず、唯話の途絶えめ〳〵を、何處からかカンナの音が響いて來ます、その間の惡かつた事はお話になりません。

談話は斷片的で社へ歸つたとて、記事になりさうもなく、その焦慮と恥かしさが込み上げて、座に居堪へないやうで御座いました。それでも日頃尊敬してゐた人に見えた、一種の滿足を得て、私は社へ歸つて參りました。初めての事で非常に印象強く、どうか斯うか纏めて書きました。

△自分を殺してかゝる

男の方を訪問するのは割合に樂で、問題さへ提出すれば大抵の方はお話し下さるので、別に呼吸も何も要りませんが、婦人にして訪問記者に應ずる方は、餘程解つた方でせう。

逢ふには逢つて下さるが、御謙遜が過ぎて皮肉なやうに受け取れます、尤此方が神經過敏になつてゐるせいで、先方でも責任を重ぜられるが故に、無暗にお口をお開きにならぬのでせう。然し何時お目にかゝつても氣持のよいのは、藝術家、もしくは藝術を解された方で御座いませう。

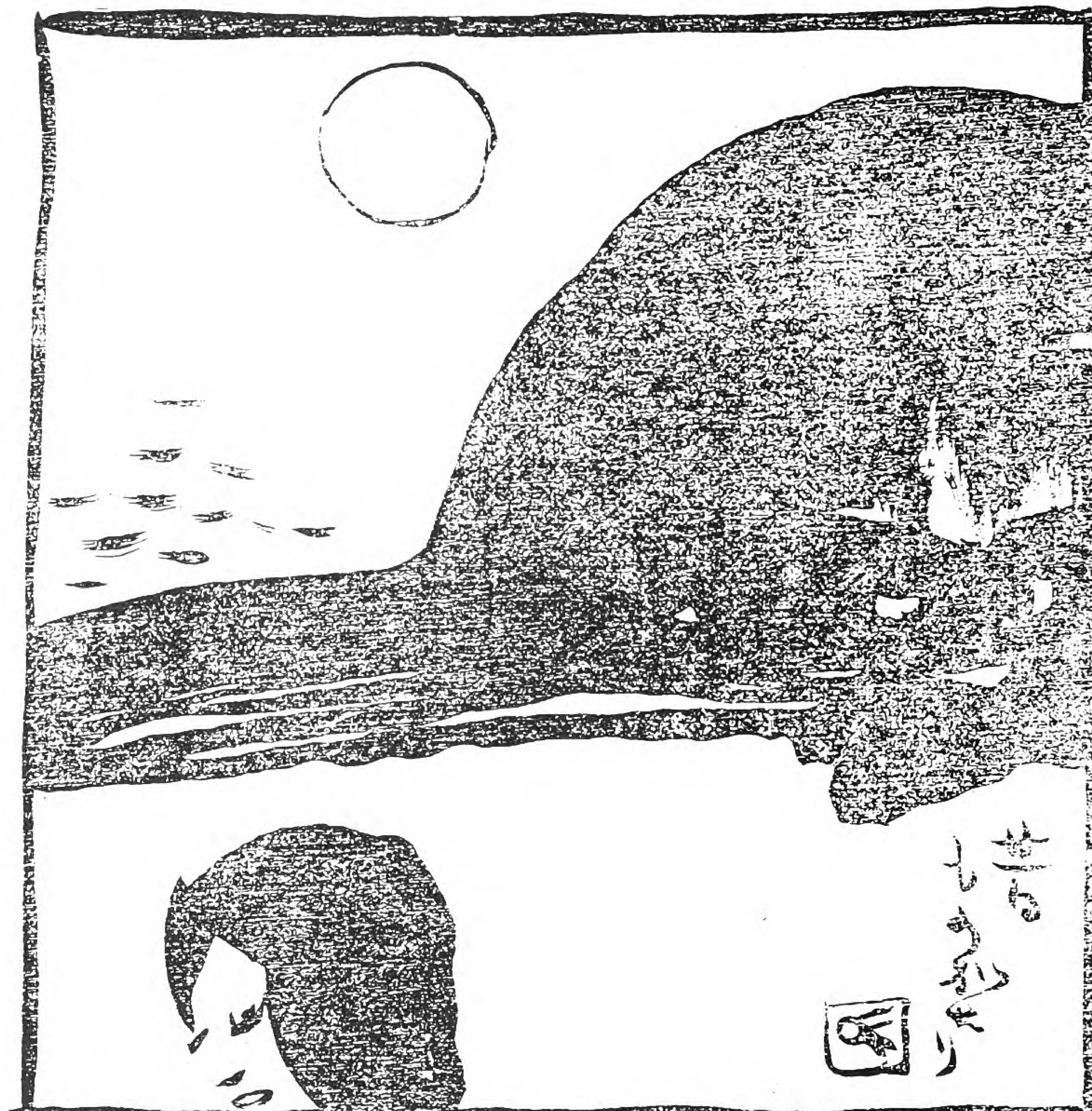
廣い世間を歩いて見ると、色々な人に出會ひますから、自分といふものを全然殺してかゝらないと、此の商賣は出來ません。

ある舊華族でしたが、御令嬢にお目にかゝりたいと申出でました。すると、『當家の姫君は新聞の材料に

は相成らせられぬ。』とある、今時こんな事を聞いてお芝居のやうだと、編輯室の一同で笑ひました

斯ういふのは執事の老人が時勢を知らぬので、夫人なり令嬢なりは當代の教育も受けられてゐるし、決してそんな事はあるまいと存じます。◎それから櫻井ちか子女史を訪問した事が御座いましたが、それも大きに失敗談、女史がタイプライターをせらる丶間、三十分許り應接間でお待ち申すと、軈て女史は入つて來られた。

先づ氷のやうに冷い瞳の視線に、若い胸を射られて、ヂロ／＼と見られるのが辛くて、居堪へられませんでしたが、自分は今訪問記者であるといふ自覺を強くして、問題を提出すると、『自分の答ふべき問題ではない。』とある、それでは何でもお考へつきの事を、といふと、『私は學校の長としても、一家の主婦としても多忙な身で新聞の種子など考へてゐる閑暇はなかつた。』といふ情ない言葉、全く女史の仰有る如く、問題の適不適を考へて持つて行くべきでせうが、此の問題ならあの人は熱をもつて話すだらうと思つても、決して然うはゆかぬ場合もあるのですもの。



▲我儘者も遂に服從

餘りの侮辱に堪へ兼ねて、一層新聞記者なんて止めて、再び父母の懷中へ歸つて、服從の日を送らうとまで思つたのは、此の時許りでは御座いませんでした。今になつて見れば、〇〇女史に感謝すべき處が大いにあります。

初めの程は虛榮心に驅らるゝ事もなく、極く眞面目に仕事の事にのみ追はれて、一日の中に何物をか得なければ忽ち日刊新聞の事だから、あとからく〱と追はれますのみか、編輯上の都合が惡くなるのですが、丁度留守の處へ行つたり、居ても逢へなかつたり、引つ越しの後を追つて見ても知れなかつたりして、短い冬の日は徒勞に終る事もありました。そんな時は、何時も悄然とした姿をして、小石川の宿に歸つて行くのでした。

歸れば何を勉強する氣にもなれず。筆をとる氣にもなれず、唯疲れた體軀を投げ出して。快い眠りに入る事より他に、何の慾望もありません。勞働者の上も偲ばれて、氣の毒で堪へませんでした。然し私も一個の勞働者です、終日パンを得る爲にのみ斯くして過します。どう思つても幾ら高く買つても、これが天職の使命のとは思はれません。

社内の事よりも何よりも、反抗するに感應のない、大自然の壓迫は、實に苦しく、家庭や長上の人より受くるもの丶やうに餘裕がありません、流石の我儘者の私も、是には服從せざるを得ませんでした。

▲生活費の不足

早稻田生身の文學士樣さへ、最初の月給は二十圓から二十五圓と、相場の定つた新聞社の事ですから、私は初め見習として十五圓を與へられました、電車代は別です。

自給するやうになつて、生れて初めて月給を懷中にした時は、嬉しい氣持ちよりも、顧て一ケ月の自分の勞力が餘りに安價に購はれ、餘りに又小なる自らの力である事を心細く思ひました。

十五圓の中、

一〇、円 錢	食料及び炭、油
六〇	湯錢
六〇	郵便
二、七〇	電車券私用分
一、一〇	小遣

（三十日）

と計算立てゝ見ましたが、此の中から英語の月謝を出さうと思つても出ません。既に郵便の六十錢は不足一圓十錢のお小遣では足袋が切れても、下駄が惡くなつても買へません、それに半襟が汚れるとか化粧品を買ふとか、臨時費が多く出ますから足りる筈がありません。書物も買へず勉強も出來ない、これでは仕樣がないと思つて、知合の妻君に相談しますと、東京の生活は百圓でも出來れば、五圓でも出來るといふ、食料の方から月謝位出さうなものですねと云ひました。それから直ぐその素人下宿を退いて、神田の裏長屋同然の家へ行きました。元、鄕里の家に居た下男が獨身で世帶を持つてゐるのです。其處へ同居してから自炊もして見ました、その男はかなり忠實な人で、夜の中に水を汲み込んだり、薪の用意もして呉れまして、夜の明けぬ中に勞働に出て了ひます。

雪の日にも風の日にも、私は社から疲れて歸つて、かぢかんだ手で鍵を開けて、眞ッ暗い家の中に入り、ランプを灯して、此度は火を起しにかゝるのです、馴れない爲に幾ら起しても消えて了ふ、終には自棄になつて、石油をかけて火をつける、隨分危險な亂暴な事をしたものです。

そんなに迄しましたが、遂に勉強の暇は得られませんでした。

下男は口癖のやうに、お孃さんはお可愛想だと云つてゐましたが、遂に見兼ねてか私の生活の狀態を、鄕里の家へ知らしてやつたと見えて、それから充分に金子も送つてくれましたし、衣服等も汚れゝば直ぐ鄕里へ送り返すと、新しい着更を送つてくれるといふやうになりました。衣服の汚れる事、いたむ事は、それはそれは甚しいので、母に始末をたのむのが氣の毒のやうで御座います。

然うなつて來ると、丁度空腹の人が食を得て眠くなるやうに、却つて身の爲になりません。その後遂うとう惰弱に流れ、虛榮は募る、物質慾が增長して、安逸許りを求めて、自己の修養などは、とんと忘れて了ひました。

洗濯物すら素人の手では氣持惡く、貴婦人達にはお友達が出來る。高價、月給の一割もするクリームが塗りたく、男のお友達も出來たりして、一時私は全く虛榮を夢見て、輕佻浮薄な日を送りましたね。

けれどもその後幾變遷、私といふ女は又當時の人と變りました。

要するに、新聞記者雜誌記者は、幾ら文明になつて來たと云つても、今の日本では婦人に困難な仕事で御座いますね、第一服裝からして不便な事はお話になりません。米國あたりは知らぬ事、いまの日本の社會は幾十年、婦人が新聞界で奮鬪して見たところで、苦しい經驗を山のやうに積んだ處で、相當の地位を與へてくれる見込みは到底ありません。

私の初めの大理想は何處へやら消滅して、元氣なく丁度、一旦泥水に浸みた女が、足を洗へずにもがいてゐるやうなもので、矢ッ張り相變らずの日を過して居ります。

それでも『婦人は實力以上に買はれる。』といふ餘德あるが爲で御座いませう。

然し實力以上に買はれるとは、何たる侮辱された言葉でせう、決してそれを潔しとは致しませぬ。

* * * * *

要するに婦人の職業と云ふことは、まだ〳〵範圍が狹いのみならず、殊に筆を持つて立たうとなさる方は、なほ更生活の途の苦しいと云ふことを覺悟して、陣頭に立たれたいと思ひます。



順境に在りて

白木絲子

△女は男に頼るべきもの

こんな事を申出したら嘸因襲に囚はれてゐる時代後れとお蔑みになるかもしれませんけれど、若い女に肖合はない私の心を質素すぎると笑つて下さいますな。

私の思想はたとへ時代の潮流に多少動かされる處があつても、根本はこれ體質の組織からして男に劣つてゐるのが女では御座いませんか。

時代の思潮に一番接觸してゐる文藝の立場にあつても、女流作家の作品が所謂女性的作品といふ一語の下に葬られて別ものにされてゐますのを見ても、女の頭腦と男の頭腦と差異のあるのが判りませう。もつともこれでなくてどうして女に子が產めませう。

△自覺した女が果して幸福か？

新時代の女とか、自覺したる女とか徹底しない徒ら

な浮薄の言葉に惑はされて一生を私は棒にふりたくございません。

現今の覺めたる女、それが眞に自覺して女といふものゝどういふものと云ふことを知つたかと思へば心ぼそくなります。

いはゆる自覺した女が果して幸福か？どうかは私には判りませぬ。一體に女すべてが覺めて來たのは事實でございますけれども、とりわけて只自覺といふ言葉にのみ左右されて甲斐ない反抗の叫び聲をあげてゐる人を見れば傷ましく思はれます。

△私は健實派

石が流れて木の葉が沈む世になつた譯でもございますまいが、男の方が男であることを忘れたり、女の方が己れ自身女の身であることを忘れたりなさいまして男に女のやうなのが多く、女に男のやうなのが多くなつたこの頃、これはどういふ現象でございませう。

男に女のやうな方のあるのは別として私達同性の方には出來ることなら和歌をお詠み遊ばすよりも、それより先に襦袢一つの拵らへ方位御存じあつて欲しいものと思ひます。

女の頭腦、女の體質、それが男に一歩を讓つてゐることを悟つたものは幸福じやなからうかと存じます。と申したとて良人を天と戴けなんていふ教訓のまゝに服從してテンから何もかも壓迫されてそれに甘んじてゐた其昔の女、それを私は讃美するものでは必ずございません。けれども男女兩性といふものに考へ及ぼして自分は女であるといふことを忘れ得なかつたら或は救はれる場合が多くはないでせうか。

何百年來鎖されてきた女の位置も開放された現今、しかし乍らまだ過渡時代なのに向ふ見ずの自己擴張は危いこと〳〵、自分を護るものは自分よりほかありませぬ。時流の勢はどうあらうとも私はとに角健實派でございます。

△私等の歩むべき道

女として生を享けた私は、私自らの歩んでゆくべき道、それを確固と定めておきたいと思ひます。

妻となり、母となつてゆく――それはごく平坦な道にすぎないやうですけれど、單に妻となり母となつてゆく――それのみでなく女にも色々の活動すべき處がありますし、か弱い女の力そのものが大きく考へ

てみて社會の原動力となることを思へば女のゆく道それが平坦だ空虚だといつて何の氣もなしに歩いてはゆかれません。

分つてゐるやうで案外分らぬのは世の中でございます。その世間の多くのことを目にし耳にきいてさて心に入れて靜然と考へて見れば自分の歩いてゆくべき道といふものについて私に重大な責任を感じます。ですから私は何處までも私の歩んでゆくべき道を確りと定めておいて、そして世の中を廣く深く見たいと思つて居ります。

△私の友達の初産に際して得た智識

女が結婚すれば次に來るのは必ず出産といふ事でございませう。俗に棺桶に片足かけてゐるといふ女の一番大事なこの難關も無事に越えて了へば何でもないこと。けれど今まで御産といふことは自分と何の交渉もないものゝやうに平氣でゐられた處女時代には得る事の出來なかつた智識が妻になつてから得られたのでございます。友達のお產、ことに若い妻としての友の初めてのそれは確かに經驗のない者にとつては大事件にちがひありませんでした。そしてそれに際して得た智識は私に益々女といふものゝすべてを敎へてくれたやうなもので御座いました。

△親といふものゝ心持

また夫ればかりでなく親といふものゝ心持も同時に解し得たやうな氣がいたしました。

古い事ですけれど「子を持つて知る親の恩」とか「親の心子知らず」とか何とか云ふやうな諺、それを今更感じるのでございます。

私が私の知る人の範圍内で見聞した所計りを考へてみましても親といふものゝ心持ほど微妙な神秘的なものはないと存じます。

舊いものと新らしいものと相離れてゆくのは自然の勢で已むことを得ませぬけれど、已むをえないと捨てゝ了はずに親といふものゝ心持をもう少し現代の若い方達に知つていたゞき度い。

△解し得ぬ不幸と解せられざる不幸

それにつけても心持を知るといふことは尤も大事な

事とおもひます。オセロの悲劇も或は又私らが日常の間に起る些細な衝突も考へてみますれば斯ういふ處から出發するのではありますまいか。

解し得ぬ不幸！解せられざる不幸！私はその何れをも悲しみます。

△人情といふこと

こんな事を新らしく云出しませばどんな皮肉を戴くかも存じませんが、私は私の生活に人情といふことをとりのけ得ない人間なので御座います。

人情といふ其言葉はいかにも舊いやうながら私達の生活にこれをはなして了つたらどんなものになりませう。試に世の中を知つてゐるといふ人ほど人情といふことを解して居られるやうに思へるのを見ても、私は人情といふものを笑へないので御座います。

△自個と自他

個性を尊重することが重んぜらるゝやうになりましたのは誠にお互の幸福であるとは思ひますが、多くの方の中には此の個性の尊重を妙に曲解しておいでになる方もあるやうに御見うけいたします。

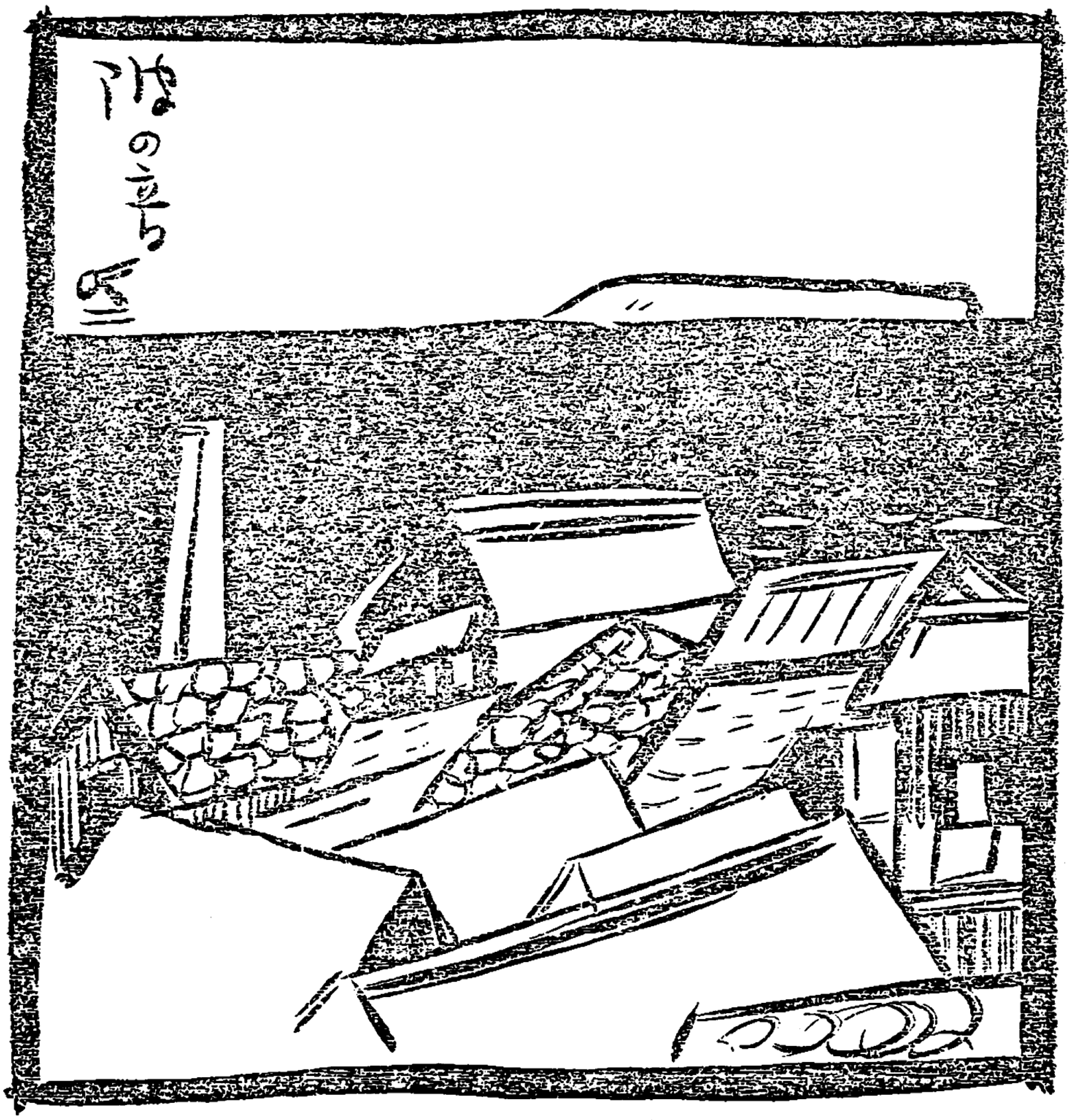
自我の發展それも餘りに極端にすぎては遂に自ら傷めるやうなことになりはいたしませんでせうか。何も自分の意志を殺してまでも自他の爲に服する事はありませんけれど、自己を尊重すると同じ意味を以て私達は自他をも尊重したい。これが處世上にはなか〳〵必要な條件だと思ひます。

△結婚によりて女は眼が開く

比較的みじかい處女の夢からさめて結婚の曙光を見た後にこそ女は眼が明くものではございませんでせうか。自個といふことも社會的地位の出來た妻女時代に入つて一層明瞭に發揮しなければなりません。

女は結婚してしまふと多く意氣が消耗してまづ可いと安心して進歩心を失つて了ふと誰方かゞ云はれましたが、私は此言を以てお互に結婚した女の上に警めたいとぞんじます。

女そのものは到底男子と對等に立ち得べきものではありませんけれど、さりとてあながちに自分から諦めてしまつて向上心のないのは喜ばしいことでは御座いません。



海より歸りて

まだ海の音が聞えてゐるやうです
銚子は荒いですね
都會の人ですか
滅多に出ませんが
たつた一人逢ひました
遠くからあしもとだけが白く
見えるのです
松原の外れでしたよ
直ぐ都會の人と直覺しました
勿論です
寒い海を見に來たのでせう
私は其女と、今一つ
未だ暮れ切らぬ空に
パツと燈臺の火の點く處を
見て、驚きましたよ
何と云ふ輝きでせう
力ですね
崇拜すべき光です
繪は澤山出來ました
見て下さい

（SM）

二つの生命（出產前記）

磨志緒



☆人形の着物を參考

好いお天氣だ、運動にと思つてブラ〱出掛た。フト思出して山本屋へ入る、表の店につりさげてあるメリンスを一々見る、好いと思つても一尺餘りしかないのや、長くても嫌な柄でちつとも思はしいのがない。こちらにも澤山御ざいますし、御氣に召したのが御ざいましたら何尺でも切りますから、と相想よく言ふ。空色地に褪紅色と白で大きな芙蓉の模樣のあるのがあつた、何尺御ざいますの、と尋ねると、さして見て五尺と言ふ、之と海老茶地に唐人形の遊んでる模樣の六尺餘りのとを買つて歸る。早速裁ちかけたが寸法がちつとも分らん、けど鄕にゐた時丁度あか兒位の人形の着物をしたのを考へ出してたつ。

丈一尺三寸にして殘りを袖にすると一寸尺がまけてあつたので四寸五分になる、其袖から襟と衽をかいて袖幅を三寸五分にした、襟一寸五分かいて殘りが衽、おとしを一寸五分にすると衽丈がたらんので下前で襟切てつぐ、襟は二つに切てたらんだけ黑繻子を入れた、裏はヒワのメリンスがよく映えるので五分ふきにして幅はどこも一パイ、衽だけ少々縫こんだ。襟幅は五分肩の明を八分にして、袖は奧口ともマッスグに縫ふた

身丈の眞中より二寸許り上の後幅へ白メリンス五分幅のヒモ二尺を千鳥にかゞつてつけた。

可愛い事、襟の黑繻子が丁度首がすれぬやうわざと掛たやうに見えて、袖口や裾のヒワと表の空色がそれは〳〵よく映える、かう着せる樣にして後の紐を前へ持て來てくゝつて、ニッコリ獨り微笑む、暫く抱て見てゐた。

生れたらすぐ之を着せやう、可愛いかいまきが出來た。（七月十日）

☆柚子が食べたい

胸がわるいので朝飯はぬきにした、何か食べないか卵は、と仰つたけど、卵と思つてもムカ〳〵するので何かすつとした物でなければと言ふ。

御出勤の時、お見送りしやうとしたらいゝよ寢ておゐでと仰るので失禮する。柚子が食べたいネーと、ない物を欲しがつて、子供の樣だと自分ながらをかしくなる。酸味のつよい物は惡いのだと知つて居ながら、昨日隣から戴いた李五ッ許りたべた、もつと食べたかつたけど辛棒する。

お晝飯は少したべた。白羽二重でハート形の涎掛をこしらへる。良人は水蜜と、バナナ買て歸つて下さる、うれしかつた。（二十日）

☆蚊帳つるのにも注意る

便所の掃除をする、いつぞや婦人世界に便所の掃除を怠る人は見惡い兒を生む等書てあつた事を思ひ出して淸潔に掃除した。

良人は此頃蚊帳つるのさへ氣をつけよ、氣をつけよ、と仰る。高い所に手を上げて、流產した人は澤山あるさうだから、夜家政要鑑育兒の部を讀む。子供に寢る時澤山蒲團を着せるより、下へ敷く方が溫かだと書てある、私は寒い時には何枚もお蒲團きせてやるのだと思つてゐた。（八月五日）

☆可笑しい處ではない

姙娠中は殊に身體や衣服を清潔にする樣、どの本にも書てあるからと思つて、あまり進まなんだけど洗濯した。竿に干してこちらへ來る時どうしたはづみか、つまづいて膝から兩手土だらけ、誰か見はせぬかとキヨロ〳〵四方を見る、あとで思ひ出しては一人で笑つてゐた。

良人が歸つてらしつたので其話すると、をかしいどころじやない、もつと氣をつけなきあ常の身とちがうんだからと仰つた。(二十九日)

☆また着物一枚

川島樣へ一度診察貰ひに行く。まだ月が若いので確に申上る事は出來ませんが、姙娠ですと申上ても間違は御ざいますまい、五月になつたら來て下さい、私が伺つてもよろしいと仰る。

もつと確り言つて下さるつもりで行たのに、少々氣ぬけがした。けど今もう三月のくれ、之が外の病でゞもあつたら、どつかに異常があらうけど病氣でない事はきまつてると思つて、又着物一枚仕立にかゝる。丈は前のかいつまみより四寸長いので、少し大きうなつても着られるやうにと思つて、襟をくつてつけた、袖丈は五寸で幅は四寸、襟幅が七分襟下五寸にフキは七分出す、紐も襟につけて後でむすぶやうにする。紫紺地に鷹の飛んで居る模樣、裾まはしは白のメリンス。すつかりしたのが出來た。(三十一日)

☆文學も好きに違ひない

食べ物を殊更變へるのはよくないさうだから、常の通りにしてゐるけど、辛い物はちつとも食べん樣にした、水氣のあるものは、すつとしていゝが之もいつもひかへ目にしてゐる。

此頃は胸のわるいのも治つたし、何が食べたいの欲しいのとも餘り思はんやうになつたが、何だか氣がくしやくして、何でもない事に腹が立つたり、悲しくなつたりする。今朝も良人に厭な顏して話してたと見えて又と笑われた。ハッとしてこんな氣でゐてはお腹

の兒が立派に生れる筈がないと氣を持ちなほす、成たけ美しい優しい心でゐやう。

夜ヴアイオリンとマンドリンで合奏した、良人は乾度音樂好きの兒が生れるよつて笑つて被居した、文學も好きに違ひない。（九月二日）

☆襁褓の觀察

今日は涼しくて心地がよい。白地の單衣と私の飛白の單衣とをといてオムツにする、何尺位でいゝか、さつぱり分らん。表に出て知らん顏して、よその軒に干してあるのを見る、一尺のも二尺のも大きな四角のもある、一方の端を縫つて輪にしてあるから乾き易いらう、私もさうして置く。夜は雜誌をよむ、小兒衞生だ問答欄がぢき目につく。（八日）

☆來年の夏に着られる

今日は上天氣、家にすつこんで居るよりと思つて裏の山へ登つた。おりる時足がふるへて困つた、遠道したり、山坂の下り上りは害があると知つて居ながらと思つて急いで歸る。良人には默つて居る、言つたらしかられるから。夜トキ色のネルで單衣一枚こしらへた、之も來年の夏頃着られるやうにと思つて、前の綿入の様に仕立ておく、袖口にヒダをとつて黑襦子の縁をとつた可愛いものだ。（十五日）

☆子供が出來ても夫は大事

姙娠した者は一倍暑さ寒さも身にこたへるつて聞いてゐたが、ほんたうにさうだ。此頃はもう寒くてく今朝も前の田で働いてる人に寒うなりましたねと言つたら、大分涼しうなりましたなと仰つて、きまりが惡るかつた。

袷を着たい程だけど、早いものからと又人に笑はれたらと思つて、浴衣と飛白との重ね着する。

良人が御歸りなすつたので奥へいつて、お召かへの御手傳に、お召を持て立てゐると、いゝよ子供が產れると、こんなにして貰へんから、今から一人上手に着

る、つて笑つて被居る。私も笑つてゐたけど、心の中では子供が出來ても今迄通りにしやう、子供の爲に夫の事をお留守になり勝にはすまい、と思つてゐた。

今晩からお蒲團三枚着てねる。（二十三日）

☆二十年後の愛讀者

來月の原稿をと思つて机によつたら、下腹部がピコピコと動いた、ハッと思つて考へてると止んで、又動き出す。原稿には主に自分の現在を書いた。

今生れる兒が女であつたら、之から先二十年もたゝぬ間に女子文壇の愛讀者になつて、私のやうに下手でも毎月投書して、時には私の母も私の年頃には磨志緒といつて、月々投書したと言てゐる、なんて書くと今三十の記者樣が、その時はもう五十で、此社にゐらつしたら、どうだらう。こんな、ひようきんな事思つてひとり笑つてゐた。

夜姙娠の經過をよむと、注意深き姙婦は四ケ月の末に至りて自ら胎動を感ずる事ありと、書てあつたので、けふ動いたのは確に胎動だと思つた。

床に入つてからも、それは〱よく動いた。（二十八日）

☆其小さいものは何だ

今日鵜飼樣へ遊びに行く、房樣は十二月に生まれるんだと仰る。大分大きい、あなたも帶のあたりがふくらんできましたし、大分おやせなすつたつて、やせたのか知ら、自分ではちつとも分らんけど。

着物や襦袢の仕立方など聞く。襦袢は幅なりに縫うんだつて、さうでないと下にオムツまくから、あはんさうだ。私は又、子供の大きさ許り考へて、皆少しづゝかいておいたのに、着物でも一尺位のものは生れて一月程しきあ着せられないさうだ、二尺程の丈にしておくと、滿一年たつた時で丁度いゝかげんになると仰つた。

歸つて早速襦袢を仕立はじめる。紅や、うこん等は子供の肌にうつつて惡いと本に書てあつたので、白でする、此度は幅いつぱいにぬうた、九寸の丈だのに幅

は一パイだから四角な襦袢だ。袖にいゝのがないし胴と同じのを一枚と、一枚は派出なネルで三寸の幅で丈も三寸で、袖口を二寸にした。良人は傍に見てゐて、其小さい物何だつて仰るので袖で御ざいますの。その小さいものが、私のかと思つてらつしやるんだなと思つて子供のですの、と言つたら、そんな小さい物は着せたりぬがせたりするのにいかんと仰る。いつも默つて居らつしやるけど、矢張り子供は可愛いと見えると思つてゐた。（十月十五日）

☆他の嬰兒に眼が着く

朝から仕度して運動會見に行く。之迄は同じ年頃の美しう着飾つた人許り目についたのが、今は人に抱かれたり、負ぶされてる兒の頭から足先にまで氣がつく。

矢張り女の兒でもあまり赤々した物はよくない、縞よりも飛白がいゝが、可愛いのはメリンスが一等だ。男の兒のムッチリ肥た顏に黒の帽子はほんたうによく似合ふ、少し顏うつりは惡いが白もスッカリとしていいものだ。

私はたゞ柔い物がいゝと許り思つて、羽二重やなんかで涎掛こしらへて置たけど、今日見て成程と思つた。涎の出る兒にこんな薄つぺらな物はすぐ下へ泌みてくる、此度から白のネルや、表は薄くつても裏は厚いものを付けやうと氣がつく。

歸つたのは四時。着換の折黒くなつた乳首いぢつて搾つて見たら、まア透明た初乳が、丁度眞珠のやうに美しい玉になつて、乳の頭に幾つも現れる、言ひ知れぬ嬉さと可愛さを覺えた。

朝から歸る迄立どほしであつたので、腰のあたりがはる、足もつつぱる樣だ、矢張り惡かつた。（二十六日）

☆新しき生命の響

川島樣へ診察貰ひに行く。お腹に聽心器をあてゝ、おゝもう胎兒の心音が確に分つてますよ、ヒイ、フウ、ミイこんな早さにと仰る、母と言ふ觀念が益々深くなる。（三十日）

☆お人形さんの頭とは違ふ

枕を縫はうと思つてお隣で籾糠貰うて來て、七寸四方のトキ色メリンスを二ツに折て縫うてゐると、郷の母樣が入被して見て、お枕かい、之では餘り小さいねと仰る、でも人形のこの位でしたわ、と言つたら、お人形樣のお頭は幾日たつても同じ大さだけどねといつて笑つて被居る。一寸之の倍位にはして置かないと、すぐ頭が大きうなるさうだ。

仕立た着物や、オムツを見せたら、こんな一幅計りのオムツでは一寸大きくなると困る、一幅半のや二幅の四角なのも之を三角に折てオムツの上から又から巻くのだと仰る。着物も生れてすぐは袵なしの綿入でいいさうだ。丈も一尺一二寸もあつたら大丈夫で、之はほんの暫く着せる物だから、あまり新しいものは惜しい、お前の不常着の派出な方の下着をといて三枚程と、殘りで袵の付たのを仕立よ、と敎へて下さる。田舎では餘り派出すぎて厭であつた着物が丁度まにあふ。

お蒲團を三尺餘りの丈で、横二尺五寸位の二枚と、之より少し小さなの一枚こしらへるやうにと言て、いい柄の更紗と萠黄の裏迄下すつた。

氣をつけて轉けんやうにせんと、姙娠中にこけて子供が横位になつたり、臍帶が纏絡て產めん人が澤山あるからと注意して下さる。(十一月四日)

☆芝居もお斷り

此間から芝居が出來て皆樣誘ひに來て下さるけど、皆お斷りした。良人は行きたいだらうがと慰めて下さる、いゝへ行つたらいけませんからと言ふ。

夜おそく道を歩くのさへ惡いのに、其上凡て精神を刺戟するやうな事を見聞して、身體に故障ると私計りじやない、折角生れる兒に迄害を及ぼすから。(十三日)

☆生れる子にも同情あれ

もう六月も半分すぎた。床をとつたり上たりするのに息ぐるしいし、動き憎い、一つは冷えぬ樣にと思つ

て餘り澤山着たり、腰に卷いたりしてゐる爲でもあらう。

夜中に目を覺すと、屹度下になつてる方の足が痳痺れて、其痛痒い何とも言へぬ苦しさ、他に姙娠中ありがちの、靜脈瘤だの、下肢の浮腫だの、そんな病は出ないからまア嬉しいけど、座つたり立たり又寢ても同じ位置にぢつとしてゐるのは惡いやうだ。

今日可憐さうな乞食が來たので、シヤツとお米をやつた。

どうぞ産れる兒も憐み深い美しい情あるやうに思つて……。私は今迄にない美しい明るい心を持て、可愛いお腹の中の兒と、顔合す日の來るのを樂しんで待てゐる。(廿三日)

曉の誕生

島崎藤村

東の空のほのぐと
汝が世は白みそめにけり
この曉のさまを見て
さだめを如何に占はむ

ことにさやけ紅の
光を放つ明星や
やがて處女となるまでの
汝が生ひ先のしるべせよ

朝風舞を舞ふごとく
はるかに雲の袖を吹き
鷄は寢覺に驚きて
先づ黎明を呼びにけり

はじめて朝の床の上に
汝が初聲を聞くときは
霞を破るあけぼのゝ
薔の花にまがふかな

ぬるき汝に湯あみして
朝日に匂ふ酋ぞめ
まだ罪もなき姿こそ
ながはゝ夢の風情なれ

いかにいかなる世なりとは
思ふ心もなからまし
その美はしき肌もて
なにをか見んと願ふらむ

まだ生れ來し世の中に
願ふもとめもなからまし
空にやさしき手をのべて
なにをか早も戀ふらむ

行末花と生ひ立ちて
いかなる夢を重ぬとも
かゝるゆたけき朝のごと
心の空の靜かなれ

新に寄宿舎に入らんとする友人に注意する書

壽だみ

御入學の御報知、嬉しく嬉しく、拜見致しました。貴女のおよろこび、もう〱、御察しするばかりでも心が躍るばかりで御座います。元のやうに御近所なら早速伺ひますものを、口惜しう御座います。始めて、母樣のお懷子が他人の中にお出で遊ばすこと、御心痛の趣は、御手紙でも歷々と、わかりますが、然し世の中はそんなに難しいものではありませぬ、まして同じ年頃の同じやうな初心な淸らかな美しい少女の群で御座いますもの、御案じになるには及びません。しかし私が一二心付きましたことを申上げて置きませう。御參考になりましたなら、何よりで御座います。

◎何事も誠實にすること

こんな事は誰でも知つて居りますこと、今更申上げなくつてもいゝやうな事で御座いますが、然し人は妙なもので大勢の中に這入りますと、遂々なげやりになりやすいもので御座います。こんなことは、あの人でもして居るから私だつてさしつかへはなからうの、人はなまけて居るのに、一生懸命に塵をかぶるのも馬鹿馬鹿しいなんていふ氣は、得て起りやすいもので御座います。もうこの氣の起りますのは心に弛が出來た時なので御座いますから、いつもいつも誠實の二字を以て御心の内に充して置いて下さいまし。大勢のなかには隨分、變り者も御座いませう、一級の中に一人か二人かきつと、變型者があるもので御座います。はねつかへりやら、むつつり者やら、快活な人、沈んだ人、ずるい人、種々雜多な性格の人がありませう、此等にお交りになりますのに、一樣に、誠實を以て遊ばせ。

よしや馬鹿正直なんつて云ふ綽名をつけられても結構で御座いますから、何事も表裏なく、御自分の精一ぱいに遊ばして下さいまし。誠實に敵する者は、世界に何も御座いません。學科の方の御心配は兎も角、人の爲めといふことを念頭に置いて、交際を圓滿にすることも修行の一だと思召して下さいまし。

◎我が分を守る事

人の天分には、差がありますもの、一定の時間に同じ事を習ひまして同じやうに復習しましても、ある人はそれを理解し應用し記憶します點に於て、高く擢んでて居るのも御座います。又天性、交際術に長けて居りまして誰とでもよく話の合ふ、所謂る人好のする質の人もありませう。同じする事でも人の目にたつ派手なやり口でよくする事のはえる人もあります、又お家がお金持でお召しや何かが立派な方もありませう。こんなのを一も二もなく、眞似しては大變で御座います。いゝことなら眞似るもよう御座いますが、眞似る前に、きつと深くお考へなすつて下さい。自分の天性、自分の境遇、自分の技倆、自分の缺點と長所、つまり自分の個性といふものをお考へなすつて下さい。前に申上げた誠實に、自分の本分さへおつくしになれば、よろしう御座います。人事を盡して天命をまつとやら、その後のことはあきらめるより外はありませぬ。

右に申上げたのは、大體の事で御座いますが、今度少し立ち入つて申し上げませう。

◎舍監に對して

舍監と申しますと、何處の方でも、きちんと、舍監室にお出でになつて、生徒を隨分皮肉な眼を以て御覽になる傾向がありはしないかと思ひます。けれども決して舍監をこわいのいやな方だのと思つてはいけません。なるたけ、舍監には、お近かづきになつて、御自分の缺點も長所も、皆な無邪氣に、さらけ出して承知させてお置なさい。おさし支へのない限りは、お家の事情も十分のみこませてお置き遊ばす方が利益で御座

います。母樣と同じ心持で、十分おすがりなさいまし、縋られてふりきることは出來ないもので御座います。

◎お召し物について

當座のお着換が二三枚、式服が一そろひ、帶が二筋位で澤山で御座います。足袋と肌のものとは澤山おもち遊ばせ。お天氣都合だの、試驗だのでどうかするとさしつかへますから。それからお持ちになつたものは目錄をお作りになつて、細くおつけになつてお置きなさい、紛失の恐がありますからね。又足袋にも襦袢にもシーツにも、御自分のお名前をかいてお置なさい。

貴女なんていつも突飛な風は遊ばさないから、宜しう御座いますが、大勢の中では、淸楚と端正といふことを重に遊ばして、お召しもあまり派手に、けば〱しくならないやうに、お化粧もあつさりと遊ばしてお置なさい。口善惡ない人達に、かげ口一つ餘計にきかれるだけでも損で御座いますから。

◎小使帳に日記

これは外の復習の時間をさいても、少々面倒でもきちんと、おつけなさい。大勢の中ですから御自分の出所進退は明らかになさいませぬといけません。且つ又思ひ出の種となり、後日どんなに樂だかしれませんからね。殊に小使帳の方で御座いますと、自然と帳面の手前恥しくなりまして、冗費をはぶくやうになりますから、精細に手落ちなく誰にみられても恥しくないやうにおつけ遊ばせ。

◎お內へのおたより

母樣には一週に一遍はお葉書でもよう御座いますからお上げなさいまし。御用があつても、なくつても日曜の朝は、劈頭に故鄕へ文を出すことにきめてお置きなさいまし。始めのうちこそ、故鄕戀し母戀しのホームシックで、夜もおち〱眠られないものが、暫くたつと忙しいのなんのと、とかく怠り勝になり易う御座

いますから、これはよくお氣をおつけなさいまし。

たらちねは旅なる我を思ふらむまつらんかげのおもかげに見ゆ。親思ふにまさる子を思ふの情、母樣の御上は忘れ遊ばすな。それからも一つは、お體のお惡い時は、遠慮なさらずに、ずん〴〵舍監なり、又その係りになり、申し出でゝ、早くお手當て遊ばせ。最後にも一つ、變なことを申す樣ですけれども、半年位たつ中には、きつと氣の合つたお友達が、お一人か二人はお出來になりませう、そんな方と表面は餘りきはだつて中よく遊ばしますな。嫉みといふ事は誰でも免れないことで御座いますから、餘りなかがよさゝうだと、よく水をさすやうな、おせつかいが出まして煩さう御座います、何事もきは立たないのが、いゝので御座います。

何にしろ、無邪氣に誠實に隔てなく人に交はるのが一番で御座います。よく思はれようの、えらく見られようの、美しく見られようのといふお氣は、すつかりなくした方が宜しう御座います。

それは、寄宿舍などには、隨分、煩はしい、細い規則がありますけれども、それを面倒の何のと思召してはいけませぬ、世の中は猶更、面倒なもので御座いますからね。辛いのいやだのといふのは未だ人間がねれてゐない證據なので御座います、何事も御修行の一つだと思召して、快活に勇ましくなさいまし。いろ〳〵申上げたう御座いますけれども、今度はこれにて擱筆致します、御機嫌よろしく御自愛なさいませ。

寄宿舍にて

此處は私の心の家です、心の糧は此處に積まれ、心の粧ひは此處に美しく、世と離れて、若き人々と新しい生命の夢を見てゐます。

櫻こぼるゝ春の夜、棟を隔てゝ聞え來るピアノの音には、海の彼方の陸遠く來りし人を想ひ、青葉に暮れゆく黃昏に、町を隔てゝ尺八の音を聞きては、父母在す故山を慕ふ、悲みも樂しく、樂しみも悲しき若い生活は此處にあるのです。（白砂）

時間の屑を利用した事

みきよ子

△口で言ふやうに出來にくい

箸より重い物持ち給はぬ姫樣ならばいざ知らず、私の樣に一日中にお三どんや、三助に迄早變りせねばならぬ身體には、時間が最も惜くて又無精が最もおそろしい時喰ふ蟲だと思つて居ります。此麼事今更事新しく申上なくとも判り切つた理屈ですが、私も學校で耳がたこに成る迄聞いて〱百も二百も承知ですのに、さて實地自分が當つて見ると仲々時間を經濟的に、諸事を手まめにすると云ふ事は、口で言ふ樣に出來にくい折が度々有りまして、今更事新しく覺えるのです。

昔から時は金なりつて申ますけれど、金は世間のまはり物、足がはえて右から左へ走り去つても自己の心得一つで、再び戻つて參りませうが、時はそれこそたとひ一秒間でも、永久にめぐつて來ません。すれば時は金よりも猶無上の、貴重な寶です。その貴い無上の寶を巧者に使用すると否とに依つて、餘程の相違があるだらうと思ひます。若し一生を通じて比較たならば積り積つて随分な損益だらうと思ひます。

殊に注意して利用すべきは、鳥渡の時間です。誰方にしても、ホンの鳥渡の間、まあ僅の間と思つて、つひうか〱と無駄に過して仕舞ますが、塵も積ればで積つた結果は案外大きいものだと、私は倩々感じて居ます。又遠くに結果が見えなくとも、すぐに無精をした報があるものです。

△醫師の玄關で折紙

それで私は何時も用事片付て、冬ならば火鉢で手を暖めます時、夏ならば團扇で風入れる其五分七分でも鳥渡雜誌なり書籍なりを片手に持つて讀ます。私は斯して種々の事項を知りましたおかげで、その効能が時時現れて、大きに嬉しく思ふ事があります。此麼忙しい讀方をしても案外よく呑込で居ます。又私は臥せります前十分間を、平易な佛語をホンの僅かづゝ敎へて貰つて書いて寢ます。よく覺えたら又新しくと云ふ樣に一昨年の春頃から始めましたが、此頃では簡單な事なら少しは判る樣に成りました。其外お心易い方とならば編物などをしながらお話致します。しほり位譯なく出來て手紙に封込で差上ますと、鳥渡愛想になりま

す。先年私は病院へ診察を受けに參つて、手持無沙汰に待つ間を、粉藥つゝんだ不用紙で鶴だの蟬だのを折つて、傍の子供達に上げましたが、退屈しのぎに成りました。何しましても鳥渡の時間を巧く使用するには無精が一番禁物です。私は平生から、時を惜しめ骨を惜しむなと口癖にして居ります。僅かの勞力で出來る事をしないで居ると、それに費す時間だけ省けて、餘裕が生じた樣に感じられますが、後日必ずそれをせねばならん樣に成つて參ります。一概にも申されますまいが、私は是迄にしば〳〵經驗して後悔しました。

△朝の一時間は晝の三時間

早い話が朝手早く身じまひして置けば、急用が出來て外出する時でも、突然他人に訪問されても、散歩に誘はれても、バタ〳〵とお湯とつて手先洗ふ世話も入りません。たゞ着物を更へて用も足せれば、應接も出來ます。私なんか若い時にはよく母から

「靜や、早くおしよ。春子さんが先刻から待つて被居るぢやないか、女はいつも手先を奇麗にして置くのが身だしなみの一つ、朝チヤンとして置けば、すぐ着物更へてお供が出來るのに……」と申聞されました。無精をした日に限つて、突然散歩になんか誘はれて、あわてた事もあります。又本箱整理しながら一寸本開けてはつひ讀みかけると、

「靜や、早く片付てお座敷おはきよ。まあ靜は又チヨイ讀して居るよ、讀むのは好けど、掃除すましてからにおし、朝ぐづ付てると晝迄たすき掛で居なけりやなりませんよ、朝の一時間は日中の三時間にも當るんだから、朝晩はさつさとなさい。」

と母は申て呉れましたが、全く其通りで、私の家では朝は十時晩は七時迄には、チヤンと何も彼も片付て仕舞ますが、少しぐづ〳〵して居ますと、恐しい程番狂して、朝など手を置いて時計を見て、オヤ最う午砲に三十分しかない、といふ樣になります。

△終日襷掛の下女

或る私の知つてる家へ伺ひますのに、いつ伺つても其家のお女中はたすきがけで、流しもとに何かしらゴソ〳〵して居ます。そしてふき掃除一つするのを見て居てもゆつくりと、ぐつ〳〵して居ます。その癖すみずみに行渡つて居なくて、時間が多く費えます。丁寧にするのぢやなくて、骨惜みするのです。其家の奥樣

のお心掛も見える樣に思はれます。私が敎へて頂戴た先生など、御兩親のお世話からお子供の事迄おひとりで遊ずのに、いつお目に懸つても下襦袢のえりの後に少しの汚れも見た事がありません。他の事も萬事その通りで、些細の事ですが鳥渡臆劫がる者には出來にくい事です。

▲洗濯の後で下駄を洗ふ

一體骨惜しみすると云ふのは卽ち無精を極め込む事で、無精な物事を臆劫がる人は、同一の仕事をしても、ぐづ〳〵と起居振舞からしてしまりがありません。ですから三十分で終る仕事も、四十分もかゝると云ふ譯で、早そこに十分間を下手に使用事に成るのです。三十分で仕終へた人はその十分の餘裕を又他の事に費ず、そして手早くしては僅かの餘裕でも生ますと、斯うなりますから時を惜しむ人は着々仕事が片付いて整ひますから、氣持が好です。時間が餘つたからつてボンヤリと手を遊して居ては甲斐がありません。鳥渡の間でも手まめに始終心がけて居ないと、無形の損があります。りぼんでも結だまゝで仕舞ませず、湯の沸いてる時に一寸し



わのばして置きますと、りぼんのためもよくて新聞紙に巻き込んで、流行らなくなつたら箸袋に組んだり、塵拂に致します。雜巾でも別に縫ひます時もありますが、裁縫した時一寸か二寸の端絲が出來ますと布へ縫ひ附けて置きますと、僅かの時間で出來ます。半巾の一二枚は入湯の時にもんで置き、ひろげて置けば苦もなく翌朝迄にかわきます。洗濯の後では汚れた他所行きの下駄を洗つて置きますと、いつでも清々して居ます。朝起きたら常着に更へる迄蒲團を風にあてゝ置きますと心地がよくて布の爲も宜しい。そして、夜具入を掃き出して、仕舞込めば雜作も手間もかゝりません。

何しましても、時間を浪費せぬ樣、骨惜みなく働けば自然に物事がキチンと整頓して、いつも心よく暮せます。それが習慣と成れば自ら趣味も湧いて來る、イソ〱と働く事が出來るだらうと思ひます。

要するに時間と云ふものは、屑にする習慣をつけると、幾許でも屑になつて消えるし、少しでも大切にして能く使ふと、屑が却つて後日に大いなる役に立ちます。世の中は忙くなるにつれ、女子でも時間を大切にすると云ふ觀念を、常住座臥の間にも忘れてはならぬと思ひます。

子供本位の教育家の家庭

美智子

◎有名なるお伽噺の先生

私は教育家にしてお伽噺名士の三大人物と云はれて居る一人の○○先生のお宅にお世話になつて居りました。先生は女學校と幼稚園とを設立なさいまして校長たり園長たりなか〱多忙で入らつしやいますが、それで居て著述もなさいますし、又諸所で講演などもなさいます故、雜事が隨分澤山ありまして、書生の一人や二人位置いても、いゝ位ですが、それを奧樣御一人でなさいます。奧樣は師範學校出身でなか〱の敏腕家です、家事一切をきりまはして、先生には少しも内顧の憂なからしめ、且學校、幼稚園の教諭として熱心に働かれます、實に感心の外ありません。かゝる夫人ありてこそ名望ある教育家として、先生が世にたつ事が出來ると思ひました。

◎どんな物でも女中に分配す

家族は御夫婦に子供四人、女中二人と私と都合九人

の家族でしたが一家むつまじく、いつも春の樣で、どんな少しの物でも分配すると云ふ風です。いつでしたか五歳になるお孃さんが他からお菓子を紙包みにして戴いて來ました、そしてみんなに分け與へて自分のがなくなりましたので、泣き出した事があります。その樣に子供までよい心掛です、矢張奧樣が、すべて公平になさいますからです。なんでも一人にやつて一人にやらぬと云ふ事は決してなさいません。

◎怒らぬ主義

先生は怒らぬと云ふ主義で御座いまして、大抵の事は胸をおさへてお怒りになりません。惡い事があれば親切にさとし敎へて下さいます。若し怒り度い事があれば「子供と遊べ」と仰います。ほんとに怒り度い時などは無邪氣な子供と遊ぶとなほります。

然し先生は一年に二度位ひどくお怒りになり、其の時は人知れず深夜に奧樣を書齋に呼んで、ひどくお叱りになるさうです。ですから私共には先生がお怒りになつた事はない樣に思はれます。

◎五分の紙片もちらかさぬ

先生も奧樣もきちやうめんに、すべてを整頓したのがすきです。文房具衣類臺所器書齋に至るまですべて整頓して居ります、又私が最も感心いたしました事は來た手紙の封筒を切つた紙切雜誌の帶封など五分程の紙切れでも、ちらかしませんで、ちやんとくづかごにおすてになります。又座ぶとんなどでも一分もまがつて敷いてあるのは嫌ひです。又いつでしたか朝飯すぎて、すぐ玄關の所で私をお呼びになりますから參りましたら、戸を指して「こゝをちやんと開けて下さい」とお仰います。今朝開けたのにと、私は不思議に思つてよく見ますと、玄關の戸が五分ばかり開け切りません、アッと思つて初めて氣がつきました。先生は「たとへ僅少のことでもきちんとしないのはいけません」と仰いました、すべてが此の通りの性格を備へて居らつしやる方です。

◎居候置いてあはず居てあはず

私はかゝる家庭に女中とも書生とも家庭敎師ともつかず、まづ食客卽ち居候ですね、私は少し考ふる所がありまして、兩親は不贊成でしたが、兒童硏究を志して他家に食客の身となつたのです。それも長くではあり

ません、半年ばかりですが、實に其の得たる敎訓は數多く、私の我儘なる性質を一轉させて頂きました。古人の諺に、居候置いてあはず居てあはずとか申しますが、實際それを味つたものでなければ分りません。第一外出などでも自由に出るわけには參りませんし、又食事の時など、隨分氣兼があるものですが私のお世話になつた家は　御夫婦とも同情に富んだよい方でしたから、私を食客として取扱つては下さいませんで、お子樣方には「姉さま」と呼ばせ、何事も家族同樣にして下さいましたから、實に幸福でした。それが身にしみて居りますから、只今宅にも食客が居りますが、心から親切にしてやる事が出來ます、これは皆先生方の賜物と感謝して居るのです。

◎汝等幼兒を見よ

私は兒童硏究が目的でしたから主に幼稚園の事をさせて頂きました。無邪氣な園兒と一緒に遊んで居りますと、全く何もかも世間の事を忘れて、自分の心が幼兒の如くなります。キリストが「なんぢらをさなごを見よ」と仰いましたのも、實に斯の如き事だと思ひます。

其の中にも實に責任の重い事を感じ、園兒によつて非常に敎訓を得ました。左に園長先生の園兒の躾方を少し記しませう。

◎子供の叱り方

子供には小言は少しも仰いません、小言は大人の一つの方便に過ぎない、小言は子供に云つても一向効能がない。我が儘を云つたり惡い事をした時には座らせて云つて聞かせるか、又はひどいお處刑をするのがよい、そして「御めんなさい」と自分からあやまらないうちは、決しておゆるしになりません。

◎泣いた時

「泣く子は弱い、強い子は泣かない」といふ格言をいつも云はせますが、泣くのにもいろ〳〵あります。病氣の時などは、特別ですが、大抵は我儘で泣くのですから「〇〇さんは強いんだけれど、泣くと強いのが、涙と一緒に出ていつてしまふから、泣くのではありません」とかう云ふ風に申しますとすぐだまります。

又道を歩いて居て、轉んで泣いた時「早く起きなさい、オヽつよい、痛くても泣かないね、つよい〳〵」

と申しますと、少し位痛い所があつても、がまんします、實に奇妙な位です。子供はつよいと云はれるのが一番嬉しいと見えます。

◎喧嘩をした時

幼兒は少しの事でも訴へに來ます、其の時は一々裁判をつけなければなりません。喧嘩をした時には、兩方にあやまらせます、例へば甲が「先生誰さんが私を打ちました」と告げに來た時、「如何して叩いたか」と乙を呼んで聞きます、乙は「誰さんがいぢわるしましたから」と答へます、そこで「叩いた人も惡い、いぢわるした人も惡い」兩方「御めんなさい」と手と手を握手させます、するともうすぐ仲よく遊びます。

◎約束を守る

又園長先生はどんな事でも約束を破つた事はありません。何日に玩具を買ひませうとか、何日は何々をしますと約束すると、必ず其の通りになさいます。又お子さん方にも其の通りです、先生がお出かけの際、お土産ありやなしやと聞くと「さうね、ありにしませう」と仰つてお出かけになれば、どんなに都合が惡くも買つていらつしやいます、若し忘れゝば戻つても買つてお歸りになります。

◎自分の事は自分でする

女中がたくさん居る家の子供は、玩具は出しつぱなし、すぐ傍にあるものでも、人に取つてもらふと云ふ習慣がありますが、當園兒に限つては、そんな事はさせません。「自分の事は自分でかたづける」と云ふ主義で、小さい時から躾ます。ですから幼稚園に來ても、諸方に撒き散らしてある玩具を、それ〴〵ちやんと片付けます。

私は斯くして先生や、奥樣や、兒童により非常に教訓を得ました。我が數萬の奥樣方や、姉樣方に幾分なりと御參考になれば、幸と存じまして、ノートの或る部分を拔き記きいたしました。

裁縫には秘傳がいる

ふ じ き 野

▲學校の裁縫と實地の應用

裁縫と一口に云へば、女と生れて知らない方はおそ

らく御座いますまいけれど、只法式に許りよつて、裁ち縫ふのが裁縫ではなく、多少自分で經驗し、着る人人のからだに合ふ樣に仕立てるのが肝心だと思ひます。私も專門の學校は出ましたけれど、今では殆ど學校式では御座いません、細工は流々仕上げを御覧じろと申ますもの、たとひ法式にはづれて居たからとて、着てきちんと合つて、恰好がよかつたら、それにこした事なかららうと存じますのよ。學校で習つた通りを、後生大事に守つて仕立てたら、たゝんでおいた恰好はよいでしやうけれど、人間だつて、皆一樣の體格ぢあありませんもの、肥えてる人も、瘦せてる人も、首の長い人も、短かい人もあります。それに何でもかまはず、定まつた法式通りの着物を着せたら、それあ恰好も何もありあしません。矢張出來るだけ、色々に工夫して、見にくい形も見宜い樣におぎなつてゆくのが、裁縫する人の技倆だと思ひます。何分學校裁縫は、僅か二三年間に、何十通りと縫ふのですから、只法式を知る位に過ぎません。何うしても數懸けて、色々經驗もし、工夫もし、多くの方法も心得て見なければ、眞の裁縫の價値は御座いますまい。私は裁縫學校の卒業生ですからなんて、學校出た許りで、ろく〳〵數もかけもしないのに、御天狗に許りなり、其實隨分妙な事して見たり、わからなくて內々困りながら、負け惜しみに人にも聞かず、宜い加減なやつゝけ仕事をして終ふなんて、眞實につまらぬ事です。其實私も隨分負けず嫌ひの方ですから、以前は人になんか一寸だつて聞くぢあなし、わからなければ、かげでノートと首引して、何うやらかうやらこぎつけて來たものですけれど、考がへて見れば、馬鹿〳〵しい、何の聞くは一時の恥、知らぬは末代の恥ですもの。……近頃は少しでも恰好の宜いやうに仕立てやう〳〵と心懸けてますから、わからぬことや、具合のわるい處は、どん〳〵人に聞いてあらゆる方法を覺える事につとめてますの。裁縫學校卒業ながら、此位の事わからぬのか位蔭口きかれたつて恐れませんワ、終りの勝利はたしかに握つて見せますもの……ホヽヽ大變な意氣込みでせう。

△むづかしいのは羽織の襟

で私が今迄に一番苦心したのは、羽織の衿です。おそらく是位十人十色のものは御座いますまい、私の敎つたのは初め衿を衿幅の二倍に五分加へて折り、其幅から五分五厘引いて殘りを折り、輪の方を縫ひ付ける

ので、衿肩からチ付までやゝゆるみをつけ、それから下は平にして、前下り三四寸、上の處から縫代を三分程縫込み、衿先を縫つてから衿しんを入れ絎けるといふ順序でしたけれど、何うも衿の返りが感心しません。それで色々やつて見ました揚句、今では右の樣に折つた衿を、チ付から前下りにかけてなぞへに五分程縫込みます、五分とは少々多過ぎる樣ですけれど、かう致せばたとひ縞物でも、まがりが目立たず、宜い樣です。そして衿先も心持裏になる方をつらして縫ひ、絎けるにも衿先から三寸位少しくつらし、其たるみを上の方へだまし〳〵絎け込んで縫ふのです。この付方に定めて居りますが、何うやら具合が宜い樣です。まだ〳〵此他に變つた附け方と云へば、折つた輪の方を絎ける方に持つていつたり、綿を入れぬ前に裏一枚へ衿を縫附けて終つたり、全部衿を作り上げてから附けるなんて、色々ありますけれど、何うも私には具合宜くゆきません。

　それから袷羽織や、單衣羽織の衿は、總て鐵砲附けと學校等では教へますけれど、これは其品々によつて考へなければならなからうと存じますの……？それあ鐵砲附に致せば、世話はありませんし、旨くゆけばきちんとしてよござんすけれど、何しろ彼樣狹い中に前身をたゝみ込んで縫ふのですから、萬一やり損じて幾度も〳〵なほし、あたら品物を皺苦茶にして了ふよりは、むしろ初めから普通附に致す方が安全だと思ひますの。尤も銘仙や、大島見たいに、餘り皺にもならず、たとひ皺になつたとて、どし〳〵熨斗でも何でも懸けられる物は、かまひませんけれど……それでも私、袷羽織は皆普通附けに致して居りますの。何んに致せ羽織は衿一つで出來不出來がわかるものであつて其衿と云ふのが、なか〳〵思ふやうにゆかない物ですが、衿の返りは衿肩廻しの一寸した加減で大變異ふやうです。では何うと被仰られたとて、かうと申上るわけには參りませんけれど、要するに無理なく附ければ宜いやうです。茲が俗に云ふ骨とでも申すので御座いませう。衿肩廻しも首のつまつた方のでしたら衿肩の縫込みを六分位にし、無理なくなぞへに縫廻して附けますと、衿が被らなくて宜いやうです。是に附いて可笑しい話がございますの……或る方が羽織の衿が被つて、汚れて困るつてお被仰るので、衿附の時脊を六分許り縫ひ込んで御覽なさいませと申たら、其後御仕立になつたお羽織は、脊のとこ許り六分縫込んで、あ

とを急にあさくなすつた物ですから、眞中が三角形にピヨコンとして居て、其可笑しさつたらありませんでした。いくら六分縫込めと只申たからつて、少しは自分で機轉をきかして、調子取つて縫はなければ、此樣事になり、なほなほ變な物を仕立てゝ終ひます。大體此六分縫込むと申ますのは女物に限りますのに、男羽織をこれに仕立てゝ、男の拔えもんなんかこしらへたり、普通に裁つてある紋附物を、此樣に縫込んで紋を上の方にチヨコンとさして終つたりなんかなさつては折角の苦心もホヽヽ傘屋の職人見たいに、骨折つてつまらぬ事になつて終ひます。

△羽織の脇明け

も一つ羽織で加減しなければならないのは、脇明です。玆は普通二寸五分、襠上幅五分と定められてあるのですけれど、帶をちやんと締る方や、肩揚のある方は、これで宜いとして、肩揚なしで袴をおはきになる方が、此寸法で御仕立てになつた物を召したら、必と後の脇になる方に、だぶだぶが出來ます。外を歩るきますと、いくらもこゝのだぶだぶしたのを見受けますので、餘計な御世話ですけれど、ほんとに一寸の加減を御教へして上げたいと思ひますの。是は明を二寸位につめ、襠上も三分位につめますと、決して此樣だぶつきは出來ません。先づ羽織で經驗したのは此位です。

△着物に就いて

着物も矢張り女物は衿肩廻しを五分位縫ひ込んだ方が恰好が好い樣です。立褄もせいの高い方でしたら、勢高くなるわけですが、せいのひくい方でも、先二尺から二尺一寸位にして腰骨の上に紐を締めた方が締りも宜く、すらりと見えて、幾分かひくいせいをおぎなふ樣です。而し丈の短い着物に、餘り褄下許り高くしたら、衿を附けるせきがなくなつて、衽先のひろい變な物が出來て終ひますから、これは臨機應變です。衽下りも衿をつめて着る方でしたら、女並より五分つめて、五寸五分位にした方が、胸の工合が宜い樣に思ひます。

△長襦袢の仕立方

それから長襦袢ですけれど、これも一寸考がへると下へ着る物ですから、先づ着丈が三尺四寸の方とすれば、矢張同樣か、むしろ少し位つめた方が宜くはない

か等思はれるのですが、是も一つの經驗で、同寸等に仕立ておきますと、歩いて居るうち、だん〳〵たくし上つて、どうも歩きにくい樣です。それで私は着丈よりも五分長く致しておきますが、かうしておくと、裾さばきも宜でございますし、着物の裾とちやんと揃つてますから、裾が切れないだけでも經濟ですワ……さうかと云つて、御召の下から、ぞろ〳〵出して歩いてるのも、餘り感心した物でも御座いませんわネ。何んに致せ、裁縫には仕立ての上手下手は申迄もなく、肝要なのですけれど、恰好と云ふ事も大に是に伴なはなければなりませんでせう。要するに裁縫に伴ふ機轉が必要なのです。たとへば瘦せた人の着物なら心持ひろめに仕立てるとか、肥えた人のならやゝ幅せまに仕立てると云つた樣なのです。ホヽ、是では一寸反對の樣ですけれど、こゝが經驗して見ればわかるのです、おためしにやつて御覽遊ばせ……而し餘り極端に過ぎて、前者は狼が衣を着た樣になり、後者は前がはだけて合はないなんて、こんな仕立て方をなさつたら、それあ問題外です。

まあ自分が出來もしないに、とんだ口はゞつたい事申上げましてネ、けれど是で裁縫が完全すると申上るのでもなければ、皆樣にしいて御勸め致すわけでもありません、私自身だとて、今後まだ〳〵どの樣に變化して參るかわからないので御座いますもの……以上は只私が今迄の經驗を、いさゝか御參考にもやと思ひ、申述べたに過ぎないので御座います。

家庭の秀才となりたい

春野胡蝶

△人任せは思ふやうにゆかぬ

學校に居た頃はお豆腐の樣だの、羽二重の樣だのつて冷やかされた私の手も、此頃は眞綿が引つかゝつて困る樣になりました。つく〴〵自分の手をながめながら、あんまりひどくなつたとこぼしてますのよ。それだけ少しは經驗した事もありますから、御參考までにお話致して見ませう。それアね女中も居るんですからしなくともと思ふ事も有ますが、人まかせはどうも思ふ樣に行かないものでして、臺所の隅など三日も見廻らずに居て御覽なさい、塵も積れば山となるぢやアありませんか、とてもかまはずに居られないで遂雜巾も

手にします、井戸の太い綱もつかみます、炭もきれば糠みそもかき廻さなければなりません。家の事はむつかしいものではありません、たゞ手まめにしなければならない、なか〳〵めんどくさいものよ。お指にリングの四つもはめた奧樣、御宅樣ではお女中お使ひ遊ばすのにそんな事まで遊ばさずとも、とお仰るそれがいけません。だからつまらぬ費用もかゝらうと云ふものあへてしみつたれを云ふわけではありませんけどね、で下女を使ふのもなか〳〵むつかしいものでして、叱つてうごくもの、おだてゝよいもの、細々と小言を云へばやかましいと云はれ、云はなければわがまゝになる、實に使ふ身も樂なものではありません、寛にして嚴でせうね。あまりへだてもつけず、なれさせもせずと云ふ工合に、人を見て法をとけと申す事もあります皆樣も御自身で御使になる樣になると、成程と思召すでせう。

△時勢には後れたくない

學校に居つた時、耳にたこが出來る程聞かされた良妻賢母は、立派な着物きて、金やら寶石やらで飾りたつて交際社會の花となるのか、それではありませんでせう。私の敬服してる校長の君がお仰つたお言葉に、學校の秀才かならず社會の秀才とは限らない、皆樣は社會の秀才家庭の秀才になつて下さい。私は成る程と感心して伺つて居りました。私はとても學校の秀才にはなれないから家庭を作つた上の秀才になりたいと心がけて居ります、でどうしたら所謂スヰートホームが作れるかとそれのみ考へて居ります。隨分いろ〳〵の會を進められますが大ていはおことわり致して居りますさうかと申して決して引込み主義や、もぐらもち主義でもありません、然し會などに出ますと時によれば遲くなつて樂しい晩餐の仕度がおそくなつて主人をおてらせる事もあり、又その爲にむだの時間を捨てなければならぬ事もあります。まだ家庭なれない自分にはなかなか、それだけの時間の猶豫がありません。いづれ隱居になつて、家庭の用がなくなつたら、其時こそ嫌いなりする時間を社會の爲にはたらきませう、つて笑つて居りますのよ。でもね時世にはおくれたくないよ、新聞雜誌は經費の許す限り、澤山取つて、少しでも暇があれば讀書して修養だけは怠らぬつもりです。だから教育會などにお出になる方より以上知つてる事もあつてい、あなた家にばかり入らしつて、よくいろん

な事御存じねつて、私手品師かも知れませんよホヽヽ。

△こま〴〵した物の始末

私は又ぼろつゞりが大好き、エヽ餘程貧乏性なのね。やくにたゝぬ切れをあつめて、いろんなもの工風じて作るのが樂しみでしてね、羽織が下着になつたり帶が長襦袢の胴になつたり、いろ〳〵に化けますのよ、うまく工風すると、おもしろく出來る事があります、わざわざ考へた樣に。反物の織出の友切はかならず取つて置くものです、かぎざき燒こげ作らぬとも限りませんその時すぐ役に立ちませう、又古くなつた時のつぎ切になります。袖口と裾はかならず二重にしておく事です、私の樣に働くものはかぎ切れますからね、切れて綿や赤い切の見える程不精〳〵した事はありませんもの。二重にしておけば少し位切れても、目立ちません。

友切はいくら小さくともかならずとつておくものです。絹は絹、木綿は木綿とちやんと箱なりたとふなりに區別して、何時でもまごつかぬ樣にしておきますと便利です。それから襟垢は實によく付き易いものでことに二本髪はなほさうですが、又これ位むさいものはありません、これは少しの内に一ヶ月に二度位、古綿に揮發油をしませてこするとおちます、それを遠火にあぶつて香水を少しふりかけておきます。さうしないとにほひが殘つて居りますから、白襟なども一寸としか着ないからよからうなど、不性しておかうものなら次に出すと、きつとあとが付いて居ります。それをぬいだときすぐ揮發油でこすつておくと、何時でも新らしいものゝ樣です。洋服の襟も大ていはおちます、然し何んでも手まめにしないといけません。又羽二重やリンズのたちくづでネクタイが出來ます、應用と廢物利用です。小包やなにか包んで來た紐類は決してはさみなどで切らず、指でといて一定の袋にしまつておくと急に紐がほしい時、その袋さへ開けばすぐ間に合ふもんです。メリンスの古いのはさいてはたきを作るとよいのが出來ます。私の母は絹のぬき絲の長いのは揃ておいて、つぎものにつかひますが短かい捨てる樣なのをつないでおいて、帶を織りました、丈夫で一寸變つて面白いものが出來ました。

臺所では炭のこなですね、ためといて炬燵に入れるとたどんの代用を致しますよ。灰のふるつたのは道の惡い處へ敷きます、田舍では炭の粉や灰を買ふものはありませんから。お料理の折などはとつておくと付木

のかはりになります、お菓子箱の古いのも同樣です。

△四季の手輕料理

それから客などがあつて急にお酒だの御飯だの出すと云ふ時は實に困りますから、常に何にかしら用意はしておく事です。仕出しやとて急の間に合ひません、又むつかしいものも出來ません、極々お手輕なもの、獻立を少し書いて見ませう。

春、木芽田樂、三ツ葉或は嫁菜の浸しもの、わらびのからし和へ、筍の木芽和へ。

夏、胡瓜もみ、奴豆腐、柳川鍋、茄子の鴫燒。

秋、茸類のすまし汁、鰯の鹽燒、初いもの甘煮。

冬、鮭の子とおろしの酢の物、鹽引鮭のあんかけ、ほうれん草の浸し物、小松菜のごま和へ、湯豆腐。

西洋料理の手輕なもの

食パンの玉子燒。

食パンを三分位の厚さに切り狐色に燒き、玉子をほぐして玉子燒の樣に味を付けたものに、前のパンを浸しフライパンにバタを引きたるものに入れて燒く。

手輕なシチウー

馬鈴薯、人參、玉葱、肉（牛肉、豚肉、鳥肉、なんでもよし）各五分角に切りフライパンにラードをとかし、前の切りたるものを入れていり付け、鹽胡椒、砂糖を入れて味を付け、火が通つたら湯を肉のかぶる程入れる（ソップなればなほよし）よく煎つめ汁のなくなりし時皿にもる。

魚のホワイトソースかけ

魚（なんでもよし）大きく切り鹽をふりかけて一時間ばかりおきて後蒸す、別にフライパンにラードをとかし、牛乳一合に就き大匙一杯のメリケン粉、小匙三分の一の鹽と小匙半分の砂糖を入れてよくかきまはして入れドロ〳〵になりたる時、蒸した魚にかけて出す

右は本當のお手輕なものばかり。

家庭の運動法とし又一つの娛樂として、花と野菜を少し作つて居ります、家内のものばかりでするのですから、滿足な事は出來ませんが、春はすみれから秋は菊までかはる〴〵に咲く樂しさ。母は佛樣のお花が絕えないと喜こんで居ります。又床に活花の絕えた折、草花のなげざしも趣味のあるものです。夕食終へて後明日さく朝顏を數へるのも、胡瓜や茄子の見廻りするのも、花の蟲とりするのも、各自分のものを鼻高々と自慢しあふなど、家庭平和の基ではありますまいか、內

に樂みがあれば、自然外に出て樂みをもとめるものもなく、いよ〳〵一家の平和は長へに續くでせう。

商家の店と奥

春子

朝がた眼をさまして、二度眠りをしたので、今朝はつひ〳〵朝寢をしてしまつた。母に起されて、「御年よりが起きて雨戸をくつて居るのに、眼がさめないやうぢやしかたがない」と。早朝からのおこゞとはあまり心地のよいものぢやないが、全くもう廿歳になるのももずこしであるに、と思へばはづかしい。六時二十分。いつもよりは二十分おそいのだ。大急ぎで顔をあらふ。

裏の大釜に、湯をわかさうと思つて、たきつけたけれども、なか〳〵もえつかない、あせればあせる程、泣きつらに蜂、おそく起きた時などに限つて此通りだもの。「火が上手にたけない樣な女に限つて、經濟が下手だ」と口ぐせのやうな祖母の言葉を思ふと、なさけなくなる。やう〳〵湯がわいた、つめたくなければよい、といふのを丁度に、忘れないで水をさして置く。

私は茶の間の掃除を受もつけて居る。電氣が消えない中からの掃除で、其上弟妹らがどし〳〵あるくのだからたまらない、九時過ぎのお茶の時には、もうしろく塵がかゝつて居る。祖母に二度ふきなほしされるのがつらいから出來るだけ美しく掃除する。

「お湯がにえ立つて居るのに……」と、高々と祖母の聲がひゞいてくる、けれども、きゝなれた耳にはさう強くもひゞかない。過ぎたるはなほ及ばざるが如し、少しのことにあまりおこゞとが強いと、人はいふ事をきかなくなる。

祖母といふ名はなつかしいといふよりも、私には、きびしい人、やかましい人、といふ觀念が先に立つてくる、もつたいないけれども。子のない祖母樣は、なにかに精が薄くて、おうらみいたすこともしば〳〵である。七十路越しても、機織ることを忘れないで、いつも、春の日にふさはしいやうな、ゆるやかな、をさの音がひゞいて居る。私は働かれる迄働くつもりだといつも此言を實行して、朝から夕迄、こつ〳〵働いて居るには大ていの人はおどろいてしまふ。ずゐ分と無理なことも申されるが、たいていは、習慣上から割り出しての言葉ですから、理屈で打破することは出來ない。私はいつも研究的に其言をうかゞつて居る。九

時から裁縫、午後から親類の××樣の御いで。よく我子をおほめになる、「青田と我子をほめるな」秋が來なければ、果して實るか、實らぬかわからぬものを、あらしもあるぢやありませんか、大雨もあるぢやありませんか、默つてきいて居ると、耳のむづかゆいこと、學校で習つた修身の話をして家人にきかせる位、つまりは自分の敎育の程度を表示して居るんだもの、馬鹿々々しい。

それでも全く學校はおできのやうだが、今年七つになる其家の子供が、自分がお嫁に行く話しをして居るのだからおどろいてしまふ。それをよろこんで話してあるくにいたつてはます〳〵恐れ入る。今度はいよ〳〵、御娘樣が養子をむかへられるとか、又々おじまんがあるだらうとそれを樂しみにして居る。

家に居る番頭がいよ〳〵今年限りさがることになつたので、紋附の羽織を縫ふ。

他人はたのまれないものだ、祖父がゐて、父はとかく身體がすぐれず、弟はわづか四歲で用は出來ず、今一ヶ月を過ぎると、店の方やらなにやら、いそがはしくなるのを見て、ながくひまを願つた、私の方では別にそれをとめる權利はないから、默して見て居るが女はやはり弱い、心が小さい、夜人のゐない折はよく祖母や、母からぐちをきかされる。

「人情なしだ、始めは二十五迄もといつて置きながら次は來年一ッぱい、祖父がなくなつたら今年限り、是非ひまをもらひたいと親がくる。親も親だ、子も子だ……………」と。

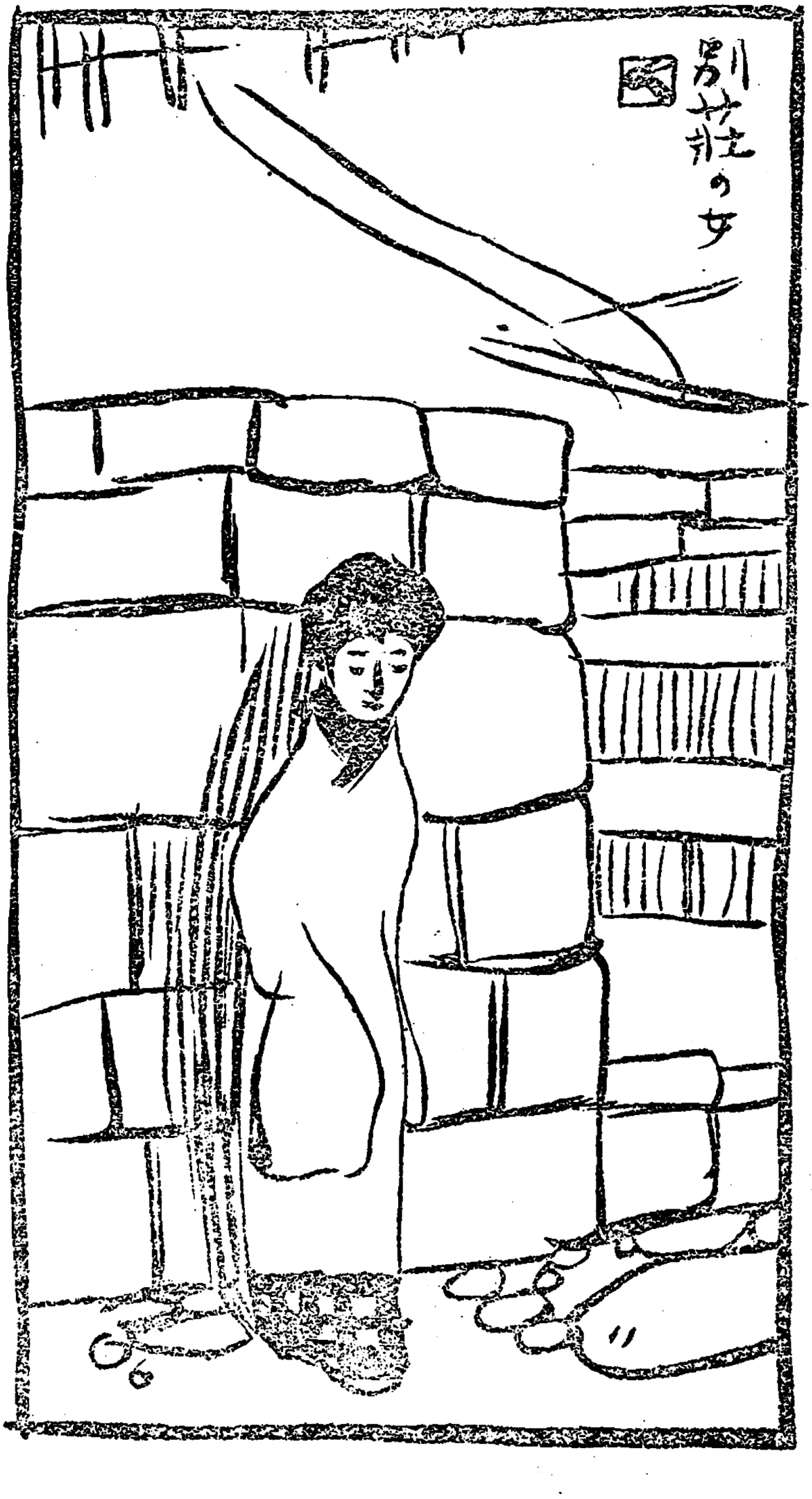
うりのつるには、なすびはならない、親に似ぬ子は鬼だもの、そんなにぐちをいふにも及ばない、行きたいものは行け、なるやうにしかならぬ世の中だ。たかが五尺の人間が、いくらもがいても、運命の手をのがれることは出來ないのだもの、長いものにはまかれろつまり運命はながい〳〵ものだ。

父親が死んでも立つて行く家があるが、母親がなくなつて、家庭の平和にゆく家はなか〳〵ないといふ。私の知つてる家で、ずゐ分と大きな店だが、息子といふてはわづかに十五歲の子供一人、母親の手一つできりまはして、世間から笑はれもせずに居るのに、母親のなくなつた某家などを見ると氣の毒な程である。女、弱いものと價がきまつて居る女も、又ある一方に於ては强いものだとしみ〴〵思はれる。

お店にいつて帳場に座つて居る。

「お味噌を下さい」
「いくら……」「九錢」
かみのほうけた女の子が買物にきて、一錢のつりをもらつて行く。それが大てい途中で買ひぐひをするのにつかふといふのだときいては、あさましい、むろん良家庭の子ではあるまいが。

時にはこんな悲劇が演ぜられることがある。勿論裏長屋あたりの子供であるが五錢の中からですら途中でいくらかをつかつてくる、五錢より下を賣られないとことわられてせんすべなくて遂に店先で大聲あげて泣くことがある。夜の小買はずゐ分と多い、更けて戸をたゝかれることさへ



ある。わづかでも御客様、商ばいも又つらいものかな

此間おみつさんのお家にいつたとき、商人の子は商人でいろんな話しがあつた、つまりはお客様の棚おろしですね、みつさんの家は八百屋だからあきなひがこまかい。地方で何々夫人ともいはれる家で、夕方眼が

まはりさうにいそがしい時に、「只今すぐてがらしを五厘だけ持つてきてくれ」などいふことがあるさうだ。「いくら五厘、一錢、でもお客だつて、一町や二町の所ぢやあるまいし近處にいつてもあるのを早く早くつて、馬鹿〳〵しい」と大に憤慨していらしつた。

これなどは御夫人自ら臺所に出張しての話しぢやあるまいが、めうがが二つ、ねぎ三本、なんどの注文にいたつては、いくら下女がいふのにもせよ、奥樣たる人のねうちがうかゞはれる。全くきいてあきれたもの。

それから甚だしいのは、「昨日いたゞいた大根一本今日はいらないから、何々とかへておくれ」といふた奥樣があるさうだ。いくら經濟が大切だつて、こゝらになると常識がない所のさわぎぢやない、品格に關する樣になる、あまりだ。大根のつかひ途を知らないやうでは。

夕方官宅にいらつしやる奥樣がおてゞと云ひにいらしつた、おそいとおつしやるけれども、誰れも〳〵早くといふのだから、十人も番頭がない以上は順に少しはおくれるのは普通である。夜の御味噌がちつともないにいたつては不用意の程も推しはかられる。でもおわびをしてあげた。此奥樣、いつも「家では通ひでとつてゐるのに――」を連發する、通ひといふのがどれ程得意なのか、こんな奥樣に限つて、ちよいと電話を拜しやくなどいふて、同じやうに他の店を叱つて居る、なんともお話しにならない。

燈臺下暗し、わづか一町もへだたらぬ眼前に出來た××館を、まだ一度も見たことがないといふて大笑ひをされた。手前の見えないのをでんがく燒の性といふ人の前許に燒けたのが見えて、手前の燒けたのが見えないからだと、母にきかせられてをかしくなつて一人で笑つた。

九時過ぎ××樣の御いで、あまり突然だつたので、思はずとんきような聲をあげてしまつた。

先日結婚なすつた許り、初々しい大まるまげに緋鹿の子の手柄やさしく、銘仙の羽織をめしてあつぱれなマダム振り。とかく旦那樣の御話し許り、かういふ時は、多く旦那樣の御話しをするとよいときいて居たから、せい〳〵旦那樣の御話しを持ち出してあげた。未婚の人の前で、甘い御話しをなさるのは、如何いふものだか、私はなぜかをかしくてたまらなかつた。

八人の弟妹の姉となつて、大に責任の重きを知る樣になつた。一擧一動は小さな子供の頭によくひゞくの

だもの。

「姉樣がかうしたから私もした」といはれるのが恥かしい。文學趣味のない妹は、つく〴〵手藝に精だして居る。一帶かうしたものは學生時代には比かく的安全である、けれども一歩世に足をふみいれてからうろたへるのも斯した女である。卒業したなら讀まれるだけ讀書させやうと思つて居る。少しも自分の心をかきあらはすことのできない樣な者は不幸である。

第二の妹は頗る剛情に生れて居る。よくなればよくなる、わるくなれば限りがない、大に注意すべきものだ。一帶に青年教育について、私は自分の過去を本位にしてかれこれ世話をやいて居る。私は全く父より他に異性といふものを知らなかつた、しらなかつたからいろ〳〵馬鹿々々しい行きちがひも出來た。

それでやはり健全に異性といふものを知らせる必要があると思ふ、それでないとゝかくごかいがおこりやすい。

子供を白痴にした若き母の罪

島の女

今の若き奥樣方と申ますれば、大抵女學校出で、萬事よくお心得遊ばして被在いませうけれど、玆に母親の不注意から、遂に取返しの出來ぬ始末を招いた例が有ますので、是を皆樣の御參考までにと筆執りました。

これは私の親戚のもので御座いますが、元々一人娘の氣まゝ者故、既に人妻となつての後までも、家事は元より、愛兒の養育まで人任せにしておいて、自分は朝から晩までコロリン、シヤン、と十三絃に親んで許り被在つたその結果、今年三歳になる子供が、生れもつかぬ白痴同樣になりました。

こんなになる迄には、餘程以前から病氣に罹つて居たのでせう、とお醫者樣が被仰られたさうで御座いますが、母たる人が氣の附なかつたものか、それとも親の慾眼でわからなかつたのか、今年の夏まで醫者にも診せなかつたのですもの、全く母親の不注意から來たもので御座いますわ。病症は漫性腦膜炎とかで、或ドクトルの診斷では、離乳時期延長に原因するもの、と被仰られたさうで御座います。そのうへ漫性の胃腸加答兒と、まだ外にも六ケ敷病氣がおありなさるのですつて、こんなお小さい時から胃腸を弱くしては駄目で御座いませうよ。

育兒に就ての事は、女學校でもお習ひになりました

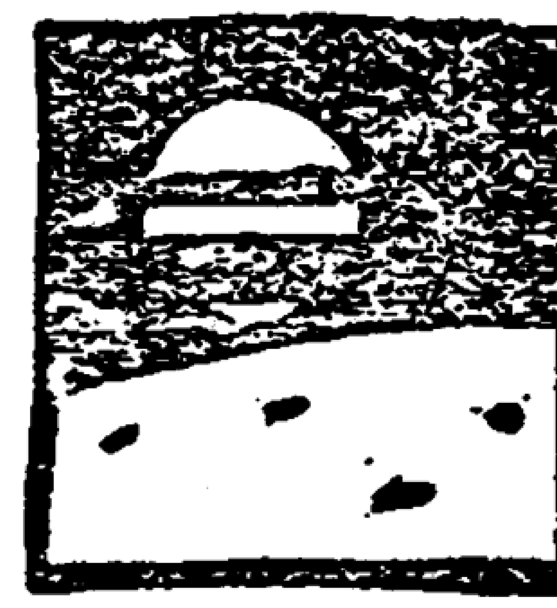
らうし、新聞、雜誌、殊に女學世界だとか、婦人世界の樣な婦人雜誌には眼が倦るくなるほど澤山に出て居ますのに、雜誌をとつて何を讀んで被在つたらう。折角男子と生れた兒を、あんな育て方をなさるなら、むしろ始つから產なけりや却つて罪を作らないでよかつたらうに――。

馬鹿と云つても、病氣さへ癒つたら少しは物事がわかるやうになるだらう、とは親の慾心、中々一度腦疾患に罹つたからは、全治と云ふ事は到底駄目な願ひで御座います。

音樂は家庭の趣味と申ますから、處女時代には少しはたしなんでおくのも宜しいでせうが、家婦ともなり、子供の一人も出來てごらんなさい、それは〳〵忙しいもので御座います。下女の一人位居ましたつて、ろくろく髮を梳く隙も有ませんわ。と姉はいつもこぼして居ました。それに明ても暮てもシャシャコロリンとお琴の前に座つて、絃を彈いて許り居て、子供が滿足に育立ちさうな筈は有ませんわ。私等でも今のうちこそヴワイオリン肩にして弓引いては、曲だとか、マーチだとか云つて樂んで居ますけれど、是でも家庭を持つたら、止めてしまふ覺悟で御座います。そして子女を立派に養育して聖代の恩德に酬ひ奉らなければなりませんから――。

こんな事申ますと、何だか論文の樣になりますけれど、一たい始めて子を持つた方は何方でも、愛、卽ち子に對する愛と云ふ事を誤解なさつて、可愛いゝからと云つては、土用でも風邪ひかせまいとてか、綿入の二枚も重ねて、それが爲め皮膚を弱くしたり、餘り間食をさせた結果、胃腸を害つたり、乳を離すのが酷なやうにでも思ふのか、五歲になつても七歲になつても矢張しぼんだ乳を吸はせなさるやうな母も、世には澤山見受けますが、是等は皆、兒を愛するでなく、玩具扱ひになさるので御座います。

離乳と云つても、何もさう〳〵六ケ敷事はないのですが、皆樣は今と思つて今、急に離さうとなさるから六ケ敷なつて、苦味丁幾をつけたり、せんぶりを塗つたりしなけりやならぬのでせう。まあ可愛さうに、そんな慘酷い事をなさらないでも、他にいくらも方法がありますのに、急遽に離さうとなさる爲に、却つて子供が泣いて他の食物を飲食せず、體は痩せ衰へて、種種の病氣に犯されるのであります。



親の厚情にて無き命を拾ひし記

附り看病の心得

N女

▲醫師を選む心得

醫者は學識もあり經驗もある人を撰むのは至當ですが、成るべくは常々かゝる醫者で、病人の體質を能く知つて居る醫者があつたなら、それを賴むのが宜いのです。して病には種々あるけれども、其病の專門の名醫にかゝることは云ふまでもないが、醫者の少い田舍は兎に角、都會の專門醫者もある土地ならば、內科ならば內科、外科ならば外科、眼科ならば眼科、產科ならば產科、小兒ならば小兒と云ふ樣に、其の科にすぐれた醫者にかゝることが大切である。急病なれば、先づなるたけ手當をして、一方には醫者に走ることであるが、一時の手當に就いては據なく、近所の醫者を賴むとも、學識も經驗も少い拙き醫者を撰むではならない。

▲醫師を招くに就いて

醫者を撰むで、さて招く時には病人の容態を詳しくのべ、使の者に詳しくのべることが出來ないと思つたならば、詳しく書きしるした書面を持たして遣る樣にしなければならない。何故に斯くするかと云ふと、醫者の方では、病相當の機械や、藥品等を用意するためである。もし不用意であつたならば、急に手術を施すことも、藥を與ふることも出來ないからである。だからその書面に只「病人ある故只今御越下され」とばかりでは何の役にもたゝない、その上無益に時間を費したり、病人の方に手後れたりしてたいへんな差である。

▲醫師を換へるに就いて

能く撰むで招いた醫者は、十分信じて任せなければ

ならない、假りにも疑ふこと等があつてはならない。

併し病人がいつも同じやうな氣分であつて、快よくなかつた場合に、醫者を換ふる時には、一應他の醫者にも診察を乞ひたいからと、其主治醫にも得心の上で、他の醫者に診察を乞ひ、見立もよく、それに換へた方がよいと思つたなら換へるもよいけれど、其の時は前の主治醫に十分相談して、次の換へた醫者へ、前よりの容子を傳へ、何事もよく相談して呉れる樣に賴まねばならない、なるべくは換へない方が可いとすれば徒に疑つて、度々醫者を換へたりするのは、病人に對して最も惡いことです。

△醫師の命令は固く守るべき事

一旦かゝつた醫者の命令は、病人の起臥、飲食、話しすること、睡ること、看病人は命令通りにして、少しも背かず、藥を飲ます時刻には違へず飲ませ、分量は無論少しも間ちがへてはならぬ。

△病人の精神を安らかにすべし

病人は體の力が衰へて居る故、何ごとにもよく氣がつき、氣がつき過ぎて心を苦めるものである。依つて看病人は、心を安める樣に注意し、わけて熱病や腦病などの病人は、病中に心を苦しませると、全快した後にもひゞき、腦の力が不足になつて、始終苦として治らぬ樣になることもある、だから注意して大切に看病しなければならない。古人曰く「一に看病、二に藥」とは尤なお言葉です。

△病人との談話に注意

病人の親しい人の見舞に來た時などは、いろ〳〵病人と話をするものである。すると話に實が入つて、自然と長話になるものであるが、これが病氣のために大へん惡いのであるから、看病人は、そこを注意して、あまり長話にならぬやう、議論の樣な難しい話にならぬ樣にせねばならぬ。又悲しい話や、病氣の話等は最もさはるものである、つまりそれを慰むるのが看病人の務である。

△病人の枕元にては靜かにせよ

病人の枕元で、高聲を揚げ、又は噪がしく話をしたりするのは宜くないのです。されぱとて又低聲で囁くのは、病人に疑はせて、心配をさせる種であるから、

よく愼まねばならない。病人が小說や、雜誌等の話を乞ふた時には、あまり複雜にならぬ樣、又悲しいことを語らない樣にして、寧ろ滑稽な話でも聞かすがよい。

△病　室

病室は六疊敷より、八疊敷ぐらゐまでの室を宜しとす。併し病室には、日光が、程よく射し込み、夏は涼しく冬は暖かなるべきは云ふまでもない。斯樣に撰むでも、それが往來に沿ふて居たり、子兒の遊び室や、臺所などに近い所は宜しくない。これも避けて、靜な室があるとしても、病室に用ひたら、戶障子を開閉して、空氣を入れかへ、掃除を丁寧にして、取亂さず、要らぬものは置かぬ樣にすることである。されど斯樣な室は餘ほど大家で、離れ坐敷にでもしなければなるまい、とても普通の小家では望みがたいのです。

△病人の寢褥

病人の寢褥は、柔な蒲團を敷き、其上に白い上敷を覆ひ、臥せた上には毛布の樣な輕くして暖なものを掛け、尤も寢褥は室の中央に設けることで、看病人は其まはりを通り步ける樣にしてよい。又病人の着て居る寢具は、度々日光にあて、上敷は度々洗濯することである。物を食べさせる時には、別の布を敷いて、其上で食べさせた方がよい、されば寢具は二通り以上なければならぬ。

△病室內の空氣

人の呼く息は空氣を不潔にするものである、燈火を多くするのも、炭氣がこもつて惡いし、又火鉢で物を煮る等は、空氣を不潔にするものである。だから病室內には、多くの人が集まつてはならない、燈火も多くしてはならない、食物も煮てはならない。

△藥を服ます時刻と服ませ方

醫者の指圖によるけれども、普通の內藥は食事の前後一時間位をへだてゝ服ますがよい。

水藥を服ますには、瓶を振りうごかして、瓶の口を淸潔に拭ひ、服むだけの分量を盃にうつしてのますがよい。併し起上ることの出來ない病人には、匕で服ませるか、又は細い硝子管の尖の少し曲つたもので吸はせるがよい。又散藥なれば、口中に入れ、湯で服み下し、又は湯で溶いてのませるもよい。

しかし惡い味がして、服みにくいものは、藥舗で賣る「オブラート」に包んでのむがよい。其外、外用藥と云ふのがある、外用藥とは、吸入劑、散布劑、注射劑、洗滌劑などです。是等はたいていゝ劇藥か毒藥等であるから、服み下しては害になる。依つて內藥と間ちがへぬ樣に、印を附けておいて用ふがよい。

△病人の身體を清潔にせよ

これは每朝、顏を洗ひ、髮に櫛を入れ、又時々熱い湯で絞つた手拭で、一所づゝ手早く全身を拭ひ、衣服を着かへさせるのです。

先づ看病のことは、このくらゐにして置きませう。細く記したならば、到底書きつくせません。

私は此の看病と云ふ二字は、最も深く心にしみ込んで居ります。

△私の病源

忘れもせぬ三年前のことであつた。學校から歸ると間もなく惡寒がして、頭が重くなつたけれども、もう四五日で冬休みになると云ふので、學科の方が忙はしく、どうしても明日までに作文をつゞつて行かねばならぬので、我まんに我まんして、勉强して居たけれども、最う苦しくて起きて居ることさへかなはず、とうとう臥せつてしまつたのです。さあ、それからは家內の者が、みんな心配して、醫者よ、藥よと騷いだが、いつかなく／＼なほればこそ。私はあまりの苦しさに、思はず淚を拭つて、併し苦しい中に、思ひ出さるゝは目の前へちらつく冬休中の學科の復習……考へはあれからこれへと、さながら夢か現の如に映つて來た。ふと考へ事をやめると、今度は前の樣ではない、一層苦しくて私は只「學校が休みになるときは書物を持つて來て下さい」と、もう其言葉の半分は夢我夢中であつたさうです。それから四時間ばかりたつて、正氣に歸つたのです、けれども其四時間と云ふものは、痛いのか、苦しいのか、晝か、夜かの區別さへつかなかつたのです。正氣にかへると又苦しみを感じて、居ても立つても居られず、何氣なく起き上つて、二足三足步きましたが、これも夢中のことでした。

△私の看病をして下さつた父母の想

斯く夢中であつたことが、五十三日間、其の間の食

量は云へば、わづか一個の鷄卵が三日に飲みきれず水も薬ものどを通らず、名醫にかゝつても、既う見はなされてしまつて、薬を與へて下さらなかつたさうです。それをやう〳〵お願ひして、薬を戴き、飲むことも食べることも出來ぬ私の口中へ入れては、頭を振つて流し込んで下さつたさうですが、其の薬を飲む力のない私は、全く死だ人の樣であつた。今考へても冷々すると母は云つて居ります。

薬を飲せて下さつた父は「こんなに苦しめて飲ませるのは可愛さうだ、いつそのこと水も薬も飲ますまい」と思つたさうですが、いや〳〵飲せんで置けば、すぐに草葉の露と消えてしまふと思ひなほしては、飲ませて下さつたさうですが、其の飲ませかたと云つたら、あまりのことに、繪にも筆にも、書きつくせなかつたと云はれます。



して受持の先生等は何度御見舞に來て下さつたか知れないと、今でも云はれて居りますが私は少しもわかりませんでした。

▲正氣にかへつた後

漸く正氣に反つたのは、五十三日目であつたが、私は又苦しさを感じて來ました。私の病氣は初のうちは腦病でしたがそれが變病して腦脊髓となつたのです。そして毎日毎

日氷嚢を枕にしたり、天井からもつるして、すべて頭を冷し、足の方へはユタンプを二つづつあて〻、暖めたのです。其の看病をして下さつたのは、父と母とであつたのですが、私の夢中の時などは、三日三晩も帶をとかずでまんじりともせず看病して下さつたと云ふことです。又醫者の方では「親の身體がたまらぬから看護婦を賴むがよい」とお進め下さつたさうですが、「どうして、此の病人が他人の手に渡せ樣か」と思つて、とう〱自ら看病したと、よくお云ひになります。

△病氣全快

父母の手厚き看病により、私の病氣は一枚紙をはがすが如く、全快に赴いたのです。そして牛乳も日に一合ぐらゐは飲めるやうになり、藥もよく、のどを通る樣になつたが、永い間、臥つて居たので、未だ起き上ることが出來なかつたのです。指折りかぞへて見れば患ひ初めてより既う六十日餘になつたのです。けれども穀類と云つたら、一口も食べられなかつたのです。七十一日目で初めて起き上ることが出來たり、おかゆが食べられたりしました。

受持の先生は、七日に一度ぐらゐ、お遊に來て下さつたり、友達も毎日の樣にお出になつてくれますので自然と起きて居ることが出來る樣になつたのです。そして先生がお遊びに來て下さる時は、必ず二三通の手紙を、學友に賴まれては、持つて來て下さいました。そして、「奥澤さん、早く全快つて學校へお出なさいよみなさんがいくら待つて居るか知れませんよ、奥澤さんの場所は、あかせて置きますからね、私が學校へ行くとね、生徒がいつも、奥澤さんのことを尋ねて仕方がありません、あなたが夢中の時などは何んて話してよいか分らなかつたのですよ」といはれたので、もう俄に友達が懷しくなつて、明日にも學校へ行きたくてたまらなかつた。併し未だ不自由の身の上で、庭へさへ出られなかつたのです。

△病後初めて庭を歩いた時

或る日曜日でした、朝から先生や、お友達がお遊びにきて下さいましたので、初めて庭へ下りて見ました。が何しろ、寢臺の上に枕を友とせし身なれば、思ふ樣に足ははかどらず、先生の手にすがりながら、歩きました。彼方に見える野山は、もう若綠になり初めて、麥も一尺位に成長したのです、それを私は夢我夢中

ですでしたのです。病氣になる前は、未だ木枯が寒く肌にふれる頃で、麥も二寸程しか成長して居なかつたのです。併し誰一人として、生きると思つた人はなかつたさうですが、甚だしきは醫者までも疑つて居て、「此の病氣が全快る者は萬人に一人もない、全快したところが何所か不足になる」と云つたさうですが、私が何所も不足なくなほつたと聞いて「まああの病人が」と驚かれたさうですが、それもこれも「父母の看病が御熱心であつたから」と、こゝに初めて親の大恩と云ふことが、身にしみ〴〵としみ渡りました。

今尚、ふと思ひ出しては有難さのあまり、人知れず涙を拭ふこともあります。

吾家の室内に掲げて置く各種の表

紅梅女

家事に就てまだ經驗の淺い私は、如何したら主婦としての責任を完うする事が出來樣かと、其事許り思つて居ます。其處で先づ色々考へた末、思ひ付きましたのは、好く人の目にかかる所へ表を掲げて置く事です。

柱曆　是は大概な家で無い所はありますまい、人によつては這那ものをと笑ふ方もありませうが、私は兎に角に大切な表の一として居ます。

汽車汽船發着表　是は山間の地にあつて、文明の利器のお蔭を蒙らない所は、別段入用でもありませんが、當地の樣に、幸にして多少交通機關の備はつて居る所では、是非必要だらうと思ひます。此間も或人がこれを見て、丁度待合室の樣ねと申されましたので、私が氣が利いて居ませうと言つて笑つた樣な次第でした。

郵便物早見表　是は申す迄もなく仲々重寶至極なものです。

年中行事表　是は隨分考へたのです。凡て一家を維持して秩序よく暮さうとするには、常々の用意を要するのでありますが、大體の記錄によつて豫定通りに致しますと、心を使はないで濟む事が多いのです。人は萬事に注意を要するものではありますが、省かれるだけ省くといふのも心の經濟であります。そして大體豫定がありますと、それに相應した準備とか繰合せと

か出來て、誠に便利なものです。只々出任せにして行くよりも、規律を立てゝするといふ事は、家風を定むる上にも、子供等の教育の上にも、餘程大切な事と思ひます。衣更へなどといふ事も、衛生的方面から言つたならば、暑ければ薄くし、寒ければ少し早いが袷にするといふ風にするが一番の得策でせう。けれども是も一定の規律のもとに、一家悉く打揃ふて着替へた方が、家庭としての立場から見たら誠に立派だらうと思ひます。此點から見ると警察官などは至極結構な事です。其他誕生日、佛事、大掃除、蟲干など數へ來たら幾らもありますが、總て前年行つた事を一々記錄に照して、これを年中行事に表はして置けば誠に重寶なものです。納税の事なども毎年一定の期日に、令書が出るものですから、其期日を行事表に書き入れて置きさへすれば、忘れるといふ事は無い筈です。其外一家内のみでなく他家に關係した事なども、或る一定の事は行事に認めて置けば至極便利です。そして是に書かれぬ事は記錄にして置くのです。行事表を利用せなかつたり、記錄をたよりにしない人は、一定の行動を取る事が出來ませんから、不義理な事になつたり、後悔したりする樣になりはしないかと案じます。だから是非この行事表は大切なものと思ひます。然しまだ草創の際とて甚だ不束なものです。

物價表　これまた非常に大切な物と考へます。人によつては何だコセ／＼して細かい事にまで氣を配る、といふ方もあるかも知れませんが、私は一家の主婦となつた以上は、經濟の點に於て、大に注意を拂はねばならぬ事と思ひます。唯今では米醬油の樣なものから掛目菓子の類まで書き列ねて居ます。けれども是も時時相場の變る事がありますから、餘り委しくは書きません、値段の變つた度に、店から知らせる事にして居ますから、下女等を買物に遣りましても誠に安心でございます。僅五厘三厘の違ひと思ひましても、度が重なるにつれて大きな事になりますから、充分注意を要する事と思ひます。斯く一定して置きますと、日々の計算をするにも誠に手早く出來る譯です。私の懇意にして居ます或奥樣は、大家育ちで金錢上の事に餘り細かしい事は申さぬ、寧ろ物價等を知らぬ方が鷹揚でよいといふ風に育て上げられた方です。所が米一升が何程か、砂糖一斤が何錢か、一向御存じの無いものから下女下男共がよい加減に自分達で値段をつけて、五錢するものでも六錢七錢と申上げるさうです。其度に只

さうかと申される迄ですから、結局其れをよい事にして、我もくと斯る惡計を企てる樣になり、大切な資は唯徒らに下女下男の懐を肥やす許りです。家政を司どる主婦として、か丶る不經濟を見逃す不見識さ、全でお話にならんではありませんか。私は此話を聞いて熟々其奥樣のお身の上を情なく思ひましたので、臺所と女中部屋の間に此物價表を大きく書いて掲げて居ります。斯うなつて來ると、召使どももさうく自分勝手な事が出來樣筈もありませず、また滅多に惡い事も出來ぬ樣にしてあります。兎に角に私一人の考としては、よい物と思つて居ます。

それから只今では必要もありませんが、いづれ是も入用と思ふのは子供の**學校時間割表**だと思ひます。それは子供に學問を重んずる習慣を養つて遣りたいと思ふからです。子供は初めから進んで復習を仕樣とするものではありません、だから時間割表をよく見える所に貼つて置きますと、態々注意しなくとも今日はどんな授業があつたかゞ親の目に入るでせう。夜分などでも仕事の間に些と子供に聞いて見る、卽ちそれが復習の手係りとなつて、案外復習する樣になります。こんな習慣がつけば少し大きくなると、自ら進んで復習に取か丶る樣になるでせう。其他此表は明日の準備をするにも便利です兎に角にこれも大切な表の一として、子供が學齡に達した曉にはと、今から考へて居ます。其れから雜誌樣の帳簿を二冊拵へて居ます。一つは

食寶 と申して、色々の雜誌の中や人の話の中で珍らしい料理法や、經濟な點があつて感心だと思ふ事のあつた時には、其を細大洩さず書き集めたものです。そして必ず眞似て見るのです。時には夫に笑はれたり冷評されたりする事もありますけれど、私の生れ付好きな道とて、一度失敗したからつてそれで止めは致しません、二度も三度も試驗的にやつて見ます。さうする内に可成夫の口に合ふ樣になつて、甘味いくといつて食られた時の私の胸の中――隙な時にはちよいちよい繰返して見ます、誠に面白いものです。女中も時々廣げて居ます、そして奥樣何時かこれを拵へて見ませうなどと、ご馳走の催促が初まつたりなんかします先日私が女中を連れて買物に出掛けました留守の時夫のお友達がお訪ね下さつたさうです。何かおもてなしをと思ひましたが相憎と何も無かつたので、仕方なしに臺所へ行つて、柿の味噌漬を持出してお茶の口

取にしたさうです。所が大層珍らしいものだ、是は奥樣のお手際か、結構なものだ、手前でも是非眞似をさせ樣、此方法をご存じ無いかねと、聞かれたさうです。けれども大體受持が違ふので一向分らんが、多分此帳簿にあるだらう、といつて不束な食饌を持ち出してお目にかけた所が、其方は是は仲々感心なお心掛けだ、道理で此家へ來ると珍らしいご馳走になられる、といつて大層賞められたさうです。私は後に此話を夫から聞きまして、誠に恥かしく思ひました。皆覺えて置きたいのが山々だけれども、到底私には叶はないから只ほんの私の備忘錄として書き集めた迄のもので、決して人樣のお目にかけられたもので無いのに。然し私は此食饌によつてどれだけ益をするか知れません、誠に重寶なものです。今後ともます／＼勉强して書きよせたいと思つて居ます。もう一つは

心得草　といふものを拵へて居ます。是は料理以外に有益だと思ふ事、つまり廢物利用法とか、應急の手當とか、種々雜多な事を書き集めたものです。勿論種類によつて項目をわけて居ます。是も記憶力の乏しい私には、何よりの好侶伴として、座右に備へ付けてゐます。

まだ主婦として間がありませんので、何も彼も足らない事許りです。及ばずながら此道に盡して、立派な家庭を造り上げるには、今後幾年月を經過するか知れません。まだ／＼前途遼遠だと思ひます。

無邪氣で珍しい家庭公園

新田文子

▲始めは弟の考案から

妾の弟は、只今中學の一年ですが、小さい時から不意不意つと、奇拔な事を、考へ付く兒です。去年の五月頃でした。妾に恁麽ことを話すのです。それは、月形とか、ハート形とか、櫻花形とかの、種種な公園を作つたら面白からうと言ふのです。妾は實際に、そんなことが、出來るかしらとためらつてゐましたが、弟はもうもう熱心なもの、それでは、姉さん僕が一つ、月と星との形でやつて見ますと、元氣よく鍬をかついで、築山の向ふにある十坪許りの土地に行きました。そして先づ、地に三日月形を描き其弓の樣に彎曲して居る間に、星を一つ描きました。此の星に

は流石弟も五角形に、苦しみましたが、漸く、思ひ通りに、出來上りましたから、愈々弟は鍬をくだしました。

先づ、形の所だけ、鍬を打つて、地をくだき、土を軟くしました。そして他から土をいくらか運んで、其形の所だけ四寸位を、他の地より高くし、一々手を下して形を正し、土を平らかにしました。それでもう新月に星の形の土地が、出來たのです。廣さは一坪內外です。弟はもう、一生懸命で、生意氣にも「大方成功したぞ」と申しては、大喜んでゐます。

そして、今度は、公園だからと申して、星形の方に池の小いのをつくり、それに一寸した、橋をかけ、其のあたりに、夏菊と白萩を植ゑました。

新月形の方には、松を二三本(七八寸位なもの)と、南天の木を一本、うゑつけて、置きました。是れで、先づ先づ、月と星との形の小さい公園が出來上つたのです。妹の花ちやんや、姪の八重ちやんや、從弟の、虎雄さんは、大層な大賛成で、明日は、自分らも、好い形を思ひついて、兄さんに、まけんのを、造ると、云つては、喜んで居ました。妾も大贊成して、置きました。

△五人が思ひ思ひの形の公園を造る

其の翌日は、弟を始めとして、妹の花ちやん、姪の八重ちやん、從弟の虎雄さん、妾と、五人が思ひ思ひの形の小公園を造りました。花ちやんは、蝶の形にし、八重ちやんは櫻花の形にし、虎雄さんは、鯛の形にし、妾はハイカラなハート形にし、弟はやつぱり昨日造つた、新月と星との形の儘で、置きました。そして、妾が形を描くし、弟が鍬打つて、土を軟くするし、他の三人はせつせと土を運んで、小さい可愛い手で、われ一にと、此の無邪氣な珍らしい小公園をこしらへました。

△小さい公園の命名

出來上つた公園には、各々名をつけました。先づ弟の新月に星の形のを、トルコ公園と呼ばました。從弟の虎雄さんのを鯛公園とつけました。妹の花ちやんのが蝶公園で、姪の八重ちやんのを櫻花公園と名づけました。最後に妾のは、弟の發言でハイカラ公園と言ふことにしました。

▲各公園のありさま

必死の元氣と、申しませうか、皆、それぞれ自分の受持ちの公園を、一生懸命で、こしらへたのですから、其効あつて、實に豫想以外の好成績で出來上つたのです。

トルコ公園　弟がいろいろと考案し、周圍が土では（無論形の周圍のことです）雨などの爲めにくづれたり或は低くなつたりするからといつて、瓦の破片を拾つて來て、それで周圍をとりまきました。ところが丁度瓦煉を用ひたかの如く、大層きれいに見えます。そして河原から白い砂を持つて來て、振りかけましたものですから、青い松とのうつりが、一寸、風雅です。

鯛公園　鯛の形にして、周圍はやはり弟と同じく瓦の破片を用ひてゐます。そして、鯛の頭部にあたる所に、小さい松を植ゑ、腹部にあたる、廣い所に、菊を澤山うゑました。尾部には、オモトが植ゑてあります。腹部の菊が滿開した時は、ほんとに、見ものでした。

蝶公園　あげ羽の蝶の形で、周圍には蜂草といふ小さい草を植ゑました。此の草は、小い赤や黄の花を咲かせますので、可愛く見えます。そして、蝶の脊にあたる所に杉苗を三四本植ゑ、兩側の羽のところには、なでしこ、菊、などを植ゑ、可愛いく公園です。

櫻花公園　さくらの花の形で、中央に萬龍を一本植ゑ、五片の花瓣にあたる所には、朝顔と、夕顔を澤山植ゑました。周圍は蝶公園と同じく、蜂草をもつてしました。八月頃、朝は朝顔が美しく咲き、夕は、夕顔がいと淸く花を咲かせ、少なからず私共を喜ばせました。

ハイカラ公園　ハート形にして、周圍に、小石を並べました。そして、赤砂（石英の碎片）を、一たいに散布し、秋海棠、紅芙蓉、百合、石竹等を植ゑました砂が一寸美しいので、百合花や、芙蓉の花の咲いた時は見ごとです。

▲昔の菊畑、今の公園

以前、祖父が在世の頃は、此の土地は菊畑と稱して隨分、手入れがしてあつたのですが、祖父が亡くなつてからは、誰れかまふものもなく、僅か三四株の菊が殘つて居るばかりでしたが、妾ら五人にして、こんな、珍奇な、無邪氣な公園、卽ちいひかへれば家庭園を、思ひつき、十坪許りの土地は、五つの各々異形なる、

公園となつたのです。そして、四季折々、可愛い趣と園藝なるものの趣味が幾分か與へて居ます。弟を始めとし、花ちやんも、八重ちやんも、虎雄さんも、妾も皆、朝夕手入れを怠りません。園藝などあまり興味を持たない妾も、此頃は、此の公園に出て種々草花の手入れするのが、唯一の樂しみの樣になりました。

妾共が、こんな公園をこしらへましてから、凡そ一年にもなりますが、一日一日立派になりつつあります。草花なども、日本種苗株式會社から、種々な種子を、とり寄せ撒いて居ます。そして、妾共五人は、これが改良進歩に力をつくして居ます。實に、樂しみ多き家庭公園です。

家庭心得其をり〱

葛野葉女

△藍の色をみる事

へいえい、お値段のお安い紺の宜敷いの、ひえ、これでも辛棒が願へませんでせうか？つて、頭をずつと下げられると、つひお世詞に醉はされてしまふ時があります。ぢつと默して、あの品にもこの品にも手をかけてみて、はては眼がぐら〱して、黒なんかひつかぶせられちや大變だが、等思ふ時はよく嗅いでみるがよろしい。風邪にでも犯されてゐる時は、切のはしをなめてみると鹽氣のあるのはいけないのです。それでも分明らぬ時は、絲をほついてきりゝとよる樣に、要するに暫し立つ樣にです、燐寸をすつて今の絲につけて洋紙でも和紙でもよいから紙の端にもえつゝある絲をふつと火が消えぬ程度にふきつけるのです、其紙に藍がうつりますから。

△うどんそば

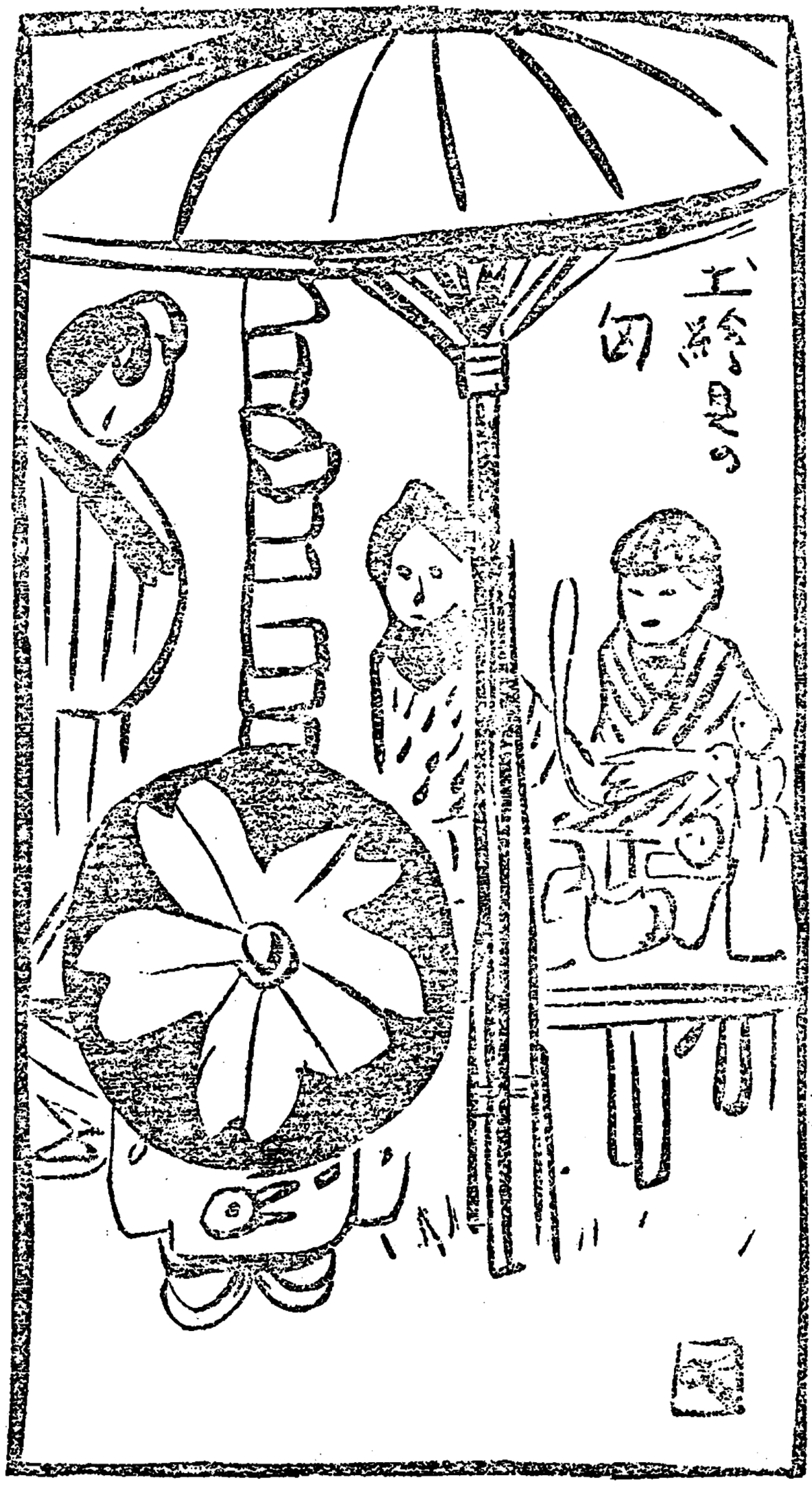
雷落しでも致しまして初から何番目位に引合に出される呼聲、うどんそば、笑つちや不可ません、うどんの粉の需用の廣い事つたら、隨分皆樣いろ〱にいぢめなさいますでせう。或時はパンになれの、此度はビスケットを燒くとか、フライにするの、お饅頭の皮に、なんて、さういふいたづらをなすつた餘りの粉などがあつたら、試にうどんなどにして御覽なさいまし。澤山ない時は、煮込なんかにすると、今時のお寒い時

には持つて來いですよ。乾うどんなどの比ではありません。煮込ですと水でこねてよろしいが、おうどんですと水量の九分の三鹽（波の花）を入れるのです、何れも水を少しづゝ入れてはさい箸でよくかきまぜます、ひやつこくなつたらボーロ位にしめつてゐのを、はたへよせといて全部同じ樣になるのを待ちます。食鹽の入つた時は引きしめ心地ですから、いさゝかやはらかにこねるのです、さうなつたら全部一緒に濃淡のない樣にあつちやへこつちやへと、押へつけては丸るめ丸るめては押へつけ、こんどは踏むのです。田舍では蓆で致しますが、無いときは油紙の厚いのでもよろしいから、……それもなければよろしいから、初の手で幾度も〳〵練り合せまして、めん棒で打つのですが、だからとて耳がでこ〳〵してゝもつまりませんから、袂の丸身をする樣にいせて丸く月の樣に納めねばいけません。麵棒がなければ、竹の節をきつた三尺位のでも宜敷い、それに卷きつけてはとん〳〵と掌で打つ樣に押すです、平たくなるとのばしては粉をふつて、ずつとなで廻しとくのです、ひつつかぬ爲ですの。するとその棒に卷きついてるさきがのびて居ますから、なるべくそつの出來ない樣に四方へ延ばして、最後にはうち粉を少しよけいにかけて、のばして下し乍ら疊むのです。そして庖刀にかけるのです。左の手で、計り乍ら濃淡にならぬ樣出來たら今の麵棒を其前へ置いて、それに引つかける樣ばら〳〵と向うへのばす、すだれの横になつた樣な上へ又うち粉をふつて、かせの樣に中央からたがにとつて、煮込なれば、おしたぢのよくたぎつてる中へ、自分の顏などへ熱い物がこぬ樣に入れる。うどんなればお湯のにえかへつてる中へ入れて、ぷーつとふき上つたら、水を柄杓から平たくなる樣に、ぱつと入れてさい箸で同じ方角にお鍋の底からかき交すのです。お水を初めに少なくすると、是非底にこげつきますから其おつもりで、水入れてから上手にさい箸をあてると、光澤が出ます。おうどんに所謂それがつや出しですの。

　おそばは仲々六か敷いです。つゞきませんから、そば粉とうどん粉と等分に入れて、前の樣に致しますがこれはぷーつと沸いたら、直ぐに上げて、冷水にさらすことはおうどんと同じです、が、頂く時は笊か何かに入れて、熱いお湯を思ひ切りかけていたゞくのですが、露はよく切らなくちや不可ません。

乾うどんは御承知の通り、かたくこねて機械で押し

つけたのですから、どうしたとて手打のそれには及びませんが、前に述べました様な、おとろい事は商法外の者がしなくてもいゝです。ほんのおなぐさみにてんなにするのだと申までの事ですが、乾かたゞつて可成美味しく頂く工夫をしなければなりません、どうしたらいゝでせう。私は二三分間水につけてから致しますが、水につけました時は、一層お湯をたぎらせます、ぬるい處へ入れますと、ぼろくに切れてしまひますからです。割合にぼんやり癒れますよ。



△汚染落し

あれお母さまいつの間にか、私の大事のにこんないらぬ色がと、泣たとて年數經てから、洗ひ屋だの紺屋だのと騒いだ處が、遲かりし由良之助ですから、衣服なら何なり使用後はよく注意すべきです。

故意にいらぬ色はつく物ぢやありませんから、仕方はありませんが、過つてつけた時、つけられた時はこんなにするがよろしい、次の如く。

お酒、灰をはら〱ふりかけて、ぬるい湯でも水でもよろしい靜に。

お紅、ひつぱりあつて、熱湯を局部にかけてから右の如くするのです。

墨點、時間を經過致しましたのなら、お念佛で諦める方がましです、でも死際が惡るかつたら飯粒かのりでもこすりつけて機械的におとすより仕方はありません。

煙草の脂、ニユーマダムさんがあれ所天、ほんのり頰を染めて覗んでるより、早速生味噌の汁で。

朱肉、テレピン油といふもので、藥品店にあります。

インク(紅のは駄目)醋酸の買置がありませんでしたら、道理は同じですから酢で洗ひなさい、そしてお靴か角帽を賴まれるまで棚へのつけとく事、ほゝゝ。

鐵銹、鹽素と酸素と水素の加合物に水をませた、キエンサンといふもので洗ふのです、早くしなくちや。

汗と油、いひ草の樣だけれど、汗は水ですゝげばよし、油は揮發油で洗つてかわかすのは天火でもよし、火鉢でもよし。

血痕、含み水でも大根の水でも宜敷いが、初めからこれに熱く〱なくとも、とにかくお湯をかけたら、もうどんなにもですよ。かうしてもいゝといふの、澱粉を水でといてのりの樣にして、其上へべつたりぬりつけて、かれ〱になる迄放つといてもひと一緒に落るとか、後のは經驗なしですから保證は出來不申候。

醬油と泥、前者は手早く呼否吸ひとる事と、泥はかわいたらそつともむ、これなんだらブラッシで、絹物ならビロードか繻子でこする位皆樣いつか御承知。

果實の汁、數時間澱粉末をのせて置く事。

白フランネル、グクスリンと玉子の黃身を半分わけにいれてあらふ事、色フランは蔭乾にする事です。

衿垢、餘りべた〱なら揮發油で、一寸ならビロードや、南京繻子を絡つてこするのです、お餅でも宜敷い。

白駝鳥の羽、白い石鹼を湯にとかして全部浸る程にちやぶ〱やるのです、全く乾く迄火に拂ひつゝ焙りつゝ、諸は何物でも白砂糖で洗ふのです。

毛織物の珈琲汚點、テーブル掛などにかゝらかした時は、放つといてはいけません、グリスリンを汚點の

上へ擦りつけて、ぬるま湯で洗ひ、乾く迄裏側から火熨斗をかけます。

メリンス、石鹸を湯でとかしまして極冷たく水と同じになるのを待つて洗はなければ、湯は禁物です。

白布、の黄ろくなつたのはみつともないですから、一夜微温湯につけて、翌朝清浄な石鹸水で洗ひ、變つた方の水に硼酸粉を少し加へて洗ひ、後水で。

毛絲物、編物は大分熱いお湯に石鹸粉を入れて、お箸か何かで泡立たせて其中へ二十四時間、もまずにつけて置きまして、後冷清水でふり出し、絞らないで。

玉子の黄身、初から水計りでなくちやいけません、お茶碗などにくつゝいてはなれぬ時がありますねえ。

茶しぶ、これは灰が一等よろしい。序だから夏向茶釜などをみがき砂で洗つた後に灰で今一度みがきますれば、まことにきれいになりますし、水のあとが直ぐには點々と赤錆にならないものです。

以上述べました様ですが、汚點と病人とは相似かよひでして、悪い所へ薬品を持つて向ふのですが、一に看病二に薬ですから、薬に重きを置いてはいけません。どうも當今のお醫者様は薬が強過ぎまして……。

◆茶道

とは申ますが、之は少し誤つて居はしますまいか、誤つてるとも斷言は出來ませんが、これは十二三歳から四五年位習ふが良からうと思ひます、けれども出來なければ乃至は二三年でもよろしい、それも出來ねば一ヶ年位は是非習ふ方がよろしい。

私は水さしの次へ、お茶碗と茶入をと只今申ますのぢやありませんが、心裏は雄々敷くても女は女らしくしんなりありたきものですから申ずので御座います。女は晴れの席へ等餘り出なかつた昔はいざ知らず、當今はさうは參りません。或時晴れの席へ紋附の奥様が御着席なさるとき、男來客の前を、口を開いて、はあはあお通りなさいましたが、お茶道を踏んだ方ならそんな不ざまは御座いません、何事にも態度がきまつて順序よくやつて行かれます。

而しお茶を習ふ人は、習ふ時から、如何なる人の前に出づるも恥かしがらぬ癖をつけなければなりませんお客様によつて、胸がどき〱したり、お顔ばかり火にほてらして、なすべかりしをと後に悔いたりする事が無い様に、物をいふ時はずん〱いふがよろしく、

語尾をはつきり、輕いには相違なくとも服紗一枚かろがろしくしてはなりませぬ。輕いのを重く使ふのは如何にも奥ふかき感のする者で御座いますもの。そしてお花を見わける位の見識も供へねばなりませぬが、和歌の一首位は卽座に考へられる樣修養しなければなりませぬ。お客になつた時はお軸なりお道具なり、よく拜見すべきです、けれどもやにこくほめてもなりませんが、毎日の仕事を、お茶たてる時の樣に、それからそれへ鷄の嘴と喰ひちがはぬ樣、始末をつけて行くならば、どれ丈きれいな日送りが出來ますでせう。

△五號活字と編物

五號活字に假名なしで、きつちり刷つたのがあるでせう、あれを應用して、編物の模樣をこしらへます、編物に花や字をいるゝ絲であみ込みますのは、實際樂しみなもので御座います。私など編物は不得手でありながら好で御座いますが、帽子や肩掛位自分で編むがよろしいです。

それで先づ横向の梅花でも編みますには、枝になる絲を暫く編んでぢくをつけ、がくをつけて花びらをあみつゝ、しべなどをあしらひますのですが、心覺えでは存外いびつな花等が出來上りかねすから、一寸したものゝ外は形をとつて置かねばなりません。碁盤なりにこまかく線を引いてもよろしいが、その代りに五號活字を使用ひますのです。薄い日本紙か、どうさ紙を上へのつけて、一字をコマ編一つにかぞへて、花なり鳥なりを點で書き上げまして、あむので御座います。が此頃私はずるくなりまして、初から點をかぞへて、十二とか十三とか字で書いて赤、桃色、黄とやつて致しますが、馴れて來れば餘程ゆうづうもしますし大抵はやれるもので御座います。

處女の衞生と旅行の衞生

紫の花

△授業中の俄の腹痛

十六の秋でした。體操の後さん〴〵テニスして始業の鐘がなると、私は皆樣と一緒に二階の教室には入つたのです。丁度歷史の時間で、ナポレオンがセントヘレナに流罪の邊まで先生のお話が進むだ頃、フト下腹部が非常にいたみ出して手がふるへて、ノートにかゝ

れた字は自分でさへよくわからないほどです。さうしてその痛みは頭に迄のぼるやうに思はれて、その上、下の方から何とも云へない冷たさが込み上げてくるのです。私はシックリ口を結んでこらへましたが脣迄ふるへるのです。さうしてゾク／＼とさむけはいたしますし、もう目まひまでして堪へられないのです。けれど私はもう終業の鐘がなるのをまちわびて、なるべく苦痛を見せまいと下許向いて居りましたが、フト級長！とおつしやつたので私は顔を上げたのです。と先生はビックリしたやうに教壇を下つていらつしやいました。すると皆様も初めて知つたので座をはなれて來て下さいましたが、當日の當番が下に降りる音をきくと、私は何も分らなくなつたのです。

その頃は冷汗がジク／＼と額際から流れて、もう苦痛は絶頂なのでした。

私が目をさました時は、休息室の一隅に、白い蒲團に包まつてねてゐたのです。

傍には裁縫の先生が、ヂーつと見つめて座つてゐられました。私はハットして起き上らうとすると、腹痛を感じたのです。さうして腹部にはコンニヤクのあつくしたのがあたつてゐました。

先生は、少しはよいのですか。靜かにおきゝになるのです。私は何とで返事してよいのかわかりません。再び起きやうといたしますと、靜かに／＼、決して氣をつかつてはいけません、お宅の方へはまだしらせしませんから、……隨分おくるしさうでしたね。

とかうおつしやるのです。そしてかさねて、

校醫がおつしやるには、別に大した事はないですから、これであたゝめて、靜かになすつたら直よくなります、どうも私には月經中過度に運動なすつたのだらうと思はれる。而してこれは危險な事をかもしやすいから、大切に醫師に治療をおうけになるがよろしからうとの注意でしたと、かうおつしやいました。さうして月經中ですか？。おきゝになつた時、全身の血は皆頭にのぼつたかと思ふ程ほてつて、私は吾知らず蒲團をかぶつてしまつたのです。春から初まつて丁度五ヶ月の間　私はまだ、十六年肉を分けてそだてて下すつた母にさへつげなかつたはづかしい／＼それがあんまりたやすく知られたのが、私には實に驚かれもし、何とも云ひやうのない切なさを覺えたのです。コンニヤクは幾度もとりかへられました。

それから腹痛もかろくなつたので、私は車でかへつ

たのです、母のおどろきはどんなだつたでせう。私はその日とう〳〵打あけられず只泣いたのです。

一週間缺席して、私は醫師に治療されましたけれどどうしても身體を見せないのです。三日かうして過しましたので、醫師も大凡はきゝ知りの樣子とで藥をくれました。さうして母からいろ〳〵と注意もうけました。

此時期にはのぼせたり冷えたりいたすもので、精神感動も運動過度も非常にさはるのださうです。その外入湯もよくないさうで、母が若かつた時、閉止した翌日、入湯してまたあつたので驚いたさうです。尤も母も少量のため、四日か五日位なのでした、それゆゑ母は一週間經過しないと禁じて居るさうです。

私等も極少量のため、遂運動過度になつたので、多量の人なれば出來かぬるであらうと申します。

それから私は全治いたしましたけれど、毎月月經の時期になりますと、腹痛が僅ながらいたす癖がついてしまひましたが、私のやうに輕くすめば結構ですが、これがため非常な病にかゝつた人もございますから、私は自己の辱を打あけまして、皆樣が女としての大切な時期に、しいて過度な事をあそばして、身體をあやまるやうな事がございましてはと、同じあとを踏まぬやう、さうして未來のよき子をお產みあそばす地盤をおかため遊ばすやう氣をつけましたなら、妻となつてから、青いヒステリックなお顏をあそばす事もなく、紅頰つや〳〵と夫の愛を一身にあびて、夫も自分もどの位愉快な事でございませう。皆樣よ、充分お氣をつけあそばすやうくれ〴〵もご注意下さいませ。

次にお話しがかけはなれますが、お心ぞへまでに一寸。

△旅行に白布を携ふる事

大凡の方は實行しておいでかと思はれますが、旅行には白布即白金巾、或はテンジク、一丈二尺位なれば最良ですが、それでなくとも大幅、三尺位とハンケチ程の白布をご用意あそばせ。夜具の襟などは眼病の黴菌も、呼吸器の黴菌も、聞くもいまはしい梅毒なども口にふれたり、眼にふれたりいたしますので、傳染し易く、また傳染いたした例も、隨分多いのでございますから、私は、長い方のですと、枕の上から直ふとんにしいて、それから折かへして掛ふとんなり、夜具なりにそうて、また襟の處から外へ折返します。

かういたしますと、宿の物には、何にも直接にふれませんから、萬一の憂もなく、傳染する事も少ないであらうと思はれるのです。短かい方なれば、夜具の襟にかけて、一つは枕にのせるのです。これは必ずで用意なさる方がよからうとお進めします。長い方は丁度袋には入つた樣になります。又入浴中、湯槽の中で洗顔なさる方を見ますが、決して洗顔なさらぬやう、私の隣家の子供は七つの時、父親と湯にまゐりましてもどつてくると、程なく目がツキツキ痛み出して來たので、父も母も痛むのは塵でもは入つたのであらうなどゝ申して、いろ〳〵にいたしましたが、痛はますますはげしくなつて、醫師の見た時はもう既に手遲れになつて、泣き叫びながら子供は目がつぶれてしまつたのです。

それは、痳毒が眼にふれて、風眼といふ、かなしいかなしい此世の光も見えない癈人となりましたので、今は琴を彈いてをります。

眼だけではなく、身體の何處へ毒が傳染るかも知れませんから、入湯の時は入るにも出るにも、能く心得て居らねばなりません。

で注意專一におねがひ申上ます。くれ〴〵も。

心おぼえ

野の花

失敗は成功の基ともいひますし、他山の石を以て珠を磨くべしとも承つて居りますから、私のつまらぬ經驗談や、失敗の話でも、或は皆樣方の御參考の一にもならば、何よりの幸ひであると思ひましたから、日記帳の端に記しておいた、心づいた事の數々を集めて見ました。秩序も何もたつてはゐませんが、其所は惡しからずお許しを願ひます。

一、食物に關したる事

○揚物をなさる時

揚物をするときには、最初に生姜を揚げて、それから他のものを揚げますと、決して油の匂ひがいたしません、これは妙ですから皆樣もお試めしを願ひます。

○山葵の利きのわるい時

山葵の利きの惡るい時には、山葵おろしを火にあぶつておろしますとよく利きます。これは何んでもない事でありますけれど知つてゐると便利でございます。

○貝類の砂を早く吐かせるには

蜆などの砂は中々早く吐かせにくいものでございま

すが私の實驗によりますと、蜆などを水の中へ入れてその中へ庖丁でも何でもよろしいから、金物を入れておきますと、大變早く砂を吐いてしまひます。これは蛤や淺蜊やその他の貝類も同じことでございます。

○牡蠣の水氣を早くとるには

牡蠣の水氣を早くとるには、大きな皿に乾いた灰を平らかに引き、その上に西洋紙をのせて、その紙の上にむいた牡蠣を並べます。かうして二十分もたちますと見る間に水氣がとれて、フライなどにしても油がはねませず重寶でございます。

○菜漬の泡の立たぬやうにするには

菜漬の泡の立たぬやうにするには、菜を漬ける時唐辛を五六本樽の中へ入れておきますと、決して泡は立ちません、又味もよく兩得でございます。

○空豆の皮を容易くむくには

空豆の皮を容易くむくには、熱湯を沸しておきまして、衣服を洗濯するときに用ふる苛性曹達を適宜に入れて豆をゆでます。そして豆の中の實が軟かくならぬ先に早く鍋をおろして、ざるにあげ、磨りばちに入れてすりこぎで力を入れずにすりますと、皮と實がきれいにはなれます。苛性曹達の代りに重炭酸曹達を入れてもよろしうございますが、その時には少し分量を多く入れるとよろしうございます。

○餅をたべすぎた時には

お祭りやお正月には餅をたべすぎて胸につかへ、大變困ることが御座いますが、さういふ時には生大根を切つてたべるか、又は大根おろしでおろしてたべるかするとすぐ胸がひらきます。

○餅にかびが生えるのを防ぐには

餅を搗てから數日もそのまゝおきますと、かびが生えて困るとがございますが、それを防ぎますには酒樽の中にいれておくのが一番でございます。さうすると決してかびの生える患ひはありません。それから酒樽がないときには、串柹と一緒に入れておきましても効がございます。

○かびの生えた餅や搔き餅に切つた屑は

搔き餅に切つたあとに殘る餅屑や、かびが生えた餅は、それを一二日水に浸けておいて、少し軟かくなつた時よく水をかへては洗ひますと、かびはすぐとれてしまひますから、これを御飯をたく時にその上にのせて共に蒸かし、すりこ木で飯と一緒につき交ぜ、餡をつけますと、誠に美味しい萩の餅ができます。又すり

て木でつき交ぜずに、その餅だけとりのけましてすぐ砂糖をつけて食べるか、一日程してから、切つて焼いて食べましても中々おいしうございます。

○水餅を永く貯へますには

水餅を永く貯へますには、餅を水に入れる時食鹽を水の中に少し入れておきますと、崩れるやうなこともなく、臭みもつかず、いつもつきたてのやうでございます。

二、衣服に關したる事

○蝙蝠傘の古い布は

蝙蝠傘の布は古くなると、何もつかひ道がないものですが、私はそれを小さい子供の袖口にいたしましたが大變よろしうございました。又その狭いところと廣い處とを縫ひ合せて綿を入れ平常用の座蒲團をこしらへましたが、重寶でございました。これも廢物利用の一つと考へます。

○衣服を膝の上で裁つ時には注意を要す

これは私の失敗談を申上げるのですが、衣服を裁つ折に疊の上でせず、膝の上にのせて裁つてをりました。すると、大變手でたへがありましたので見ますと、着物の衽が二寸ばかりも切れてゐて驚きました。一寸したことですが御注意までに。

○衣服洗濯についての注意

衣服を洗濯するときに白いものなどは、一寸した不注意から却つて汚すことがあるものでございます。私は紺飛白の着物を洗つたことがありましたが、その後で同じ盥で浴衣を洗ひました。その時盥の洗ひやうが少なかつたものですから、紺色が少し殘つてをりましたと見えて、浴衣は淺黄色になつてしまひました。

それからこれは去年の今頃でございました。白い弟のシャツを洗つて何心なく竿にかけましたが、乾いてから見ますと、その竿が雨などがふつて汚れてゐたものですから、竿のあたつてゐたところが黒く汚れてゐました。いつでも洗濯物を乾すときには、必ず竿をきれいにふいてから干すものであると、後悔いたしました。

これも洗濯をする時の御注意までに申上げますが、洗濯をする時によく苛性曹達を用ゐますが、それを溶かすときには餘程注意せないと大變な目にあふことがございます。それは曹達の溶解するときには澤山の無水炭酸を放散しますから、それがために卒倒すること

がでざいます。此の間も下女が洗濯の際に突然様子が變になつて騒いだ事がありました。これはその無水炭酸に犯されたのでした。

○メリヤスのシャツの古いのは

これも廢物利用の一つでございますが、メリヤスのシャツの古いものは雑巾にすると大變強いものができます。又白く洗ひまして三四歳の子供の腹當や股引にしてもよろしうございます。

○裁縫をしたあとの針の始末

裁縫をしたあとで、使用ふた針の始末は氣をつけた上にも氣をつけなければなりません。世間にも裁縫の針の始末がわるかつたために、思はぬ怪我をしたといふ例がたくさんあらうと思ひます。私もその苦い經驗をいたしましたので御注意までに申上げます。去年の夏休みのすんだ數日の後でありました、私の敎へて居ります尋常六年の女生徒に、裁縫敎室の掃除をさせた事がございました。その時一人の女生徒が疊の間に針の根本の方が折れたのを拾つて、側の柱の下の方にさしておいて、そのまゝ掃除をつゞけてゐたさうです。すると他の一人の女生徒がそんなことゝは知らずに、その柱を雑巾で上から力まかせに拭き下しました。その拍子にその針が拇指の根本にさゝりました。アッといふ聲がいたしましたので、私は何事かと側へいつて見ますと、右の次第で大變驚きました。見ると針は餘程深くさゝれたと見えて、根本の折れた方が少ししか見えてゐません。容易にぬけさうにもありませんでしたから、そのまゝ學校の附近の醫師の許へ走らせました。そこでやう〱ぬいてもらつた樣な事でございました。針が身體の一部へ深くさゝると、そのまゝ身體の中をぐる〱廻るさうで、命にもかゝはるさうでございます。附近に醫師があつたならばこそよかつたやうなものゝ、若し無かつたならば大變な事になつてゐたかも、知れませんのでした。

三、德用な買物の仕方

私は常々どういふ風にすれば、經濟的に買物が出來るかといふとについて、心掛けて居りますが、未だ充分わかりません。而し私の家の隣りが荒物屋でございますので、いつも遊びに參りましては聞きましたり、又私が經驗したりした經濟的な買物の仕方について、少し申上げやうと思ひます。

○文具品を買ふには

文具品は一個づゝ買ふよりは、かためて一時に買ふ方が大變廉うございます。それにいつまで置きましても損じも腐りもいたしませんので、尚更よろしうございます。例へてみますれば、鉛筆の樣なものでも一本づゝ買ひますと二錢しますものが、一ダース以上買ひますと一本が一錢六厘餘りでございますし、紙の樣なものでも一〆も買ひますと、一帖が三錢のものでも二錢餘りの割合でございます。

○お米などを買ふには

田舍の米屋などには、さういふ事もございませんが都會の米屋などになりますと、お米の中に磨き粉がたくさん入れてあつて困ることがございます。これは第一衛生上有害でございますし、味も惡うございますから、成るべくならば磨き砂の交じらないお米を買はなければなりません。それには町の米屋に命じましてもどうしても、全く交じらないものは求め難うございますから、田舍に知己のお方などがございましたら、農家に賴んで、白米にして送つてお貰ひになるのが便利でございます。砂を交せますのは、一つはなるべく短い時間の中に白米に仕樣とするからでございますから農家ですと、足で搗きましても、決して勞力はいとひませんから、砂を交せるやうな事はございません。又お米に磨き砂が交せてあるか無いかを見るには、第一色でわかります、砂が交せてありますと、大變白うございますし、交せてないと、どの樣に白く搗いてございましても、少し曇つて居ります、そして水で洗つて見ますと、交じつてゐるお米は、洗はぬ前よりは色が少し黑くなりますし、交じつてゐないお米は、洗はぬ前よりは餘程白くなります。

かうして田舍の百姓から直接買ひますと、直段でもきつと安うございます。一日で持つて來られるところでございましたら、一度に車ですと一石以上持つて來られますから、運賃を拂ひましても德用でございます。又野菜のやうなものでも、お米のついでに賴みますと八百屋のものよりも、ずつと新鮮なものが得られます。

○蠟燭を買ふには

私の村では多量に櫨の實を產します。從つて蠟燭を製造する家も十數軒でございます。蠟燭をお買ひになるのでしたならば、目方でお買ひになるのをおすゝめいたします。又同じ直段で品の良いのをお求めにならうとお思ひでしたら、夏の暑い時に買つてお置きになる

のがよろしうございます。これは、夏は質の惡い蠟を交ぜますと、すぐ熔け出して固まりません、從つて自然に優等の蠟を用ゐますから、同じ直段のものでも夏製造したものは質が大變よろしうございます。

○茶を買ふには

お茶をお買ひになるには、少し直段の高いのをお買ひになる事をおすゝめします。それはよいお茶は量を少くいれてもよく出ますし、またいつまでも飲み味が變りません。而し香氣の變り易いものですから、少しづゝお買ひになるとよろしうございます。そして二十錢三十錢くれといふて買ふよりは一斤、二斤といふてお買ひになる方が德用でございます。

養鷄

むらさき

卵は滋養だく／＼と云ふのでよく皆樣お使ひになるやうですが、冬あたりはさうでもありませんが夏の暑い頃になりますと八百屋から取る鷄卵に何か御見出しの事がございませう。或はきりゝつと結んでをるべき黃身がとけて、誠に氣持のわるい濁り方をしてゐるのも御座いませう。或は生々しい血のまじつてゐるのや腐敗しかけたのも御座いませう。それが必ず十の中に一つか二つあると云ふお話で御座います。これは盛夏の頃になりますと鷄が暑さにまけて多くうまないやうになりますので、狡猾な商人が鷄の多くゐる地方から箱詰にしたのを引くので御座います。ちやんと箱詰にしてあるのを解いて空氣にさらしますと急に腐敗するのださうです。こんな事は兎に角としまして十の中に一つも二つもありますと第一經濟上よくありませんし腐敗したのを知らずに食べたりなんかしますと身體の爲にも惡う御座います。それやこれやで宅では父に願ひまして裏の隅に小さな小屋をたてゝもらひまして鷄を飼つてゐます。只今は白色レグホーンが六羽にコーチンが五羽にアンダルミヤンが三羽、都合十四羽、それにレグホーンの雄が一羽居ります。レグホーンは氣の立つたもので體は小さう御座いますが卵は一番多くうむ樣です。コーチンは體が大きくつてノソリ／＼して歩きますが卵はレグホーン程うみません。併し俗に毛をかへると云ふ頃になりますとこれは少しも知らない樣にやはり生んでゐます。誠に罪のない可愛いゝものでして家の者には皆よく馴れて、弟等がゆきますと

コヽツコーッと云つてあとからついて參ります。朝なんかは人先に起きて早くあけてくれといつて大層やかましくいたしますから、私どもゝ早く起ぬ譯にはまゐりません。又身體のためには運動が出來てようございます。學校を出ると誰しも家に座りつきりになつて運動不足になりますが、鷄を飼ひますと先づ朝は糞を取るために小屋の中をはいてやらねばなりません。きたない仕事ですが、それがすむと餌をやります。餌は普通籾で、それに飴のかすを少しまぜてもつてゆきます餌籠を見ると遠くにゐるのも近くにゐるのも、大聲に叫んで走つて參ります所は誠に可笑しうございます。お晝の餌をやる迄には靑みと間食をさせます。夕方の餌をやるまでにもその通り致します。其間に卵子をうむべき鷄は抱籠の中にはいりまして產みます。うむと大きくないて籠からとび出ます。そのあとへ他のものがはいると云ふ譯で誠に氣持のいゝ程、新らしいのが取れます。夕方暗くならない中に皆追ひこんでしまへば、泊り木に上つてねむつてしまひますからそれからは少しも手間が入りません。又翌日になればこのやうにいたします。併し病氣になつた時は實に可愛相ですが出入りの鷄屋に取つてもらひます。

來年は卵をだかして孵化さうと思つてゐます。此樣な仕事は家事の暇々にいくらも出來る事で御座いまして、其上體の爲にはいゝし、其仕事をしてゐます間はつまらない外の事――ツマリ邪念ですね――を忘れてしまひますから、極めていゝ事だらうと思ひます。お暇のある御婦人方は遊ばしたらよろしからうと存じます。尙何程の費用がいるといふやうなお問ひのある方には喜んでお答へをいたします。

臺所の一週間

笹舟

心の底まで凍らす樣な寒い風！それがひゆーつと鳴響をたてゝ臺所の破障子を通拔けて來ると……火爐の炭火までがぱちぱちと熾つて周圍は何となく朝らしい想が通ふ。臺所の日記帳は寒さうにめくれた儘。まあ、板間の冷たいこと。

△月曜日

今朝は一同お豆腐の味噌汁。一昨夜から降りつゞいた雨で魚屋は來ない。晝は社で皆樣と御一所だから世

話もいらぬ。晩は揚卷牛蒡と牛肉入菊かぶらと決める……牛蒡を細長く切つて湯がき、揚豆腐を二枚にへいで牛蒡三本ばかり卷けるだけの幅に切つてこれを卷き、その上を竹皮にてかたく縛り酒、醬油、砂糖にて味をつけ輪切りにして皿に盛る、大かぶらを七分三分に輪切りにきりはなし、七分の方を中をまるくえぐり取り器の如き形にし三分の方は蓋とする。蓋の上、表となる方に菊形に體裁よく刄を入れて、その中に牛のひき肉を盛つて蓋をして、かぶらの柔かくなるまでを度として蒸し、白味噌に砂糖を加へて少しゆるめ、一度火を通して椀に入れ、其上に菊かぶらのむしたのを入れてまごし内に。

△火曜日

昨日の雨はどこへやら、からりとした小春日和。朝はパンとチヨコレート、パンにはバターをつけて狐色に燒いたのを良人に、私と子供とはバターを好まぬのでヂヤムをつけていたゞく事とした。チヨコレートには角砂糖とミルクとを加へること例の通り。『奥樣！今日は大變な魚ですとつさり買つて下さい』と大聲で魚屋が來た。新しい大きな烏賊があつたので、晩のに買つておく事とした。お晝過ぎ信一と仲よしの俊ちやんが遊びに來たので、お菓子をこさへる。蜜柑の皮をむきとつて輪切りにし、鍋に寒天一本に水一合の割で煮立て、溶けたら布巾で漉して砂糖を入れ、火を弱くしてかき廻しながら煮る。杓子にて掬つて見て、ねばり氣出でポタリポタリ落ちるやうになつた時を度として輪切にした蜜柑を箱形の器に程よくならべて之を流し込みて冷やす、よく凝つてから恰好よく切つて皿に盛つて食べさした。早速晩の仕度にかゝる事とした。烏賊をよく洗つて足を取り表の皮の方に縱横にこまかく切目を入れ串にさし、燒いて醬油に酒砂糖とを加へたもので狐色になるまでつけ燒きにする。又一つの方は身の表の方に縱にこまかく切目を入れて、ちゞみ麩をよく洗つて一日水につけ鹽氣をよくぬいて切目を入れた身の裏側に合せ足を中に入れてかたく卷き、竹の皮でとけぬやう縛り、酒、醬油、砂糖で味をつけて輪切として、二品を程よく皿に盛つたものと豆腐の澄し汁とにした。

△水曜日

良人は今朝友人を訪問するとていつもより早く出勤

子供達はお隣の石井樣に遊びに上つてゐる。あゝこんな時こそ一日中で私の樂な時、お書齋の掃除がすむと其まゝ箒を壁に立てかけて椽に出て見る。小春日和の何となく溫かに、春の光が梢に流れて輕い暖みが頰に當る。きつとこんな日には誰れかゞお見えになるだらうと思つてる矢先、表戸が開いたので急いで出て見るとまあ、思ひがけない！東京より從妹が歸つたと云つて挨拶に來たのであつた。聞けば結婚が一月早くなつたので急に歸つて來たとのことである。久しぶりで四方山の話をしてゐるうち、良人も歸つて來たので、私に代つてお壽美さんと話してゐてくれた。私はお菓子をこしらへることゝした。お壽美さんは牛乳は大嫌ひだけれどもカスタープデンは牛乳の呑めぬ人でも食べるのでこれにきめる。玉子二個へ牛乳一合と砂糖大匙二杯とを少しづゝ混せながら入れよくかき廻しドロドロにしたものを茶椀蒸の茶椀に盛り釜の中に入れて重い蓋をして凡そ二十分間ほどむし、蓋をとつて箸で眞中を通して粘り氣のつかぬ時は出來上つたものと見てとり出した。これに紅茶をそへて出す。お加減がいゝと云つて時の間になくなつて了つた。晩は大鯛一尾で潮汁、照燒、海苔卷と定める、鯛は三枚に下し頭を四つに割り胴骨と共に薄鹽をして暫くして熱湯に一寸酒を加へ其中へ入れよく煮て鹽加減を見て、蕗の薹を添へる。照燒も片身を適宜に切り醬油、砂糖、酒の交せ合した中へしばらく浸しておいて、串にさして文火で燒く事にする。海苔卷は切身を細かく賽の目にきつて湯がき冷ましてよく水をきり海苔を適宜に切つて一切づゝ包み、小皿に盛つて出す。また他の皿には甘酢に獨活を極く薄く短冊きりにしたものをつけ、海苔卷はこの酢をつけて食べる。食後東京のはなしで持切、子供は面白がつてお壽美さんをはなさなかつたが遲くなると危險だといつて十時がうつと急いで車で歸つた。

△木曜日

今日は信一の誕生日に當るし良人も早くかへつて來るので、いつもお世話下さるお隣のをば樣と、信一の從妹にあたる里ちやんと、お祖母樣とをお招ぎすることゝした。お祖母樣は何にも御用が無いので朝から遊びに入しつた、めづらしい大きな柿を頂く。晩には赤の御飯に小鯛お頭付の鹽やき、新鱈一鹽の吸物に結び昆布と青菜を入れたもの、お鱠はお祖母樣に頂いた柿を使つて柿なますをすることゝした。大根を極く細く

切つて鹽でよくもみ、水で洗つてかたく絞り、ちゞみ麩を朝早くから水につけて鹽出をして極くこまかく細く切つておき、先づ極く柔かきぶわ／＼の柿の皮を取り種子やしんを去つて、よく擂鉢で擂つて酢を少し混ぜ前の大根とちゞみ麩を入れてかき混ぜて皿に盛る。うま煮は生鮭と蕗とを別々に醬油、味淋、砂糖少々にて煮て二品を盛り合す。きんとんは昨年の秋、内庭の砂に埋めておいた栗を取り出して皮をむき澁をよく取り茹でゝ、砂糖、鹽、味淋で味をつけ、半分を擂鉢でよくすりつぶして餡の樣にして、あと半分の栗を入れてよく和へる。此夏に作へた不如歸漬が大層味よくなつてゐるので五づゝ小皿に盛る。大根の皮をむき薄く輪切にして二三日ばかり日光に晒してあまり熱くない湯で洗つてかたく絞り、別に唐辛の太いのを選んで厚一分位に輪切にして種子をとり、今の大根と一緒に甘酢に二三日ばかり浸しておき、大根をくるりと卷いて唐辛にて帶をして甘酢につけて置く。お終にミンチカツレツをして見た。初めてにしては加減よく出來た。牛肉百五十匁を細かく叩き、玉葱の大きいのを二つばかりを細かく切り、ソースパンにラードをスプウン一杯を入れ、**玉ねぎの狐色になるまでいため、肉を入れ尙**ほよく煮えたこきメリケン粉をスプウン二杯半ばかり入れて牛乳三勺と鹽と胡椒とを少し入れ、能くかき混ぜ、之れを六個の小判形となしてメリケン粉に包み、玉子を塗りパン粉で再び包み、フライパンにて燒いて皿に盛る、この七品を出した。清酒は皆不調法とて葡萄酒を出す。お祖母樣の昔話や、里ちやんのまだお口のきけないのに可愛ことばかり云つて皆を笑はせた近頃にない樂しい一夜を過ごした。

△金曜日

夜中から降り出したみぞれまじりの雨、眞から寒い陰氣な日だ。朝蜆の味噌汁にて一同すます。良人は今夜社の宴會で歸りがおそくなる筈。私等二人湯豆腐と生玉子にてすます、湯豆腐の藥味は豆腐一つに大きいねぎ二本ばかり擂鉢で能くすつてから味噌と擂り混ぜ湯豆腐につけて食事をすました。

△土曜日

今日は昨日にひきかへ實にいゝお天氣。高島屋の春衣賣出しの廣告があつたので信一をつれて出かけた。**大變な景氣、とても子供をつれてゐては危險で見るて**

とても出來ない、やつとのことで例の番頭に明日ついでに持つて來て貰ふやうに頼んで大急ぎで歸途につく。晩はチキンマリアン、若鷄の吸もの、香の物千枚漬と定める。チキンマリアンは若鷄五十匁を三片に切つて鹽と胡椒で味をつけメリケン粉に包み、別に玉子二個、白身を充分泡たゝして黄身を混じ、鹽、胡椒少量、メリケン粉スプウン一杯半入れて輕く混じ衣となし、フライパンにラードを入れ沸騰した時揚げたのを皿に盛る。湯をよく煮え立たせ若鷄五十匁を引肉にし小さい團子となし前の衣のてりをまぶし湯の中に入れ、醤油、酒で味をつけ青味を浮せて出す。食後、今朝本屋から配達した女子文壇を讀む。

△日曜日

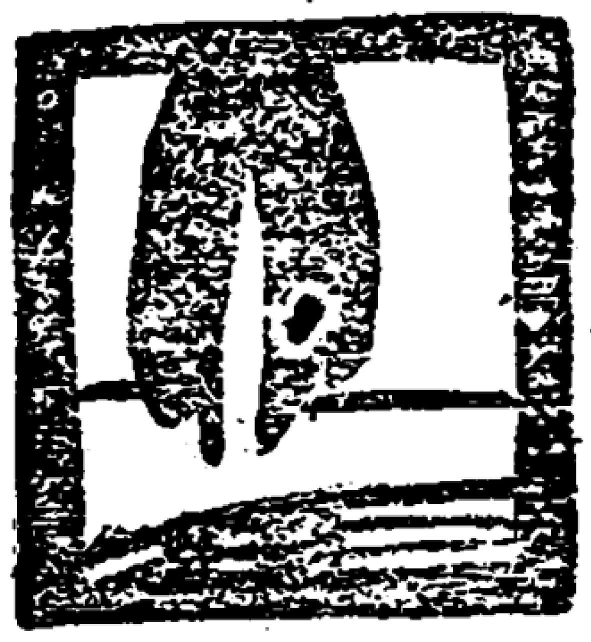
朝のうちは雨でも降りさうな空模様であつたが、お晝ころから晴天となつた。良人は植木の手入で忙しいのに、信一は散歩に行かうと、やかましく云つてゐる。おや表戸が開いたやうだ、石野さんが被入つた。良人に告げる。遠慮の無い間柄とて、すぐ寢そべつて面白さうなお話がなかなか盛んだ。泣いてゐた信一もつり込まれて一所になつて笑つてゐる。何か溫いものをと考へてゐたが、ライスプデンにした。ライスプデンは深い茶椀に玉子一個半と牛乳と砂糖を入れよくかき混ぜ、飯を六分目ほど入れ、飯より汁の方を多くして蒸籠に入れて蒸し、ミルクねりチヨコレートを熱き湯でよくといて、角砂糖を入れ、兩方とも熱い内に出した。夕方、やはり同窓の池田さんと山下さんとが被入つた。都合四人で、夕飯は書生流に牛肉とねぎ、豆腐、せり、他に海老とあなごの天夫羅とを出した。

日に一錢づゝの貯金

北利子

私は年齢を聞かれるとはづかしくてなりません、未だ獨身ではありながら二十の山も去年越してしまひました、世間によく言ふ女二十はバヾノウチとか申して居ります、私は最早バヾの仲間入を致しました。前に申しました樣に年だけは妙に重ねて行きますが、何の經驗もなく年月を送つてしまひました。しかし此のボンヤリとして居た私にも只一つ、ためになつた事がありますから話させて戴きませう。凡そ此の世の中に立つて何が最も大切でせう、金程大事なものはあります

まい、金がなければ生活も出來ず、如何程の目的もとげられません、金は命の親と申しましても然るべきだと思ひます。私の父は至つて勤勉家で、第一儉約を重じ、貯蓄を喜んで居ます。だから私共にも常々貯金せよ／＼と申して居ります。私も其命に從ひ、四十年の三月からふと思ひ立つた事を今日までそれを續けて居ます。それは自分と自分に貯金するのであります。かう申すとなんだかむつかしい樣にとれますが、別に面倒な事ではありません、自分は一箇の箱を作り、其箱は厚さが五寸程に長さが一尺餘の大きさです。それは柱にでも掛ける樣にしておきました。開くところは別に設けないで、四方釘を打つてしまひました、しかし、上の方を一分五厘程開けておきまして、そこから貯金をするのであります。これは勿論、私は秘密箱にして人の目にふれぬ場所にかくしてあります、そして毎日一錢づゝ其の箱の中へ落してやるので御座います一錢ぐらゐのお金は、そんなに苦しまなくても誰樣でも出來ませう、一錢が御都合惡いと思召すお方は五厘でも差支は御座いますまい。兎に角私は一錢づゝ入れて行きました、「塵もつもれば山となる」非常なものですよ、一錢のお金と思つても、今年三月の二十日までには、九圓九十七錢出來てゐました。是も出す心算でなかつたのですが、ちやうど彼岸で御座いまして私の地方では春と秋の彼岸には、村民こぞつて京都の本願寺へ參詣します、京參り／＼とやかましく申して居ります。私の家のお隣のをばあさんも、親類の人も參詣するので、母にも進めてくれました、しかし母は溫泉から歸つて日も淺いので、父に金は請求出來ず、京參りの人の數だけ讀み立てゝ羨んでゐました。私は此の時こそ母に箱の金を進呈めたらと思つて出しました、一錢のお金ばかりでしたから酒屋で取りかへてもらひまして母に十圓の都合にして出しました。母はたいそう喜ばれましたが、不思議に思はれまして、おまへ此の金をどうしたの……と尋ねられました。私はお母さんまあよいじやありませんか、それお母さんに上げますのよ、後は御心配かけませんと答へますと、母はニッコリと……もらふは有りがたいが、もしや、伯父樣のお宅でかりてきたのではないのかと、心配らしく尋ねられますので、私も閉口してしまひました、三箇年間誰にも知られぬ秘密を打ち明けて安心させました、母は神樣のやうだと大喜びで父に參詣をさせて下さいと願ひました。父も譯を聞いて欣んで許しました。



普通の着物も縫へないやうでは嫁に行かれぬ

松韭紫花

◎田螺と一しよに育つた私

今度の「婦人ノート」に私も何か一つと思ひましたけれど、何を申しても未だ二十三年の淺い月日、殊に手巾を擴げた程な四國の草中に、田螺といつしよに育つた私、とても〳〵筆とる價値はないのではございますが、下手な横好き、海老の鯛交りとお笑ひ下さいませ然し高尚な事といつたら私の體を煎じ詰めても出んのでございますから、只僅に十年程の間の私の土臭い、ほんの着物に手足が通るといふだけの裁縫に關する經驗と申すよりは、身の上話を書いて見ようと思ひます。就きましては裁縫と申しますから裁つ事の方から先に書かうと思ひます。

◎失戀と裁ちそこなひ

或人が「失戀とは女が裁ちそこなつた布切を抱いて泣いてゐる樣なものである」と云はれましたが、どちらにしても悲慘なといふ事でございませう。縫ひ違ひは又何度でも直す事が出來ますけれど、裁ち損つたのになりますと、再びとり返しがつかんのでございますから、誰にしても注意せねばならぬ事と存じます。

どれ程裁縫の技に熟達してゐられる人でも、時にはつい裁ちそこなふ事がございますさうで、それも複雜なものならばですが、何の譯もないものを裁つのに、切られぬ所を切り放して仕舞つて、鋏握つた儘目を圓くしてゐる人をよく見受けます。

そんな時は大抵うか〳〵と何か他の事を考へつゝ切つたのでせうけれど、[illegible]としては、大事なものだと思つて、注意に注意を加へて充分しらべ抜いた上で、漸く裁つたのに、裁ち放して見ると、思はぬ間違ひをしてゐる事もございます。いくら勝れた人でも、勘違ひといふ事はないとは斷言は出來ぬだらうと存じます。それで、かはりのあるものならば兎も角も、天にも地にもかけがへのないものなど裁つ時には、裁つべく用意して、針でもさすとか、標でもつけたところを誰か裁ち方の解る人に一寸目を通して貰ふのが、上策かと思ひます。裁縫學校の生徒などならば其先生に、又其友達にでも、さすれば岡目八目で滅多にしくじる事はないだらうと思ひます。

◎裁ち方よりは縫ひ方

それから之はずつと幼稚なお話ではございますが、私は私が十二三歳の頃に、洗濯屋から持つて來た父の羽織の端縫を解かされて、初めて羽織の裁ち方を解しましたが、端縫は最初に裁つてある通りに縫ひ繼ぎ繼ぎしてあるのでございますから、黒板の裁ち方の圖を見るより以上よく解ります。然し裁ち方計りは、解つたらそれでもう覺えたのであるから、間違ひさへなければ一筋道ですから、どんな複雜な裁ち方でも、覺えやうと思ふ心一つで、直ぐ覺える事も出來ますから致しようでございますが、縫ひ方の方になりますと、それこそ少しの上手下手――巧者と不器用とで、恰好から着心地が大變違ひます。子供の着物でさへ肩揚や腰揚のつまみ方一つでも、早其子供全體がしほれて見えます位でございます。

◎十四の齡に母を喪ふ

私は、私が十四の年に、母が死にましたので、それはみぢめな裁縫の稽古をして來たのでございます。それに母は死ぬ二三年前から、ぶら〳〵して居りましたから、學校で裁縫の先生から、今度は何を持つてお出でなさいと命ぜられても、私は家へ歸つて病床の母に

突飛な材料を是非といふ事は忍ばれませんでした。云ひさへすれば病んでゐても勝氣な、慈愛深い母はどんなにかして、調へては呉れるのでございましたけれど少しでも心遣ひをさせたくないので、滅多に申しませんでした。すると裁縫の時間には先生が、又云ふのを忘れたのでせう、他の學科がよくても裁縫が惡かつたら優等にはなれんのですからつて、今日も云はれる、明日も怒られる、其先生のお言葉は尤である――と思へばそんな場合に泣いたりするのは人間が「いたづら」なのではございませうけれど、私は怒られたのが愁くて泣くのではない、怒られてゐる自分よりは、多病母の上が痛はしうなつて泣いたのでございました。然し私が云ひ忘れたのではありませんといふことは、遂に口にはしませんでした。そんな事を口にするのは、先生に怒られるよりはみぢめでございますもの。只母がよくなつたら〳〵とそれを樂みにして居りました。こんな調子でございましたから、裁縫の點は卒業する迄も始終惡うございました。其内母は遂に死にますし、私も小學校卒業いたしましたが、皆の樣に女學校とか、裁縫學校とかへとびのいて行く事は出



來ませず、父を慰め、弟妹の世話をしながら、漸く小學校の裁縫補習科へ行くことになりました。

◎最も苦心して習つた時代

それとても他の人の樣に、次へ〱材料を拵へて呉れる人がありませんから、自分手に、縫して呉れさうな家へ賴んで廻つたり、宅の古いものを洗ひ張りしたりなどして、材料を拵へては通學いたしました。それで稽古の時間には、うか〱とは稽古しませんでした幸 私は先生に一番近い裁ち板に居りましたから、他の生徒が先生のところへ持つて來て見て貰つてゐる時に、先生が、どこか惡い箇所を見とめられた時とか何か新らしい法を敎へて下さる時とかに、「コレハネー」と云はれる時には、私は耳をすまして先生のお話を橫合からじつと聞きとりました。先生が「コレハネー」と前置きして云はれることは、何時でもためになる事に定つてゐる。もとより田舍の事で、一人〱違つた材料によつて、個人式に稽古をするのでございますから、自分は木綿の單物を縫ひつゝ、他の人の袴の襞のとり方も聞きますし、裾綿の拵へ方も覺えました。それでは色々に氣が散つて、かへつて惡いと仰せられるでございませうけれど、材料の出來ぬ者はこんな事でもせねばならぬのでございます。つまり私は自分の縫つた丈けの材料で稽古したのではなくて、幾分かづつ生徒全體の材料によつて稽古をしたのでございますそれで生徒の內、誰か急ぐ物を縫つてゐる時には、私はいつでも喜んで手傳はして貰ひました。急ぐものが早く出來て都合がいゝ計りでなく、早く縫ふ練習には一番よろしうございます。何でも叮嚀にはせねばなりませんけれど、いらぬ所へ空念を入れて、一つの縫物抱へたら五日も六日も矢つ張り同じ一枚を布晒す樣に引きずり廻してゐるのは、あまり好い器量ではございません。何事も瘦せ我慢で凝り固つてゐる私などは、人の前で裁縫するのさへあまり好みません、一人引きこもつて誰れも知らぬ間に仕上げて置くのが理想です然しこんな主義の縫ひ方をする人は、仕上げた時によ

くくしらべて見ませんと、縫うた心算が躾計りであつて、躾をとつたら口開つゝて仕舞ふ樣な醜態を演ずる事がございます、又時には待針が殘つてゐることもございます。昔或ところの花嫁樣が、姑の着物を縫つて、其の中に針があつたといふので、而かもそれを故意の樣に云はれて、そのため遂に離緣されたといふことでございます。

◎母のないだけに稽古に苦勞する

それから何かの都合によつて、裁縫學校を度々轉校した人の話に、どうも學校がかはる度に、先生がかはる度に、縫ひ方や順序がかはつて困るといはれましたが、それは稽古の內は矢張り其の學校の法式通りに習つて置いて、自分は自分で勝手にどの法式でも、稽古した中の長所〳〵をとつて、又自分獨特の或流を拵らへたらいゝと思ひます。「細工は流々仕上を御覽じ」と諺にある通り、兎も角も仕上げが立派でさへあればいゝのでございます。

女は春日にこげてさへ穢多の嫁にも貰つて呉れんと申します位でございますから、いくら山芋派の女でも一通りの着物が縫へないではと思ひまして、私は母のない丈けに、心盡して苦勞して稽古をいたしました。多き誌友の中の、幼いまだ裁縫初步のお方の中には、お母樣のない、私の幼時に似たお方が或はないとも限らんと存じます、それ等の方の御參考とまでにはならずとも、御一讀の榮を得ば嬉しく存じます。又慈愛深き母御樣の御手に縋つて豐かに、溫かに、樂しく、面白く裁縫のお稽古をしてゐられつゝあるお方々は、不幸な者に引きくらべて、益々お勵み遊します樣にすゝめ申します。

世には、十五六の頃迄も、糠袋さへ滿足に縫へなかつたといふのに、僅かの年月の內に、裁縫の塾を開いて、立派に人を敎へてゐる人さへ、あるのでございますから——。

* * * * * *

始めてお産をする方へ

若き母

▲はしがき

病院で始めてお産を致しました私は、二週間目に家に歸りました。子に無經驗な若い者ばかしの私の家ですから、兼て色々の育兒の書物などを見ておきましたものゝ、さてかうして自分が手に掛ける樣になると、なか〳〵書物にない事が澤山出て來ますので御座います。早い話が子どもが泣きますと、たゞ氣がハラ〳〵として、何で泣いてゐるのか少しも調子がわかりません、餘りよく眠ると云つては、病氣ではなからうかと思つて見たり、なか〳〵骨の折れるもので御座います。御經驗のお有り遊ばす方は、とにかくとして、これからお子持におなりなさる方や、お姑の無い方に、幾分か御參考になるだらうと存じて、こゝに私の失敗致した事を申上ませう。

▲臍で失敗す

丁度生後十五日目の夜でした、例になく泣いて、抱いてもどうしても泣き歇みません。そして少し眠つたかと思ふと、直ぐ醒めて、また泣くといふ風なので、もしか着物にでも針がさゝつて居るのでは有るまいかと、しらべて見ても別に見あたりません。偶然お臍に氣が附いて、見ました處、少し赤くなつて、たゞれた樣でした。早速お醫者をむかへて、手當を致し、泣き歇みましたが、その原因は多分お湯を使はせた時、拭き方が足りなかつたのと仕末が惡かつた處へもつて、馴れぬものが、下手に抱いてゆすぶつた爲、着物にすれて痛みを增したのでせう。このお臍は大切なもので早く氣が附いてよろしかつたものゝ、手おくれ致すと全身に毒が廻り、終には生命をも取られて仕舞ふので御座いますさうです。また出臍も親の不注意から起るのですが、これ等を前以て防ぐのは、お臍帶が取れた後も、繃帶をしておく事です、その仕方は繃帶を一尺三四寸に切り、三枚程重ねたものをお湯を使はした後に、お臍を極柔いガーゼか、丁寧にすれば水四分アルコール六分の割合で混ぜた液に脫脂綿をひたしたもので周圍をかろく拭き、デルマトール（藥屋に有）を筆の先につけて、上から振り掛け、ガーゼをあてゝ繃帶を互ひに入れ合せて置くので、かくすれば出臍をふせぎ

たゞれも癒えるので御座いますが、お臍から膿でも出る樣になると、お湯には入れられず、そしてなか〳〵長引くもので御座います。

△六十日間灌腸す

少なくとも一日に二三回なければならぬお通じが、お臍を惡くした頃から無くなり、二日も三日も致しません、而して熱が出て呼吸も何だか苦しさうに見受けられるので、早速先生に見せますと、灌腸をして下さいました。何かお藥でもと申しました處、先生は頭をお振りになつて、決してこんな日も若い子どもに、服藥はいけません、服藥したゝめに、却つて弱くする樣なもので有るから、乳を吞ませる前に、盃に一ぱい程のお湯を吞まして御覽なさいとの事で、二日ばかり過ぎましたが、依然として大便が出ません。それならば、今度は蜂蜜か、水飴をお湯にとかしたのを盃に一ぱいづゝ吞ませて見よとの事でしたが、それも効が無いので、灌腸をするより致し方が無いので中二日おきに灌腸を致しました。その仕方はリスリンと水とを等分した者を灌腸器に大人の半分入れ、器の先は腸を傷めぬ爲に、ワゼリンかオレーブ油を塗つて挿入するので御座います。斯くして、二ヶ月間續けましたが、その間、他樣がそんな大騷な事をせずとも、何々といふ賣藥が有るから、お吞ませなさいと、色々とお勸め下さるので、幾度か迷ひかけましたが、イヤ〳〵信賴せるお醫者の言葉にそむいてはと、灌腸を致して居りましたところ、丁度二ヶ月目に、獨で出る樣になりました。その時の嬉しさは今に忘れませんが　或る方は此の灌腸を、一ヶ年間もお續けになつたさうです。むやみに下劑藥なんか吞ませては、却つて子どもに苦痛を感じさせ、弱く致すやうな事になるので御座います。

△乳の吞ませ過ぎ

これも生後間無き時でした、始め頭が赤くなつて、ブツブツが出來そして、終には大きなフケの樣なものが出來てまゐりました。これは乳の吞せ過から起るので、若し氣がつかずに捨てゝ置きますと、終にはおデキになつて、親は勿論の事、子どもにも不愉快な目を致させなければならぬのです。元來子どもには、三時間毎にお乳を吞ませられればいゝのです。知らぬものはたゞ泣くと云つてはお乳をふくませ、それがため胃腸を惡くし、下痢を起させ、終には瘠せた發達の惡い子

ともにして仕舞ふので御座います。彼の田舎の子の丈夫なのは、どうかと申すと、母親は田畑へ働きに行く前、充分お乳を呑せ、お晝頃食事で歸つた時、呑ませるのですから、子どもはお腹をすかして待つて居るといふ風で、時間が規則正しく、それが大變子のためになるのです、第一お乳の時間を定めると睡眠も定まりまことに便利です。

△乳にグリ〱

一時もなくてはならぬものはお乳ですが、始めての人は調子が少しもわかりませぬ。とにかく始めて吸ひ付かれた時は、非常に痛い者ですが、それを辛棒して呑まさぬと、グリ〱が出來て、能く乳線炎にかゝつて切らねばなりません。第一は不潔な手で乳頸をいぢらぬ事です、そして乳を呑ませた後は、アルコールで拭いておくといゝさうです。若乳を握つて見て、底がかたい様でしたら、呑ませた後で、乳吸器か、又は手にて能く絞り出して置くと、工合能くお乳が張つてまゐります。丁度お產をしてから一ケ月半も過ぎた頃でしたらう、右の乳の一部が少しかたくなつて、呑ましたり、觸れたりすると、痛さを感じるので、早速お醫者に聞くと、氷で冷し、猶繃帶か何かで乳を上向ける様に、頸からかけてつるし、而して其のグリ〱の部分は、アルコールを浸したガーゼをあてゝおけとの事でした。早く氣が付いたから多分切らなくつて濟むだらうとの事でしたが、痛みは益々烈しくなる、と云つて呑まさねば終にはお乳が出なくなつて仕舞ふさうですから、辛棒して呑ませ、頻りに氷で冷し、三日も致しましたら、俄かに痛みが止り樂になりました。

△牛乳

段々成長するに從つて、乳も澤山呑む様になりますが、私は乳が不足になつて參りました。乳母を雇ひませうと思ひましたが、なか〱むづかしいもので、殊に乳母なぞと申すものは、マア敎育の十分有る者は少ないと申さなければなりません、餘りに干渉しては、乳母も困るでせうしと、終に牛乳を足す事と致しました。牛乳は申までもなく、產れたての子には濃過ぎます、その混ぜ方が不適當で有ると、子供の發育が惡くなりますから、便に能く氣を付けねばなりませぬ。先づ生後間も無き子には、牛乳一合ならば湯三合位混ぜねばなりません。親心として、餘りに薄いと可愛想で

また少しでも營養を取つて大きくしたいとの心から、つひ濃くし過ぎるものですが、これは却つて惡いのです。牛乳で養ふ子は、便が普通より白色を帶びるが常です、若し、白いかたまりが有れば、それは濃過ぎるのです、成長するにつけ、段々と湯を減じて行かねばなりません。子に依つて牛乳を呑せると、便秘するのも有れば、下痢するのも有りますが、一體牛乳を薄めると、人の乳と變る處は、糖分と澱粉とが不足となるさうですから、水飴とオモ湯、或は薄い葛湯を混ぜると、同じ事となります、またオモ湯を混ぜると、下痢をしなくていゝさうです。それから最注意すべきは、牛乳を呑ませる器の消毒です、呑せた後は、必ず湯で洗ひ、殊にゴム管は、牛乳が附着して腐敗する者ですから、その儘に長らく捨てゝ呑ます時は、子供の口中を痛め、病氣となる事が有るさうです。乳頸とゴム管は、使用後清水に浸して置き、またやはらかになれば取り換へる事を忘れぬ樣にしなければなりませぬ。

▲泣き聲

子供は言葉で告げる事が出來ませんから、何事でも泣いて告げます。お腹が空いてか、何處か痛んでか、かゆいのか始めの内は解らぬ者でたゞ乳を呑せるものですが、追々と經驗すると解つて來ます。或る人は、餘り泣くので、着物を見ると、針がさゝつてゐたといふ事を聞きましたが、子供は痛ければその部分を動かします。或日泣いて少しも歇みません、別に何處が痛いと云ふ風でも無く、たゞ體をかたくつゝぱるばかりでした、偶然手に氣が附きました、可愛想に子供は凡て手を縮めるものですが、おシメをし換へた折、着物を引つぱつた時に、手をそのまゝくゝつて仕舞つたので、痛かつたのです。氣が付いて手を出すと、直ぐ機嫌よくなりましたが、これは一例ですが、母親たる者は細かい處迄も、注意をしなければなりませぬ。

▲入浴の注意

授乳後三十分許り立つた後が一番よいさうです、空腹の時や、眠る前などに入浴させると、泣く事が御座います。また入浴中、乳を呑ませる事は絶對に止さなければなりません。而して口中眼などは、決して別のお湯で洗はぬと、眼病や、口中の病をする事が御座いますさうです。頭は石鹼に限るさうですが、刺す樣なのはいけません。太つた子は、頭や、手の節や、股が

たゞれる事が有りますが、身體は糠が一番いゝ様ですたゞれた部は浴後能く拭いた後、亞鉛か澱粉（藥屋に有り）を塗つて置く事です、冬季はとかく風をひき易いのですが、熱さへなければ入れてもかまはぬ代りに浴後は戸外に出さず、暖かくして眠らせる様にすればいゝさうです。

▲衣服

大人より一枚多く着せればよいとの事です、厚着をむやみにさせると風を引き易くなります、子供は中までも無く、皮膚が弱いものですから、下着等は縫目を表にして仕立た方が能い様です。又綿ネールの下着ならば、袖だけは毛の無い方を肌に附ける様にしないと手を握るものですから、毛が指の間に挾まり、不潔になる爲たゞれ易くなります。おシメは可成柔かいものがいゝのですが、毎日〳〵水ばかしで洗つてゐると、堅くなるもので、時々熱い湯で洗ふと柔になり消毒にもなります。またおシメを干した時は、必ず太陽の入らぬ間に取り入れぬと、蟲などが附着してゐる事が有ります、また壁際も蟲がつき易い處ですから注意すべき事です。

▲下痢

私の子は始めは大便が遠くて困りましたが、成長するにつれ時々下痢を起します、子供の胃腸の良否は大便で先づ素人は見て行かなければなりません。完全に消化された大便は、丁度玉子の半熟の様なものですが親が青物を喰べた時は別として、青い便や、水分を多く含んで、白い塊を見出す様でしたら、早速醫師に乞はねばなりませんが、輕いのならば、親の乳を減じて脂肪の少ないオモ湯か、薄い葛湯を呑ませる事です。下痢を捨てゝ置く事は、發育上大變害が有るさうで御座いますから、注意をしなければなりませぬ。

母のをしへ

佐分華影

◎周圍に氣をつけよ

あゝ今日は大變寒いわ、あれ〳〵木の葉の飛んでゆく事ホヽヽあつ焦げ臭いわ、誰、おや私、まあ袖を。まあお前にも困るね、それでいつも云ふぢあないか、

何でも周圍に氣をつけなければ、他家へ嫁つたらどうするの、何でもうつかり屋で困つちまうね。一色に目をつけると夢中だから、どんなに惡口云はれても聞えやしない、あゝ綺麗な〳〵と云つて其方ばかり氣を取られて、足の方をうつかりして居れば、麁忽があり、又道なら川の中へも落ちるよ、氣を利かせるの、機轉を利かせるのです。一目其人を見て、あゝ機轉の利く人だと感心させる人は解つて居る。何か一種手に持つて來たら、今度出て行く時は、持つてゆく物はないかつて、見廻してゆく。散らかつて居たら、片附けて、と云ふ樣に十分に周圍に氣を配る。袂には臨時に要る時の小さい襷を入れておく。ぞろ〳〵として居ては汚れて了ふ、心を働かせるのは六づかしい樣で譯ない事です。

◎雲脂を掻いて離緣された嫁

潔ないね、このまあ見せのだしてある事、不用になつた物は流元へ出さなければ、大御馳走でも拵へた樣に、何でも規律よくしなければ、整頓と云ふ事をいつも心がけてをらなければ、他の家へ行つても臺所押入等皆整頓としてある家だと、其の主婦や下女などの平生が思はれて床しく、居心地がよいのに、其れに反して臺所など、お祭りの樣に、大混雜、押入を開けられても、無茶苦茶に何か投り込んである、流元は夏なら洗ひ殘しの物に蠅が一面にをる樣では、其の家がいくら大きな家でも、主婦が美人でも、交際家でも、何だか居るのが嫌になつちまふ。荷作りする時にも、よくきまりよく何か入れるとよくは入るぢあないか、鏡臺の引出しには髮の毛一本も散らかつてない樣に、鏡のくもりは毎朝とる、鏡のくもつて居るのは其人の心がくもつて居ると云つてもよい。

料理などする時は、手を洗ひ髮をとき上げてするのです、〇〇の嫁さんは、姑の病氣の時、粥を煮る時に鍋の上で頭を掻いたのを姑が見て居て、雲脂は毒だと云ふ、其毒を私に食はせると云つて、とう〳〵離緣になつた。餘程注意しなければ、姑と云ふ人は、嫁の縫つた着物から、針が一本出て來ても離緣にする。嘘ついて離緣になつた人もある、決して僞りは云つてはならぬ。僞りを云ふと一生の信用を落して了つていらぬ心配を自分からするのです。

女は閑雅でなければなりません、人には親切にして今度の姉樣の事について、一人で困つて居る時にも、

○○樣が親切にして下すつたから、どれだけ助かつたか、十圓二十圓の祝儀を戴くより、有難かつた他人の方がどれ程親切だか、親類だとて誰だとて、決して人を當にして居てはいかぬ、依頼心など起してはいけませぬよ。

◎藥の呑みちがひ

午前に雪のちら〱降るなかを、十三四の目の恐ろしい知らぬ者が見ても身體の變な子が、母親らしいのにつれられて行つたらう。あれはね、杉戸の人で、生れて半期許りたつた時、鼻を出して風邪の樣だから親達が××××××丸と云ふ風邪藥を、大人でも多くのむと酷いと云ふのを、分量も何も讀まずに、何程かのませると、一時間計りたつと、熱が出て、苦しみかけたので、これは風邪が酷くなつたと、又其藥をのましたら、身體中紫色になつて、血線と云ふ血線は皆はれ上がつて、二目と見られないやうになつた。初めて親たちの目が覺めたのか、俄に醫師へ連れてゆくと、「もう此の人は此んなになつては駄目です、仕樣がないから家へ行つて葬式の用意でも」と宣告した。

親達は今更の樣に恟くりして、又他の醫師へ連れて行くと「貴女この子は繼子ですか、貴女の實子ですか」と云はれたので「いゝえ私がたしかに生みましたのでどうか後生ですからお助けを」「あ、さうですか、繼子でしたら此の事を警察へ屆出なければならぬから」と九死に一生あるかないかの子を見て「此の藥をのませなさい、さうすると、二時間程立つと苦しむのを靜止と押へて居ると、なほる、宜くならなければ仕樣がない」と仰有つた。藥をのますと矢張り苦しみだした、運よくて全快なつたのが、あの子だとか、今では目が不自由で、白痴の樣になつたとか云ふ。賣藥を無やみにのましては、とりかへしのつかぬ事になる。病氣になつたら早い處醫者にかけるか、風邪位と拋棄つて置くと、姉樣の樣に鼻カタルでも手術をうける樣な事になる。よく醫者が云ふでしやう、田舍の餘り生活のよくない家では、病氣でもほうつておくから、そしてさあとなると俄に醫者にかけると、もう手遅れで、其の樣な人が一番貴い生命をなくして、醫者の方でも困りますと。よく注意なさいよ。

豐子の小さい時に斯ういふ事があつたよ、二ッか三ッの時か覺えはないが、朝、子守に脊おはしておくと子守が豐子をおぶつたなりで、お宮さんの日向へ行つ

て、子守仲間で遊んで居たが、お晝の時に歸つてくると、鼻の上に酷い疵痕があるので、聞くと、知らぬと云ふ、豊に聞くと、守が痛い事したと云ふので、よく聞き糺すと、子守等と遊んで居ると、歸りたいと子が云ふので、子守が遊びたいので、鼻柱の所をつねつたのだと、眞實にあれ等にも困る。子守なんが餘程性質の溫和な子でなければ、使はない方が子の利益にかへつていゝよ。

◎價も知らずに物を買ふ

お前其れ何程です、え知らない、通帳見なければばつて、代も知らずに買ひにやつたの、困るね、よい物があると代も聞きもせずに買ふなんて、米一升何程、鷄肉百目何程つて事も知らないだらう、遊んで許り居て。一錢のお金でも、天から降りはしない、地から湧きもしない、皆心配して自分の物にするのです、一錢の錢でも大切にしなければなりませぬ、お金がなければパン一片買ふにも困るぢあありませんか。金を借りにくる人さへある、金を借りる人は或る程度の人の外は充分贅澤に虚榮を飾る人の中にもある、其の樣な人は極く田舍ではない、都會になる程多い。いつか小説を讀んで、女中を三人も使つて居て、僅五拾圓のお金がないので、奥樣の着物を賣るなんて、と聞いたでしよう、其れも虚榮なのです、儉約にすればいゝのに、女は虚榮で身を持ち崩すとは此のことです。

お芋のお料理と御飯焚き

さつき

田舍からお薩摩を貰つたので、今日はお薩摩料理をする。何か皆をあつと云はせるやうなめづらしいものはないかと、ノートブックを繙げて、うの目鷹の目で探してみると、在學時代に筆記したお薩摩料理が六つ七つあつた。この中でも殊に毛色の變つたものがよからうと思つて、海苔巻芋と、かまぼこ芋とをこしらへる事にした。それでもし時間があつたら、芋やうかんもこしらへるつもり。今日は母樣の手を借りないで、私一人でやる、割烹前掛を胸からかけて、手拭かぶつた、これでどう見ても一人前の料理番のやうに見える。

先づはじめ、お芋の皮をむいて水につける、今迄水につける事は知らなかつたが、昨日母樣が、かうする

と、灰汁が出て、眞白になると仰有つたから、それで水につける。

暫時そのまゝにしておいて、次はそのお芋を、大根下ろしで下ろした、それを布巾につゝむで、水氣をしぼり、メリケン粉を入れて、よく煉り合せて、お砂糖と、食鹽とを、好加減に入れて、味をつけた。それを丼へうつして、ぬれ布巾をかけて置く。

次はお芋を洗つて、皮のついたまゝ蒸しはじめた。お釜の下がいくらしても燃えつかないで、悲しく、殆んど半泣きの有樣であつたが、ふと、火箸でかきまはす拍子に、下を少しあけたらとろ〳〵燃え出した。

さあ占めたと思つて、薄い木葉を少し立て加減に入れて見たら、ぼつと燃え出した、今日がお釜の下のもしはじめ。學校ではいつも定まつた方がして下さるので、一度も燃した事はなかつた、これからも斯樣に下をあけて置けば、すぐ燃えつくだらう、はじめてして、もう一つ經驗になつた、お釜の中へ蒸籠を入れてむす。

幾度も〳〵ふたを開けて、箸を通して見る、ずつと通つたのは二十五分の後。

この間にさつきのすり芋を、かまぼこ板へかまぼこなりにつけて置く、さうして、その上を杉箸で、縦に筋をつけて、その間にひき茶をふりかけた。

蒸したお芋を出して、又蒸籠の中へ、前にしたかまぼこ板を入れて暫時むした。

皮をむからうと思つても、中々熱つくてむけない、やつとむいて、それを裏ごしにかけた、少しむしすぎたか軟らかい樣である。これを半分にわけて、一方の方を少し殘して置く。

もう蒸せた時分と、ふたを取つて見ると、お芋の上が湯氣で一杯、折角ふりかけたひき茶は流れてしまつて、汚たならしい、あゝ失敗した。これからはひき茶はむし上げてしまつてから掛ける事にしよう何だかがつかりしてしまつた。まだ芋やうかんして蒸籠使ふからその間に又お芋をむして置く、なか〳〵急がしい。

こしたお芋に、お砂糖と食鹽とを入れ一方の少し殘した方へは、お砂糖と食料紅とを入れ、ごく薄すり色をつけた。次には淺草海苔をあぶつて二枚合せ、前にこしたのをうつすり延べて、又其上へ色をつけたのを細く撚り加減におき、端からクル〳〵と海苔巻ずしのやうに巻いて行つたら、青と、白と、薄桃色とで、本當に綺麗であつた。

お皿へ入れて置き、さつきこした味をつけない方の

お芋へ、昨日赤御飯たく時とつておいた、小豆と今日買つた田舎まんぢゆうのあんと、メリケン粉少し、お砂糖とを加へてよく煉り合せ布巾につゝんだ。

蒸さうと思つて、お芋を出すと、蒸し過ぎた故か、ベト〳〵の水芋になつてゐた。自分ながら可笑しくもあり腹立たしくもある。

その後へ、前のを入れて、又十五分ばかり蒸した。クル〳〵と、順よくしたから、蒸籠も少しもあけずに思つただけ出來た、しかし時間は隨分かゝつた。遊び半分にするのだから好いやうなものゝ、實用にこんな事しやうと思つても到底出來ない。

火をけして蒸籠から出して見ると、これはよく出來た。よろこんで暫時さまして置いて、その間に海苔卷芋を切る、丁度カステーラのやう、後前を一寸食べて見たら、お芋のやうではなかつた、これなら父樣も母樣もきつと、おほめなさるに違ひない。次にかまぼこをきる、これは外見が汚たならしくて、一寸食べる氣にならない、手間損である、海苔卷芋程ではない。でもひき茶は流れてもいゝ匂ひ。

次はやうかんを切る、少し軟らかかつた、でも芋やうかんだから仕方がない。皆好加減に、鉢やお皿へ入れて、やうかんは、お茶受けに、後のはお副食にした。やうかんは思ひの外よく出來て、お二人共ほめて下すつた。

夜食の折、かまぼこと、海苔卷とを食べた。海苔卷芋の方は甘過ぎてお副食にはちと不向、やはりこれもお茶菓子の方、仕方がないから、少し醬油をつけて食べた、めづらしいといつて下すつたので、嬉しかつた。かまぼこの方は落第、手間のかけ損、でも三つの中二つ好かつたから嬉しい、やはり割烹を習つたおかげである。(十二月十日)

○

今日は母樣御留守なので私が御飯をたく。

お前がたいても不可だから、私が歸つて來てたくと仰有つたのを、無理に、私だつて學校で習ひましたもの、御飯ぐらゐたけますわ、安心して行つていらつしやいと、一も二もなく安請合してしまつた。しかし心の中では少し、不安であつた。學校で習つても、唯お講義ばかり、實地の時は、いつも世話好きの、新條樣が一人で上手にたいて下さるので、皆も先生も安心して任せきりなので、まだ一度も實地に行つた事はないが、火の燃し工合は此間覺えたから大丈夫、ノートを

開いて見ると、「米一升に對する水一升二合、吹き出したれば直に火を引き、ふたの上に桶に水を入れてのせ置くべし、但し火は初め少しく強火に、吹き出す前になりて、少しく弱火にすべし、火引きて後十分にして下ろし、五分にして移すなり」これだけ書いてあれば大丈夫、いつもより屹度おいしい御飯を、たいて見せると力味かへつて、お米が一升でないと都合が惡から一升磨いで、水を一升二合入れて、お釜へ移した。火はもう一度燃してゐるから、容易く燃え出した、待ち遠しくて途中でふたを開けて見たくなつたが、ふたを開けると御飯が死ぬと常から母樣が云つてゐらしたから、じつと我慢してゐた。やがて、もう好い時分と、薪を一二本減らしたら、ぷつぷーと吹き出して來た、もう嬉しくてすぐ薪を引いてしまつて、ノートにある通り、水を一杯桶に入れて、お釜のふたの上へのせて、十分たつのを待つてゐた。

下ろす時ふたを取つて見たら、南無三上の方にはまだ水が殘つてゐる、あゝ失敗じつたかと思つたが、今更仕方がない、今迄の元氣は何處へやら行つてしまつた。お講義も當てにならぬ、母樣歸つていらしたら何と云はう。

いつか十分の餘も立つてしまつたので、はつと思つてお食櫃に移して見ると、案の條、上の方はクチヤクチヤ、丁度糊のやう、下へ行くに從つて、底にはまだ水がある。さつき上にあつたのが、屹度下へ廻つたに相違ない、火の引き樣が早かつたのだものと、こがしてもかけて置けばよかつた、まだこげた方が始末がよい。

母樣御歸り迄氣が氣でなかつた、歸つていらしたから譯を話したら「まあいゝわね、それもお稽古の中だから、何でも一度は失敗じつて見なくてはわからないから、何好いよ、お粥にでもするから。仕方がない、一度たくから見てお出で」とやさしく云つて下すつたので、ほつと重荷を下ろした氣持。

母樣たいていらつしやるのを見てゐた。水は私のときより少なかつた、火は、一たいに強火で、吹き出して來てから暫時立つて、母樣は「火を引くのは、此湯氣のまだ横へ散る中は不可です、ずーつと上へ上るやうになつて來たら、大きいのからそろ〳〵引いて行つて、終りの小さいもえかけは、ゆつくり引くやうにすればよい、十五分程立つたら下ろして、少しむらして移すと丁度好い御飯が出來ます」と細々敎へて下すつ

た。移す迄見てゐたが、丁度好い御飯であつた。もうたき加減はすつかりわかつた。

學校で骨折つて聞いた、お講義よりも、母樣に教へて頂いた方が、早く覺えられて役に立つ。今迄は一も學校、二も學校と殆んど學校で習つた事でなくては信用しなかつたが、他の物は兎も角、お料理法は實地家庭で稽古した方が却つて私等のためになるといふ事がわかつた。（十二月十七日）

私は裁縫が何より好き

田舍女

婦人として何が一番大切だと云つて、裁縫ほど大切な物はないと思ひます。一家の主婦になりましても、良人に滿足な衣服をきせる事の出來ない婦人が澤山あります、また一寸も心得のない方も御座いますが、まことになげかはしい次第で御座います。また裁縫一通りは習つて來たから、もうなんでも出來るとおつしやる方もありますが、かう云ふ方に限つて、實地にあたつて、其れほどうまく出來ないものです。男子が外出した場合、あまり不格好に出來て居る衣服は、其の人ばかりのはぢではなく、妻たるものゝ非常なはぢではありませんか、裁縫を充分こゝろえて居れば、やりくりと云ふ事が大變上手に參ります、又はぎものをするにも、仕立屋へ出すにも、大そう利益になるものです。

次にかゝげるのは實地の御話ですが、元當地にも居られた方です。其の良人たる人は、其れほど價値のある人でもなかつたが、其の妻は非常な交際家で、また大變に裁縫が出來たので、遊びに行つた前で、はり仕事などして居れば、私が少し手傳て上げませうと言つてたすけるので、追々人望を得、其れがためにだんだん良人の地位も高くなり、今では靜岡に立派な家庭を作つて居るとの事です。何んと裁縫の力も大變なものではありませんか。只今中流以上の家庭では、女は大抵、女學校卒業、または裁縫學校を卒業いたしますから、一通は御存で御座いますが、さて實地にあたりますと、其れほどうまく仕上らないものです。私はようく小學校卒業したばかりで、か樣に申ましてはまことに失禮です、或はおいかりになるお方もあるかも知れませんが、私が今まで裁縫をならつて來た經驗でよくわかつて居ります、私は小學卒業後當地では一番

上手だと云ふ仕立屋に參りました。只今でも、勉强最中です。先生の御はなしには、當家へも女學校卒業生又は裁縫學校を卒業した方も來るが、仕立させると存外不出來で、とても其のまゝではいけないと云つた事がよくあります、まさかとは思つたけれど、其後尤な事とおもひました事が、たび〳〵御座いました。この樣な方ばかりも御座いませんでせうが、裁縫を習ふには一時的ではいけません、一時的に習ふと思ふには、やはり出來はわるくても、速成などが良いでせう。どんな立派なる衣服でも、仕立がわるいと、其れほどに見えません、これと反對に少し位物がわるくても、仕立が良いと、はるかによく見えます。私の參る家は先生が二人、弟子が七八人位なものです、學校とは違ひますから、弟子はあまり澤山はおきません。最初は先づ袖口を付けたり、裏身頃を縫ふ位なものです、これとてもうまく出來ると云ふ事は、中々むつかしい事です二三年位毎日〳〵同じ事をして、其れでやつと氣持よく出來る位なものです。二三年と申しますと、ずゐぶん長くて、實にあきますが、そこがしんぼうです。ちりめんの袖口など付けましても、綿を入れてくゝります時、どうもねぢりたがるものです、ほんのさゝいな事ですが、熟練せねばうまく參りません。少し位ねぢつてもよいだらうと云ふ方もあるかも知れませんが、袖口をくける時、綺麗にくけ上る事が出來ません、八ツ口でも丸でも、ごく丁寧にしないと、後で直さなければなりません。手ぎはよく出來ると出來ないとは、重に熟練ですが、一つは器用不器用もあります、裁縫を覺え樣とするには、先づ熱心に人のくけて居る所、又縫つて居る所などを見るのが肝要で御座います。次に先生のヘラをする時、注意してよく見て居ると、後日自身がする時、大いにためになります。又はほどき物をする場合には、殊に注意して、どう云ふ工合に縫つてあるか、くけてあるかを心して見るのも、大變利益のあるものです。すべて縫物をするのに、急所〳〵はごく丁寧に一針ぬきにいたしますと、出來上つてから大變よく見えます。羽織で申しますれば、衿、又はすそのまがりめを一二寸、袖付ならば縫ひ始め、縫ひ終り、山の所などです。其れからくけ物を致しますのにいく針も幾針もすくつては、のたり針になつて、外見が見にくゝあります。針を立てゝ表裏一度づゝすくつたらば、針をぬかなくてはだめです。又曲り目は、ほんの少し表をゆるめに絎けて、丁度よくなります。白

衣などを縫ひます時、心なしにぬひますと、縫ひじわが非常について、のりが落ち、布がいたみます。縫ひじわの出來ない樣にぬふには、少しづゝ縫つては、針を左の手におさへて居ながら前に縫つた所を持てかるく引けば決して皺はよりません。裁縫するのに、自分が上達して參りますと、大變面白みが出て參ります、上達して來れば、いつも同じ樣に出來るかと云つても其れは一樣には行きません。先づつまを縫ひますのに同じ人、同じ手、同じつま形をあてゝ縫ひますのに、三枚ぬへば三色です。なぜかと言へば、第一布にあるのです、耳の大變にはつて居るのもあれば、中だけたるいのもあつたりなんかして、中々思ふ樣にはまゐりません。其れから裁縫致しますのに、最初ヘラが大切です、もしヘラが知れない時は、とんでもない間違を來す事があります。チリメンなどでは、五厘や一分の違はわかりませんが、白衣は一番困ります、五厘でも間違ば直さなければなりません。幅がせまくて縫ひ出すと云ふ場合は、布に針穴があいて、古物だと言つて歸される樣な事がないとも限りません。其れからはさみで物を切ると云ふ場合、よほど注意しないと、切りそこなひがあります。切りそこなつても、同じ品物のある時は良い樣なものゝ、同一の物はまあないものです。私は生れつきそゝつかしいので、二三度裁ちそこなひました、一度などはかなしくて一日泣き通した事も御座いました。其の後また羽織を裁ちそこなつて、其の時は自身もよほど注意して裁つだけは滿足に裁ちました、袖を縫ふと思つて二つにきり、ヘラをしようとすると、袖丈がないのです、はつと思つてしばらくは氣が遠くなつて居ました、私は衿と袖とをまちがへたのです、羽織を裁つたらば、衿は二つ折にして置けばよかつたが、逐忘れたゝめに、大變なそゝうを致しました。其れですから皆樣にも、羽織を裁つたらば、衿は必ず二つ折になさいと申します。其れからこてをかけますのに、うつかりしてかけますと、まゝ布をやく時があります。私も只今勉强中ですから、經驗と申しましても、あまり澤山は御座いません。また私は次の樣に思ひます。女はたとへ料理音樂生花茶の湯など出來ましても、人間は七ころび八起きと云ふ事がある通り、どんなに落ぶれないとも限りません、其の時は裁縫ほど、やくにはたゝないでせうと思ひます。婦人が生花など習ひましても、數やりますと、前に習つた方はすつかりわすれてしまふさうですが、裁縫は一度

おぼえれば、決してわすれません。私は針仕事が非常にすきで、宅で今日は休めとでも申されますと、かなしくてないた事が度々御座いました。熱心にさへすれば手はます〳〵上つて參ります。

化粧問はず語り

鈴音

お正月の準備といつては、ちと大げさだが、二三日前から氣に落付きがなく、髪を結ふさへ大儀になつて一昨日洗つたまゝ、ひつつめのぐるまきにして置いたのを、明日是非とも、チヤンと結はなくちやならないから、今日から前髪の出しぐせを付けて置かないと、元日早々又癇癪おこすのもいやだから、小さな金盥にお湯を取つて、ゴシ〳〵くせなほしゝて結ふ。前の生際の所が、ひつつめのくせがついてゝどうしてもふつくりしない、あゝッほんとうに癪だ、なぜ私の髪はこうくせが惡るいんだらう、一度だつて氣に入つたやうに前髪やたぼの出た事はない。其うちに手はてゞえて來るし、もう面倒くさいから、やけにぐい〳〵とかして、さつさと道具片付る。

母樣が美惠ちやんのリボンがなかつたから、御苦勞だけれども買つ來てやつておくれつておつしやる。こんな髪して、と思つたけれども、まあ〳〵妹の嬉ぶ事と縞セルのコートにボーアまいて出かける。

町々では停車場通りから狸小路の方まで、歳暮聯合大賣出しなんて、提灯華やかにさわいで居るし、道行く人々の足音も何となく忙しさうに聞える。どの店も一つぱいではいれさうもないから、少し遠いけれどもなかうろこまで行く。眞紅の五吋のを三尺と、手袋もほしいつて云つてたからと、これも赤いのにミツト入りの半手袋と、自分のたぼ櫛買つて外へ出ると後で「Sさん S さん」つて呼ぶ人がある。ふりかへつて見るとまあクラスメートのKさんとTさん「まあしばらくねえ、其後お變りもなくつて？」

「えゝありがたう。いよ〳〵十九も今日で左樣ならね」

「あなたなんかいゝわ、やつと二十でせう、私なんかもう二よ、お婆さんになるばかりだわ」なんてさも情無い樣な聲を出す。Tさんは學校時代にもましてお若いふつくり、お髪なんてまるで濡れ羽のやう、前もたぼもふつくりと出たルイザ卷、私の雀の巣と較べたら

泣き度くなつて了ふ。「まあお婆さんなんて私の事よ、見て頂戴私の顏色を」と云ふKさんのお顏を見れば、ほんとうにあのいき〳〵したピンクの頬の色は何所へやら、茶色した皮がしわだらけ、睡眠不足の樣な力の無い目を伏せて、如何にも精無さうにしていらつしやる。「さういつちや惡るいけど、ほんとうにKさんお顏の色があんまり善くないのねえ、Sさんも似たものよどうなすつたの？」と美しいTさん「ほんとうに私困つてるのよ、あなたはほんとうにおきれいね、お髮だつてくせはちつともないし、羨しいわ、Tさんどんなにお化粧なさるの？助けると思つて敎へて頂戴」つてKさんと二人でせびつて、やつとTさんのお化粧法を聞くを得た。

「私ねえ、髮なんてくせなほしした事ないのよ、だつていゝ法があるんですもの、あのね金盥にお湯を取つたらね、それをストーブか火鉢にかけて熱くして、其湯氣で蒸すのよ。金盥の上へ頭を出して、蒸しながら靜かにとかすと、くせなんかきれいになくなつて、どうにでも自由になつてよ。何で洗ふかつて？フノリよあまり熱いお湯は毛がいたんでいけないんですつて、熱湯にフノリをとかして少しさめてから靜かにもむのよ、そして何度もぬるま湯でゆすいだら、最後のゆすぎ湯に香油を四五滴たらして、それでゆすぐと乾せてから艶が出て來るのよ。だからきれいだつて？ホヽヽ戲言ぢやないわ。てんどは顏の手入？授業料でも戴かなくちやならないわ。ホヽヽ朝顏を洗ふには溫湯よ、クラブかなんかで垢を除してから、金盥に熱いお湯を入れて、それへ硼酸を一摘程交せて、さつきお話した髮のくせなほしする時のやうに、ストーブか火鉢の上へ懸けて、さめない樣にしながら、其中へタオルを浸して、輕く絞つちや顏へ當てゝ、十五分も繰り返し〳〵、さうするのよ。そして毛穴が開いたとこで、手早くクリームを指先で撫でながら、塗りますの、さうすると皺が延びてつる〳〵といゝ色になりますよ、やつてご覽なさいな。一週間に一度づゝもすると、いつもきれいになつてゝよ。だけどうちの姉の樣に、脂肪性は駄目よ、かへつて吹出がしてそれやひどいのよ、ですから姉なんか決してクリームはつけませんの、美顏水ね藥用の、あれが一番ですつて、始終あれをつけて居ますとね、もう吹出しませんよ、出てもすぐなほりますの。あんな廣告なんてあてにならないと思つてたんですけど、あれだけはほんとうにいゝですつて、だけど色が白

くなるつていふのはうそね。お水晶おしろいね、あれだとほんとうに素顔が白い樣に見えてよ、水晶おしろいも美顏水も同じ原料ぢやないかと思ふのよ、どつちもなめてみるとにがいし、つけるとどつちもピリツとしむんですつて、Ｓさんの樣な脂肪性の方はきつといゝわ、ためしてごらんなさいな」つてニツコリ。

「まあ有がたう、おかげ樣で毎朝癇癪おこさなくてもよくなつてよ、ほんとうにうれしい、Ｔさん有難う」つて二人で何度も御禮云ふ。するとＴさん話しながらもさつきから私の體をぢろ〳〵見て居ると思つたら「あなた着物の着樣御上手ね、今のかはりに今度は私に敎へて頂戴な」つておつしやる。「まあいやね」とはいつたけれども、せつかくのお望み、今の御禮心、内心は少なからず得意になつて硏究のまゝをお話しする

「着樣て別にかはないんですけどね、仕立方にあるのよ、衿肩の所ね、背で五分ほど身頃の方を縫ひ込むのよ、さうするとあまり拔衣紋にもならず、ちよつと衿をすかした樣に見えますのよ。それから袖付はね、後より前の方を五分多く附けますの、袖がちやんと八ツ口の方が後へ行く樣になりますの。それから着樣ね私の樣な背の低い者は、着樣はなるべくひきずらないほどに長目に着ますの、そして後は長くとも前は少しつり加減に着るのよ。腰帶はね、腰の骨の上に止めますの、そして帶はなるべく下にしめて、はしよりを少し出す樣にして、後はお尻の出ない程に上に結びますの。お背の高い方なら腰帶は腰骨の下へしめた方がいい樣ね、後はなるべく大きく結んだ方がいゝと思つてよ。あなたお背がひくいのに、そんな下の方に腰帶していらつしやるんですもの、おまけに横縞なんか召していらつしやるんぢやないの？だからなほ低く見えるんですわホヽヽヽ」つていふと日頃のおめかしやさんにも似ず、まあさうねえ〳〵つて感心していらつしやる。Ｔさんは丸井迄、Ｋさんは北までいらつしやるつていふので、それからコートの柄がいゝの、Ｔさんの紺地に紅の絞り模樣の半襟が振るつて居るの、Ｋさんの琥珀地クリーム色のリボンがハイカラだのつて、三人口置かずしやべりながら、一條通まで來て了ふ。Ｔさんは東へ、Ｋさんは北へ私は西へと別れる「お陰さまで明日から氣に入つた樣に髮が結へるでせう」

「私も美しいお化粧が出來てよ」

「私だつてスタイル甲の上になるわホヽヽ」

「左樣なら」

「いづれ來年……」

冬の日は暮れやすく、町々には最早電氣がついた。火の用心と大きく書いた掛取袋さげた小僧さん達が、〇とか一とかつて家々の印ついた提灯持つて、忙しげに往來してゐる。

母の留守

はざくら

曉の床に溫い夢を破られたのは、痩雀が軒の樋を飛びはねる音であつた。淡く障子に映つた朝明の影は、わづかに寂しさが漂うて居る。

枕を離れて、ねくたれ髪を束ねなほし、落ちた前褂をとつてさした。柔い寢卷の袖を脱ぎ替へるさへ寒い朝である。スヤ〳〵と心地よげに睡つて居る妹の可愛寢顔を見乍ら、枕元の障子をそつと音のせぬように開けて締めると、赤い頸玉の小猫が破れ目からのそりと頭を出して飛び出た。抱いてやらうと手をのばすと、無心の小猫は又二間程先へすうつと走しる。

素足へはいた下駄の表も冷たかつた。土間の戸を一枚くつて外へ出ると、氷の様に冷い朝の空氣は、起き立ての溫い肌へ痛い程に泌む。空には一條の雲も見えぬと言ひたかつたが、北を見ると、山から湧いたものか、阿波から送られたのか、灰色の雲が怖しく山にくつついて見えて居る。

一寸室内へ這入つて、袷の上へ綿入れ羽織を引かけた。袂の重みを覺えた。

向ふの木戸口を悉く開ける。すぐ西の、肌もあらはに赫茶けた山も、自然の悲しき聲なき叫びと胸が顫ふた。朝顔の枯蔓も今朝はイヤに硬ばつて見えるし、生ふるがまゝに地へ植ゑた紅菊の色も、際立つて褪せた様だ。母が居たならもう彼枯蔓もとりのけられて居たらうにと思ふ。私はもう自然のまゝに捨て置けばいゝのにと思ふけれど、凋落の様を恐れてか、母は綺麗にとりのける人だつた。しかし今年は忙しさにまぎれて其邊にゆかなかつて、のけられずに殘つて居よう。

門の戸を開けると寂かな空氣にひゞいてあはれさうに音が消えた。道路のおもてが、眞白に堅さうだ。

昨日の朝、こゝに立つて讃岐に旅する母を見送つたのは、今朝よりも早い頃だつた。町まで母を連れてつた父と善通寺へ初旅の母の姿とを、あかず見送つた私等

姉妹の胸には、云ひ知らぬ哀愁の波が立つた。次第〱に遠ざかり行く其なつかしい後姿を眺めては、親子の中を遠く引きはづして去られるような感じがして、強いかなしみとさびしさが起つた。

ふとふりかへつた母の面は、もうおぼろであつた。も一度ふり返つて頂戴と、私は強く胸に叫んだが、悲しさは隠しても胸につき上げて來る。だん〱に小さくなりゆく人達の姿を見るに偲びなくて、同じ樣に立ちつくせる妹にも無言のまゝ、室内に馳せ上ると、床の間に燈されたなりにひとり殘つたランプの灯は、馬鹿らしいと云つた風に寂しくゆらめいてゐた。

ぷつと吹き消すとあたりは臭い灰色のゆえんが、イヤな匂ひに鼻をついた。私の心は矢張寂しくて、ほろほろと泣けて來ては、私も語らず妹も語らず、終日暗い思ひに閉されてすごした。

噫、昨夜の母は心から淋しい思ひをしたであらう、家に殘した二人の娘の事をどんなにか思つて下すつたらう。然し行くべき道も考へたらうが、やがて逢ふ兄や義姉の顏も思ひ浮べたことであらう。今朝はもう俥の人となつて、恐しいと聞く吉野川の斷崖に沿ふた山道を搖られて居るだらうが、寒さに馴れない國にいらして、若し雪が降つてたらと思ふと、母の肩のあたりがさびしさうに、寒むさうに浮ぶ。

斷崖を俥に搖られ〱母は私達のことを思つて居てくれよう、向ふの事も浮ばうが、寂しう留守もる二人の子は母の胸からあたまから、たえず離れまい――。

とりとめもなくこんな思ひにふけつて、寒さも覺えずに立ちつくして居る私の髮をかすめて落ち葉がちつた。手をやる間もなく早かつた。

七時がゆるくなつて居る。

不思けさは遲くなつたと氣づく。けれど半時間以上は進んでゐるのだと思つて、手ばやに釜の下へ火を燃した。湯が沸くとそれを鐵瓶とバケツとにとつて、昨夜から洗ひ上げの米をそのあとへ入れる。それから臺所の澤山な棚や流下、かまどの側、板の間など雜巾がけして了うと御飯がたけた。

女と云ふものは、何でも手まはしを早く仕馴れぬと恥である、臺所のことは殊更にさうだ、へつゝいの火は折々つくろへば獨でに燃へるのだから、其間に他のことはいくらでも出來る。とりわけふき掃除は早く人目につかぬ内にせねば、女の大なる恥辱である、と、私がもの心附いてから、母は口ぐせの樣に敎へて居る。

火をひいた釜のへつゝいへ鍋をかけて置いた。
鯖を切る手は、水が喰ひつく樣につめたかつた。さしみを作つて、骨と頭をダシにする、昨夜買ひ置きの豆腐と麩を入れて味噌汁をしかける。それの出來上る間に茶の間の掃除と長い裏縁の雜巾がけして、再び臺所へ來ると、沸いてた鍋へ青菜を入れてざつと沸かしておろし、御飯を出してたら妹を起す父の聲がして居る。『寢かしてお置きなさいな、敏さんは風邪の樣ですから』と座敷へ來て私が云ふた頃には、妹はもう障子を開けて居た。

それからずうつと向ふ座敷の掃除をし、雜巾がけを濟ませてくると、妹は丁度、土間と庭、奥庭、家のぐるりから道路まで掃いて離室のまへだけ殘して來たと紅紫の手袋をぬいで、火桶の側へ座つた。恁うして、茶の間の腰硝子を越して朝日が輝つてゐる食卓に、水入らずの三人が悠々と箸をとつた時に、八時が緩うなつて居た。



三時頃から細い雨になつた。

葉の散つてしまつたせんだの梢は、やがて落つべき莖許りが寂しうて、黄色な實が房々と目に立つ。秋から冬にうつらうとする、其刹那のさびしさが現はれて泌みぐ\としみる樣だ。

妹が山芋を摺つて、私がエゾの肉をおろしてたら、郵便が來て重みのあるものを、どさりと言ふ音さして投げて行た。『敏さん雜誌が來たわ』といふと、妹は立つて女子文壇と封書と葉書を持つて來た。

頭と骨と皮とを鍋に入れてダシにした。鷄の巣を覗いたら卵が五ッあつたので、エゾの肉と共にすり芋へまぜて摺る。

葉書は、六時に太田口に着いたといふ、なつかしい母からの、やさしい文字であつた。咲さん敏さん、寂しいでせうが、お留守を賴みますよともあつた。

封書はいつも御達筆なY先生の見覺えあるお手蹟である。封も切りたい、本も開けたい、こんなことまで母の居ぬのが泌々と不自由を感ずる。

『先生から來たの』と妹は靜に言ふ、本の帶封をとつて居た。『先生が因縁づきの本だと有仰つたM樣が口繪に出て居ますのよ』とも云つた。

先刻のお鍋へ、すつた芋とホーレン草とを入れて焚く。妹に燒魚のかげんを賴んで置いて、私は向ふの縁側、廣い板の間、裏縁と雜巾がけする。妹は魚が燒けると、それからは例の通りに、ランプの掃除、水汲み外の掃除で大てい終る。

お米を洗うてざるへ上げ、翌朝のおかずの支合まで手配りして、炭たどに山ほど炭を入れたのを持つて、私が茶の間へ來ると、もう父も妹も私を待つて居た。今夜の摺芋はおいしいぐ\と皆がおかはり。ほんとにおいしかつたもの――母も居たならと偲ばせる。もう今夜は善通寺へ着いたと父は談した。

妹と神棚へお光を上げる。母の無事を心から祈つて胸がすいた樣だ。迷信だと笑ふ人は笑ふが宜い。母はいつも子等が旅に立つた日からは、何事も最も愼み深くして、神に子等が幸福を祈つて居るのだつた。

父に用事の人が來た。私達は小さい箱火ばちへ火を移して、四疊の室へ退く。

Y先生のお手紙をなつかしう封を切つた。案じた通りに、矢張胸も足も痛むとある。硝子越しに日向ぼつこして居らるゝ人の影がおぼろに浮ぶ。行きたい、行つてみたいと思つた。

『WとOから手紙があつた、Oの文字は手紙でも何でも純潔無比である……』とある。ほんとに彼人の文は驚く程上手だ、年も少いと言ふことだのに。
『WはR子が却つて非常に先生を心配してるとある』と讀んで、再び限りなき哀愁は胸を襲うた。悧い程愛らしい丸顔の少女姿が浮んで來た。
『……×××署名の作家だあて丶見たまへ……』と云ふのがある。靜な人だらうか、愛らしきと言ふ少女か、詩に活きてる人、彼君此君と、とりとめなく頭字の人は知る限り胸に浮ぶ――。
先刻の本を默讀して居る妹の頁をくる微かな音が、折々に夜の沈默を破つては、無限の寂しさにあたりが顫ふ。あゝ、寂かな夜である、遠くで木枯の聲はして居るけれど――。

肉體の痛み心の傷み

山梔

自分の經驗！實驗！おはづかしながらそんな立派なものは私には一つもないのです。學校も中途半途で止め若い華々しい處女時代に何時とかいふリボンすらさした事のない私には、どうして化粧衣服結髮の經驗がありませう。まして四年間といふものは、臺所へ一歩も足を入れませぬ私、庖刀の持ち方まで忘れてしまつた者には、實驗だの何のと大それた事が書けた筈がやないのです。けれどもこれでも私には一つの實驗がありますのよ。
それは病氣に對する精神狀態の變遷でございますの第一增刊からこんな緣喜でもない事を書きまして皆樣御めん遊ばせ。
私の一生はほんとうに病の一生です。此四年間は殆ど病み通し、癒えたり、重つたり、快くなつたり、起つたり、どゞのつまりがこんな身體になり終つたのです。だから食道の病の外は大概な病には皆經驗があるのです、殊に此度の病氣――昨年の秋から病み出して今なほ病みつゝある――この精神狀態こそ最も面白いのです。
忘れもせぬ昨年の秋十月、十九歲の大厄といふに、今年は大して身體の具合もよく、動悸もあまり早くなし、熱もよけい出ないといふ油斷から、つひ心を許して少しは處女らしい生活もして見たく、華やかに生れ

た甲斐には、一度は裝をこらして友人を羨ましがらせてやりたいといふ虛榮心から、いつも簞笥の底にしまつてある着物を出して、廂を思ひきりふくらませて、雨の降る泥濘の路を充實した若い心を抱いて步いたのです。

步きながらも猶ほ絕えず東京！印象！憧憬！と限りない空想に、想はそれからそれへと走つて、つひ石ころのあるにも氣づかず、遂う〳〵水溜りのところでこけてしまつた。嗚呼悟つてしまつた今の心で考へて見るとほんとうに情ないといへばよいか、恥かしいといへばよいか、實に穴にもはいり度いやうな心を其時はして居たのであつた。けれどもそれは私ばかりぢやない、今の若い人の胸はみな斯うした血潮を漲らせていらつしやるのでしよう。

歸るには歸つたが、人通りのある往來を、泥だらけの姿でショボ〳〵と步いた其きまり惡さ、膝が痛いやら恥かしいやらで、泣き〳〵居間に橫臥ると、もう動けなくなつた。それからは熱が出る〳〵三十九度までも昇つて、日に日に痛さが增すばかり、暫時安眠すればすぐ痙攣を起す、其度々が身も魂もくだけるやうにつらい。痛い部分はほんの關節ばかりなのだけれども足全體が神經過敏になつて、蒲團掛けることも出來なければ、あくびはもとより笑つてすら響が足につたはつて、身體がもう綿のやうに疲れてゐました。それでも病氣には慣れて居るから、ぢき快るだらう、遲くともお正月までには步けるだらう——とこれを一の望みに、ぼんやり天井を眺めて暮したが、其年も早やおしつまつて明日が元旦だといふ日になつた時には、もう何とも言へぬ感じが胸に切つて、只限りなく泣いたのでした。

靜かに打ち出す除夜の鐘、遠く近く響く音に秒一秒と過古を葬むつて新らしい未來に近づくべく鳴る悲しい鐘を數へた時——ほんとうに淋しかつた。

あゝなつかしい十九歲逝く、青春再び來らず、今年もあだに暮れて、いつこの病が癒えることであらう。人は樂しく新年のみきく〳〵みかはしてことほぐであらうに自分ひとり病床……嗚呼病み出して今日で七十五日人の噂も七十五日といふにこれは叉どうして私は癒えないのだらう、むざ〳〵貴重な時間を斯うしてつぶしてしまつては、此末どうなるだらう、あたら人生も寢て許り居て何の意味がある。いやだ〳〵早く癒りたい乞食してもよいから災息に活動したいと、あせればあ

せる程心が苦しくなつて、無性に泪が出る。歌をうたつても過古を思つて涙が出で、雪を見ても雀の飛ぶのを見ても涙が出て、時とすると一日泣き通した事さへあつた。人前は平氣を粧つて居るけれども、人なき折には泣いて泣いて涙の盡きないのが不思議な位、殊に學生當時運動會に歌つたうたが最も涙が出て寢卷の衿も枕もぬれて冷たくなるのであつた。けれどもそれが何より慰みになつて、毎日一度は必ず歌つて涙を呼び起した。一月も半ばを過ぎての或る日、あまり悲しいので若しや先生にでも訴へたなら、少しは涙がをさまるかと思つて、もと教へを受けたM先生に手紙を出した、心亂れてどう書いたか忘れたが、待つて居た返事は來なかつた。そして其後親しい友のYさんが來られて、先生の仰つた一部始終を告げて曰く「あなた一體何を書いたの？先生そりやご立腹ですよ、お詫狀出しなさい」と笑つて歸られた、あゝ其時！私は始めて自分が如何に悲觀して居たかを意識した。それと同時にこれまでの涙のあまりに淡々しいのが恥づかしくなつた。あゝ泣くまい皆私が惡かつたのだ、何も思ふまい世の中は斯うしたものだ、私ばかりが不運なのぢやない、まだひどい人もあらう！とかう悟ると急に心が輕くなつて、無暗に涙は出なくなつた。そして現實の苦痛が少しも不平でなくなつて、毎日愉快に樂しい日を送つた、先生のところへも御詫狀を出した。其翌日、「立腹とは何かの間違ひでしやう、私はちつとも腹立てゝ居ませんから御安心なさい、ちと散歩のをり遊びにいらつしやい」と書いた返事を受取つた、散歩の折？先生はあの手紙御覽なさらなかつたのでしやう、散歩出來る位なら……恨めしくなつた。

けれども悲しい哉、其時の樂觀は馬鹿悟りであつた餘り泣いた反動で無茶な悟り方をしたので、其後又心の變る時は來たのであつた。

三月も彼岸がすんで、寒い國にも春がおとづれて、そろそろ櫻の枝がふくらむと、近所の子供は申し合せたやうに、後の野へ遊びに來て、終日ボールの音をさせたり、ワンノールと高い聲で叫んだり、凧をうならせたりして私の弱い心を躍らしたのであつた。又或る時はふと窓を見ると學生時代に三幅對とまでも人に囃された親友の其二人が、お揃の着物を着て、仲よく笑ひながら私の家の前を驅けて行つた、後姿を見送つて只ひとり取りのこされた身を泣いたこともあつた。又或る時は、離れた友から貝拾ひに來いといふ手紙を受

取つて、身が身ならばと悶へたこともあつた。

けれども悲しい〳〵と思つた其心も、或る動機によつて袷一枚では熱いといふ初夏の或る朝、着物と共に取り替へられたのであつた。

緑葉の蔭が清和の月に寫つて、地面のそこ彼處に敷物を敷いたやうに美しかつた其晩は、如何に清い心を以て私は蚯蚓の鳴く音を聽いたでしやう。

其動機といふのは、本誌六月號の黒百合、實にそれであつた。何氣なく開いたページの面に、自分が豫ねて御同情申し上げて居つた先生の御作をみいだした時は、本統に嬉しかつた。一章々々と讀んで行くうちに心の悶がだん〳〵薄らいで、醉茗先生の御諭しになつたといふところで、もう堪らなくなつて、目を閉ぢて靜かに泣いたのでした。何の涙？實に清い涙であつた、美しい涙であつた、果ては自分までが先生に諭して戴いたやうな心地がして、一言一句沈痛な御言葉に限りなく嬉しい涙を注いだのであつた。それからは生れ變つたやうに心がきれいに改まつて、煩悶も日に日に去り、此度こそは眞實の樂觀になつて今猶ほ悟りの月日を送つて居るのです。これが私の一年間の心の變遷で、卽ちぼんやり、悲觀馬鹿悟り煩悶樂觀とから五度動いたのでした。要するに病氣になつて悲觀したり厭世したりする人は未だ〳〵新米なので、障子のさんも數へつくし、枕頭の本も讀み盡したから、見舞に來いと、大袈裟な事をいふ人はやがて癒る人だ。人の病氣の時何のそれ位と平氣で居て、さて自分が病氣すると、わい〳〵わめいて、やれ深切がたりぬの笑ひ聲が癪に障るのと、叱る人はあまり重くない人だ。私のやうな病人中間の古狸は、悲觀も厭世も馬鹿らしくてする氣になれず、何の今日あつて明日ない命ですから愉快に其日を送らうと思ひます。

最後に皆樣が若し病人の許へ見舞にいらつしやるなら、自分の經驗として嬉しかつた事を一ツ二ツ申ましやう。精神に異狀のない限りは、一般の病は肉體のものですから、其補を精神でした方が嬉しい。菓子はやすくて美しいといつて澤山くれた人がありますけれども、そんな物はちつとも欲しくない、そんな看護人の腹を肥すものよりは花、――四季をり〳〵咲きかけた花を折つて來て、自分で生けてくれる人、殊に私が花が好だといふことを覺えて居て、市中を驅け廻つて黒葵を持つて來てくれた人があつた。其人の心も偲ばれて、歸られたあとで自分ひとり凝乎と眺めた時は、本

實に嬉しいと感謝した。本を貸してくれるのも好く、人形くれるのもよい、或る人は病人には陽氣な話がよいといつて、盛んに登山海水浴と自分の手柄話をした。歩けぬものにそんな話は罪ぢやなからうか、況んやお轉婆だつた私に於いてをやだ。それから死んだ話に儲かつた話、嫁に行つた話に子の生れた話、そんな無趣味な話は有難くない、宗教の話に學校の話、滑稽なものに無邪氣なもの、文學の話ときたら堪らない、も一つ病氣は氣から起るから、心をしつかりせいと深切かしに言つてくれる程癪に障る事はなかつた。

感心な奥樣

內海千鳥子

其一

いつも皆樣のお作拜見致しますす度、自分も何か出し度と思ひますが、文はいたつて下手ですから、顏だしすることが出來ませず、殘念でした。處が此度文章よりも他に筆をおくとの事故、常々感じた事、經驗した事でも少し書いて見ませう。

私が寄宿舍生活をしてゐました時、近所に中學校教諭のお宅がございました。奥樣は二十五六の方で美しいとはいへませんが、何處となく氣品のある、謙遜な方でした。お子供は五つ位とまだ小さいのと、男の子お二人ですが下女も子守も置かず臺所のことから、お守り、應接、買物まで皆お一人でなさいます。お話した事もございませず、判然とはわかりませんが御主人や、お子等の服裝で察せられます。木綿でこざつぱりとした着物をつけて居られますのを見ても經濟家でいらつしやるとすぐ知れます。乳母車におちひさいのを乘せて、お買物して歸られるのを何度もお見うけ申しました。晝間でもお琴の音がかすかに、もれて來ることは珍らしくありません。驚いたぢやありませんか。十文字におんぶしてですと！、人から聞きましたの。大抵の奥樣でしたら下女を置くやら、子守を傭ふやらしませう。そして此奥樣、いつも髮のみだれたのを見うけた事でございません。御自分でおあげなさるのだとか。白いものも少しほどこしていらつしやいますの、ほんとになにから何まで感心の外でございません。こんな方とお交りして、色々導いて頂きたいと常々思ひましたが、今は遠くへはなれました。

其二

今一人感心な、模範としてはづかしからぬ奥様がございます。

小學校の校長をして居られます御主人と坊ちやんがお一人、都合三人暮しのお氣やすい御生活。私等が小學校で敎へていたゞいたのですもの、もうかれこれ、十年にもなりませう。長い間勤めて下さつてるので、奥様を伯母様のやう、先生を伯父様と思つていつも遊びに參ります。奥様は四十を三つ四つ越された方、それは〳〵お品のよい、すらりとした美しい方ですの、岩倉公の令夫人にほんとによく似て居られます。お年のわりにヂミなおつくりですから一層美しいのです。お髪はいつも御自分で束髪になさいます。丸髷に遊ばした事は、かぞへる程もありません。仲々の節儉家でいらつしやいます。お召物なんか先生でも、坊ちやんでも折目のたつたのを着て居られます。料理、裁縫がもつともお上手ですの。先生が御交際家といふ程でもありませんが、お交際が廣い方ですから來客がよく有ります。でもちつとも嫌やなお顔なさらず、おもてなし遊ばします。十人や十五人位でしたら、お一人で色色と御馳走こしらへて、ちやんとして知らぬ顔でいらつしやいます。些お手傳ひ致しませう、といつて笑はれますの。お手早でしかも美味く、いろ〳〵こしらへられるのですから、私等のやうな者は何といつてよいか分りません。一かどの料理人でも感心するのです。縫物もお上手ですから仕立物がいつもたえません。晝はお洗濯、炊事、裁縫と中々おいそがしい程です。夜は大抵新聞雑誌など御覧になつて早くお臥りになります。まるで女學生上りの若奥様の様ですの。何事でも時世におくれないやうつとめていらつしやいます。それでゐて、お老人なんかともよくお話が合ひます、年の老若にかゝはらず、上流の方でも下等社會のものでもそれ〴〵話を合はされます。文盲な者だといつてあなどつたりなさいません。ですから、いづれの方にも立派な奥様！、人格の高い常識に富める方！と敬されまた慕はれて居られます。

* * * *

私も何か經驗談でもと存じますが不束な身、何とて皆様の御參考になるやうな事がございませう。只右の事だけを……。



三度のお產にて得し私の經驗

みどり

◎十七歳で結婚

十七の春學校を出ると間もなく結婚した私は、良夫と共に、兼てあこがれてゐた花の都、東京へと赴きました。其當時は只もう嬉しくて、夫婦手を携へては、今日は彼地、明日は此地と、二人きりの氣樂さに、氣も浮き〳〵と愉快に過しましたが、一年二年と經つ內には、新婚の夢も漸くさめて、家計簿記に頭を惱す樣になる。其時分から何だか物足らぬ感じが起りまして淋しい〳〵風が夫婦の中を吹いてる樣で、夕ぐれ時、支度を整へて、良夫の歸りを待つ間などは殊に寂涼を感じました。そんな時には、一人緣の柱にもたれて、夕日茜さす西の山端に、富士の姿を木の間から遙に眺めて居ました。

けれども、愛の神樣は、私共に幸福を與へて、十九の春には花の如き、女子をお授け下さいました。十三も年上の良夫は、常から待ち兼ねてをりましたから、其喜びも一通りではありません。姙娠となつてからは大變に大事にしてくれました。世間では姙娠の奥樣を嫌つて、家外に樂しみを求める方もあるさうですのに私は何といふ幸福者かと感謝に堪へませんでした。元來虛弱な身體へ、加ふるに貧血性ですから、常から牛乳を離しませんでしたが、姙娠となりましては、一層滋養を取る樣にと、牛乳も分量を增し、鐵飴に鐵ペプトンにと、あらゆる養生を怠らず努めて、胎兒の壯健をば祈りました。お蔭で、惡阻も輕く、漸く胎動を感ずる五月の初め、良夫は丁度關西地方へ轉任する事となりました。一番に困つたは私の身體、長々の汽車旅行等して、もしや異狀を來してはと、心配しましたが扨一人で跡へ殘る譯にもゆかず、醫師の注意で、東海

道を休み〳〵、四日掛りで漸く任地へと着きましたが、幸にも何の故障もありませんでした。

◎初めは難産

かうなりますと一番頼みに思ふは産婆であります。自分の命を預けたも同様ですもの、いかに學問ある新知識を備へた者でも、若い經驗にとぼしい者は、甚だ心細うございます、十分經驗ある者をと詮議しましたが、丁度開業二十年で、新知識をも備へた者がありましたから、此人に萬事を依頼いたしまして。お産の輕い樣にと、五月目の戌の日に着帶して、赤飯に内祝ひ等いたしました。

暖き親の懐を離れ、遠き他國の空で、しかも新任當時ですもの、深きおなじみもなく、殊に初産の事ですから、さつぱり勝手も解らず、相談する方もなく、實に〳〵困りました。こんな時こそ母樣のお側であつたらと、戀しくも悲しくも思ひました。ですからせめて書物でも參考にせうと隨分色々な物に目を通しましたが、其中にも惡いと知りつゝも、恐いもの見たさで異狀産等の所を讀んでは神經を起し、又分娩當時を想像しては心を痛め等して良夫に笑はれました。八月目からは姑樣が手傳ひにと、國からわざ〳〵見えまして初めて氣をつけられて、赤子の衣服やら、蒲團やら整へ、分娩時には消毒したる分娩具を求めて置きました。それからは只出産を待つ許りとなりましたが、何が扨二人きりの家内へ、女中もゐますし、姑樣も入らつしやいましたから、日々何の用事がありません、重いものは箸より持たず、顔を洗ふ時の水使ひ位、稀にはそこらへ散歩に出るだけで、少しも運動をいたしません。滋養は飽食しますし、肝心の運動も不足となります上に、餘り安逸に過ぎましたから、輕くお産の出來る筈はありません。運動不足の爲、胎兒もふとり過ぎとなり、陣痛は微弱、羊水は早潟との三ツが重なりまして、遂に醫師の手によつて出産する程の難産にあひました。

◎今年七つで幼稚園に通ふ

最初朝の七時頃、水下りがしましたから、早速産婆をむかへましたが、内診の結果、假羊水の漏れるので明朝か遅くとも明夕四時頃には出産するとの事でしたが、翌朝になつても、少しも催しがなく、只始終水下りがしてをりました。午後の四時頃産婆が參りました

時には、少しの陣痛を覺えましたが、假羊水も羊水もすつかり下りきつてをります。陣痛微弱な爲に腰湯等もしましたけれども、少しも効なく、其夜は產婆の看護を受け、翌朝十時になつても、分娩せず、胎兒の頭は大變大きいとの事で、遂に午後二時頃醫師をむかへ漸く三日目に分娩を終りました。餘り閑暇取つた爲に胎內で窒息してゐた赤子も、人工呼吸を以て漸く泣き聲を上げました。成程生れた嬰子は大變頭が大きく、醫師も或は腦に異狀があるやも知れぬとて、心配しましたが、お蔭樣で何事もなく成長して、今年七歲で日日幼稚園へ通つてをります。

普通の出產とは違ひますから、產後もよほど長引きました。分娩時の傷もありましたから、一週間は身動きもならず、漸く座る樣になつたのが三週間目で、床を離れましたのは三十日の後でありました。其產褥三十日間は、無論好きな雜誌や、新聞も見る事は出來ません、只安眠々々と申しましても、一日や二日の事ではありませんもの、なか〳〵續けるものではありません。姑樣等が嬉しさうに赤坊の世話等してゐるのを見ますと、自分も早く彼樣になりたいと羨やましくて、身體の自由にならぬのを、どんなにか恨みましたらう。病氣でもありませんが、身體の我意のごとくならぬ苦しみを思ひまして、如何なる勞働でも健康でさへあつたならと、世に病身ほど方程、不幸はあるまいとつく〴〵悟りました。

◎二度目に得たる經驗

もはや母親と名がつきますと、其責任も中々輕くはありません、今迄如き暢氣な譯には參りません。隨分いそがしい思ひで、日の經つのも早くまたゝく中に二年三年と過ぎ去りまして、四年目の春には、又二度目の出產をいたしました。今度は經驗もあり、初產で十分懲りてますから、姙娠中の養生等も、初產の時とは異なり、食養生よりも、一番に運動に重きを置いて飽食を戒め、規則正しき生活をと努めました。總じて姙娠中は、重い物は持たれぬ、手は頭より上にはあげられぬ、根氣のつまる仕事はせられぬ等とよく申しますが、日常始終してゐる事なれば、姙娠中とても少しも差支へはありません。或は常にない力業とか、凡てした事もない仕事を、姙娠になつてから急に初める等の事は、誠によくない事だらうと存じます。ですから二度目の時には、臨月の時になるまで、洗濯をしまし

た。手のない時には女中相手に風呂の水を汲み込みました。却て身體も壯健で、胸がつかへて食事の進まぬ等の事は少しもなく、何はなくとも御飯はおいしく頂きましたから、お產も輕く、產婆の豫定時間とは二時間も早く生れました。

◎二人目は男の子

其日は、朝良夫が出勤の時には、まだ何事もありませんでしたのに、午前十時頃から、催しました。早速產婆に知らせて產褥に入りましたが午後二時、分娩しましたは五時半でありました。良夫は宴會がありまして歸宅しましたは夜の九時頃、何事も知らず、醉步蹣跚と歸つて見ると、思ひがけなく勇ましき呱々の聲を聞いたのですから、さぞ嬉しかつたでせう。それに初めが女ですから、今度は男子をと願ふてゐた甲斐があつて、思ひ通りの男子でしたから、實に〳〵嬉しく、鬼の首でも取つた樣、誇りを感じました。良夫の顏にも滿足の色がみち〳〵て、姑樣も大變およろこびなさいました。生れた赤兒も壯健で、成人も早く、大きな身體でありましたから、生後七月目には坐りまして、誕生一月前から步きました。今年は四歲のいたづら盛り、男子ですから尙更わんぱくがはげしく、先日も年上の子供と走りくらして、石に躓き、敷石の角で眼の上、眉の下を一寸程切創にして泣き〳〵歸りました時には、半面血まみれですもの、膽をつぶしました。眼には異狀がなくて、誠に不幸中の幸でありました。實に子を持つて知る親の恩、心の安まる時はありません、今更御兩親の御恩をしみ〴〵感じます。

◎三度目は更に輕い

產には生みならひなしとか申しますが、やはり初產よりは二度目、三度目と漸々輕くなる樣です。三度目に男子が生れました時などは、まるで夢のうちに分娩いたしました。產湯も間に合はぬ程輕くて、苦しんでる間も少なく、誠に樂でありました。三度目にもなりますと、家事やら子供の世話におはれますから、別に努めて運動等せずとも、自然運動は出來ますし、二度の經驗に十分勝手も解つてゐますから、輕いのも當然でせう。もう今日か明日かと心待ちにまちつゝ、秋の夜長を燈火の下でお針に更しまして寢につきましたは、十一時頃でしたか、フト目を覺しますと、お腹の工合が變です、どうも陣痛らしい催しがありますから、時計

を見ると十二時半、漸々時のたつに随つて、陣痛もはげしく、産婆をまねきましたが、二時半でしたが餘り早くより産褥に入りましては、却て退屈して待ち兼ねる爲に、往々寢り産となりますから、なるべくなれば、靜に安坐して時の來るのを待ち、分娩前一時間程にて産褥へ入る樣にといたしました。産婆が便通の如何をきく、灌腸の準備をして内診しましたが、もう灌腸の間はありません、直ぐお出來になりますよとて、産婆は意外に分娩期の迫つてるのに驚き、あわてゝ消毒衣を着、湯を沸す樣にと命じました。それから二十分の後にははや、赤子と床を並べて安臥する身となつてゐました。餘り輕く出産しましたから、自分ながらも産等した樣にもおもはぬ程でした。念の爲にと主任醫の診察を受けましたが、幸に異狀もなく、赤子も壯健でありました。其時は良夫も家にゐまして醫師と種々話しの中に醫師が、

初産よりは二度目、二度目よりは三度目と、漸々お輕くなりますと仰しやいましたが、良夫は冗談に此次ぎにはもう産婆も不用、一人で産みませうと申しますと、醫師が、

そこで御油斷なさると、醫師と産婆と一處にやつて來る樣になりますぞ。

此一言こそ誠に金言でありませう。世に多く難産する人は、初産よりは却て四度目五度目の方に多いさうですもの、輕くなつたとてゆめ〳〵養生を怠つてはなりませんが、度重なるにつれて、氣も横着になりまして、産後の養生等もゆるがせになり勝ちですが、よく〳〵注意して、分娩後二週間は産褥を離れる事はなりません。産後の無理こそ實に一生の持病となります。

◉わが家の幸福

産婦の注意すべき事は、細く云へば限りありませんが、大體は第一運動を十分にして飽食せず、安逸に流れずして規則正しき生活をなす事。第二には、心を安靜にして、餘り早くより産褥に入らぬ事。第三には、産後の養生を大切にする事等でありませう。これは私の得た經驗であります。然し異狀産等は醫師の手にかゝるより外ありません。

はや三人の母親となりましては、隨分忙がしく、女中一人では、日々の家事も不手廻り勝ちとなりますが女中と私とは、常に分業いたしまして、規則を立てゝ働きますから、割合に縫針の閑暇もあつて、まだ着物

も人手にかけた事はありません。子供も成べくは、放任主義にして、獨立心を養ふ樣につとめてゐます。世の中には子供のないとてなげく人、又はあつても女子許だとて愚痴をこぼす人もありますのに、私共は望み通り、男二人と女一人を得ました。實に子供は、一家中の花です、愛の化神です、家の內はいつも春の樣で限りなき幸福を感じます。

只てれよりは、兼て師の君よりの敎へを守り、學びの園に得し業を經とし、自分の經驗を緯とし、愛情込めて織り上げたものを以て、世に處し、子供を敎育して、女子の最も神聖なる務めを全くし たいと存じます。

產婦の心得

△出產は自然のものなり、恐怖心を抱くべかからず。
△出產は身體の大變化なり、愼重に扱ふべし。
△周圍を清潔にせよ。
△經驗は多くの人に聞くべし。
△出產前は凡て平生の如くすべし。
△出產後は凡て大事を取るべし。
△迷信は無用なり、只自信あれ。
△家族をむやみに騷がすべからず。
△初產は最も注意を要す。
△臨月前に出來得る丈け凡てを用意せよ。

詩を作る呼吸

金田代志子

山はやせ野は枯れ、木も草も若々しい色を失ふて、靜かに太陽は照り渡つて居るけれど、其の光は冷たい師走の十二日、再び病床の人となつて、嫌なく水藥の香に醉ふた衰へた瞳で、灰色の壁と障子の棧の黑いのと色々の幻の浮び出る天井板の黃色とを許り眺めて暮した日は今日で七日。菊は萎んで柿の葉は散つてひとり南天の實のみが美しう紅い井戶側で、冷たい朝風に面を吹かれ乍ら、米を洗ふ兄の手の冷たさ見て、憶富あらば！……と死にいる程痛たく悲しく、今迄一人泣いて居たが、餘り頭がむしやくしやするので、何か讀んで心をなぐさめやうと、本箱から引出したのは日記帳二冊、一つは『廢殘の記』一つは『若草』と上書してある。

廢殘の記には母亡き後の淋しみと苦しみとを悲しい文字で認めてある。自分が常に愛好する詩の事に付いて書きならべてある若草の方を開いて見た。初めに〇〇先生からのお手紙を寫してある。心を靜めて讀んで見る。

前略御手紙も詩稿も今拜見致しました。詩は初めは極短かいのをお作りになつた方がよろしからうと思ふ。詩集は海潮音でもごらんになつたらどうです、投書風な詩で勉强なされるのはよろしくはない、實は貴方の詩に對して御話ししたい事がありますが今日上京するので忙しいから後でゆつくり御話ししましよう。海潮音に此麼詩があります。

子守歌風に浮びて　溫かに日は照り渡り
田の麥に垂穗うなだれ　小川には木の葉滿ちたり
いかに思ふ若きをみなよ。

結句の一行で凡てが生々として居る、實に可い詩です。其れから

山のあなたの空遠く　幸住むと人のいふ
噫我人と尋め行きて　涙さしぐみ歸り來ぬ
山のあなたになほ遠く　幸住むとひとのいふ

い丶詩でしよう、ことに山のあなたのと云ふのを前後にくり返してあるのが實に心强く響く。又「忘なぐさ」と云ふのに

流の岸のひともとは　み空の色のみづあさぎ
波ことごとくくちづけし　はたことごとく忘行く

短かいけれど意味の深い讀んで涙のこぼれる樣じやありませんか。此麼詩を作らなければだめです。それから又

二人を時がさきしより　晝はことなく打過ぎぬ
喜びもなく悲まず　はた誰をかも恨むべき。
されど夕暗落ち暮れて　星の光の見ゆるころ
病の床の稚子のやう　心かすかにうめきいづ

心かすかにうめき出づ――心はうちわなゝいてゐるやうでしよう。

なるべく此麼短かいのが可い。短かくして意味の深いのを作る事です。そして自分を僞らないで歌ふといふ事は第一に必要です。才氣にまかせてやるといふのよりもしんみりと讀んで涙のこぼれるやうな短かい抒情詩を作らねばなりません。ことに女は女らしくして、女でなくては歌へぬ氣分を充分にあらはすと云ふ心懸を持つてことです。貴方の詩はズット變らねばなりません。女子文壇へ投書するのをいま二三ヶ月おひかへなさつたらい丶と思ふ、すぐれた詩才を、おもちのやうだから此麼老婆心も出ます。詩稿にも書いて置きましたが技巧の方が非常に自由であるから私は添削はしません。その人の個性やくせをあまり改めると却つて面白くない結果を來たしま

すぞ、最も大切な事は如何なる事を歌ふべきか?、と云ふ事です。それで内容の選擇の如何で其の人が果して詩人であるかないか、詩になつてゐるか否やといふことが區別される。私は其の方の修養を重じてる。

此の内容の方から見れば貴方の詩は非常に幼稚でなつてゐない。今後は此の點に於て充分御注意しようと思ふ。何れ後にゆつくり其の説明を送りましよう。今は忙しいからこれで止めます。

二月××日

〇　〇

讀み終ると今迄の悲しみも嘆も頭から去つて了うて何となく安らかな、詩でも歌ひたい樣な氣になつて、じつと眼をつぶつて何を考へるともなく俯向いて居た何時の間にか風がそよぎ出して、裏の棕梠の葉を搖吹つて居たが、何時の間にか又ひつそりとなつて居た。黄色い障子紙をすかして、極めて薄い影がうつつて居た。自分は叉頭をもたげて、若草の次の頁を繰つて見た。

二枚……三枚……五枚……右の頁に下書して左の頁に清書した詩の數々。其れには一つ〳〵〇〇先生の評を赤いインキで附記してある。

「友は皆戀に戯る若き日に一人歌へる我の淋しみ」と和歌一首を書いて「今日工場よりの歸り友の樂しげに語り合ふみだらなる話しを耳にして、戯れに其を空想して歌ふ。」と前記をした頁に『接吻』の詩があつた。

そは狂ひたる戯れか、
はたみだらなる振舞か、
さは何れともあらばあれ――、甘し接吻――。
花も紅なる若草は、月光にやはらに抱かれ
いとしめやかに醉ひし如、香にぞ震へる。
斯くて今、若き吾れ等が××××
××××××××××××
見よ、青き星空に舞ひ
我等伏す芝生は波と高搖りつ――、
悲しくも、はた嬉しくも醉ひにける、
愛の接吻――若き夕――……。
人はみだらと、云はば云へ、
狂へるわざと知らば知れ、
吾等知る――甘し接吻……。

(評、もつと何處かにしんみりとしたところがあつても可いでしよう)「答へて曰く、でもつとも、空想の詩ですもの……」と。

あまり眞意になつて書いてあるので、可笑しいやら

悲しいやら、いきなり其の紙を引き裂いて了つた。細かく裂いたので手に取つて見てももう讀めないから此丈にして置けば患はないと机の下へ投げ散らし、又次の頁を繰る――。カチ〳〵と時計の針の進むにつれて水の様な師走の空氣は頬に冷たくしみ込んで、紙をめくる片手はかぢけて來た。

七八枚も繰つた時に次の一枚はとれた、引裂いた續きの紙で、先生の第二の手紙を寫してある。驚いて中にはさみ讀まうとした時、兄様が晝の御飯を持つて來て呉れた。――悲しい、つらい……。

噫！姉は居ませば、母上はあらば……我の心は斯くも痛むまいに……身は貧しくとも……。

兄にすまぬと思つて笑ひ乍ら頂いた、けれどもすむとすぐに寢床の中へもぐり込んで再び泣いた。

泣いて〳〵泣き寢入つて、目が醒めたのはもう三時過ぎであつた。用がないけれども「兄様―」と呼んで見た、返事がない。野良へでも出たのだなと思ふと、何となく淋しくて又泣き度くなつて來る。が無理に涙をおさへて今のさき落ちた紙の先生からの手紙を開いて見た。

御手紙ありがたう、忙わしいものだからつひおくれました。

詩と云ふものはなか〳〵むつかしいもので、深入りすればするほどむつかしくなつて來ます。初めはとかく詩と云ふものがどんなものかと云ふ事がわからねば、無やみに作つたとて何の甲斐もありません。

第一は自分の天禀の才に頼るのは無論の事ですが、思想なり感情なり新らしい詩材をさがす、それには修養といふ事が必要だし西洋あたりの秀た詩や日本の新らしい詩集をよく〳〵玩味せねばならん事ですなるべく多く讀んだ方が可い、諳記する位に讀むとむつかしい解せぬ様な詩もおのづから理解が出來るやうになる。自分ひとりむやみに作つてよろこんで居ても、なんにもならんのです。

貴女の詩は忌憚なく申さばまだ〳〵詩の生命を失うて居ます。今度のに少し傾向の違つたのが見えましたがい丶事です。まだ詩の生命と云ふ事がお解りにならぬ様に思ひます、私にしたところで、此處四五年以前に西洋のロセッチと云ふ人の詩を讀んで、初めて詩の生命をつく〴〵分つたやうな氣がしましたのです。ほんの一寸した機微ですが、それがつかめたら詩は分ります。別紙にロセッチの詩を三つ四

つ書いて上げましたから、何度も讀んでお味ひなさい。

其の中でIの詩の……記憶も何も忘れて了ふたがたつた一つ知つて居る事がある、それはホルトリーの莖に三つの花が咲いて居たといふ事であると云ふ、此一つの莖に三つの花と云ふ呼吸は凡ての詩人が必要です。此んな細かい機微をとらへねばなりませんIIの詩は誰にもよくある事でしよう、貴女だつて今日道で會うた人、其の人はいつか自分は見た事があるやうに思ふ、いつ何處でと云ふ事は知らぬけれどいつか見た樣な氣がする、と思ふ時があるでしよう、そんな事は詩人は見のがしてはなりません。海潮音にある森は今花咲き亂れ艶なりや五日立ちける、神よ擁護を垂れたまへ、あまりに幸の多ければ……と云ふ詩も中々可い詩です。幸が身に餘る程多い、悲しみがもし此麼に多かつたらどんなに苦るしいだらう、心配だから神よ助けられよとたのむ、何といゝところをとらへて居るじやありませんか。貴女も此麼のを作らねばなりません。とにかく人の云はない細かいところに氣を付けねばなりません、葉は青い花は赤いではだめです。火鉢の火でもじつと見つめて居ると、幽かに曇つたり明るくなつたりします。有明氏はこんな事を云ひました「一花を辨ぜずして詩を作るは大いなるあやまちなり」とほんとにさうです。夜雨君が云つた通り、新體詩蝶とすみれの外讀めずではだめです。

尙此の上必要な事は、自己に忠實にすると云ふ事です。二三年經てからその詩をくりかへしても、自分の三年以前の氣分があり〳〵とわかるやうななつかしいものでなければなりません。夢の樣に花が咲いて、月が照つてゐる春の夜を、君と二人で步るくといふやうな事を空想して書く事もつまりませんし、櫻月夜だとか舞姬だとかおばしまだとか美しい文字を並べるのもあまつたるくていかぬ、讀めば其の事が胸にしみ〴〵浮かんで來て云ひしらぬなつかしみをおぼえる樣に美しくもなく汚なくもなく歌ふ事です。是非藝術家でなければならぬ、藝術的呼吸を深くして、私ならば私、貴女なれば貴女の、眼にうつつた色や匂を忠實に歌ふ事です、机に向つて道樂に詩を製造するのではいけない、其の日其の時の感興を、深く〳〵まじめに歌ふ事です。感情をとらへたり何かの事は又折を見てお話しします。それでは詩

を作ると云ふよりはよく人の詩を味ひ、自然物に注意する事を深く胸において、なるべく短かく歌ふて見なさい。詩は一字の爲に感情を薄くし句や色を失ひ非常に惡感を催さすものですから一字と云へどもかりそめにしてはいけません、女ならば女でなくては歌へぬ氣分を歌はねばなりません。あまり長くなるといけませんから今日は此れで止めて又折を見てゆつくりとお話しゝましよう。

○　○

二月十日

讀むと又頭が清々して、何だか詩的氣分が流れ込んで來たやうな氣がした。障子からは冬の冷たい日が今にも消え樣として、淡い〳〵淋しみをなげて居る。次の頁からは十八歲の春に歌ふた詩や、若き日の歌と題して投書した詩を評二つゞつ書添へて書いてある、十枚にも二十枚にも……。

二つの評を讀みくらべて見て行くと又頭が重く痛んで來た。青白い藥びんに手を掛けると、又泣きたい樣な氣になつて、飲み度くはないが、無理に飲んでその嫌な〳〵香と味とに、身は顫ひ上る樣におぼえた。お蜜柑で口中の匂と味を消さうと思つて、まくら元のかごに手を入れると、もう三つしかない。皆てろがし出して食べながら又若草の終りを見た、「婦人ノート原稿」として、海の別れの對話を書いてある十一月二十日に、あゝ早やく此の頃の樣に清々した身になつて見たい、此麼事を空想する氣分を持ちたいと又も淋しく病む身を悲しんだ。（十二月二十日病床にて）

何うすれば文章が上手になるか

撫子

ほゝゝゝ御はづかしう御座いますわ、だつて妾見たいな無教育な田舍者が、こんなに文章の作り方だなんぞと生意氣らしく云つて、だけど皆樣、文學士だの文學博士だのと立派な肩書つきの方が御書になつた「文章の作り方」と、妾の申す「文章の作り方」とは、中々くらべものにはなりませんわ。また妾もそんな立派な事は申されませんのよ、たゞね、これは妾がつくづくから思ひましたから申し上げる迄ですのよ。何卒其の御積りで。

妾はね小さい時から作文の點は乙ばかりでしたのよだから妾作文は大厭ひ、そしていつも〳〵國語の先生から「撫子さん、一寸御勉強なさい、貴女はなまける

からいけないのです」つて云はれましたの、けれど妾これには不平で不平でたまらなかつたの。だつていくら勉強しろの、なまけるなつたつて、どう勉強すればいゝのだか、どうすればなまけた事にならないのか、それがわからないのですもの、妾 相變らず、乙ばかりとりましたのよ。すると、先生がある日、妾をよんで「撫子さんこれでも御よみなさい、一寸は參考にもなるでせうから」つて、何だか馬鹿に重たい洋綴の金文字入と云ふ立派な御本を貸して下さいました。妾もね其時丈は國語の先生が、神樣ほどにも有がたく思はれましたわ。此書をよんですぐ、作文がうまくなるのなら、それはもう〳〵妾作文厭ひなど申しませんわ。

其日は家へ歸るなり、すぐ讀み初めましたの、けれど矢張妾は滿足する事が出來ませんでした。いえ〳〵滿足出來ないだけならいゝのですが、いつもの不平が頭をもたげて、承知しないのですもの。

御本にはそれは〳〵むつかしい理屈やら、作り方なんぞ書いてありましたわ。けれど、それはもう〳〵妾何度きいた事だか知れません、そしてそれを聞いたからつて、一寸も上手にはなれませんでしたわ。又其御本の後の方の頁には、あらゆる美しい辭、あらゆる巧みな形容詞が竝べ立てゝありましたけれど、それが何になるでせう？ なるほどと感心して、其辭を其まゝそつくり拜借でもしやうものなら、それこそ大變、早速級の皆樣の槍玉に上げられますわ。妾は其書をよみも終らず、長い〳〵溜息を吐くと同時に、あまりの腹立しさに投げ出してしまひましたわ。

そして、ふと腦の一隅に「妾は先天的に文章を作る能力がないのかしら？」と云ふ感じが、稻妻のやうにひらめきました。嗚呼其時からです、妾が全く文學をすてたのは。

それから幾年をか經た秋の一日、妾は胸を病んで田舍の叔母の家へ養生がてらにやられました。嗚呼文學をすてた妾が、何で田園生活に趣味を持ちませう、山も川もすべて目にふるゝものは單純なものたりない死した樣なものとしかうつりません。それを思ふと、妾はどうして其日其日を暮さうかと思ひなやんだ、其揚句、東なる姉樣から毎月〳〵送つて下さつた雜誌を、まだ目も通してなかつたもんですから、其まゝしばつて行李につめ込みましたの。田舍は妾の想像したのにも勝つて、淋しく變化のないものでした。病の床に横たはつたまゝ、妾はこの變化ない生活をいつまでつゞ

けねばならないのだらうかと思ひながら、終日天井とにらめこをしましたわ。それが六日七日となる中に、妾はたまらなく淋しさを覺えて、始めて行李を開きましたけれども、其時別によみたいなんぞと云ふ考は更になかつたのです。

始めは口繪や挿繪許り見ましたわ。けれど、それも毎日の事ですから、すぐ倦きましたの。おしまひには暇つぶしに記事をよみかけました、所が今まで「文學なんぞ」と云ふ氣だつた妾が、其中の「野に佇ずんで」と云ふ美しい優しい文章をよんでから、ふと妾の心は動き初めました。

野！野が何で面白からう、そこには青草が一面に生えて居て、たまには小川も流れて居やう、目に入るものは青い草と、青い空と、白い水ときり。それが何で面白からう、妾の野に對する想は、これ丈けでした。それがこの「野に佇んで」をよんでから吃驚してしまひましたわ。

其人の見た野邊は、こんな單純なものではありませんでした、妾はとう／＼作者の爲めに泣されましたわ。何て淋しい野邊でせう、其眞中に只一人、夕日の赤い淋しい色をじつと眺めながら佇んで――しかも其人は病める胸を抱いて――。

妾の病床は淋しい野原になりました、妾は野邊の枯れ草に力なく沈みゆく夕日に對して、悲しき胸を抱いて立つてるのです。嗚呼病める妾の胸に湧き出づる想！、そは恐くこの作者の悲しき想。

其日は遂々一日、文學てふ新しき光を見出でて、生れて初めて美しき涙の雫をこれが爲にそゝぎました。

それから後、毎朝未だ眠よりさめぬ靜な野邊をさまよひました、月清い夕の野邊にあくがれました。此時この野邊はもう決して單調なものぢやなかつたのです妾は、其野邊に佇んで、あるかすかなく聲をきゝました、あるゆかしいなつかしい姿をみとめました。其聲其姿を更けゆく田舍の淋しい秋の夜、妾は枕に縋つて更に再び思ひ出づるのです。あゝ其時、其瞬間、胸の底にひらめく想を紙のべて、いつはりなく書きのべたならば、きつと／＼人はそれを見て、妾と同じやうに泣いてくれます、妾は其涙をうけて、日毎／＼に文學に親しむやうになりました。

皆樣！いつはりなくお寫しなさい。無邪氣な子供の一言一句にも、人は笑ひ、人は泣きます、子供は少しもいつはりがありません。文章もいつはりなく、我想

を人にお訴へなさい。人は笑ひ人は泣きます必度々々。病癒えて胸に新しき光明を點じつゝ、翌くる年の春四月、思ひ出多き野邊を後に、妾は再び家の人となりました。都は騷々しくて、賑やかです、まして心もうきたつ春四月ですもの、田舍の時のやうな、靜な淸い心をもつ事は決して出來ませんでした。然し夜は妾の世界です、妾は夜の靜な懷に抱かれて、心を自由に働す事が出來ました。妾は我心に映じた美しいと思ふもの、悲しいと思ふもの、あらゆる想をゑりつけた其萬物を、夜靜な時に於て、其まゝ順序よくくり返しました。さうして細い燈の下に、かつて田舍に在りし時と同じやうに紙にかきつけましたなら、人はきつと妾の感じたと同じやうに、強く〱胸に其想をゑりつけるにちがひありません。妾が病中に「野に佇んで」の文章に動かされたやうに、ねえ皆樣さうでせう。

妾は今まで不思議に思つてる事が、どうしても胸をさらないのです、それはかうです「春」と云ふ「夏」といふある一題について、數限りない文を一人して書き得る人があるだらうかと。妾はどうしてもそんな事は出來ませんの「春」ならば一ッか二ッ、三ッ四ッが關の山よ。それも每日々々「春」といふ文章を書いて居る事は出來ません、もう一年二年とたつてさへ、一年も二年も前の辭を想ひ出してならないのですもの。けれど、よく〱考へてると、反つて作れない方が不思議かも知れませんわねえ、さうでせう。妾は眼界が小さいのですもの。或る時妾は友に語りました「ねえ貴女、新しいいゝ文章をいつも〱作つて被居しやる方は、それは珍らしい所を、旅行なんか遊す方に限つてよ、妾のやうにいつもいつも家に許り引込んでどうして新しい作文が出來るもんですか」つて——。

其時友は云ひました「失禮ですけれど、撫子さん、さう貴女が思召すなら、一度どこかへ旅行して御覽なさい、妾はきつとかう思つてよ、貴方は何も作り得ないで、お歸りなさるだらうと。怒つちやいやよ、つゝまず云つてるのですから——。貴女そんな事をなさらなくとも、よく御覽なさい、萬物は皆歌となります、詩となりますよ、貴女は萬物に對して、目を瞑つたまま、何かあるだらうとおさがしなさるから駄目ですわ目を御開きなさい、目を。撫子さん目を開いてこの宇宙から限りないあるものを認め得た方は、多く認むれば認むる丈け、幸福なんですわ、ねえさうでせう。妾たちも其最も幸福な者となるべく目を開かうぢやあり

ませんか」
友は熱したる目をあげて、強く〳〵妾の手を握りました。其夜妾はいつものやうに、床の上に頭をおさへて、うつむいたまゝ、友の言葉をくり返しました「目をお開きなさい目を――。」あゝ妾は誤つて居ました。妾の目を開けて居るのは、強ひて見むが爲めにではありませんでした、我友は熱心に或物を宇宙からもとめて居るに――。
妾の耳は聾あるものをきゝました、我友は聲なき聲をもきゝ得るに嗚呼――。
あゝ妾は知らず〳〵友に一歩後れて居たのです。まこと妾は馬鹿でした、日かげに生ふる果敢ない草も、耳を澄し心を靜めて、これに對すれば、きつときつと何事か其運命を語つて居るに違ひありません。小霧たちこめる靜けき朝、木かげによつてこれに對すれば、そこには必ずある偉大なる意味深きものが潜んでゐるにちがひありません。嗚呼妾はなぜ今迄氣づかなかつたのでせう。
あゝされど〳〵、少しも失望する事はありません、「自覺は成功の第一歩」とか。眠れる妾は今こゝに初めてよびさまされて、成功の階段に其片足をかけたのですもの。

往復三里の學校通ひ

文香子

私は誠につまらない者でございまして、もとより皆樣に向つて、お話する程の經驗も知識も何もないものでございますから、お話も前後致して居ますが、若し御不用の時間でもおありでしたら、お眼をお通し下さい。
私は十四歳の時、前の高等科二年修業致しまして、すぐ高等女學校に入學致しました。其學校に通ひます道程は、一里半でございました。それで其學校の校風として四季を通じて八時に初まつて居りましたけれど、近い所のお人はよくお後れなさつて居ましたが、私は幸に後れた事は御座いませんでした、何時でも寄宿生の方より早い位に行つて居ました。
それから通學致しますのに、困りましたのは冬でございました。毎日暗い内から、北風にさからつて參るのです、でも別に人より澤山着物を着るといふことは致しませんでした。それで母も少しは氣になつたのか

學校の側に私の姉が嫁つて居ります、其處に私をやりましたが、なんとなく故郷なつかしく、それに今迄の友人の方に何だか濟まない樣に思はれた上に、勉强時間といつても近ければそれだけ、叉他に時間を費しますから、叉歸る氣になりました。

　朝まゐります時は、近所は皆未だ起きては居られませぬ、歸りに近所の叔母さんに會ひますとおきまりに「お歸んさつたかな、此頃は朝がお早いな、私等は床の內で、カランコロン〱といふのを聞いては、どれ〱早く起きねばならんといつて何時も起きます」つて、其樣に皆さんが申されて居りました。それから晩の歸りには身をさす樣な冷い風は、後から吹飛ばします、砂のはひかぐらがプイー――と吹きまくります其中を、小足に走つて歸りますと、手足は無神經のやうになつて居ます處へ、內には晩は大へんに事が多でざいますのに、小さい私の姪が、大へんいお惡るででざいますから、それも內のてでをとる一つと思ひまして、其の子はおつてやります、これで、すつかり日がくれますと、勉强を致して居りました。朝は五時頃に起きまして、六時前から學校に行つて居りました、けれど試驗前には、さうまゐりませんから、歸つてから子供をおもりしい〱本を見るとか、叉お風呂を焚ながら本を見るとか、叉學校の歸途では、友だち同志問合を致して居りました。無理にそんなにお風呂なんか焚かずとも、內の者はゆるしてくれますが、私は不幸にして、父に早くから別れまして、其上一番末の子でございますから、兄の手元で大きくなつたのですから姉さんに對しましても、其れだけのてではとらねばなりませんやうに思ひまして、でく、少々の手傳を致して居りました。

　それでも春は誠によろしうございました、學校から歸りに、道草をたべるのです。それは私等は田舍生れでございますから、田舍道の廣い道路をつたつて市中の學校に行つて居ましたのですから、歸りみちには、毛布を敷いたやうに、澤山花が咲いて居ります、今其頃の事を思ふとほんとにをかしうございます。丁度私どもの通ひます一里程の道は、ほとんど人家はありません、眞中頃に小さい村がございますきりです。それですから、其の村を通ります時には眞面目らしく通るのです。さあ家がなくなると、道ばたの花を取つて、植物のおさらへをいたしますやら、英語のはしくれを、お稽古するやらいたします。



對話

戀の說明

高尾

羽織の女。もうお正月が來るのねえ。
被布の女。又有難くお年を頂戴か。
羽、ホヽヽヽいくらでも貰つてやるわ、一ッづゝじや厄介よ、一ダース位かためてね。
被、全くよ、私等人間に一世紀に一ッづゝ年を取れつて云つたつて其通り出來ないかはり三百六十五日に一つ取らせるのも無理よ、實際一つ年を重ねた丈の變化のあつた者は百日だつて一年だし其代り私等見たいに三年たつても變りの無い者はまだ十八だわ、いゝじやないの。要するに之より人間は目で見えた丈の年がほんとうの年なのよ。
羽、だから敢へて從來の年の割合を以つて派手質素若いふけてる等と評する勿れつて云ふんでしよう。
被、オーイエース。
羽、一寸貴女は黃縞が似合ふはね。
被、勿論、人間の出來よりしてキ印ですもの。
羽、之から何處へ行くの。
被、河へ。
羽、此寒いのに。
被、凄い水の色見に行くんだわ、昨夜會社で鞭聲肅々があつたつて云ふから。
羽、一體其れは什麽いふ譯。
被、工女がね夜河を渡つて逃げるといふ隱語だわ。
羽、まあ、で成功したの。
被、どうしてあの急流を、押流されてもう少しでお陀佛になる所を警戒に助けられたんだつて。
羽、寒かつたでしようね。
被、其れはもう、其かはり今頃は暖いお粥でうと〱

と昨夜の夢でも見てるでしようよ。

羽、其又夢を想像しに河へ行く人間も餘程物好ね。

被、じやよしませうか。

羽、どうでも。

被、昨夜は家で面白かつたわ。

羽、什麼して。

被、皆で謎掛して、でねえ私が淺間山つて出したら誰にも解けないの。

羽、じや貴女は。

被、譯はないわ家の兄さんよ、だつてほら時々噴火するでせう。

羽、まあ――。

被、實際よ、あんな怒りぽつたら有りやしないわ、妹たるものやり切れたものじやなくつてよ。

羽、あら一寸お聞きなさいよ、××亭の二階よ、ほら誓文眞實ウー妻折り傘と云はれたが、思ひをツテチンひィィらァくチツツンツンツンチツテツン花傘ァーサ…………。

被、ホヽヽヽ貴女の口三味線の方がよつぽどいヽわ、お正月には是非ね。

羽、はあ紅葉傘を用意して置きますよ、其節貴女もお逃げなさらないでしようねえ。

被、ホヽヽヽ一つさわぎませうか、惡魔拂位な事なら覺えてるかも知れないわ。

羽、そうよ、貴女と私と腕限りやつたら此所へらの三文藝者舌卷ちまうわ。

被、卷くんだか出すんだか、ホヽヽヽでも愉快ね。

羽、あの何ね考へると上手も下手も分りもしないで舞や三味を卑しい物だなんて云ふ人癡にさはるわね隨分

羽、全く野暮の骨頂だわ。

被、日本固有の藝術を淸い處女が淸い精神を以つて演じるのに何處が卑しいんでしよう。

被、其れや分らない人間が云ふ事は私等に判斷出來ないがあたりまへよ。

羽、金茶の髮を風が吹き亂す樣なヴヰオリンの音が尊いか、何も彼もわきまへてる俠氣に富んだ江戸式の女を思はせる三味の音律が卑しいか、其は時と場所演じる人間の人格の上下に依ると私は思つてよ。

被、違ないわ、全くさうよ。

羽、一寸貴女はラブつて事した事ある？。

被、どうして。

羽、だつて流行だからさ。

被、其れあ現代の人間ですもの、ラブがなくつちや生きては居られないわ。
羽、さう、どんな物。
被、どんな物つて貴女は知らないの、思ひの外話せない人ねえ。什麼つて口では云へないわ、形のあるものじやないから、まあ夢の樣な物て云つといたらいゝでしよう。
羽、ではどんな氣持なもの。
被、ホ……愉快なもの、悲しい時でも淋しい時でも無限の力を以つて私を慰めてくれてよ、其から何物にも滿足を與へてくれるわ。分りやすく云へばねえ、呉服屋の前でも通つた時美しい布が掛てあるとしませう、あつ欲いなと思つたせつな吾に戀人ありと或る者のささやきを耳にすると私は雪で心を洗はれた樣に清々しくなつて私は何もいらないのだ、と心から滿足して通り拔けてしまふのよ、其れは何に於ても變りはないの。
羽、まあ經濟的ね、だけどさめたらきつと悲しいものだと思ふわ。
被、あらさめる事はないわ永久に。
羽、其れはさうよ今熱中してる貴女から考へたらさめる事なんか思ふ餘裕はないでしようけれど、少くとも第三者の私から見たらさう思へるわ。
被、まあ貴女はだから話せないつて云ふんだわ、私の戀を否え現代の人の戀を貴女は何と思て被居るの。
羽、何だつて戀は戀よラブはラブじやありませんか。
被、オホ……貴女の頭は舊いわ、私のラバーはねえ酸素を吸つて生てる人間じやない事よ。
現代人のラバーとなるべきものはもつと〳〵尊いもつと〳〵美しい物でなくつちやならない事を貴女は御存じないの。

窓際

籬の花

「好いお天氣ねえ、庭へ出ませうか」
「それより此窓で話しませう。あ、M先生テニスして被居る」
「いつも御熱心ねえ、あれで居て少つとも上達しないのが妙よ」
「向ふは二年の綠さんぢやなくつて？」
「さうですよ、M先生のデイヤだわ」
「此頃大變上手になつてねえ、目立つから誰にも可愛

がられるわ」

「私あの人嫌ひ、上の級へ許りおべつか使つて、級ではそれは大威張だつて事よ」

「M先生てばねえ、四年生は大人振つて了つて少つともテニスしないつて仰言るのよ」

「誰が、大人振りなんかしやしないわ、したい時はいくらもやられるわ」

「だけど、もとは私達も散々上の級のことを言つて、私達はきつとテニスもやれば無邪氣に騒ぎもする、なんて云つたけど、自分は大人振る氣でなくつても、自然テニスなどきらひになるのが妙ねえ」

「種々用があるんですもの、さう〳〵遊んでばかり居られないわ」

「さう云へばもう卒業も間近ねえ」

「卒業はいゝけどお別れするのがつらいのねえ、かうして何も一緒にしたり、話しあつたりしてた者が、卒業して了へは別れ〳〵の道を歩いて、もう二度ともとの道へ歸ることは出來ないんですもの。昔は知らない同士がこんなに仲よくなつて、又別れて……あゝあよう〳〵考へると變な氣がするわ、皆神樣のたはぶれよ」

「卒業の辭じやないけど、世の荒浪にこぎ出すんですもの、學び舍の柵の中に放たれて、小羊の樣に平和の夢を見て居るわけには行かないのねえ、同じ境遇に居つたものが、樣々な階級に別れるのが悲しいと思ふわ、私なんぞどうなるんだか……」

「貴女はいゝわ、××町の資産家の令孃ですもの、貴女のお父樣の御名、知らない者はなくつてよ」

「けれど私、虚榮の中に無意義な生活は好まないのよだと云つて名を立てるなんて、そんな努力は無いし、女はどうしても損ねえ、名でも知れる樣になると男より、批難の聲が多いんですもの。一高の從兄など見ると、ほんとうに羨ましいのよ、休みの時間、廣いグラウンドの片隅で、先生をとりまいて、講義の質問したり、いろ〳〵の意氣をはくんですつて、寮歌なんぞきくと何とも云へない氣がして、そゝられる樣よ。」

「貴女とHさん××學校へいらつしやるて云ふじやなくつて？」

「あら、誰がそんなこと云つて？」

「もつぱらの評判よ」

「うそよ其樣こと、思つても居ないのにどうしたんでせうね」

「私皆様とお別れするのは嫌だけど、學校なんぞもうあきてよ。此間も貴女とねえ、外に五人許りK先生に呼ばれたのよ、如何したんだと思つたら貴女方高師へ入學してはどうですつて、そして貴女方は善良なる教師たるべき資格をもつて居るから、たとへ一年でも生徒を教へれば、大いに國家の爲めになりますんですとさ、ほゝ……まさかねえ」

「だから其時も云つたのよ、私等見た樣な者が、國家の有益になるんなら、國家への御恩報じに、小學教師でも一二年しませうかつてほゝ……だけど、誰も知らない處でせめて一年か二年、解放された生活はして見たいとも思ふわ」



「Tさんは高師へいらつしやるんでせう」

「えゝ、さうですと」

「いゝわあの方こそ、ほんとうに教育家らしい資格を持つて被居るわ」

「Aさんはすぐ嫁らつしやるんですつてね」

「えゝ、少尉ですと、エンゲージしてあるんですつて」

「貴女も直ぐだつて云ふぢやありませんか」

「あらうそよ、誰が言つたでせうね、あんな根も葉もないこと」

「何ですの？」

「あのねほゝ……、私にエンゲージがあるんですつて一時は皆して言ふのよ、私そんな結婚なんて事、未だ思つても見やしないのに」

「だけど種々思ふと厭になるのねえ、結婚なぞすれば理想も何も、無くなつて了ふじやありませんか、それより私、いつそこのまゝ、若いうちに死むでしまひたい」

「あら厭だ、さうすりや貴女淺間山へでもいらつしやるがいゝわ」

「華嚴は少つと遠いけど……××川は……あんまり詩的でないわねえ」

「そんな、自殺する程非觀しちや居ないけど、つまり唯美しい空想だわ」

「あ、今の汽笛汽船の笛の樣だつたわね、汽車の樣でない、ボ――ッと聞こえたわね」

「△△の海はよかつたねえ、あゝあんなことはもう二度とないわ」

「あゝ△△の海、△△の海！海知らぬ友の百人が、眠ることの出來なかつたあの浪の音は、一生忘れられぬ思ひ出の一つだと思ふのよ」

「あれがお天氣だつたらなほよかつたでせうにね、私朝、日の出が見たいと思つて二階の緣へ出て見たのよ未だうす暗くつて、雨がしと〳〵と降つて居るの、東の方を見ると、雲が少し許りうす明るかつたきりだつたけど、浪がきら〳〵と影を引いて、かすかだけれど、何とも云へない印象を殘したのよ」

「北の海は寂しいわねえ、私始終あんな所で暮したら心が何者かを欲してしようが無いと思ふわ」

「あゝ暖かだこと」

「貴女いゝ顏色よ」

「ほんとにいゝ小春日和ねえ、これじや梅も咲きさうだわ」

「家の土藏の傍の梅ねえ、咲きかけてるのよ」

「まあ、それはお正月飾るのに、恰度いゝでせう」

「南むきで風が當らないから、暖かい年はいつも暮のうちに咲くの、貴女けふ歸りに私の方まはつていらつしやいな、上げるわ」

「どうぞお願ひ」

「もうすぐ鐘がなるでせうね？」

「此の次圖書でせう」

「えゝ圖書室へ行きませう、貴女休暇日記の表紙、何になすつたの」

「私、夢二式の人物大きく書かうと思つたけど、六づかしくてとても駄目、顔がどうしてもいけないの。貴女は？」

「未だきまらないのよ、何かあつさりした物にして置かうと思ふの」

お稽古歸り

優梨子

マガレット「一寸明後日のお淩ひに髪何に結つて？」

お下げ「さうネ、マガレットが好かなくて？ネお澄ちやん」

桃われ「えゝ好いわマガレットが……。リボンは此間のにしませうよ」

マ「此間の？さア困るわ、私ネあれ短氣起して苦茶々々にして終つたのよ、歸つたらよく火熨斗かけなくちやあ」

お「嫌ネ美耶ちやんてば………」

桃「私ネ家の母樣のマガレットたら眞實に氣に食はないのよ、好いのネ美耶ちやんも春ちやんも姉樣があつて」

お「美耶ちやんのお姉樣もうぢきお嫁樣にいらつしやるんだつてネ」

マ「噓よ其麼こと」

お「あら隱したつてちやんと知つて居るわ、ネお澄ちやん……」

桃「えゝもう昔からネ」

マ「あら彼麼噓許り………」

お「だつて家の姉樣が香鶴さんは京都式の美人だから丁度好いつて云つたから、什麼して？つて私が聞いたら京都へお嫁にいらつしやるんだつて云つたわ」

マ「…………」

桃「それ御覧なさいな、お目出度う」

マ「知らないわ」

桃「じや明後日はお振り袖で高髷でせう」

お「えゝ無論さうよ、ゆふべ家の姉樣にも島田にお結げつて云つて被在したわ、家の姉樣は島田なんか一寸も似合はないから止すと好いのに………」

マ「あら彼麼事云つて……よくお似合ひになるわ、貴

女よりずつとお綺麗ですもの」

お「えゝそれはどうせ私はお多福よ」

マ「おや是は御挨拶！、御免なさい」

お「嫌よおほゝゝゝ」

桃「おほゝゝゝ」

マ「あ、困る！私爪箱彼家へ置いて來たわ」

桃「嫌な人ネ、待つて居るから早く取つていらつしやいよ」

マ「えゝ飛んで行つて來るわ」

お「おほゝゝゝ氣樂な人ネ」

桃「眞實にネ」

お「…………」

桃「…………」

桃「まア美耶ちやんてば何時まで待たせて置くんでせう」

お「眞實にネ、屹度また誰かと無駄話して居るのよ、彼麼氣樂な人つて有りやしないわ」

桃「あ、彼處へ來てよ、あれあんな他見なんかしながら」

お「美耶――ちやん早く被入いよ」

桃「まア何して被在したの？　人を散ざ道の眞中へ待たせて置いてさ」

マ「おほゝゝゝ御免なさい、私ネ西野さんが餘り安宅をつかゝつて許り居たから少し立て聞て居たのよ」

桃、お「まア氣樂な人！」

マ「おほゝゝゝだつて西野さん此間安宅上げた許りの蒸氣のほやほやでせう、それだのにまるでつかへて許り居るんですもの、面白かつたから…………」

桃「さう――。でもあの人明後日安宅するんでせう」

マ「えゝ、だからお師匠樣やきもきして被在したわ」

お「困るでせうネ、あゝ困るつて云へば一寸、私達の汲汲みも長くて困るのネ」

マ「眞實にネ、笠盡しからにして貰ふと好かつたけど」

お「どうせ私駄目よ」

マ「私なんか猶よ、だつて私お三味線が入るとまでつきさうで困るんですもの」

マ「八千代獅子の方がずつと聞き榮えがあつて其割りに樂で好いわネ」

お「八千代獅子は尺八が入るんでせう、嬉しいわ、私尺八の音が大好」

桃「だけどお三味線が入らなくてお琴とだけなら詰らないものよ、私はあの粋な根〆めが好いわ」

マ「私は一番お琴が好き」

桃「おほゝゝゝ皆別々ネ」

マ「ぢや明日からお澄ちやんはお三味線、春ちやんは尺八を習ふと好いわ、三人で合奏出來て」

お「さうネ、ぢあ明日からさうしませうよ、おほゝゝゝ」

マ「あら向ふから來たの A組の森さんじや無くて？馬鹿に氣取つて歩いて居るのネ」

桃「あゝさうよ、一寸向ふからお叩頭するまで知らない顔してませうネ」

お「えゝそれが好いわ、私あの人たら大嫌ひ、原先生のお花だなんてそれは威張つて居るんですつて」

桃「何だか好かない人ネ、私も嫌ひだわ」

マ「私もよ」

お「まアあのお叩頭の仕樣は………」

桃「酷いのネ、まるで人を馬鹿にして居るわ」

マ「あの澄し方……、小面が憎いわ」

桃「あの人の姉樣、それは不品行んですつてネ」

マ「えゝ〱もうさんざ新聞で叩かれたのよ」

お「まアさう！ じやあの人だつて矢張り不可ないでせうネ」

マ「どうせさうでせうよ」

桃「學校の名折れにならない内に、好い加減で彼麼人退校ると好いわ」

マ「眞實だわ」

お「不品行つて云へば美耶ちやん、あなたの後の宮川さんの話聞いて？」

マ「いゝえどんな事？」

お「それは酷い話聞いてよ、あのネ……、まア止しませうよ恁麼道中でなんか………」

マ「それもさうネ、あゝさう、今夜も貴女の姉樣家へ被入るつて云ふから其時春ちやん一緒に被入いな、お澄ちやんも……さうして其時ネ」

お「えゝ有難う、母樣が好いて云つたら上がるわ」

桃「美耶ちやんと春ちやんお姉樣、明後日何なさるの？」

マ「千鳥ノ那須野よ」

お「千鳥つてあの淡路島通ふ千鳥の……つて云ふんでせう、好いのネ早く聞きたいわ」

マ「だから今夜被入いな、それは姉樣達ナ氣取つて唄つてよ、私等見た樣に金切り聲なんか振り上げやしないわ」

お「若し行かれたら二人で合せて見ませうネ」

桃「え丶合せたいわ、もう明日きりさらは無いんですもの」
マ「じや被入いなく〱ネ屹度ネ、待つて居るわ」
お「え丶若し行かれたらネ」
マ「嫌！春ちやんてば、人おらしな………」
桃「私暗くなつたらお琴持たして上げてよ、どうせ母様が好いつて云ふに定つて居るから………」
マ「え丶成るだけ早くネ、春ちやんのお琴は昨夜のまんま有るから丁度好いわ」
お「おやもう此處へ來ちやつた、話ながら歩くと早いものネ」
桃「さていよ〱お別れネ………」
マ「じや屹度被入いな待つて居てよ」
お「え丶有難う、さようなら」
桃「有難う、じや左様なら」
マ「さようなら」

噂

はる子

A「ほんとに寒くなつたわね、今年のショールはどんなのがい丶か知ら？　貴女、もう出來て？
B「また今年もこさへる氣？　去年い丶のが出來たぢやありませんか、それでゐて岳先生のフラワーだつたんだらう恐れ入るわ。
A「ほ丶丶丶丶本校生徒たるものは斷じて流行を追ふ如き行爲あるべからず、ですが岳先生はね、貴女の事を大變ほめてゞしてよ、Bさんはあれほどの財產家に生れてゐて、ちつともたかぶらないし、そして質素だつて。
B「ふ丶、質素？　質素の方で逃げて行つてよ、私のは質素ぢやない、不性なんだわ、それはさうと貴女Yさんに逢つて？　近い中に。
A「え丶、逢つた精、一昨日だつたでせう。
B「さう、私は昨日逢つたわ、隨分な風をしてらしてね。
A「それは……あの日だつてね、マガレットに褪紅色の五インチをさして、派手なく〱友禪に、淡い御納戸の羽織なのよ、マガレットも肩あげのある間はい丶けど……？　あの方のほんとの年を知つてゐて？　私ね、卒業の時、そつと證書をみて上げてよ、たしか二十二年生だつたと思つてるわ。
B「二十二年？………、ぢや二十二ね、私達と四ッも違ふ

の？ 私の逢つた時にはね、紫矢絣のお召を二枚重ねてね、それは派手な！ あ、これね從妹の帶の祝の贈物につて縫つてるんですがね、それよりまだ派手だつたわ。そして緋博多の帶を矢の字にして、え？お髮？ 桃割よ、北野さんは小柄だし、美しいからいゝけど、私達だつたら、それこそお化ね。

A「いゝわ、そんなに悲觀しないたつて、羨しいなら自分達も、どし／＼派手にする事よ。

B「まさか、派手に出來ないからつて悲觀しやしないわ。貴女とは違ふもの、私、着物によつて慰められる程墮落してやしない事よ。

A「墮落よばはりには恐れ入るわ。ぢや私も墮落してるつていふの、それやひどいわ、私にだつて、私だけの天地があるんだもの。

B「その天地が、着物や芝居だつたら同じ事ぢやありませんか、ほほゝゝちつと趣味の向上におつとめ遊せ。

A「ひどく侮辱してね、私だからつてまさか、着物や芝居にばかり浮身をやつしてやしませんよ。ショールの新調位でそんな不體裁な名をつけられちや、うまらないからやめます。誓つて去年こさへたので了ひます。

B「ほゝゝゝいゝ覺悟ね、それでこそ我黨の士だわ、貴女の爲、我黨のために祝してよ。

A「サンキュー、どうしたつて、貴女にはかなはないわ。談話部の森先生の、フラワーだけはあつて。

B「フラワーだのデヤレストだのつて、いやになつちまうのね。先生の病氣見舞に行けばデヤレスト、質問すればフラリー、全く立場がありやしないわ。

A「貴女のは特別よ、レッドネクタイね、ほほゝゝあんな顏してわからないの、早稻田文學士、吉尾博の君よ……それは貴女の事を、賞めてたわ。天才だの、詩人だのつて、西組はいつでも、あてられてたのよ。

B「あら、貴女、西組だつたのでしたつけ、私、東のやうな氣がしてゐたわ。ぢや幸江先生の受持ね、あの先生は好きだつたわ。レッドネクタイていゝ名ね。あの先生には幸江先生がお休みの時、一二度近松か何かのお話を伺つたばかりよ。そんな事云はれる筈がないわ。

A「でもほんとに仰有つたわ、幸江先生は、お父樣におなんなすつたつてほんと？

B「えゝ、ほんと、お寫眞お目にかけませうか。一寸失禮！

* * * *

B「これが結婚紀念の、こちらが赤様の紀念のよ。
A「まあ、これが奥様？　ビユーね、先生のおひげがこくうつゝてること！　あら赤様、もうこんなに大きいの？　何時でしたつけ、御結婚なすつたのは。
B「一昨年の四月だつたでせう、私等が卒業すると歸京なすつて、それから、すぐだつたから、赤様はこの一月にお出來になつたんですよ。
A「だから、フラワーだつていふんだわ。こんなお寫眞まで貰つてなさるんだもの、私なんか年賀状だつて頂きやしないわ。私も出さないけど、ほゝゝゝ。
B「奥様のお手紙もあるわ。みせませうか？
A「おなつかしき、まだみぬB子様に。なんてハイカラな書き方ね、字も御上手ね、學校は？
B「女學館ですつて、先生が此地へいらつしやる前から許婚だつたさうですわ。Fさん Nさんが、大さわぎしたつて駄目だつた筈ね。
A「可笑しかつたわね。あの頃？　お名は？　澄江さん？　いゝお名ね、先生があの、詩人らしい目を伏せて、澄さん、なんておよびなさるところがみたい事、ほゝゝゝ、餘りお噂して、嚔なさるとわるいからやめませう。貴方、お風召したぢやありませんか、なんて仰有るところも、次手に拜見したいわね。あら、これはHさんのね、たしか中尉でしたつけ、貴女、皆様のたくさんもつてらしてね。みんな拜見よ、Sさんの高髷よく似合ふわね。Kさんのお丸髷もいゝわ。
B「卒業から丸二年にしかならぬけど、もう半分以上は奥様ですわ。皆が集るつてな事はもうないでせうか。
A「えゝ、もうないわね、奥様になつたり、母様になつたり、Iさんね、あの方は、二度いらしつて、また歸つてなさるさうだわ。
B「Iさん？　あの人、在學の時から、博愛主義で名高かつたんだわ。知らなかつて。
A「知つてたわ。さぞ岳先生が、涙を流してお歎きなすつたでせうね。例の沈痛な口調で、只一人のために五百人の生徒全體が、汚名を被らねばなりません、ほほゝゝゝみえるやうだわ。
B「けど實際よ、只一人のために八十人のクラスメートが恥しい名を受けねばならないもの。
A「あのね、離縁つた方はIさん一人ぢやないの。Lさんも、Oさんも、それから、まだ誰かゞ歸つたやうにきいたわ。それは姑様がやかましいとか、良人が遊ぶとか、小姑が意地がわるいとか、何とか事情はあるで

せうけど、名譽な話ぢやないわね。何とか、離縁らぬ工夫はないかしら?

B「ほゝゝゝ妙な心配をしたものね。Mさんが結婚なすつた時に、私何か奇抜な贈物がしたいと思つたけど、一寸、思ひつかなかつたから、こんな事言つて上げたの、『玉椿の八千代かけてなぞつて祝はれて、嫁く人が、離縁ることを思へば、八千代も餘り信用がありませんわね。私は、結婚を……結ぶでなくも決するといふ字をかくのよ……祝しますと申しませう』とね。ほほゝゝゝおもしろいでせう。

A「決婚? いゝ言葉ね、昔は、見合といつたつて、ほんの顔を赫め合ふ位の事だつたらしいし、親のいふまゝになつてゐても、離縁つてな事はあまり、なかつたらしいわね。それに、新しい教育を受けて、良人の選擇だつて、昔より、餘程、自由をあたへられた今の婦人が、片つぱしから離縁になるなんて、お墓の中に入つてから、恥かしいわね。

B「隨分な氣焔ね。あなたの時にも、決婚つて言葉を贈りますから、何卒、お墓の中で、赤面しないやうにして頂戴ね。

A「ありがたう、貴女にも何か變つた贈物がしたいわね、何がいゝかしら。

B「ほゝゝ頂いてから、お禮を申しませうかね、けど私、何も頂かないでも離縁りやしないわ。私はあなたのやうに、氣焔は吐かないけど、岳先生に四年間、教育されたから、不言實行者になつたの。

A「まあとに角、考へておきませう、貰ひ放しつて譯にもゆかないから。

B「御心配頂きませんでもよろしう御坐いますよ。何でも離縁さへしなければいゝのだから。

A「さうですね、ぢや、離縁ないつて誓に握手しませうほほゝゝゝ。

姉妹

馥子

姉、雪さん今度の婦人ノートに何を投稿の。

妹、何つて私、對話でも書いて見様と思ふの。後は出來ないですもの。

姉、對話の競争は烈しく無い事。

妹、否々非常に烈しいの、唯三人丈載せるらしいから私沒書は覺悟よ。

姉、え丶左様思ふとりやあ好いわ。和歌は投稿ないの。

妹、出さへすりやね投稿んだけれども？　近頃はめつきり凋落して了つたわ、貴姉は出來たの。

姉、五首許り出來たの、然し和歌でなくて馬鹿よ。

妹、あら其麼事。一體私は歌に餘り趣味がないのね。

姉、どうだか、私は非常に好きよ。あのう山村さんの歌今の婦人で何んだつたらう。

妹、秀逸よ、伊達さんだの木村さんだのと一所に。

姉、木村さんて？。

妹、あれ何時か小説欄で葉舟先生に何んとか云はれた木村さんよ。

姉、さう。

妹、原田さん大變優遇されるのね。

姉、進歩したからでせうよ。進歩と云へば何んと云つたけ、あ、芳子さんあの三加島さん非常に上手になつたのね。實に皆さんは羨しい。彼の人何歳位だらう。

妹、さうね新作家に出てた寫眞は十六位に見えてよ。あのう今の婦人ね姉さん何處を見て。

姉、例の通りよ歌ばつかり。

妹、まあ私其の他も見てたと思ふたわ、其れぢやあ面がはりも見ないのね。

姉、面がはりつて若杉さんの書いたのだらう。

妹、え丶。

姉、如何なの。

妹、例によつて才筆よ、あの菊地りう子さんをモデルにして書いたの。驚かざるを得ないわ。先生との戀を遠慮もなく晒け出してあるの、あ丶文章の上手な人はあれ程大膽なものかなア、私は平凡でもよい、下手でもよい、彼麼に大膽なのは嫌。菊地さんも大膽よ、まあ一度讀んで御覽なさいな、大膽揃ひだから。

姉、さう。先生もよく人に戀はれる方ね、何んとかと云ふ信濃の人だの面がはりの女主人公だのつて。濱子とはとり子さんだらうねえ。

妹、え丶其の外白山吹とも云ひますよ。大變美しい方ねえ。美人と云へば杉山とし子さん。

姉、あ丶春翠さん艶麗な人ねえ。此の頃名が見えないぢやないの。其れから今小説欄で勢のある月靈子さん彼の人も美人ね。杉山さんを山の手式と云へば岸さんは下町式だ。

妹、隨分美人もあるのね、山田さんだの臼井花子さん章子さんだの露草さん自稱美人は萩花樣。

姉、露草さんとは。

妹、三宅恒子さんよ。
姉、さう。何で見て。
妹、今の婦人にあるのよ。
姉、寫眞が。
妹、否々、寫眞は星ヶ岡の誌友會のなに有りますの、今の婦人には名よ。優しい文章を書く人だつた、和文體にねえ、今は變つた樣よ。彼の人につゆ草と云ふ號は相應しないわ。
姉、今の婦人に萩花さんは居ないこと。
妹、えゝ彼の人の文實に好のね、二三日中に定まる運命は幾度讀んだか知れないわ、彼の人も東北に居なくなつたし今最東北人で女子文壇に聞こえてるはあららぎさんね。
姉、何處の人。
妹、あら山形ぢやありませんか、其外九輪草さんだの我が縣ぢ眞野さん位ね。私なんかは駄目だての道のねんねだから。
姉、オホヽヽヽ其れぢや青半歳以下なの。
妹、無論よ以前青半歳と云つたは誤り、一昨年あたりは東北も隨分よかつたのねえ。岩代の服部さん根本さん其れから岩城か岩代かは知らないけど福島の泉花枝さん等で實に羨望に堪へなかつたわ。
姉、服部さんてば今月の文章世界にある樣ね。
妹、あゝさうでしたけ。彼の方靜な樣ね、少女界に出てた年齡から計算して見たら今年二十三の樣よ、少も戀愛小説を書かないのね、其の爲か餘り人氣が無かつたわ。何年だつけあ一昨年か、誰れかが上手な人達を評した時服部さんは拔いたの、私實に不平だつた。其れからもね小説欄の驍將は深瀬ます子さんで服部さんは次だと云ふた人があつたの、然し見る人はさう見ないでせう、寄稿家に選拔されたから。
姉、一體冷靜な文の人は餘り騷がれないぢやないの、今だつてさうよ、鈴木春子さんより筆子さんが名高いからね、筆子さんは今の婦人に出てたつたらうか。
妹、サアあの美しき色彩に居つたらうか。私はねあのう單調なる生活に倦むあれは筆子さんぢやあるまいかと思ふの、名は野に降る雨としてあるけれど。
姉、何故。
妹、だつてね書きぶりが然なんだもの、其れに事務員だの母樣と兄樣許りだと云ふもの。私は誌友の中で最も懷しいのは筆子樣よ紫花樣よ。
姉、吉田さんてあの阿波の。

妹、え、さうよ此の人達の文章で嫌と思ふたは有りませんわ。あゝ筆子さんの文壇の光の小説は好ましくなかつたけれども。

姉、今夜は隨分冷えるわねえ、既う何時だらう。

妹、アラ十一時よ餘りおしやべりして時の經つのも忘れてたわ、後は明日縫ませう。

妹、あゝ頭が痛い、何んだつて近頃はかうなんでせう。

姉、また神經衰弱が起つたのではないか、餘りお前は此頃やかましくなつたよ。其れに極端に潔癖だからねえ。少々の事はかまはない方がよいのよ。

妹、さうかも知れない、さうしませう。私はね年毎に貴姉に似ると思ふの、弱くなるのはです、一日だつて頭の痛まない日はない人だもの呆れて了ふわ。

姉、皆思ふ儘でない境遇だからよ。私が頭の痛み始めは五年許り前からよ、始の中は痛いのだつたが段々に苦しくなつて何もわからなくなつて了つたの、其れでも鼻の療治をしてから少は樂になつた。之から一生懸命になつて山を恢復さしたり鷄を飼ふたりして二三年の後、遲くとも二三年の後に東京へ行つて直さうと思ふ。此の鼻加答兒が直らないとても立ち續かれないから。

妹、實にね、さうしませう。あゝ泌々貧乏は嫌だ。お祖母さんはね先達「人の家に男子が無くて如何される、私が死んだつて位牌を女等が持つてならないぞ。何時迄婿を貰はないだらう、家の者があれば山だつて何處だて彼麽に荒廢る者でない」て云ひましたよ、餘り婆さん風な事を云ふ樣だけれ共お祖母さんの仰有る樣にしたら如何。

姉、嫌々其麽事は嫌、來年からは私が出て監督するから好いわ、けれど使ひべりする弱ん坊であゝ身體の强くないのは恨みだ、家の者も嫌、外の者も嫌。

姉、え、家の者も嫌ですと。

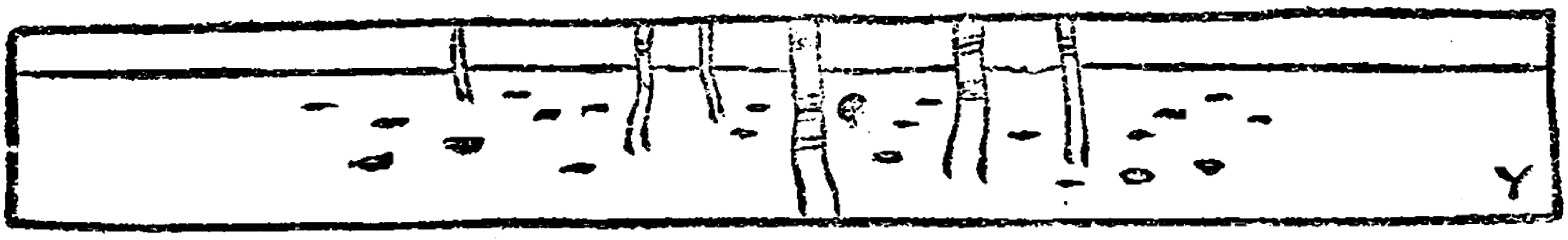
妹、アラ私の云ひ樣がわるいのよ、家の者とはお祖母さんの云ふ家の者、其れから他の者即ち庸人ね自分の思ふ樣にしてくれないから嫌と云ふ心なの。

姉、あゝさう。私もます〳〵働かう？　家さへよくなりやあ好いのだから。

妹、今日ね汽船で澤田のお嫁さんを見たの。

姉、さう甚麽人？

妹、可成の美人よ、束髮に大きい花をさしてね吾妻コートを着て居たの。此の人が結婚の晩旦那樣と理想を語り明した人かと思つたら可笑くなつたわ。



○　名古屋市　みさを

思ふことなからいひさしうつむきてみまもる指のかなしかりけり
踊子の美しかりし表情をまねびてみればさびしかりけり
黒髪をとぐろにまきし都女のよそひ目なれし御君なれば
いつの間か膝に手のありいつよりぞものもひそめし我にかあるらむ
秋の日のうつり香あわく身にぞしむ葦間さらしゝ夜着をかづけば
障子越秋風ふくをきゝながら髪結ふあさの白き元結

○　麻布　江森美子

よるにあきひるに勞れし少女等をむらさきの世にいてはしめずや
ひなけしの花にひそめて美しく給ひし笑みの柔らかさかな
故なくも若き君等にやはらかき瞳を投ぐる少女となりぬ
ふるゝ毎見る毎はゆし和胸にやはくましろく安らへる乳
やはらかき涙よ瞳よ微笑よ皆若き子の命なるかな
男とは羞恥に染むる少女等の頬にキス欲す者とし思ふ

○　羽前　伊達松子

このまゝにあれば靜けきわれなりと思ひあやまりかく衰へぬ
はた〱と暮れゆく海に白帆なるかなしき心うちつれてなる
天地のいづこともなくくづるゝが如き音して雪ふり出でぬ
うらわかきこの身にたえずまつはれるものあり日毎心おちゐず
うすぐらき室の片隅に何ものかうづくまりゐぬ熱やむ夕
しづまりし嵐のあとの白き街海のごとくに廣くさびしも

○　高尾し今

二十年を戀はず戀れず過し子よ精舍の垣の白はちすのかな

其せつな涙ながせしわれなれど今嘲ふ子となりしかな

ぬけ殘る短き髮の延びぬ間に早人妻となりにけるかな

泣きぬれてふと眠りけり野の末に時雨にさめぬ淋しき心

○　かゝるかや女

君にふれいとおもしろく鳴りいでしこのなりものを戀といふにや

思ふ、戀ふ、かかる言葉はわが心君にしめすに足らじ何れも

君に逢ひ俄に谷におちいりて救はれにけるここちせしかな

灰色の館の中に緋のとばりかけてぞ待つと人の呼ぶなる

力もて開きしは君その鍵をはづせしはわれ黄金の扉

限なきみ空さまよひ涙しぬはかなき戀の巣をたち

○　神保千代野

かやの實のこぼれ落ちたる庭のすみ語ろふ二人にくゝ思ひぬ

冬の夜に暖爐のぬくみ面あつく君が奏ずるセロの音をきく

何故に母は我をば生みしかなこの悲哀の魂をあたえて

何事も皆破れたる敗殘の身を捨てんかな宮城野のはて

○　伊志子

うつくしき衣あまた持つ少女子のほてりはちさくうつくしければ

指やみぬわれ指やみぬおそれして今日のみ紅はさゝですぎぬる

しら／＼と小鳥の啄む草の實をうづめてふりぬ山の初雪

○　平塚白百合

酒倉のならべる河岸の柳の葉午後のなやめる日の中に散る

琴抱き秋の日をゆく渡人片町はしる晩秋の風

ともし火は野獸の目してかゞやける春のちまたにわれはうれふる

○　　常陸　桂　月子

世の常の男の子の如く茶屋酒を呑むと云ふ故悲しうなりぬ

何となく只何事か恐ろしくやゝへだたりて君と語りぬ

或る時は恨みてすねておん室の冷たき壁によりそひて泣く

空虚なる心は安し安き程空虚となりし心は寂し

○　　宮城縣　原　白百合

胸の海珊瑚のいろの波たてつ戀の歌をばあまたよせ來ぬ

よわくして蹈みにじられし花なればふたゝびの日は灰色に咲く

きづつきし玉を抱きて悲しめるおろかしさをばあなづられ居ぬ

千人の少女のねたみ白銀の矢の飛ぶと思ふわれにふる雪

雲を見る夕の柱に背をなげて思ふことみな悲しかりけり

○　　福島　春　子

わかれては更に悲しくなつかしく昔ながらのわれなりしかな

消えてゆくせつなの星のいと淡き光の如きやはらかき眼よ

野を過ぎて林にいりてくれそめぬあゝ落葉のさみしきひびき

○　　常陸　古島花子

あか〱と入日の中の穗芒は君の泣くごと悲しかりけれ

さら〱と落葉のもとに黑髮をときて我泣き行く秋も泣く

わが胸のそのかたすみにうつりたる淋しきひとみ今日も笑ひぬ

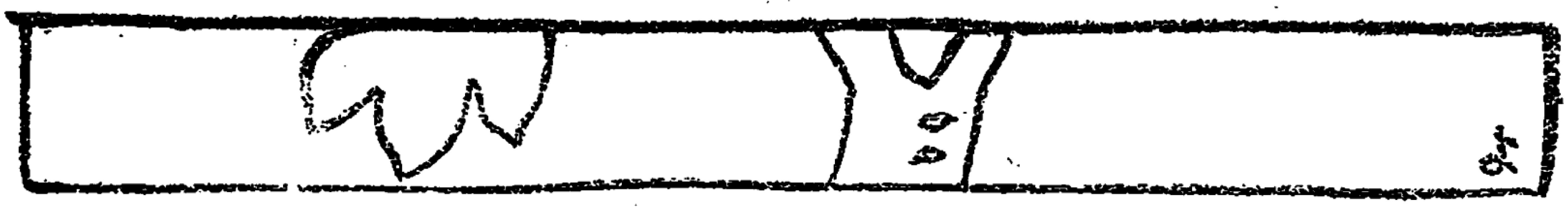
天地のものみな風になびくとき胸のすべてはありありと見ゆ

○　　金澤　むらさき

何となく灰占かくぞはかなけれ誰がをしへたるすさびにやあらむ

はじらひのさても美くし夕陽に向ふ百日紅のまばたきのいろ

鐘なりぬ山の上よりあか〱と月こそのぼれ心ときめく



八月の南吹く熱砂に寢てぬくみのなかに人をおもひぬ
神戸市　井口久我女

○本郷の森川町の杉垣にもたれて琴をよくきゝしかな

○この久我が右の腕を枕していねける人のいたきぬくみよ

○湯のかをり袷すがたの絹褄に素足艶なる春の宵かな
京都市　中野絹子

○梅かをる断食堂の夜あけがた美しいかな水浴びの人

○石臼の目きざむ斧の音さむき山の上の宿梅の花さく
尾張　佐分華影

○人妻になりしを恥づる十七の君と語りぬ初雪ふる日

○暖かき其の御口より冷やかき言葉を望む恐ろしき戀

○悲しくも少女てふ名のきえてゆくは日に當りたる雪に似しかな
京都市　三宅壽賀子

○あやまちて戀てふ園に落ちし子は歎きの花を今日も摘むかな

○君の來てわれの戀をもて行きぬ世の中かくてかゞやかしさよ

○雪の間にうす紅のきゝの芽を見しよろこびか初戀人は
秋田縣　三浦ふみえ

○父なき子五歳となりぬ桑の實に唇染めてわらふかなしさ

○わかきわがほこりを知りて大空を仰ぐ心よ白百合の花

○石階に青き灯かげのうすくさして水仙の花うつむきてあり
大阪　吉田うすい

○神ならで誰かは知らむ吾胸の此の悲しみを誰かは知らむ

○美くしき可愛き子よとほめられて處女の吾は二十となりぬ
野菊子

○いはれなく憎き君ゆゑいはれなく、物思ひするあやしき心

○笑めばゑみ、泣けば相泣くいつはりの君としるより寂しきはなし
鳥取　櫻草

○燃つき血の涸れしと思ひし我が胸は君垣間見てときめきにける

○限りなく處女としての春の日は菫や摘まむ土筆や摘まむ
陸前　浮草子

○桑をつむ手止めて雪の栗駒を望むはれたる今日の嬉しき

○今日もまた鎮守の森は雨に閉ぢ衣縫ふ手もと薄くらきかな
福島縣　袖几帳

○故知らず打ちし小狗の尾をたれてわが顔を見る不安げの眸

○地平線今しはなれし夕月のうるめる光り靄に微動す

○　會津　桑原仙子

君戀ふにすべてを捧げつくさんと思へる子をよあはれみ給へ

○

なつかしき都の君に歌よませてもの思ふ子の寂しき心

○　淺草　夕月子

柿の實の赤きを見れば停車場に君に別れし日など忍ばゆ

○

春の宵いとしき人とかたらへば添ひしかみに花はかゝりぬ

○　京都　要司村福子

いつもより身づくろひして君訪ひぬほこりと云ふもわりなき者よ

○

そのかみもあゆしらざりし二人ゆゑ又も知らざるふたりとなりぬ

○　伯耆　新田文子

黒髪をときし乙女の歌手にも戀てふ重き珠は持たれぬ

○

十八の若かりし時夢みたる戀てふものを吾れは忘れぬ

○　秋田縣　佐々木園子

白色の縮緬の中のにくかりし鼠色を選ぶ身となりにけり

○

さながらに油つきたる燈火の消ゆるが如く人は逝きけり

○　丹後　仲田品子

何となくなつかしく思ひ軒燈を數へてありし淋しき町に

○

硯箱の隅にさびたるペン先の數を數へて友を思ひぬ

○　武藏　なでしこ

春の風いま舞殿へ舞ひのぼる少女二人のうしろより吹く

○　東京　增田豐子

庭池の水の淀みに子鴨うきて長き春の日くれて行くかな

○　福井　北利子

雲あかく水にうつりて消へゆくをながめてあれば悲しかりけり

○　伊豆　西島行野

征矢放つ料となさんかともすれば君が心の鳥みだれとぶ

○　近江　みがは

村はづれのオークの林ずかしくる初冬の午後の鈍き日光しよ

○　群馬縣　美登利

我一人冬枯の野にさまよひぬありとしもなき花や咲けると

○　德島縣　蔦紅

わが心美しき日の多きかな木々の木の葉の紅葉する頃

○　兵庫縣　内海千鳥子

萬衆のね靜まりたる夜中に筆もちてあり闇えの中に

○　田村紫色女

くらがりの夜の部屋いでゝ月影を仰ぐ思ず君見る時は

○　廣島　後藤蔚美枝

一も對二にも神よとわが母は今朝も宮居に詣でけるかな

○　新潟市　吉田ふみ子

若き日の友禪の袂にいさゝかの錦を見出ぬ悲しき夕べ

○　日本橋　松岡千代子

一枝は君かみ部屋にまゐらせむわか意ゝかほれ梅の初花

○　水江新子

雨の夜を町の灯影におちながら語りゆくなる若き二人よ

○　岡山縣　入江曉花

赤壁にかと照りかへす夕日より燃えてにほへるひなげしの花

○　新潟縣　岩井常子

空晴れて雪の木立をあちこちと喜ぶ如く小鳥來て啼く

○　麴町　牧野はん子

山莊の夕の月は木蘭のつぼみの花を照してありぬ

○　大阪　ちどり

君戀ふ心は矢せていと惜しき落髮一つ母に示しぬ

○　神奈川縣　木村浜花子

父上も夢にしてみぬ母上も夢にして見る今となりけり

女子文壇紀念第百號發行豫告

來る五月一日。本誌創刊滿百號に相當するを以て、紀念の爲め、目覺ましき雜誌を發行すべし。

近頃、世上一般の婦人雜誌は漸く單調に流れ、常に同一問題を繰返して、讀者を倦怠せしむる弊あり。本誌は紀念第百號の發刊に當り、百尺竿頭一步を進め、更に誠實なる態度を以て、愛讀者諸君が多年の信賴に背かざらんことを期す。

紀念第百號の編輯準備は着々として進行しつゝあり、其槪目は逐つて豫告すべきも、要するに花やかなること櫻の如く、親しきこと母の如く、而かも尤も內容の充實したる雜誌を發行すべし。

每年の例に倣ひ、五月に本誌第二增刊を發行すべき筈なれども、代ゆるに紀念第百號を以てし、專ら此方に力を注ぐ事となりたれば、讀者讀孃にも此意の諒察を乞ふ、隨つて紀念第百號に揭載する爲め特に各種の原稿を募る、左の如し

紙數三百二十頁
本號特價金參拾錢

紀念第百號掲載投稿募集

▲花（散文）（二十四字詰五十行以内）……河井酔茗選

▲動物に對する感想 獸、鳥、蟲魚に對する感想文（行數同上）……溝口白羊選

▲三月一日より七日までの日記 或は其間の一日（二日分にても可）（行數同上）……横瀬夜雨選

▲短篇小説（二十四字詰二百行以内凡て振がな付）……水野葉舟選

▲詩（題材及び長短自由）……服部嘉香選

▲和歌（一人三首以内）……與謝野晶子選

▲俳句（一人三句以内）……内藤鳴雪選

◎婦人 身の上話 世間話 實驗談 （二十四字詰百行乃至二百行まで凡て振假名付）……編輯局選

◎女子文壇追想記（本誌と諸君との關係、又は本誌に依りて想ふさまぐの追懷）……編輯局選

▲懸賞總額金百五拾圓也

内譯 一等金貳拾圓（一人） 二等金拾圓（一人） 三等金七圓（三人） 四等金五圓（五人） 五等金參圓（八人） 六等金貳圓（十五人） 七等金壹圓（二十人）

賞與法 各種投稿を通じて尤も優勝なるものに一等を贈與し、以下之に準ず 但し第三等以下の賞は價格相當の物品にて贈る

▼投稿締切三月十五日最終便本社到着の分▲

雜報

○本號の成績

今回の『婦人ノート』の爲に投稿されたる凡ての材料は、眞面目のものが多かつた、而して投稿者は都會より地方に多かつた、世の婦人雜誌に現れてゐる處と題材は同じことでも、觀察、感想、扱ひ方、考へ方が異つてゐる、内容を能く讀むと何う異つてゐるかと云ふことが分る、新人の聲は新人でなければ聞くことが出來ぬ、記者は讀者諸君が、多大の同情を以て本誌を諒了せられんことを望むのである。而して之が特に『婦人ノート』の爲に熱誠を注いで寄稿された處の、多くの女子方に對する唯一の好き報酬であらうと信ずる。扨て投稿の入賞者と題は左の如くである。

一　等

○二つの生命（出產前記）　慶志緒（近江）

二　等

○普通の着物も縫へないやうでは嫁にも行かれぬ　松並紫花（德島縣）

○新に寄宿舍に入らんとする友人に注意する書　捧だみ（名古屋）

三　等

○三度のお產にて得し私の經驗　みとり（京都府）

○始めてお產をする方へ　若き母（京都市）

○親の情にて無き命を拾ひし記　N女（栃木縣）

四　等

○時間の屑を利用する注意　みきよ子（兵庫縣）

○子供本位の改革家の家庭　美智子（群馬縣）

○裁縫には機轉がいる　ふゝき野（宮城縣）

○吾家の室内に掲げて置く各種の表　紅梅女（島根縣）

○詩を作る呼吸　金田代志子（和泉）

五　等

○家庭の秀才と爲りたい　春野胡蝶（越後）

○無邪氣で珍しい家庭公園　新田文子（伯耆）

○家庭心得其をり〳〵　萬野染女（美濃）

○處女の衞生と旅行の衞生　紫の花（東京）

○母のをしへ　佐分華影（尾張）

○心おぼえ　野の花（丹波）

○お芋の料理と御飯炊き　さつき（東京）

○商家の店と奥　春子（岩代）

○何うすれば文章が上手になるか　無名子（香川縣）

○私は裁縫が何より好き　田舍女（群馬縣）

對　話

○戀の説明（入賞）　高尾（靜岡縣）

和　歌

○天賞　みきは（名古屋）

○地賞　江森美子（東京）

○人賞　伊達松子（陸前）

附言。『婦人ノート』の批評は懸賞で募りませんが、何か批評したいとか言いたいとか思ふ方は書いて送つて下さい、掲載いたします（記者）

○女子文壇定期號 投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る
▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること
▲原稿は凡て女子文壇社宛(未納税は断じて受付ず)に送ること
▲小說と、詩と、雜錄とは振假名をつけること
▲小說は二十四字詰八十行以内、散文は三十行乃至五十行、初めての投書は三十行以内、詩と雜錄は行數制限なし
▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす
▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る
▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め、大さは二寸に三寸、一人一枚限
◉投稿は毎月十五日到着を以て嚴に締切る

○女子文壇投稿各種 懸賞定額

▲小說と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す
▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢
▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す
▲『雜錄』は金五圓以下壹圓以上、正金にて呈す(但し二頁以内の短きものは此限りにあらず)
▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす
定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

○定期發行分 ▲毎月一回(一日)

一冊(一回分)	定價金拾五錢	…郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三冊(三月分)	前金四拾三錢五厘	……同四錢五厘	計金四拾八錢
六冊(半年分)	前金八拾四錢	……同九錢	計金九拾三錢
十二冊(壹年分)	前金壹圓五拾六錢	……同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分 ▲年四回(二月、五月、八月、十一月)

一冊(一回分)	定價金貳拾錢	…郵税一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二冊(半年分)	前金三拾八錢	……同三錢	計金四拾壹錢
四冊(壹年分)	前金七拾二錢	……同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部 ▲十六回

四冊(三月分)	定價金六拾三錢五厘	…郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八冊(半年分)	前金壹圓三拾二錢	……同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六冊(壹年分)	前金貳圓二拾八錢	……同二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▲申込注意(振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增(收入印紙謝絕)、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	一頁三十圓	半頁……………	部數多く有効に
上等	一頁廿五圓	半頁……………	比し無類の割安
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	二行四拾錢

〆切 毎號十五日前

特約取扱 ○日本電報通信社 ○明治廣告社 ○博報堂 ○弘報堂

明治四十四年二月八日印刷
明治四十四年二月十日發行

本號に限 定價金貳拾錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區宗十郎町十五番地 松本魁
印刷所 東京市京橋區宗十郎町十五番地 國文社

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話(京橋六〇七番) 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

第七年第三號（二月十日増刊）

女子文壇

（婦人ノート）

明治四十四年二月八日印刷納本

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）

本號に限り　定價金貳拾錢　郵稅壹錢五厘